松本市文化財調査報告 No.85

KITAKURI

松本市北栗遺跡Ⅳ・Ⅴ

― 緊急発掘調査報告書 ―

1990・3

松本市教育委員会

信州大学附属図書館
'90.8
定期刊行物

KITAKURI

松本市北栗遺跡Ⅳ・Ⅴ

― 緊急発掘調査報告書 ―

1990・3

松本市教育委員会

序

島立北栗地区は隣接する南栗地区とともに島立のなかでも遺跡の集中するところとして知られておりました。当地で昭和58年に始まった北栗遺跡の発掘調査も、本年は二度にわたり第４次・第５次調査が行われました。今回の調査も以前同様ほ場整備事業にともなうもので、埋蔵文化財の記録保存がその目的であります。

調査は松本地方事務所から松本市に委託されたもので、市教育委員会職員を中心に地元考古学者、地区の皆様の御協力により第４次調査を平成元年８月18日から10月26日にかけて、第５次調査を12月２日から翌年の２月15日にかけて実施いたしました。その結果、古墳時代から中世にかけての住居址が多数発見され、島立地区一帯に広がる遠い昔の村の様子の一端を窺い知ることができました。なかでも古代から中世の集落への遷移の過程はまことに興味深いものでありました。くわしくは本書に記すとおりですが、これらの成果が地元の歴史解明に貢献できるのならば幸甚に存じます。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました島立土地改良区をはじめ島立公民館、地元の皆様に心から感謝申し上げ序といたします。

平成２年３月

松本市教育委員会教育長　松　村　好　雄

例　言

1　本書は、昭和63年８月18日から同年10月26日まで(第４次)、更に昭和63年11月28日から平成元年２月15日（第５次）にわたり実施された、松本市島立北栗に所在する、北栗遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は、松本市が長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。

3　現場作業は、高桑俊雄と松沢利幸が担当、直井雅尚の協力を得た。

4　本書の執筆は下記の通りである。尚、下記以外の第３章、第１、３節は高桑が担当し、同第２節は竹内靖長が担当した。

第１章　事務局

第２章　第１節　　太田守夫

第３章　第１節　　３－１）竹内靖長

　　第２節　　３－２)、３）高桑俊雄

5　本書作成に関する作業分担は次の通りである。

編集作業：滝沢智恵子

遺構図作成：石合英子、今村嘉子、丸山恵子、百瀬二三子、米山明子

遺構図整理・トレース：石合英子、神沢ひとみ

遺物復元：松尾明恵、米山明子

遺物実測・トレース：土橋久子、永沢周子、上條尚美、松尾明恵

一覧表作成：川窪命子、百瀬二三子

写真撮影：宮嶋洋一（遺物)、高桑、松沢（遺構）

6　本書作成に当たり、㈶長野県埋蔵文化財センター松塩筑調査事務所、調査研究員の方々より御指導御教示を頂いた。又、同佐久調査事務所、調査研究員、宇賀神誠司氏には鉄器に関して、助言、御協力を頂いた。記して感謝申し上げる。

7　本調査にあたって次の方々より御協力をいただいた。

中島要、丸山光清、島立土地改良区

8　本調査に関する、出土遺物及び同類等は松本市教育委員会が保管している。

9　本書内で使用した表現は以下の通りである。

炭 範 囲　　焼土（カマド内被熱部）

炭・灰のみ　　確認できた柱痕跡

目　次

序
例　言
目　次
第1章　調査経過
　第1節　文書記録……5
　第2節　調査体制……6
第2章　遺跡の環境
　第1節　遺跡の立地と地形・地質……8
　第2節　周辺遺跡……12
第3章　調査結果
　第1節　北栗遺跡Ⅳ
　　1．調査の概要……15
　　2．遺構
　　1）住居址……19　　2）建物址……38
　　3）土坑・ピット……57　　4）溝址……70
　　3．遺物
　　1）土器……73　　2）鉄器……111
　　3）石器・土製品等……112
　　4．小結……120
　第2節　北栗遺跡Ⅴ
　　1．調査の概要……121
　　2．遺構
　　1）住居址……126　　2）建物址……164
　　3）竪穴状遺構……164　　4）土坑……165
　　5）溝址……171
　　3．遺物
　　1）土器・陶器……173　　2）鉄器・鋼製品……220
　　3）石器・土製品等……228
　　4．小結……232
第4章　調査のまとめ……233

図　目　次

第１図　調査地の位置……4
第２図　周辺小字名……7
第３図　周辺遺跡……13

北栗第Ⅳ次調査

第４図　Ⅳの位置と範囲……14
第５図　遺構配置図(1)……16
第６図　遺構配置図(2)……18
第７図　第１号住居址……20
第８図　第2・3号住居址……21
第９図　第４号住居址……23
第10図　第５号住居址……24
第11図　第６号住居址……26
第12図　第７・８号住居址……27
第13図　第９・10号住居址……29
第14図　第11・12号住居址……31
第15図　第13号住居址……33
第16図　第14・15・20号住居址……34
第17図　第16～19号住居址……36
第18図　第１号建物址……39
第19図　第２・３号建物址……40
第20図　第４号建物址……41
第21図　第５・６号建物址……43
第22図　第７・８号建物址……44
第23図　第９号建物址……46
第24図　第10・11号建物址……47
第25図　第12・13号建物址……49
第26図　第14号建物址……50
第27図　第15・16号建物址……52
第28図　土坑(1)……59
第29図　土坑(2)……60
第30図　土坑(3)……61
第31図　土坑(4)……62
第32図　土坑(5)……63
第33図　土坑(6)……64
第34図　土坑(7)……65
第35図　土坑(8)……66
第36図　ピット……67
第37図　溝址(1)……71
第38図　溝址(2)……72
第39図　出土土器(1)……82
〃　〃　〃
第59図　出土土器(21)……102
第60図　鉄器・銭……114
第61図　石器(1)……115
〃　〃　〃
第64図　石器(4)……118
第65図　石器(5)・土製品……119

北栗第Ⅴ次調査

第66図　Ⅴの位置と範囲……122
第67図　遺構配置図(1)１検……123
第68図　遺構配置図(2)２検……124
第69図　遺構配置図(3)３検……125
第70図　第１・２号住居址……127
第71図　第３号住居址……128
第72図　第４・５号住居址……129
第73図　第４号住居址遺物出土図……130
第74図　第６号住居址……131
第75図　第７号住居址……132
第76図　第８・26号住居址……134
第77図　第９号住居址……135
第78図　第10・11号住居址……136
第79図　第12・13号住居址……138
第80図　第14号住居址……139
第81図　第15・16号住居址……141

第82図　第17～19号住居址 ……143
第83図　第20号住居址 ……144
第84図　第21・30号住居址 ……145
第85図　第22・24号住居址 ……147
第86図　第23・29号住居址 ……148
第87図　第25号住居址 ……150
第88図　第27・32号住居址 ……151
第89図　第28号住居址 ……152
第90図　第31・33号住居址 ……154
第91図　第34～36号住居址 ……155
第92図　第37号住居址 ……157
第93図　第38・39号住居址 ……158
第94図　第40号住居址 ……159
第95図　第41・42号住居址 ……160
第96図　建物址 ……163
第97図　竪穴状遺構・土坑(1) ……166
第98図　土坑(2) ……167
第99図　土坑(3) ……168
第100図　土坑(4) ……169
第101図　溝址 ……172
第102図　出土土器(1) ……181
～　～　～
第128図　出土土器(27) ……207
第129図　鉄器(1) ……222
～　～　～
第132図　鉄器(4) ……225
第133図　石器 ……229
第134図　石器・土製品 ……230

表　目　次

第1表　SK IV住居址一覧表 ……37
第2表　SK IV建物址一覧表 ……53
第3表　SK IV土坑一覧表 ……68
第4表　SK IV土器器種構成一覧表(土師器、須恵器、灰釉陶器・施釉陶磁器・他) ……79
第5表　SK IV出土土器観察表 ……103
第6表　SK IV鉄器一覧表 ……111
第7表　SK IV石器・土製品等一覧表 ……113
第8表　SK V住居址一覧表 ……161
第9表　SK V建物址一覧表 ……164
第10表　SK V土坑一覧表 ……170
第11表　SK V土師器器種・器形一覧表 ……177
第12表　SK V須恵器器種・器形一覧表 ……178
第13表　SK V土器器種構成一覧表（土師器） ……179
第14表　SK V土器器種構成一覧表（須恵器・灰釉陶器・他） ……180
第15表　SK V出土土器観察表 ……208
第16表　SK V鉄・銅製品一覧表 ……226
第17表　SK V石器・土製品等一覧表 ……231

Ⅳ：第４次調査地点
Ⅴ：第５次調査地点

第１図　調査地の位置

第１章　調査経過

第１節　文書記録

昭和62年９月７日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月21日　昭和63年度補助事業計画書提出。

昭和63年６月１日　昭和63年度県営ほ場整備事業島立地区北栗遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

８月27日　北栗遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

９月６日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。

９月12日　昭和64年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

９月19日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。

11月21日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定変更通知。

12月21日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定変更通知。

12月22日　昭和64年度補助事業計画書提出。

平成元年２月22日　北栗遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。

４月３日　平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

４月３日　平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

５月24日　平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

７月15日　平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

７月18日　平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

８月10日　北栗遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

９月11日　平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節　調査体制

1．北栗遺跡Ⅳ次（SK Ⅳ）

調査団長　中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

調査担当者　神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場責任者　高桑俊雄（松本市教育委員会）

調査員　太田守夫（地質）、西沢寿晃（骨類）、森義直（自然遺物）

事務局　浅輪幸市（社会教育課長）、田口勝（文化係長）、熊谷康治（主査）、山岸清治（事務員）、三沢利子

作業協力者　浅野房子、浅野八重子、石合佐千子、今村嘉子、上条茂子、上条益子、大久保幸子、大久保棟子、小野勝近、桑井まさ、桑井益子、小林清志、斉藤まさ子、坂下しげる、田口吉重、田多井うめ子、田多井亘、塚田文子、遠山明、中島治香、萩野幸枝、原沢一二三、藤沢君江、藤森寿々子、松本かつ代、松森幸子、丸山智子、丸山恵子、百瀬一子、百瀬縫代、百瀬二三子、百瀬義友、百瀬米子、山本みね、吉江和美、米山明子

2．北栗遺跡Ⅴ次（SK Ⅴ）

調査団長　中島俊彦（松本市教育委員会教育長）

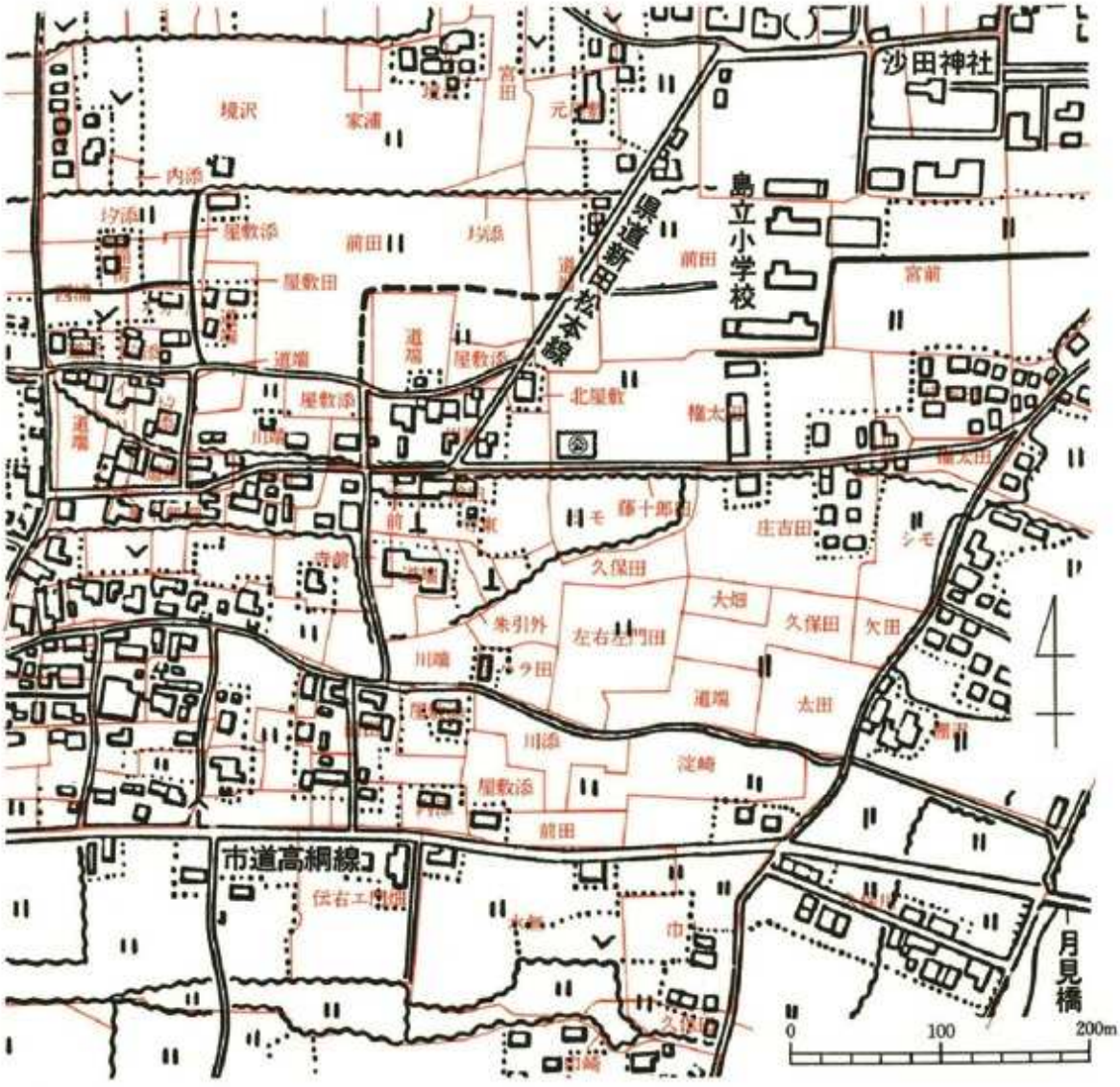
調査担当者　神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）

現場責任者　松沢利幸、直井雅尚（松本市教育委員会）

調査員　太田守夫（地質）、西沢寿晃（骨類）、森義直（自然遺物）

事務局　浅輪幸市（社会教育課長）、田口勝（文化係長）、熊谷康治（主査）、山岸清治（事務員）、三沢利子

作業協力者　赤羽包子、五十嵐周子、石合孝光、海野洋子、小沢静子、川上とよみ、川上春子、川窪命子、北條多寿子、北野よ志子、小松小きん、下里順子、鈴木なつ江、関沢結城、高田芳子、滝沢龍一、武井緑、塚田つた江、中島千矢子、中島三寿子、中島善一、中島若子、西川卓志、花村久子、藤森久子、見村芳子、宮沢利男、望月佳代子、百瀬きゑ、横山保子、若井七十郎


沙田神社
島立小学校
県道新田松本線
市道高綱線
月見橋
境沢
家浦
宮田
元
内添
坊添
屋敷添
前田
坊添
屋敷田
道端
屋敷添
北屋敷
幡太田
宮前
前田
藤十郎田
庄吉田
シモ
久保田
大畑
久保田
欠田
朱引外
左右左門田
川端
ヲ田
道端
太田
川添
淀崎
屋敷添
前田
伝右エ門田
市
0
100
200m

第２図　周辺小字名

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の立地と地形・地質

1．北栗Ⅳの位置と地形

本遺跡は松本市島立北栗集落の北、標高597 m に位置している。地形面の平均傾斜は $^{6.7}/_{1000}$、北東へ緩く傾斜している。地形上は島立地区の各遺構と同じく、梓川扇状地の沖積堆積に属し、旧河床からみると扇端の沙田神社周辺の遺跡の上流域に当たる。はん濫原の常として水田耕土の下は、同時異相の砂礫層と土層が介在し、表層では想像の出来ない堆積が現われる。本遺跡でも合流や分流を示す、幅6～8 m に及ぶ河床礫層を始め礫が広く分布し、介在する土層の面積を狭めている。

2．北栗Ⅳの堆積層と遺跡

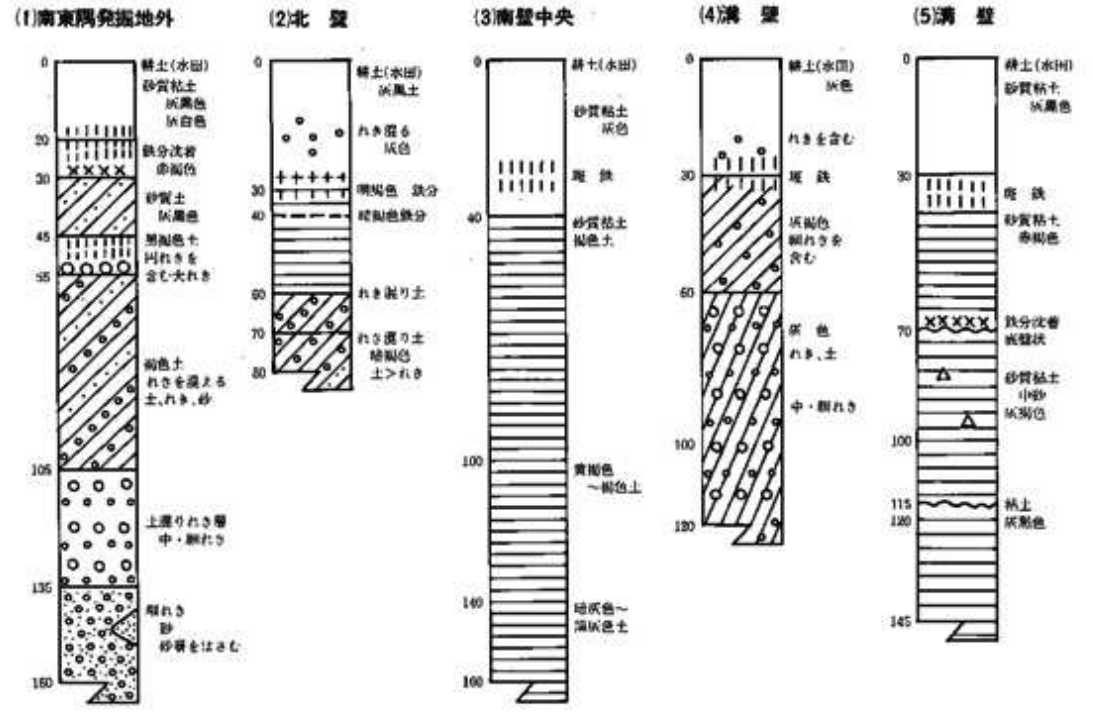
堆積上で注目されるのは、耕土下に現われた合流、分流、蛇行、曲流を示す大小の河床礫と、砂礫中に介在する厚い土層、南西隅に現われた中世の方形区画の溝である。住居址とおびただしい数の柱穴は、土層を中心に砂礫層にまで及んでいる。

最も規模の大きな河床礫層を示すと、北西隅から東南東へ（NW70°）―(1)、南西隅近くから発掘面の西側沿いに北統いて北北東へ（NE35°）―(2)、(1)と(2)が発掘面の北壁手前で合し東流して北東隅へ―(3)、さらに西側中央附近で(2)から分流した形で、最初東（E―W）統いて北北東へ（NE30°）―(4)が挙げられる。

(1)の砂礫層の幅は8 m に広がる。厚さは50 cm を越えるが下底は判っていない。礫は細・中礫で径8×8・7×5 cm が大きい方で、2×2・3×2 cm が一般的である。礫種は砂岩・硬砂岩・頁岩・頁岩のホルンフェルス・珪岩・チャート・安山岩・花こう岩でよく洗われていてきれいである。(2)の砂礫層は南西隅の中世の溝壁（挿図1―④）の砂礫層から出発しているように見える。最初北へ次いでNE35°に転じ、厚さは50 cm を越え、合流点で幅8.5 cm に広がる。(1)と違う点は土による汚れが目立つ大・中礫で、径20×10・12×12 cm が大きい方で、10×10 cm が多数である。礫種は(1)と同じである。合流後は(1)の洗われた礫が優勢で、(2)の汚れた礫はそのへりに堆積している。時代の異なる流れであるか、接触面を調べてみたが、自然に交錯していて判断がつかなかった。恐らく接触状態は周辺の堆積からみて、同時代のものと考えたほうがよいだろう。

(3)は幅を狭めながら東流するが、礫が小さくなるのが目立つ。

(4)は、最も厚い土層の中を曲流し、厚さはやはり50 cm を越えている。流れの末端では土層に埋れ



挿図１　北栗Ⅳの地層断面図

る場所も見え、消滅の気配もあるが、発掘面が終るので、これより東は不明である。

これらの砂礫層は地下60～70 cm にあり、前述の多数の柱穴や、８～10世紀の竪穴住居址が掘り込まれているところから、流れの時代はこれらの遺構が作られる以前と考えられる。以上の砂礫層のほかは中央部・南部に散在するだけで連続しない。ただ南東隅の発掘地外には土混りの厚い砂礫層（挿図１―①）が存在し、北部の砂礫層との間に厚い土層を介在した形をとっている。これらからみると流れと堆積の方向は、この附近の一般的傾向である N60～70°E よりも広く NE40°から E～W に及んでいる。

挿図１―③は南部の深い土層を示したものであるが、中央部東の最も深い部分とも共通する。耕土を除き上部は砂質粘土、下部へ行くに従い粘質を増す。色は褐色・黄褐色・暗灰色で厚さ１ m を越え、南東隅の砂礫層とは同時異相と考えられる。この厚い土層の地下１ m 以下に奈良・平安時代の住居址が見つかっている。

次に挿図１―④⑤は南西隅に現われた、環溝かと思われる中世の方形区画の溝の地層の断面である。溝は東西三条、全長は各一条およそ15 m、幅およそ1.8～２ m、東端を南北の溝で連絡されている（一部未発掘）。西端は発掘地外で不明。溝の基盤の層は挿図１―④の60 cm 以下に見られる層で、細礫を含む砂質土の上部と、中・細礫の卓越する砂礫層の下部からなっている。北と中央の溝はこの層の上面に細礫層をのせているが、厚さは西の部分で20 cm と東へ延びるほど薄くなっている。

なかでも南の溝は北・中央より幅が広く2 mを越え、溝内の堆積状況がよく読める。挿図1—⑤はこの断面を示したものである。断面が椀状の地形に、二層の緩い凹状の堆積が見られ(60～70 cm以下)、下層は粘土、上層は砂質粘土からなり、上層中から投げ込まれた割り石が見つかっている。上層はさらに耕土層へ砂礫層を挟まず連続している。

遺跡の立地と地形・地層の形成の関係は、同時異相の砂礫層と土層との堆積後、奈良時代～中世までの遺構が作られたものと考えられる。その後はかんがい用水との関係をもつ堆積だけと思われ、南西隅や南東隅の比較的浅いところで見られるものがある。

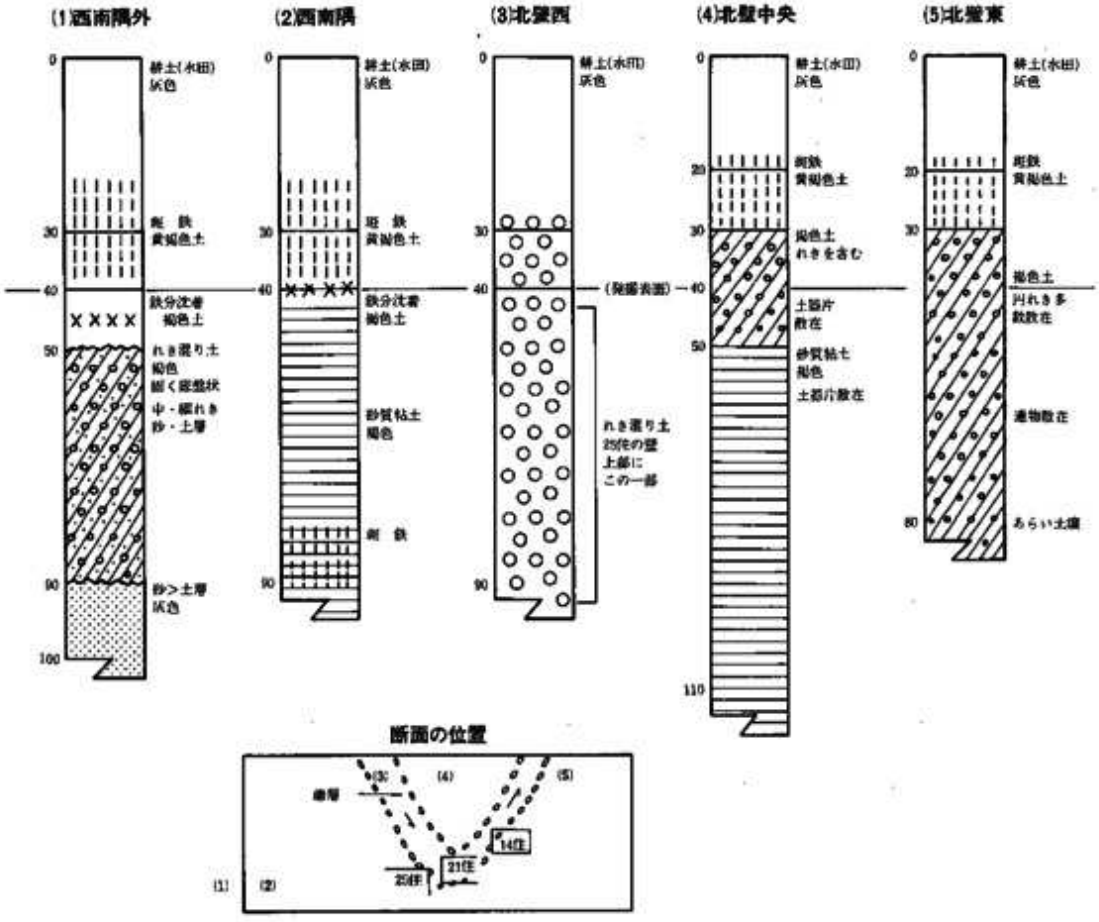
3．北栗Ⅴの位置と地形

本調査地は松本市島立北栗集落南東、標高597 m前後、平均傾斜 $^{7}/_{1000}$ の平坦面に位置し、周辺とも水田地域である。地形上は梓川扇状地はん濫原の扇端が、奈良井川により切られて出来た段丘面上にある。段丘崖（2～3 m）との距離は50 m以内である。しかし現在この段丘崖は、土採取のためすでに50 m後退し、ほとんど調査地に接している。調査地の北側は北栗から流れ下った沢（用水路）が、段丘崖近くなって下方浸食し、幅20 m、深さ2～3 m、長さ100 mの浸食谷へ合流するため下方浸食を始めている。このように平担面も東方や北方からみると、微地形的には台地状となっている。南側は奈良井川の月見橋を通る県道に接し、その南250 m、南東30 m(縄文期遺物)には1985年報告の南栗北栗遺跡がある。周囲の水田は土採取、床下げで人為が加わってきているが、土壌深度は60 cmを越える。しかし下層は後に述べるように、現在の流れの方向と異なった、扇端現象の蛇行ともとれる河床礫が現われてくる。

4．北栗Ⅴの堆積層と遺跡

堆積上で注目されるのは、耕土下に現われた蛇行を示す砂礫層（挿図2—(3)）と厚い土層である。

蛇行を示す砂礫層は、北壁の西側から南東(NW40°)へ向かい、南壁の中央の手前で北東(NE60°)に転じ、再び北壁の東側に至っている。厚さ70 cmぐらいとみられる河床礫で、幅5.8～6.5 m、北東に向かうほど広がっている。礫は円礫の砂岩・砂岩や頁岩（粘板岩）のホルンフェルスにチャート、花こう岩、珪岩を混じえている。礫径は7×7、4×6 cmが大きい方で、多数は2×3、3×4 cmの細・中礫である。粗砂・土混じりで汚れている感じである。また砂礫層は第25号（奈良）・第21号（平安）・第14号（平安）住居址と次々に接しているが、これらとの相互関係により、堆積の時期が決まってくることになる。第21号・第14号住居址はいずれも砂礫層を切って存在することから、層の堆積より新しいことになる。第25号住居址は砂礫層よりさらに深く位置し、北東壁の一部が接触しているに過ぎない。発掘の際はこの場所の堆積状態や、礫の散布の仕方を確認しなかったので、相互関係をはっきりいえない。ただ同じように扇端に位置する前述の南栗北栗遺跡や三の宮遺跡Ⅳ次調査の状況からみると、奈良期の遺物はこの砂礫層の下、中世平安期のものはこの層の堆積後に



挿図2　北栗Ⅴの地層断面図

出土していることから、本遺跡の砂礫層も奈良～平安までに形成されたと推定される。河流の蛇行は扇端の発掘でよく見られることから、ここでも蛇行の一部と考えられる。堆積層は挿図2—(1)(2)(4)(5)に示すように、扇状地堆積には普通の砂礫層と土層の相互介在関係にある。ただ本遺跡の場合は、前記の砂礫層を除き土層の部分の広いのが特徴である。層間の礫の種類は蛇行の砂礫層と同じく、大きさは4×6 cmが大きい方で多数は2×3 cmの円礫である。

東の部分で発見された溝は、前述の砂礫層とは関係をもたない11～12世紀の住居址と同時代のものとみられる。4・6溝は幅50～60 cm、深さ10～15 cm、南から東へ折れて流れる溝で、池状の場所もみられた。底部に鉄やマンガンの沈着が目立つ。

3溝は幅80 cm、深さ30 cmで、鉄分の沈着は余りない。前者は用水路、後者は集落を区画する性質の溝と考えられる。

（太田守夫）

第2節　周辺遺跡

島立地区及び近隣の新村、和田、そして奈良井川、鎖川の河岸段丘上と周辺の遺跡、さらに近年の発掘例を取り上げながら時期的に概観してみたい。

縄文時代は中期の遺構が奈良井川の段丘上、牛の川、神戸、くまのかわ遺跡にみられ、島立地区でも南栗、北栗遺跡発掘調査（松本市文化財報告№35）の際に遺物を得ている。ただし現地表下1.5～3.5ｍと驚くほど深く通常はほとんど縄文時代の遺物は目に触れない。

弥生時代になると山形村境に境窪遺跡、奈良井川左岸宮渕本村遺跡などが知られているが、いずれもここからはかなり遠い。島立地区では堀川沿いに中期の住居址の存在が明らかになった。

古墳時代では、新村に安塚古墳群、秋葉原古墳群の終末期の古墳群がある。三の宮遺跡の調査でも弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址を調査、又、昨年小学校旧グランド内にて古墳時代前期の遺物も得ている。又、未報告であるが、島立小学校南東部に古墳時代中期からの住居址を検出しており、今まで空白だった時期を埋める新たな資料として注目に値する。

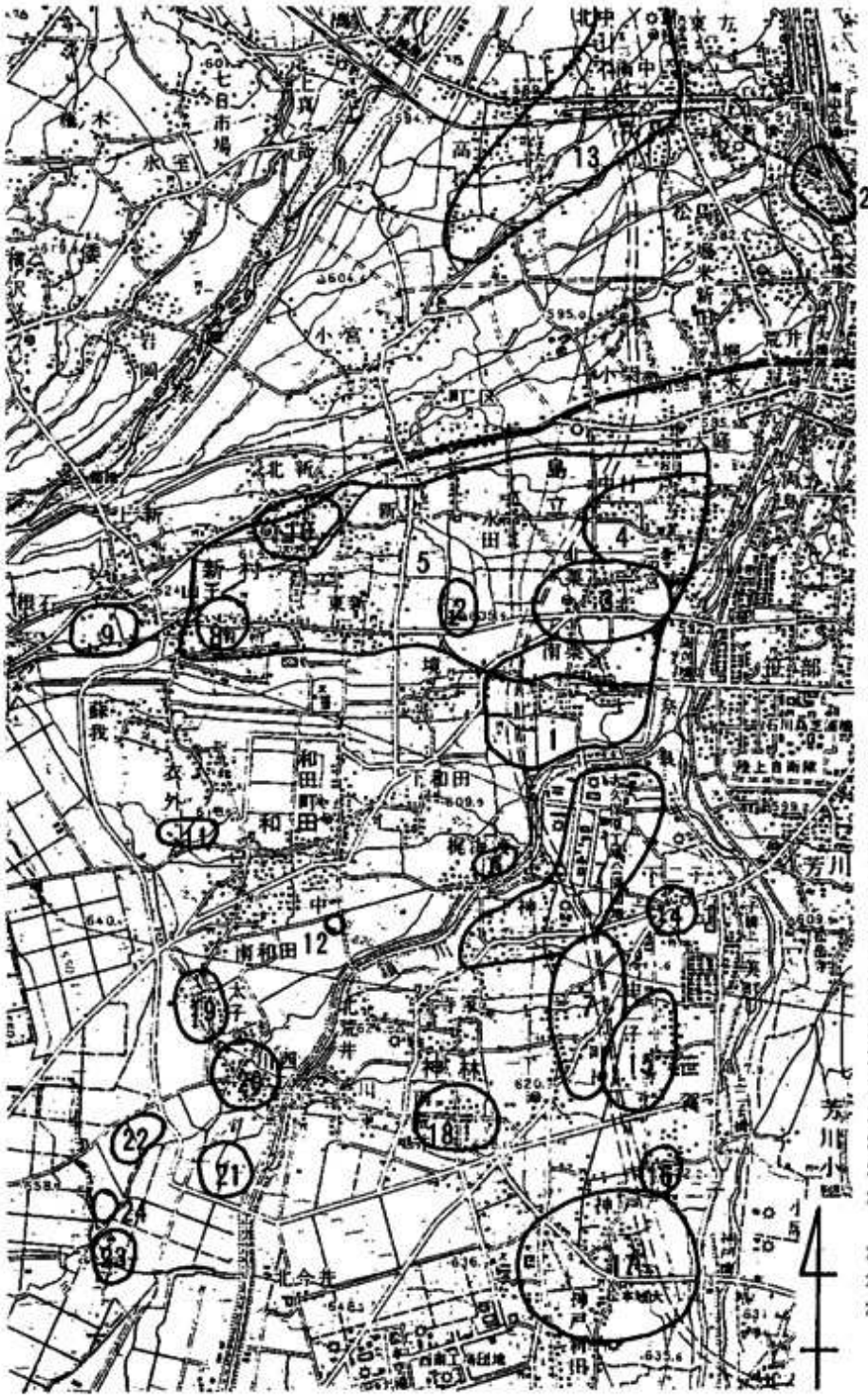
奈良時代から平安時代にかけては奈良井川沿いで下神、町神、下二子、中二子、くまのかわ、神戸や島内遺跡群などを上げることができる。

中二子遺跡は昭和60年に㈶長野県埋蔵文化財センターが調査、奈良時代を中心とする28軒の竪穴住居址、21棟の掘立柱建物址が発見されている。くまのかわ遺跡（上二子遺跡）は昭和56年に松本市教委、昭和60年に㈶長野県埋蔵文化財センターの調査で、計９軒の竪穴住居址が発見された。神戸遺跡は、昭和55年に松本市教委、昭和60年に㈶長野県埋蔵文化財センターが調査、平安時代の竪穴住居址27軒、掘立柱建物址、中世の水田址などが発見された。

昭和62～63年に調査された三間沢川左岸遺跡では、平安時代前期末頃を中心とした270基の住居址と溝等を調査し、出土遺物は銅印、銅椀、八稜鏡、帯金具と、多量の緑釉陶器などを得ており、地方荘園の様相を見せ今後予定される調査を興味あるものとした。

島立地区では三の宮遺跡、北栗遺跡、南栗遺跡がそれぞれ西方に１ km 以上の奥行きをもって絶え間なく広がり巨大な遺跡群を形成している。松本市教育委員会による過去５年間の調査で、この範囲内から250棟に及ぶ竪穴住居址が発見され、昭和60・61年度に㈶長野県埋蔵文化財センターが行った長野自動車道敷地内の調査では、実に1000棟という驚くべき数の竪穴住居址が現れた。この３遺跡の西奥の一帯は、かつて古代に遡る条里跡の可能性があると強く指摘されていたところ（島立条里的遺構）であるが、それについて積極的に肯定できる材料は未だに得られず、むしろその範囲内から断続的に古代以降の集落址が見い出されている。

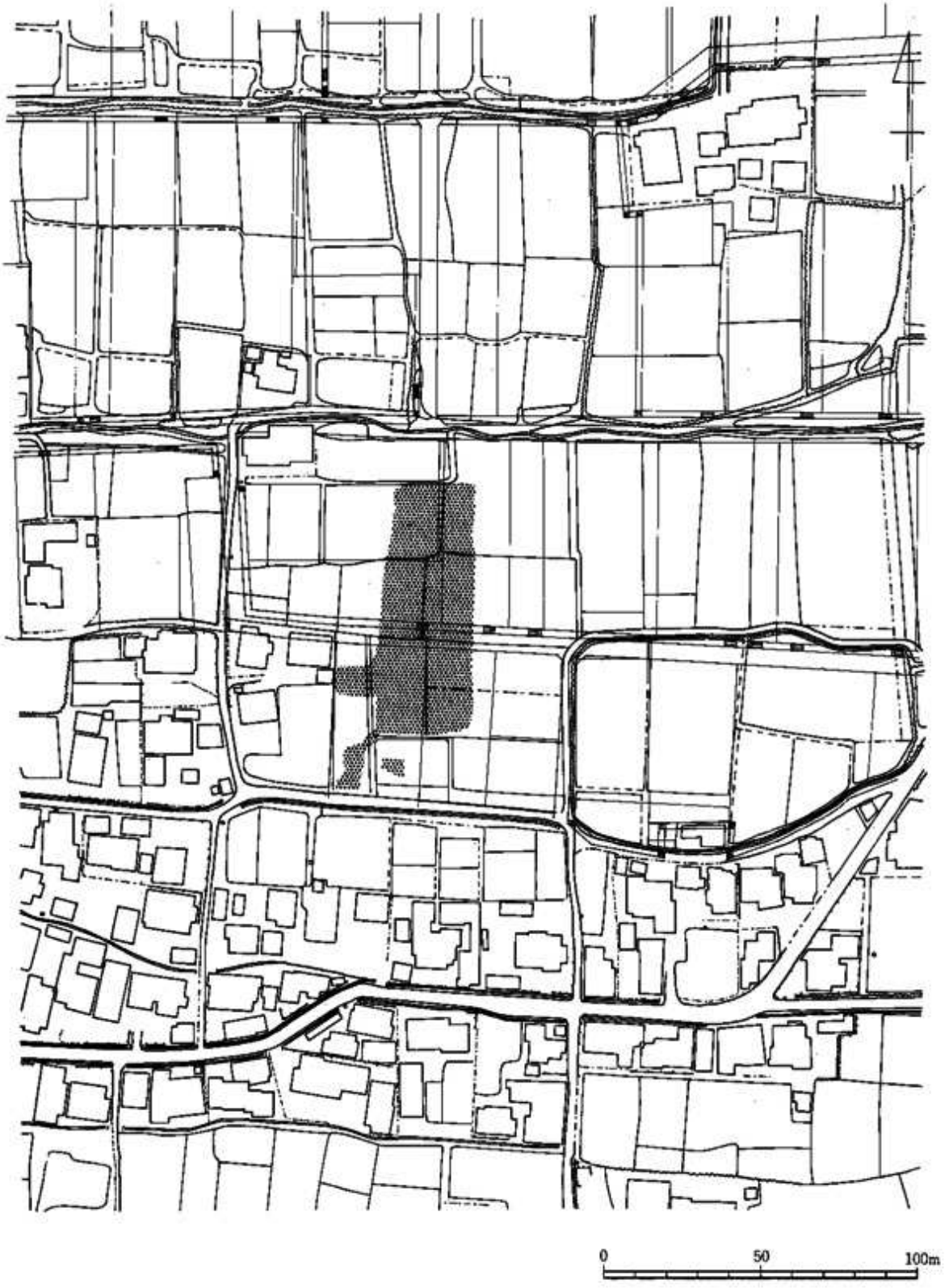
笹賀地区～島立地区にかけての奈良井川の段丘上にある遺跡は古代面の下に縄文時代の層がある。このことは、鎖川や梓川と異なり奈良井川の流路が原始から安定していたことを物語ろう。



1．南栗遺跡（1983・84）
2．高綱中学校遺跡（1984・85・88）
3．北栗遺跡（1985～87・88）
4．三の宮遺跡（1988）
5．新村島立条里的遺構（1984～87・88）
6．梶海渡遺跡（1985）
7．下神・町神遺跡（1983）
8．秋葉原遺跡（1982）
9．安塚古墳群（1978）
10．新村遺跡
11．西和田遺跡
12．和田町遺跡
13．島内遺跡群（1984～87）
14．下二子遺跡
15．中二子遺跡
16．くまのかわ遺跡（1981）
17．神戸遺跡群（1979）
18．南荒井遺跡
19．太子堂遺跡
20．川西遺跡
21．川西開田遺跡
22．三間沢川左岸遺跡（1987・88）
23．境窯遺跡
24．西原南遺跡
25．宮渕二ッ塚遺跡（1964）
宮渕本村遺跡（1985・86・88）

（　）内は調査年度

第3図　周辺遺跡



第4図　北栗Ⅳの位置と範囲

第３章　調査結果

第１節　北栗遺跡Ⅳ

１．調査の概要

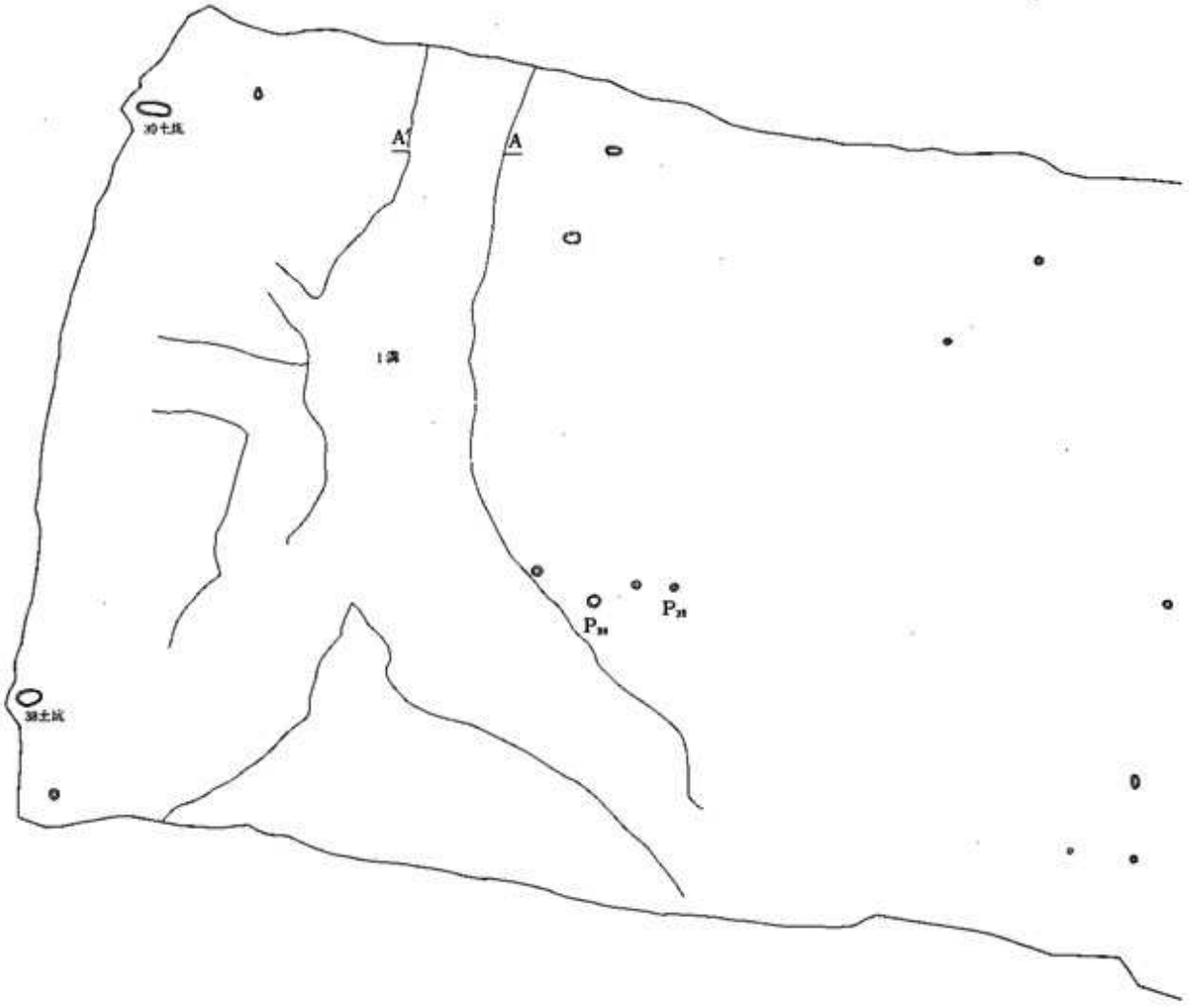
今回は、南北に長く場所を設定した。調査範囲は、第１検出面で南北100ｍ余、東西50ｍに及び、第２検出面ではそれよりやや狭く、88ｍ×34ｍ程で、実質調査面積は6,370ｍ²である。

第１検出面とは、まず、青灰色を呈した耕作土がある。その下には鉄分が沈澱を始めた灰色土があり、更にその下、鉄分が多量に沈澱した為、褐色を呈している。そのレベルを検出面としている。大雑把に言うと、現在の水田面からは、南部で40～50 cm、北及び西・東側では50～60 cm 下部に当たる。ここで検出した遺構は南半部に集中し、竪穴住居址２軒、墓址を含む土坑が56基、ピット167個、溝が６本などである。特に２号溝は用地外に続いているが、特定地区を区画するように巡り、総延長120ｍまでを確認することができた。尚この溝は底部の様子から滞水させていた様子がみえる。この第１検出面で調査した遺構からの出土遺物は、総量でも余り多くはない。

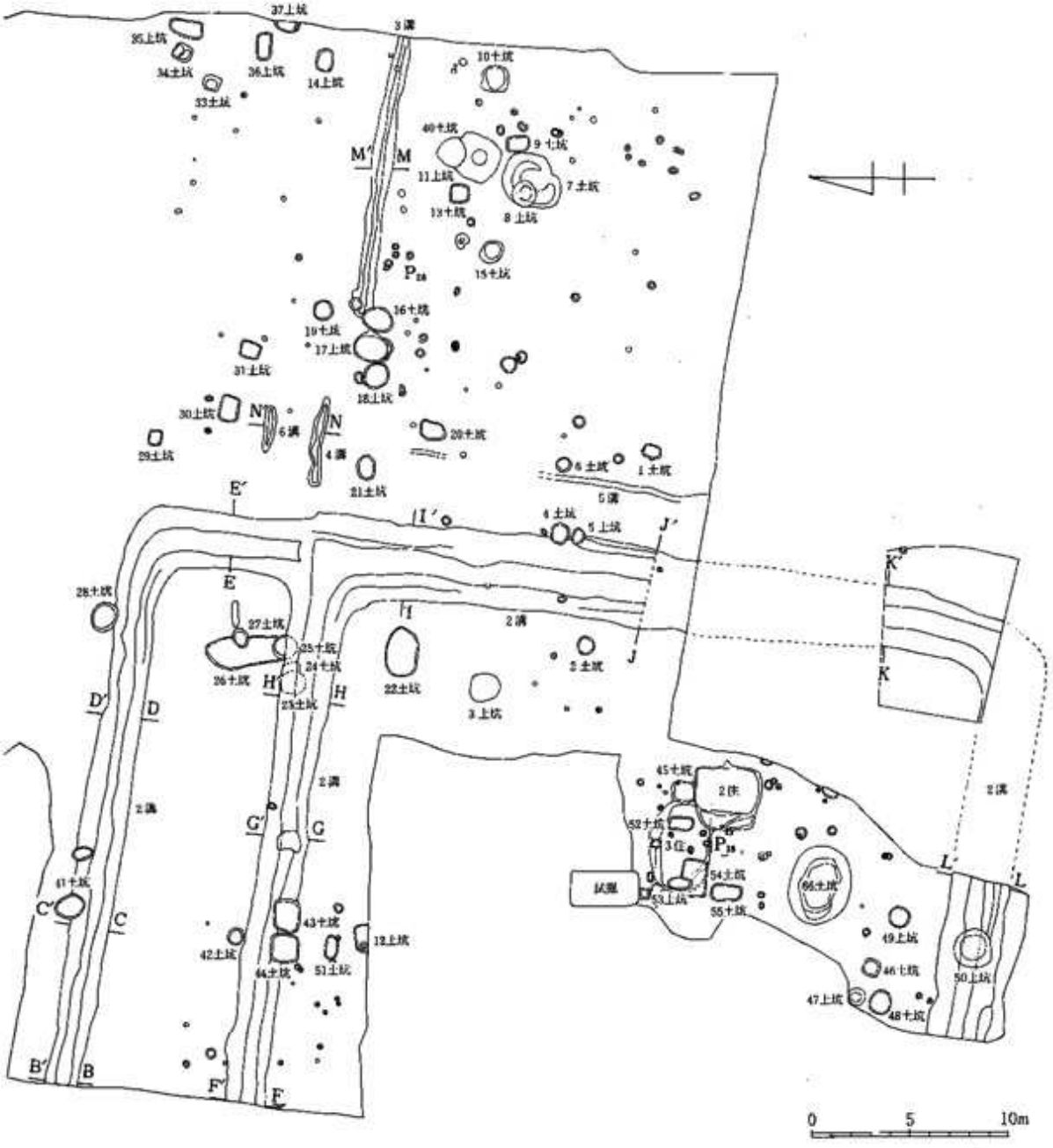
第２検出面は、第１検出面より20～25 cm程削平した所である。土色は茶褐色土粒（塊）を含む黄褐色を呈している。ここで検出した住居址や、建物址などの遺構の覆土は、ほとんど鉄分が含浸する様に、沈澱ないし混入している。ここで得られた成果は、竪穴住居址18軒、建物址16棟分を含むピットは491個と非常に多く、他に土坑が12基である。ここでも第１検出面よりは北まで遺構群が広がっているが、やはり北隅の方には全く空白の地がある。尚、遺構は西に薄く、東ないし、南へ拡がってゆくようである。

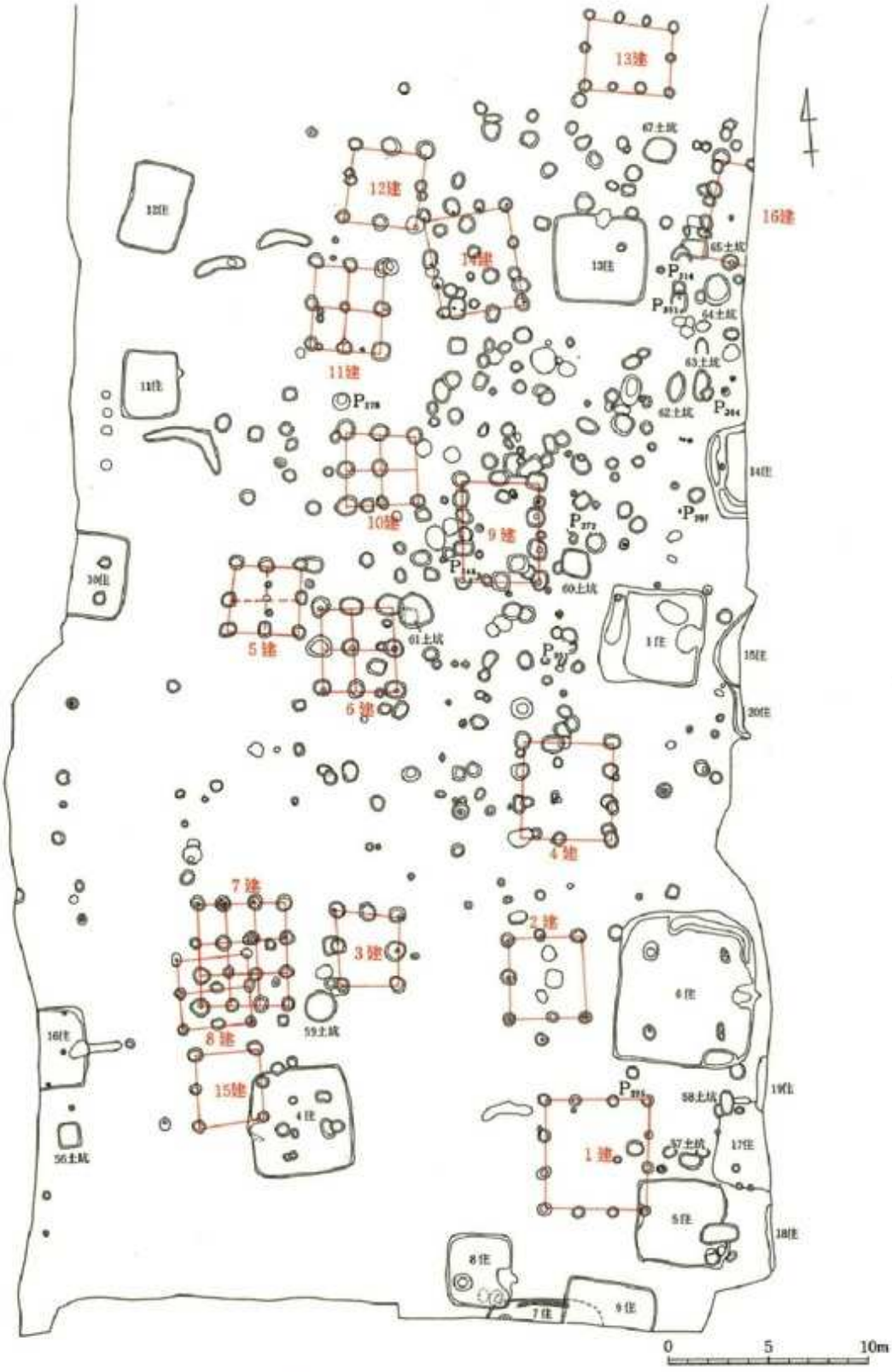
遺物はこれら遺構の覆土・床面及び検出面から多量に出土した。土器・陶磁器・石器・土製品・鉄器・銭貨などがみられる。土器・陶磁器は出土遺物の大半を占め、特に住居址内より多量に出土したが、縄文土器や弥生土器など遺構の見当たらない時期のものも検出面より若干見られた。最も多いものは平安時代前半～中頃の土器で、土師器、須恵器と若干の灰釉陶器で構成される供膳形態の坏・高坏・埦（碗）・皿などや、甕・壺・鉢等、焼物には古瀬戸系陶器、京焼風肥前系陶器、白磁、青磁などの陶磁器類である。鉄器・銅製品では、紡錘車・帯金具・銭貨、石器に砥石・石臼・こね鉢・凹石などあり、特殊なものとして臼玉が１点出土した。又、土製品には土錘・紡錘車・鞴の羽口等が見られた。

遺物を概観すると、第１検出面からの中世時代の遺物は、15世紀中頃から16世紀代。第２検出面からの古代の遺物は、７世紀後半から11世紀代の様相を見せている。



第5図　北粟Ⅳ遺構配置図(1)


37上坑
35上坑
34土坑
36上坑
14上坑
33土坑
3溝
10十坑
40十坑
9十坑
11上坑
7土坑
13十坑
8上坑
15十坑
16十坑
19十坑
17上坑
31上坑
18上坑
30上坑
6溝
4溝
20十坑
29土坑
21上坑
6土坑
1土坑
5溝
4土坑
5上坑
28土坑
27土坑
25十坑
24十坑
26十坑
23土坑
22土坑
2土坑
3上坑
2溝
41十坑
43十坑
42土坑
44土坑
51土坑
12上坑
45十坑
2床
52十坑
3住
54土坑
53上坑
55十坑
66土坑
49上坑
46十坑
47上坑
48十坑
50上坑
試掘
0
5
10m



第6図　北栗Ⅳ遺構配置図(2)

2．遺構

1)住居址

第1号住居址

本址は、中央東部に位置する。第1検出面調査時に遺構の存在を認めた。人力で掘り下げてもプランを明瞭につかむことができず、結局他の大半の住居址同様に、第2検出面に至って掘り下げを行なうこととした。主軸方向はN－83°－Wを示す。規模は東西5.08 m、南北4.79 m でやや不整の方形を呈し、壁高は18～32 cm を測る。床面は黄褐色となりまったく軟弱で、起伏も多い。又、部分的に浅いピット状の落ち込みや、西壁際には南北に長い帯状の凹み等が見られ、とても生活面としては認め難い。柱穴は確認できず、カマドらしき施設もない。なお、北西隅の壁中にピットが存在するが、本址より新しいものと思われる。

遺物は覆土の上層に多く、中・下層から床面にかけては散発的に出土する程度である。土師器鉢・坏ないし椀、須恵器蓋等が見られる。時期は鳥立南栗IX期になろう。

第2号住居址

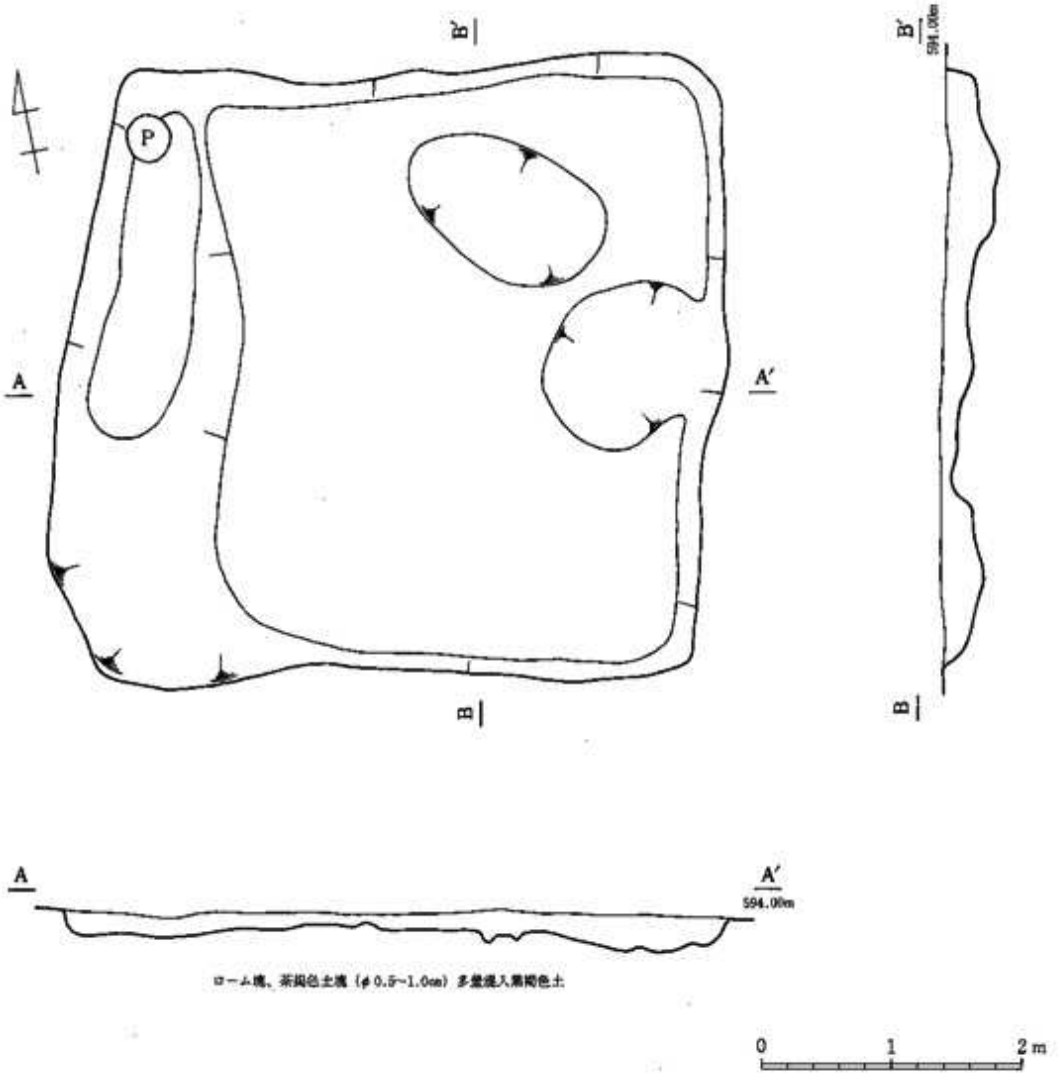
第1検出面南西部に検出した住居址である。北西隅には3住が、又北側には45土坑が重複しており、これらはいずれも本址に先行するものである。主軸方向はN－4°－Wを示し、東西3.41 m、南北3.55 m を測る。平面形は東辺に比べ西辺が短い台形様をなし、東側の壁上部は小さく外に突出する。壁は上部で急に立ち上がり、下部でゆるやかに床面と連なっているが、一部には袋状を呈する箇所も見られる。壁高は南、東、北で95～105 cm と高いが、西壁際には二段のベッド状の施設がある。床面は西側部を除き平坦であり、中央部と周囲の一部に堅い箇所が見られる。柱穴、ピット類、カマド等の施設は確認できなかった。なお西壁際には二段のベッド遺構があり、上面は床面と一部同様の堅さがある。床面との比高差は南側で40 cm 余、北側で25 cm 程であった。

遺物は量的に少なく、天目茶碗の陶器類、内耳土器などがある。焼物以外では銭が4点出土している。少ない遺物ではあるが、15世紀末頃から16世紀初期のものと考えられる。

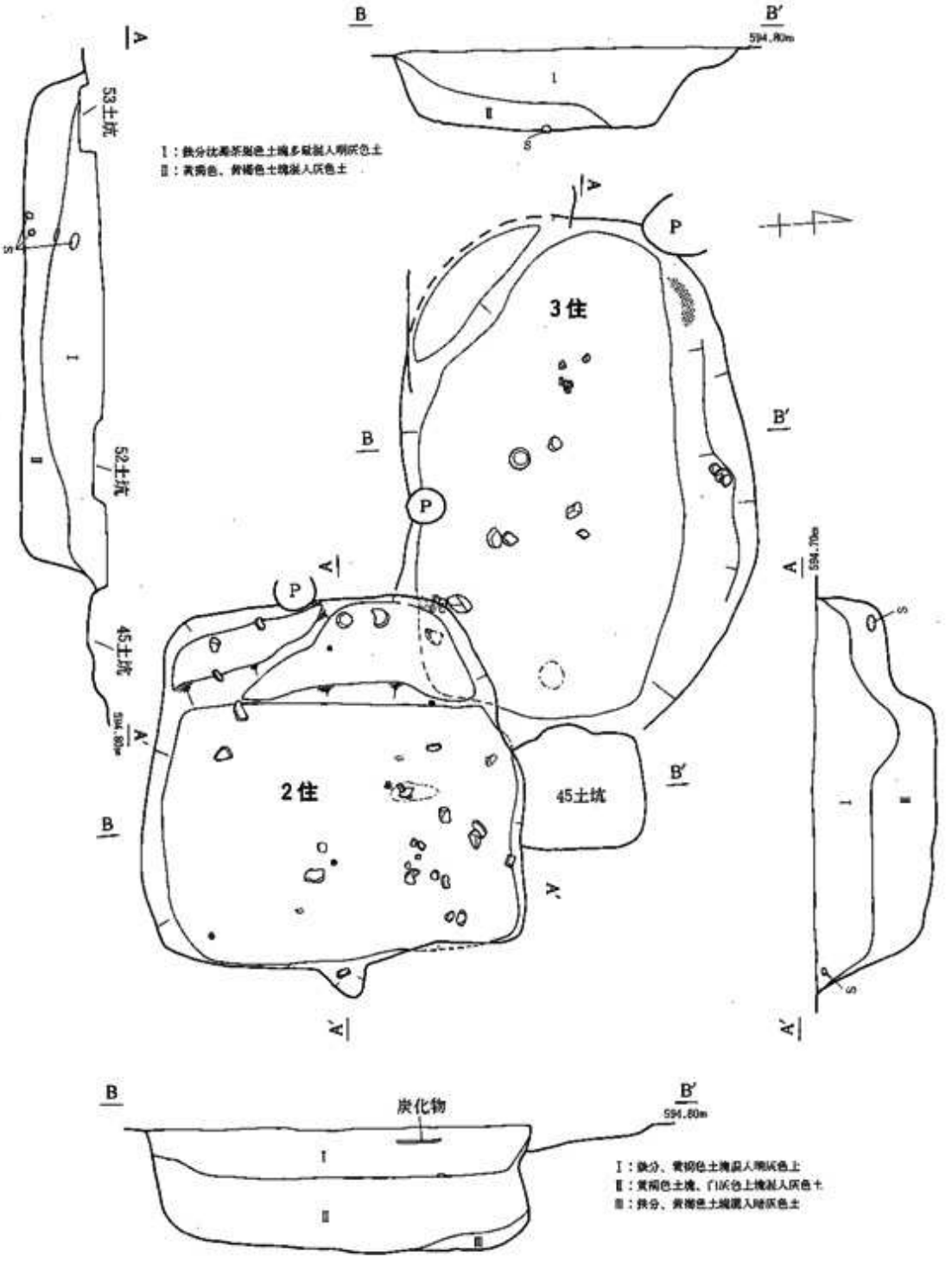
第3号住居址

本址上部は上記の2住と重複関係をなしている。更に土坑が3基、ピットが6個ありこれらはいずれも住居址より新しい遺構である。主軸方向はN－84.5°－Wを示す。平面形は楕円形で、その規模は東西4.54 m、南北3.15 m を測る。壁はさきの2住よりずっと傾斜が緩やかで特に西壁は上部がだらだらという状態であった。これらの高さは50～70 cm である。床面は平坦で全体に堅さが残っている。ピットは中央やや南寄りに小さな円形のP_1（17×19×24）がある。カマド施設は見当たらないが、焼土が狭い範囲ながら北西部の壁面に検出した。これは移動式カマドの使用の痕跡であろう。

遺物はごく僅かで、土師器、土師質土器、須恵器等がみられる。鉄器には苧引鉄が1点出土した2号住居址との切り合い関係から本址の時期は、14世紀末頃から15世紀代のものであろう。



第7図　第1号住居址



第8図　第2・3号住居址

第4号住居址

調査区南西部に位置する。西際には後世の2溝が位置するため、その影響により覆土中にも鉄分の沈澱が広がっていた。重複関係では先行する15建と本址の一部を破壊するピットがある。主軸方向はN—92.5°—Wを示す。規模は東西5.35 m、南北5.44 m で、平面形は胴張方形を呈する。壁高は11～15 cm と低い。床面は黄褐色土となりやや起伏はあるが、中央部には堅さも見られ良好に残っていた。ピットは本址に伴うもの8個を認めた。P_1(75×65×15)、P_2(45×45×17)、P_3(76×65×28)、P_4(70×68×17)、P_5(97×65×13)、P_6(45×34×10)、P_7(41×39×9)、P_8(45×41×16)である。これらは、楕円形ないし円形のものであるが、主柱穴としてはいずれもふさわしくない。カマドは西壁中央部にある。粘土袖と焚口部まで広がる焼土及び炭化物を認めた。

遺物は覆土上層から床面まで全般に見られるが、主たるものはカマドの内部、そして左袖の外側南西四半部の床面上に遺存していた。又、東半部床面上に焼土塊と灰・炭化物の広がりがあり、床面と化している。それらはカマドの所産で家屋内に投棄した結果であろうと推測する。

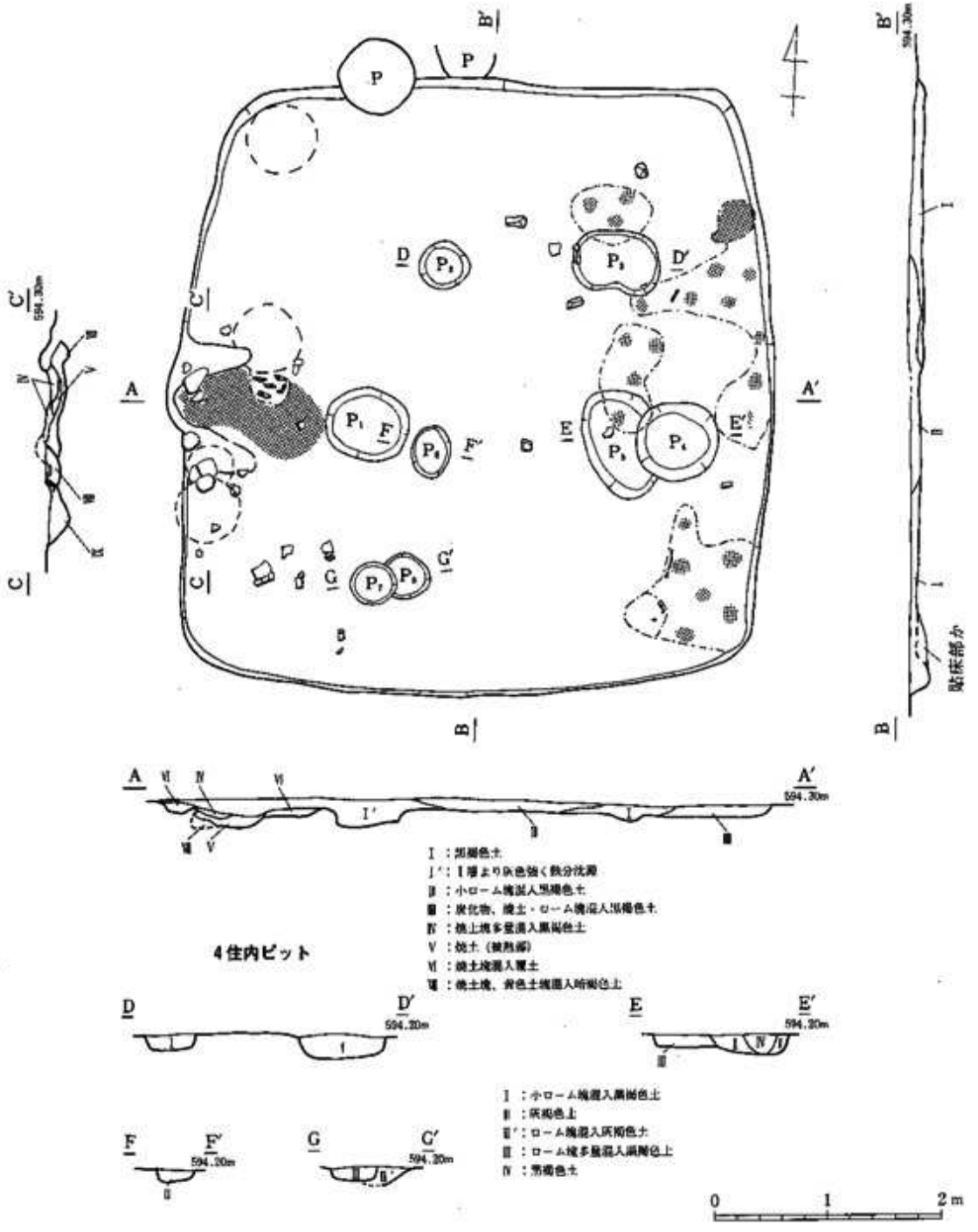
これらの遺物は、土師器坏・小形甕・甕などの土器類の他、鉄器に刀子1点がある。土器類などから見て本址は、島立南栗II期に属しよう。

第5号住居址

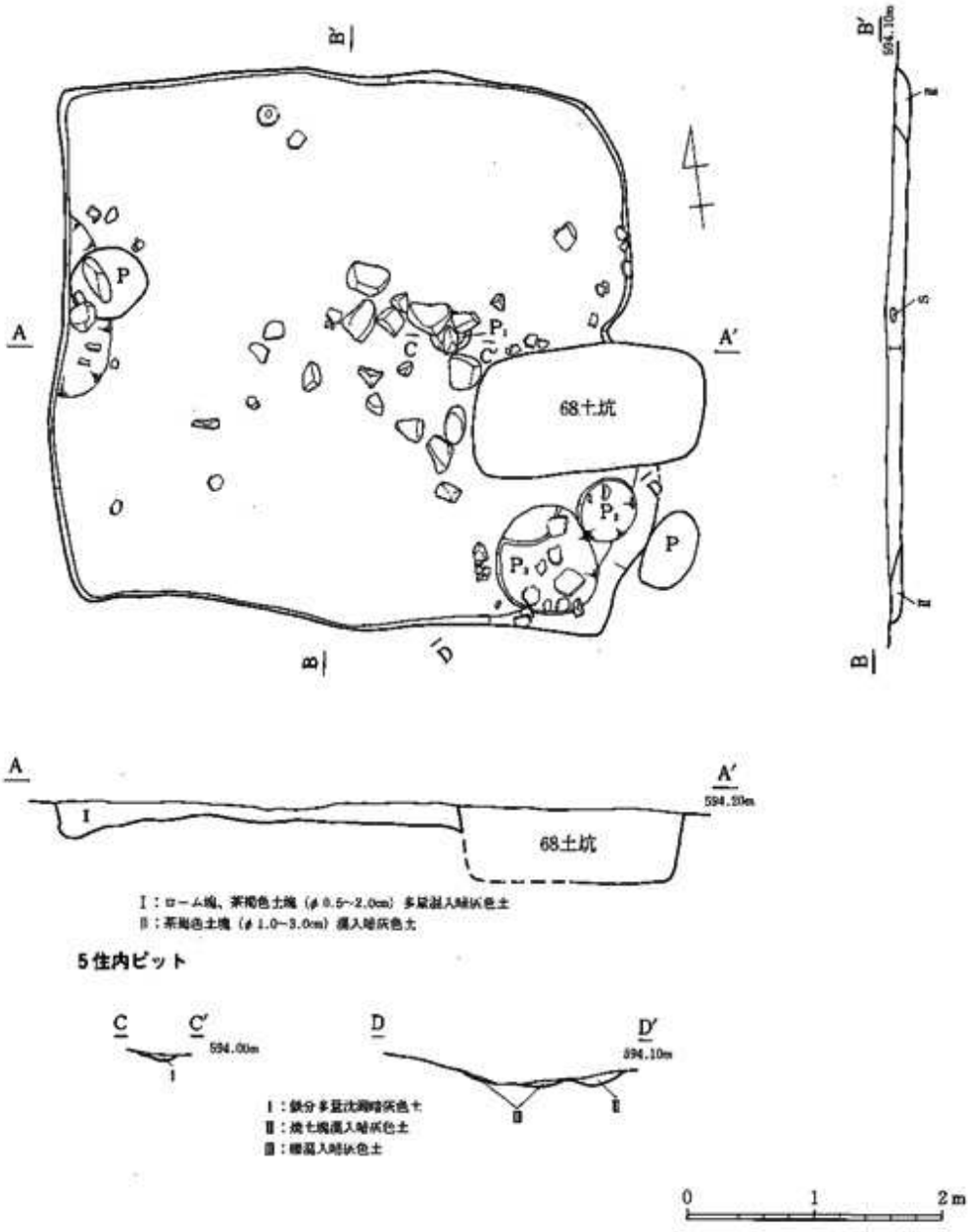
調査区南東隅に位置する。遺構内には1建の柱穴及び68土坑が床面の一部を破壊して存在する。これらはともに本址より新しい遺構である。主軸方向はN—97.5°—Eを示す。東西4.53 m×南北4.45 m の規模を測りやや不整の方形を呈する。壁高は7～15 cm と低い。床面は黄褐色土で非常に堅く良好であるが、北東隅は自然堆積の礫が露出しており堅さは見られない。なお中央西壁際の一部には、巾25 cm 長さ1.2 m の短い周溝がある。柱穴らしきものはなく、ピットが3個認められた。P_1(32×32×5)、P_2(52×46×11)、P_3(85×80×12)である。カマドは残っていなかったが、68土坑の北壁側に焼土が残留しており壁の一部が住居址側に入り込んでいるのが分かる。東壁中央部に壁の一部を袖として利用したものである。

遺物はP_3から土器類の多くが出土、次いで北西四半分の床面上に何点か見られた。又、P_1上部に人頭大までの石が20個程集まっているが、いずれも床面には密着しておらず住居埋没時に転入したものである。

遺物は、土師器の坏が多く、埦・皿・小形甕・鉢、須恵器壺・甕などがある。又鉄器に長い棒状のもの1点があり、土器より見ると本址は、島立南栗XI期になる。


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
P
594.30m
貼床部か
4住内ピット
Ⅰ：黒褐色土
Ⅰ′：Ⅰ層より明色強く鉄分沈着
Ⅱ：小ローム塊混入黒褐色土
Ⅲ：炭化物、焼土・ローム塊混入黒褐色土
Ⅳ：焼土塊多量混入黒褐色土
Ⅴ：焼土（被熱部）
Ⅵ：焼土塊混入覆土
Ⅶ：焼土塊、黄色土塊混入暗褐色土
Ⅰ：小ローム塊混入黒褐色土
Ⅱ：灰褐色土
Ⅱ′：ローム塊混入灰褐色土
Ⅲ：ローム塊多量混入黒褐色土
Ⅳ：黒褐色土
0
1
2m

第9図　第4号住居址


B'
B'
594.10m
A
A'
P
P₁
C
C'
68土坑
D
D'
P₂
B
B
A
A'
594.20m
I
68土坑
I：ローム塊、茶褐色土塊（φ0.5~2.0cm）多量混入暗灰色土
II：茶褐色土塊（φ1.0~3.0cm）僅入暗灰色土
5住内ピット
C
C'
594.00m
D
D'
594.10m
I：鉄分多量沈殿暗灰色土
II：焼土塊混入暗灰色土
III：炭混入暗灰色土
0
1
2m

第10図　第5号住居址

第6号住居址

用地内南東部に位置する。主軸方向はN—98°—Eを示し、規模は東西6.85 m、南北7.68 m と、今回調査したうちで最も大きな住居址である。平面形は北側がゆるやかに外に張る隅丸方形である。壁高は16～32 cm を測る。床面は淡い黄褐色を呈し全体的にゆるやかな起伏があり中央部のみに堅さが見られる。他は軟弱ないし、自然礫が露出している所もある。柱穴は4個あり、P_1(96×75×25)、P_2 (70×40×19)、P_3 (94×35×25)、P_4 (70×59×23)、を主柱穴として考えている。他には、P_5(175×88×8)が南東隅に位置する。北壁から東壁の一部にかけて周溝が認められた。これは60～90 cm の巾をもち周囲の床面との差は、平均20 cm 位である。カマドは東壁中央部に位置する粘土カマドである。壁上部を外に25 cm 掘り広め煙道としていたのであろう。カマドの内部からは被熱により生じた焼土が、70×45 cm の狭い範囲にまとまって検出できた。

遺物は量的に多い。覆土中には土器類の他、小さな骨片を含む焼土塊や炭化物などが、広い範囲で自然埋没の様相をみせ堆積していた。これらは住居址廃絶後に投棄したものを明瞭に物語っている。なおP_5中からは遺存状態の良い高坏2点の他かなりの遺物が出土し、これに次いでカマド周囲からのものが目についた。又、床面からの遺物がきわめて少なく見るべきものがない。

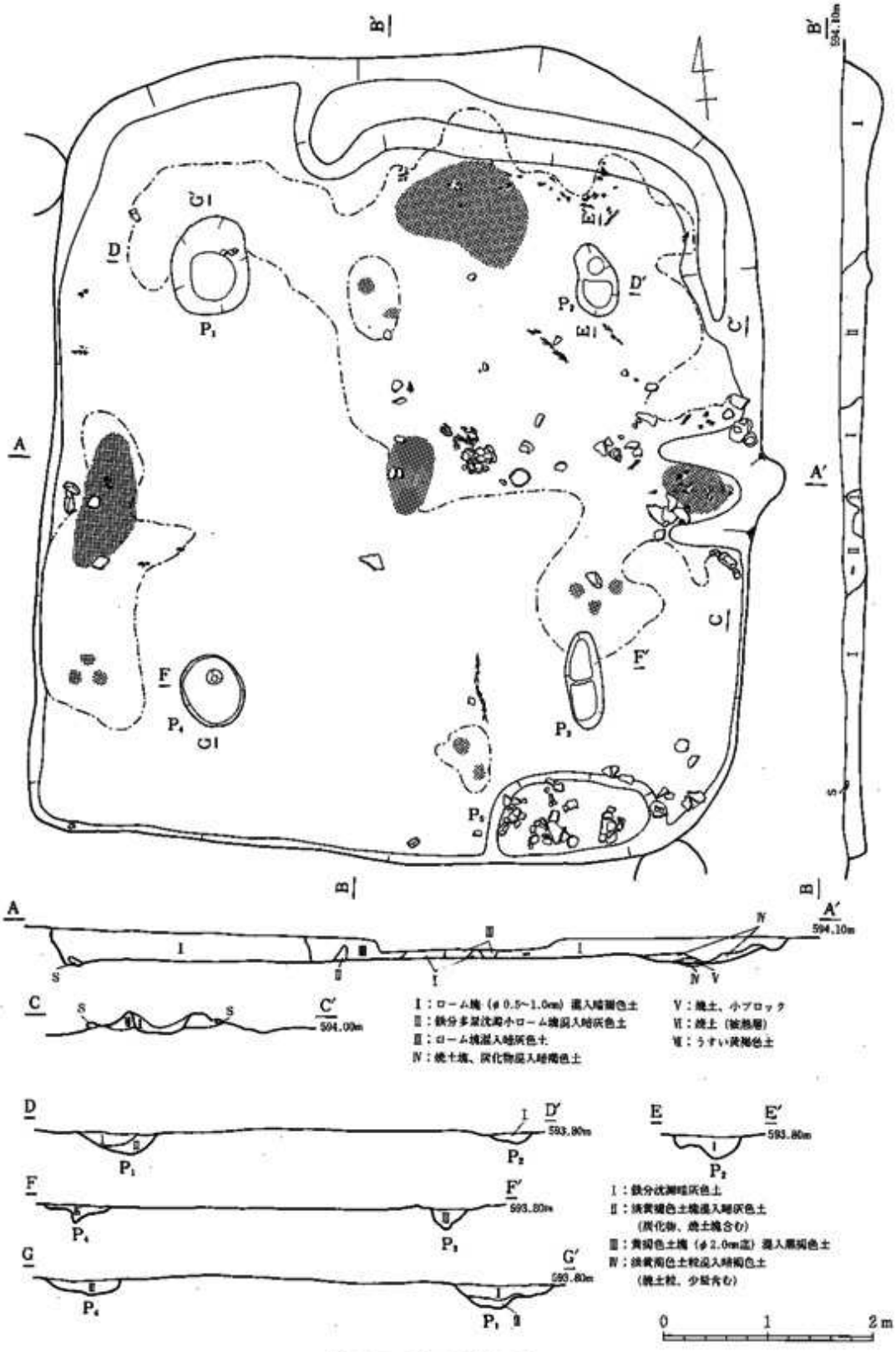
土器類としては、土師器に甕類が多く、小形甕・坏などもある。須恵器には、坏類が多く、高坏蓋・甕・盤なども見られる。鉄器には刀子・紡軸のようなものがある。遺物から見て、本址は、島立南栗Ⅲ期になろうか。

第7号住居址

用地内南東隅にあり、大部分が用地外にある為、全体の2割程しか調査ができなかった遺構である。検出時から焼土塊及び炭化材が多く目につき、これらは掘り下げるに従い徐々に多くなり焼失した住居址であることを示していた。北西隅は本址より新しい8住に、東側は同様の9住に破壊されているが、明瞭な覆土の違いと、本址の床面がやや低いこともあり重複部分でも容易に検出し得た。平面形は隅丸方形、規模は東西5.8 m 程である。壁高は30～40 cm を測る。床面は黄褐色を呈し平坦ではあるが堅さはなく、又調査した中ではピット等は見られない。北壁中央部に長さ250 cm、巾14～20 cm、深さ20 cm 程の周溝が壁際に巡っている。

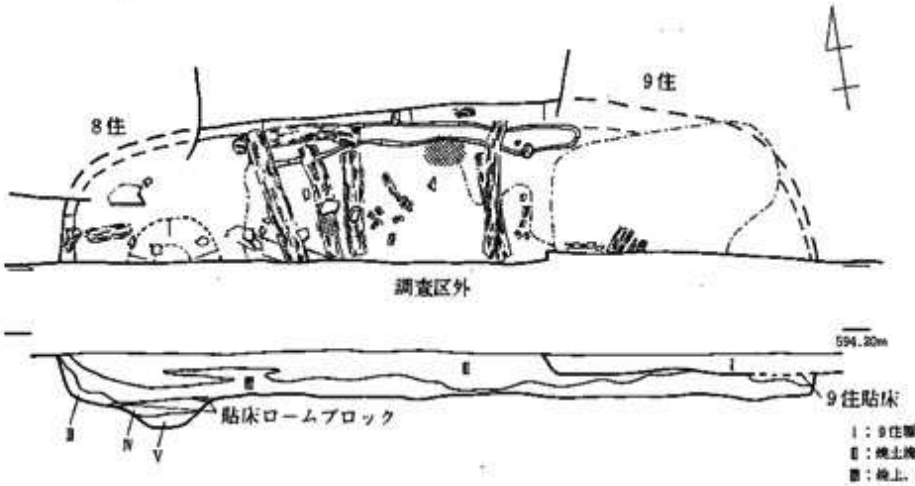
遺物は調査範囲が狭い為もあり、総量でみても土器は少ない。焼土、炭化物は多量にあり、西側を除き全面に存在、特に炭化した材片は巾15 cm、長さ1 m 以上のものが何本も放射状に重なり合って、住居址の中央部から出土した。又、周溝際には床面上に敷かれていたと思われる縦横に編まれたワラ状植物が炭化して残っていた。

土器は土師器に、小形甕・甕、須恵器に坏・甕等がある。他には石製の浮子が1点ある。時期は島立南栗Ⅲ期となろう。尚、炭化した敷物は、ナラ或はクリ材の平板の上に、ヨシ、ススキまたはハギで編んだものを敷いていたと考えられる(註)。　註、県林業総合センター専門研究員　大木正夫氏御教示

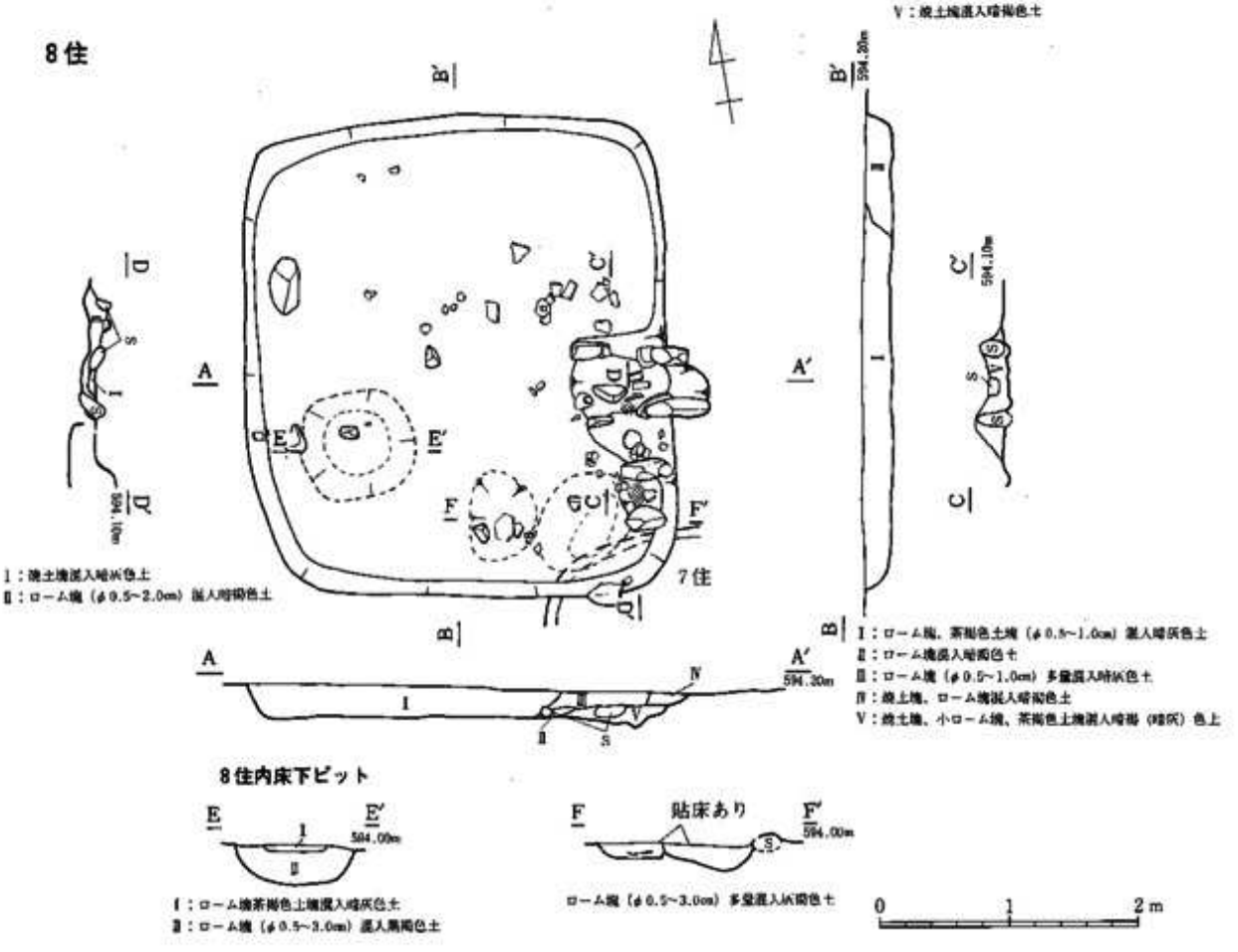

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
594.10m
594.00m
593.80m
Ⅰ：ローム塊（φ0.5～1.0cm）混入暗褐色土
Ⅱ：鉄分多量沈澱小ローム塊混入暗灰色土
Ⅲ：ローム塊混入暗灰色土
Ⅳ：焼土塊、炭化物混入暗褐色土
Ⅴ：焼土、小ブロック
Ⅵ：焼土（被熱層）
Ⅶ：うすい黄褐色土
Ⅰ：鉄分沈澱暗灰色土
Ⅱ：淡黄褐色土塊混入暗灰色土
（炭化物、焼土塊含む）
Ⅲ：黄褐色土塊（φ2.0cm広）混入黒褐色土
Ⅳ：淡黄褐色土粒混入暗褐色土
（焼土粒、少量含む）
0
1
2m

第11図　第6号住居址

7住



8住



第12図　第7・8号住居址

第8号住居址

南東部隅で7住の一部と重複する。主軸方向はN－98°－Eを示し、東西3.31 m、南北3.72 mの規模をもつ、隅丸方形の住居址である。壁高は低い南側で18 cm、高い西側では26 cmを測る。床面は黄褐色となり非常に平坦であるが、堅さは全く感じられない。柱穴は検出できなかったが、ピットを3個確認した。これらはいずれも上部に貼床を施してあり、本址に伴うものではない。焼土はカマド内に塊状となって現れるが、被熱部としては燃焼室の南脇つまり袖内側に若干残っているだけである。又、このカマドの南側に焼土塊を中央に置く2個の配石があるがこれはカマド施設ではない。カマドは東壁中央に位置する。奥壁部を30 cm程外へ掘り込んだ石芯粘土カマドである。袖部は左右それぞれの手前に1個、奥に2個ずつの石が立てて埋設してある。

遺物は覆土中層～下層にかけて比較的多く、主たる遺物はカマド周辺から南東隅にかけて出土している。

土器類には土師器として坏・埦・甕・小形甕、須恵器に坏・蓋・横瓶、他に灰釉陶器の碗などがある。これらは、島立南栗IX期とされる。

第9号住居址

西側に7住を破壊して位置する。7住より灰色がつよい為、検出はし易かった。南半部は調査区外の為に未調査となった。主軸方向はN－103°－Eとなろう。規模は東西4.49 m、平面形はやや不整の方形であろうか。壁高は12.3 cmと低い。床面は黄褐色を呈し、中央部はやや堅く周囲は軟らかい。又、7住と重複した部分は貼床が施され、炭化物が点在し焼土も散見する。柱穴及びピット類は全く見当たらなかった。カマドは東壁にあろう。覆土中に焼土粒が見え、南に徐々に密度が濃くなっている様子から、その位置もほぼ中央部辺りと推測する。

遺物は量的に多くはなく主たるものは床面上にあり、遺構全体に散在する。

遺物は土器のみで、土師器の坏・埦・甕類などである。これらは島立南栗X期に属しよう。

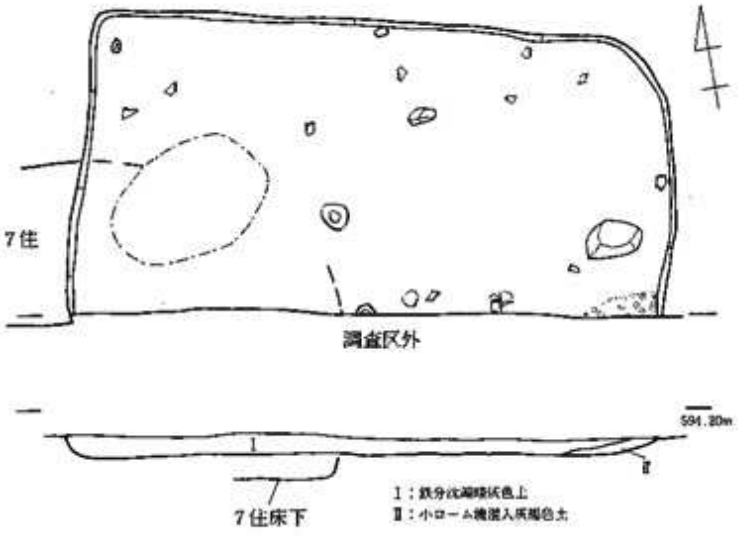
第10号住居址

調査区中央西際に位置する。西側3割程は調査区外にあり検出できなかった。方形を呈し規模は南北4.33 mを測る。壁高は低い北側で5 cm、南側で13 cm程である。床面は明瞭でなく北側礫面で把えた。南側は淡い黄褐色土となるが軟弱であり、全体でみると平坦ではあるが南・北壁際の比高差を測ると、北側が7～8 cm高くなっていることが分かる。ピットは深いP_1（74×68×27）と浅いP_2（61×53×6）を検出した。両者とも柱穴としてはふさわしくないものである。焼土など、カマドを想定するものは調査した箇所には全く見えていない。

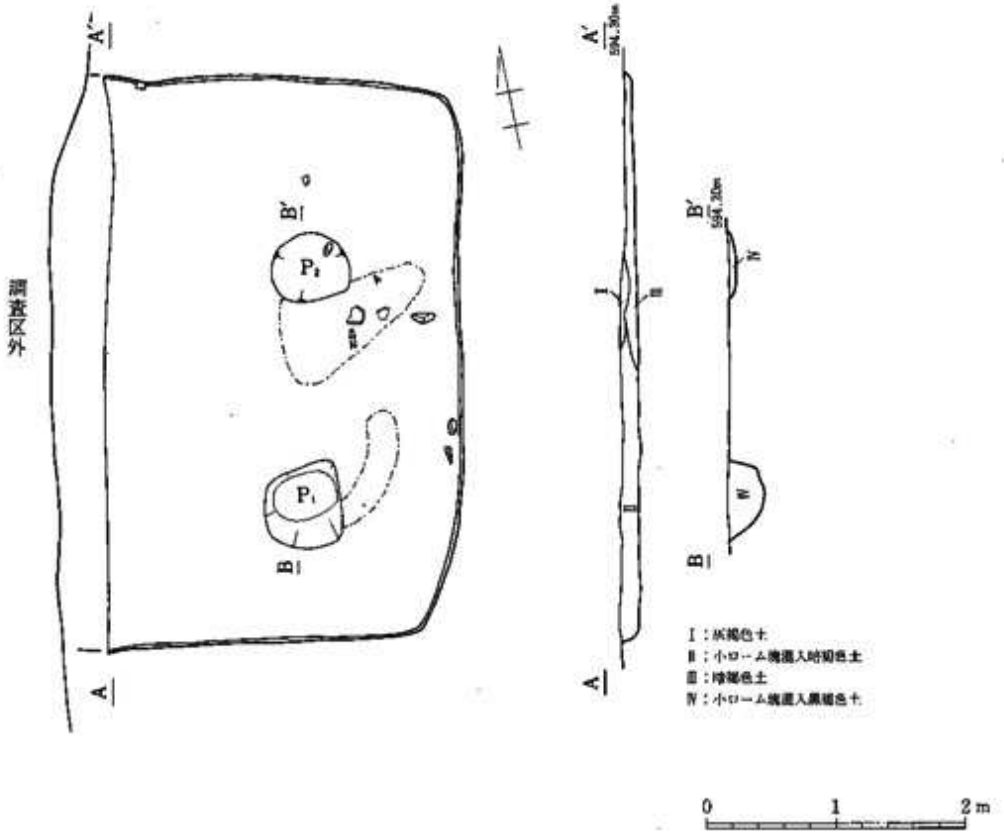
遺物は覆土中から量的に少ない土器類を得たのみである。ピット周辺及び床面上に炭化物が図に示したように広がっていた。

土師器坏など少量の土器から、島立南栗II期と考える。

9住



10住



第13図　第9・10号住居址

第11号住居址

北西部に位置する。この周辺はカマド部を含むわずかな土質であり、あとは直径5㎝位までの礫が堆積している。これは古い水路があった為でこれにより遺構は明瞭に検出できた所である。埋土の土色は上部が暗い灰色土で床面に近づくに従いその灰色が無段階に減じて次第に褐色がかる。更に茶色が強くなり全体的に黒褐色に至っている。この状況は自然埋没の様子をよく表している。主軸方向はN－94°－Eを示す。規模は東西2.90 m、南北3.36 m と今回調査した中でもっとも小形のものである。平面形は方形を呈す。壁高は12～20 ㎝を測る。床面は平坦であり、中央部のみ鉄分を沈澱させた黄色土で堅く、周囲は礫が露出しており、その上に褐色に近い黄褐色土が薄く存在する。柱穴、ピット等は全く検出できない。カマドは東壁中央やや北寄りに、床面につき立てた大きな平石と更に東壁に対して直角に並べたこぶし大の計7個程の石で、それと分かるのであるが、これらをとりまく粘土らしきものは確認できず、この袖石のあり方も左右かなり変形なものである。焼土は小塊となったものが僅かではあるが認められた。なお壁上に浅いピットがあるが、カマド施設とのつながりは分からない。

遺物はカマド北側壁際に若干集中する。総量とするとさほど多くはない。

土器には、須恵器坏・短頸壺などがあり、鉄器に鋤・鏃が1点ある。土器は、島立南栗IX期に属しよう。

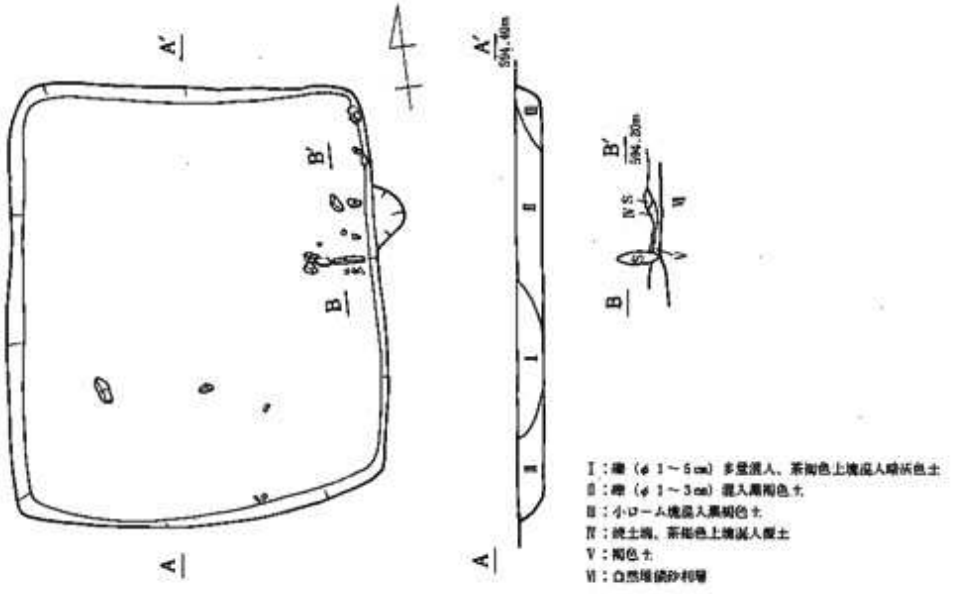
第12号住居址

北西隅に位置する。住居址周囲の状況は11住同様であり、部分的に土質でほとんどが礫質となっていた。主軸部分は長軸を計測してN－20°－Eを示す。規模は東西2.94 m×南北4.40 m の隅丸長方形を呈する。壁高は14～19 ㎝を測る。床面は後の耕作による鉄分或いはマンガン分が沈澱し、黒く又赤色がかったような色を呈するが、堅さは全く感じられない。なおその直下はほとんど礫が多量に混入する黒褐色土となる。柱穴、ピット等は全く認められない。又、カマドらしき施設も見当たらない。

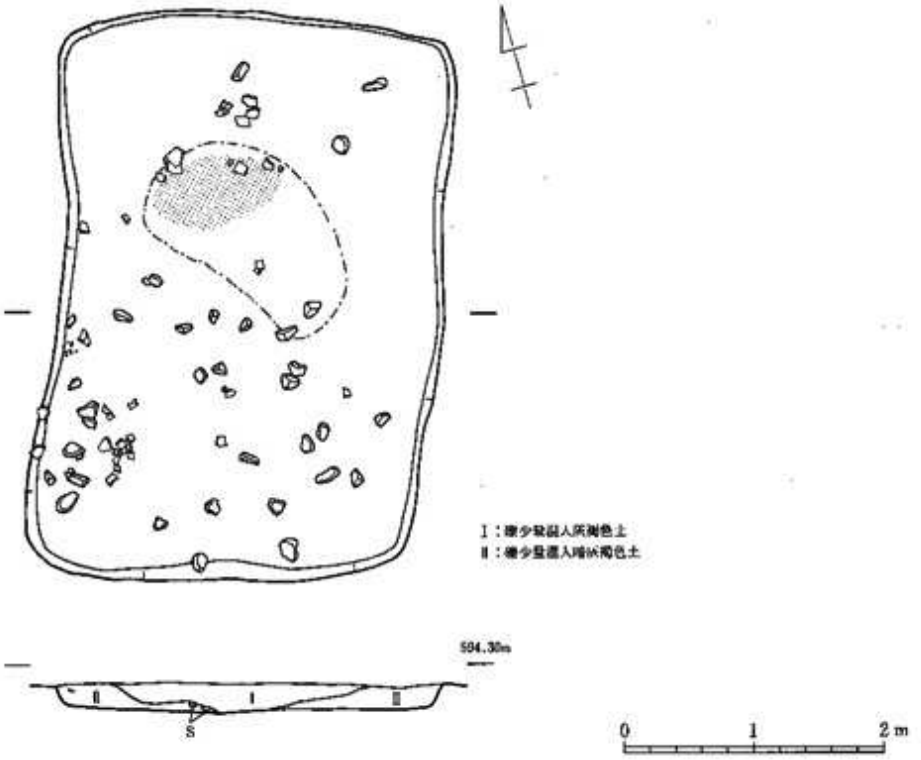
遺物は覆土上層から床面まで、小頭大の石とともに混在して、その出土傾向に特に変化は見られない。中央部床面上に炭化物が広く散在し、その中に馬の上、下顎部が50 ㎝程離れて転がっていた。

土器類に土師器の坏・甕・高坏など、須恵器に坏・短頸壺・擂鉢等がある。鉄器には鎌か、苧引鉄のようなもの1点がある。土器は島立南栗III期となろう。

11住



12住



第14図　第11・12号住居址

第13号住居址

北東部に位置する。覆土中には1個のピット、北壁上に2個のピットと僅か重複する。主軸方向はN－10.5°－Eを示す。端正な隅丸方形を呈し、東西4.76 m、南北4.36 m を測る。壁高は20～32 cmである。床面は、中央部が狭い範囲で僅か堅く、小礫を混じえた暗色の灰褐色土でこの土色は他の住居址とはやや異なる。柱穴等は全く見られない。カマドは北壁中央部に位置する。やや大ぶりな石を左右にそれぞれ4個、1個と配し、土で固定し袖部としたのであろうが、原形は分からない。壁外も30 cm程掘り込み煙道の一部とうかがえる。

遺物は覆土に全体的に散見し、特徴的な傾向は見られない。が、カマド内部にはやや集中する。又、焼土はカマド内に、その周囲床面上には炭化物が存在している。

土器は、土師器坏・埦・小形甕・甕、須恵器に坏・蓋・甕・広口壺など、灰釉陶器として、碗・皿・瓶などがある。又、土製品として、土錘が1点ある。遺物からすると、本址は島立南栗XI期になろう。

第14号住居址

調査区内中央部東際に位置し東半部は地区外となる。隅丸方形で南北のみ4.65 m を測る。壁高は西側で15 cm、北側で30 cmの高さである。床面は褐色で堅さは全くなく、中央部が周囲より若干凹む。ピット、カマド類は全く検出できない。西壁際には250×40 cmで楕円状に又、南西部から南壁にかけてやはり壁際に巾40 cmでベッド状の段が設けられている。床面との比高差は10～20 cmを測る。

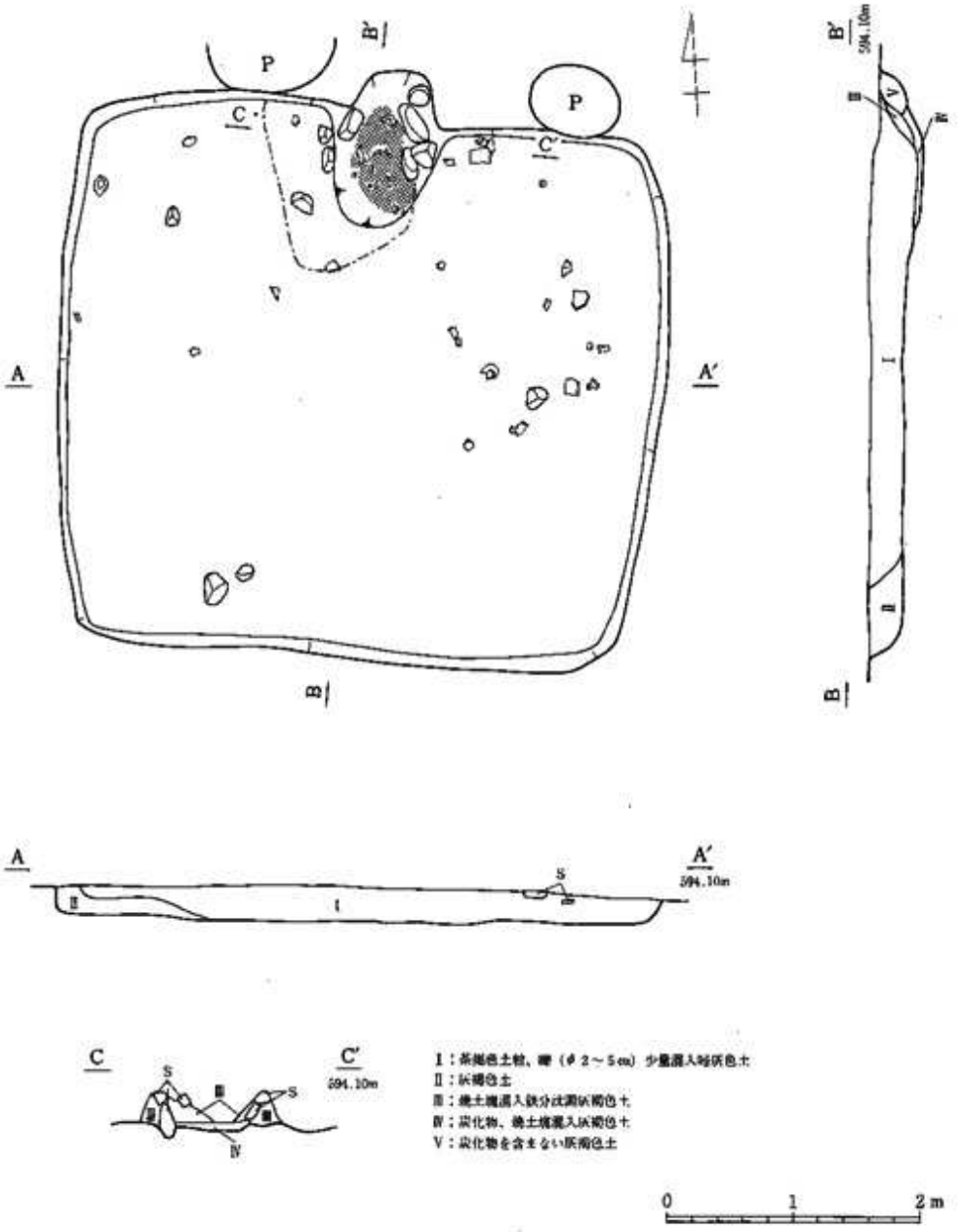
遺物は土器類のみ少量である。土師器に坏、灰釉陶器に碗、などであり、須恵器坏も若干見られた。これらの遺物より見て本址は、島立南栗X期になろう。

第15号住居址

14住の南に位置する。当初は南にある20住と一体の遺構と見えたが、断面により本址が20住より新しいものと判断した。全体的には隅丸方形のようであるが、大部分が調査区外の為、詳しくは分からない。壁高は40～50 cmと高く、床面は黄褐色ロームで中央部が周囲より若干凹む。ピット、カマド等の施設は認められない。

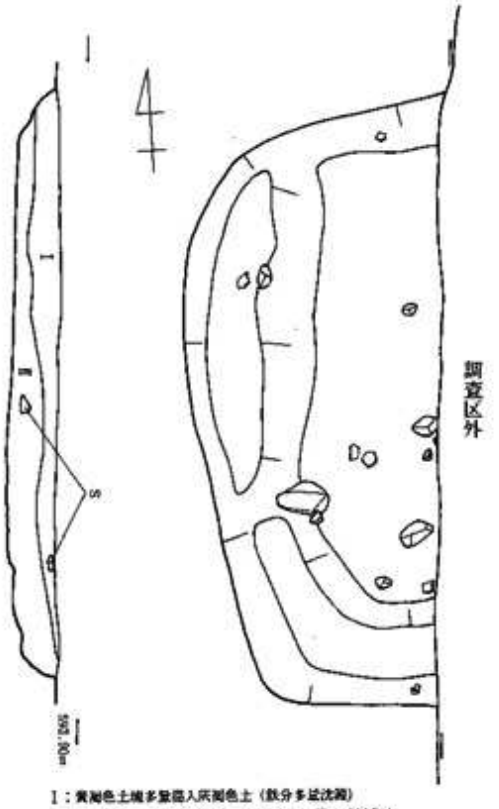
遺物は覆土が深いこともあり、量的には多い。

土器は、須恵器が多く、坏・壺など、他には土師器坏などが見られた。鉄器には鎌がある。土器よりして本址は島立南栗X期に含まれよう。

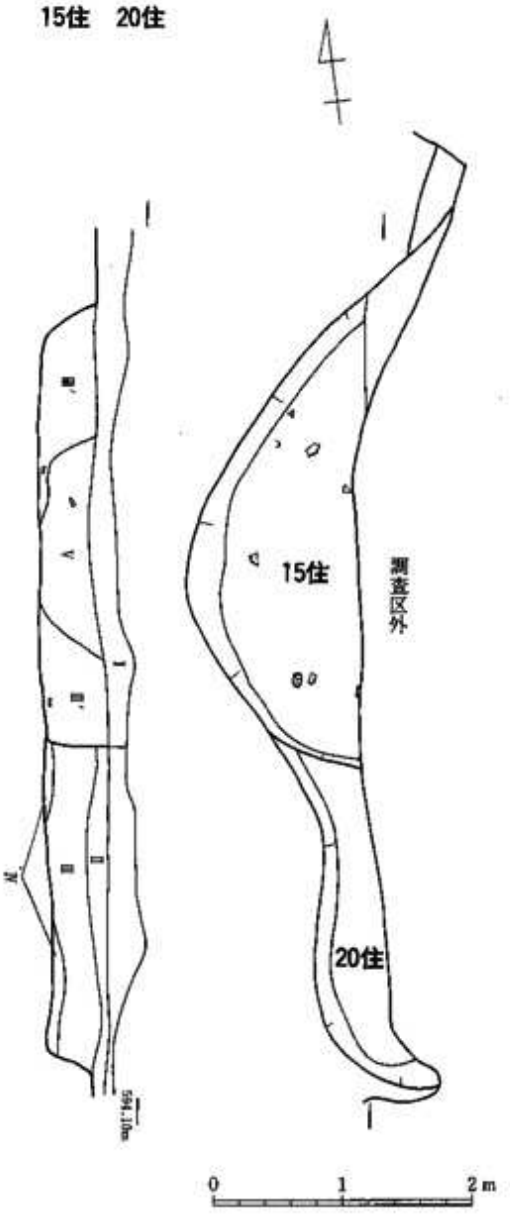


第15図　第13号住居址

14住



15住　20住



第16図　第14・15・20号住居址

第16号住居址

調査区南西部に位置する。西半部は調査区外にあり、覆土中に本址より新しいピット3個が存在した。覆土は上部が黒色つよく下部に至って灰色的となる。この点で他の住居址とは層位逆転する。主軸方向はN－90°－Eを示し、南北4.08mで隅丸方形を呈する。壁高は低い東側で19cm南側は高く35cmを測る。床面は南壁際が若干凹んでいるが他は平坦で黄褐色を呈し全面にやや堅さが見られる。本址に伴うピットは検出できない。カマドは東側壁中央部に位置する。1.8mの長い煙道と、煙出しのピットを設けた壁を掘り込んだもので内部には狭い範囲の焼土、そしてその周囲に炭化物が広がっている。

遺物は、土器に土師器坏、須恵器坏・短頸壺・四耳壺などがある。土器以外としては、銅製の帯金具が見える。遺存状態も悪い為図示していないが、巡方といわれるもので、裏面の突起と、突起受けの穴から見て一対そろっているようである。本址検出時の遺物である。

第17号住居址

地区内南東部に位置する。19住及び、58土坑、他にピット等と切り合うが、床面まで重機で削平した為その前後関係はつかめない。規模は南北で4.33mを測り、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。床面は自然礫の直上にあり、平坦となり黄褐色土で固く良好な状態である。ピットはP_1(48×40)、P_2(39×31)であるが、ともに浅く柱穴とは認め難い。

遺物は上記のような検出状況であるため総量はきわめて少ない。

土器に土師器皿・坏、灰釉陶器碗などである。これらの遺物より見て本址は、島立南栗Ⅸ期に該当しようか。

第18・19号住居址

この2軒は調査区内南東隅にあり、ともにほとんどが区外にある為、番号を付したのみで掘り込みを実施しなかった。平面形は両者とも方形を呈するようであり、18住は南北3.7m程と思われる。しかしこの両者は覆土色に大きな相違がある。19住は他のほとんどの住居址と同じ土色であるが、18住は2・3住と同様の明灰色土を呈し、中世の遺構と推測できる。

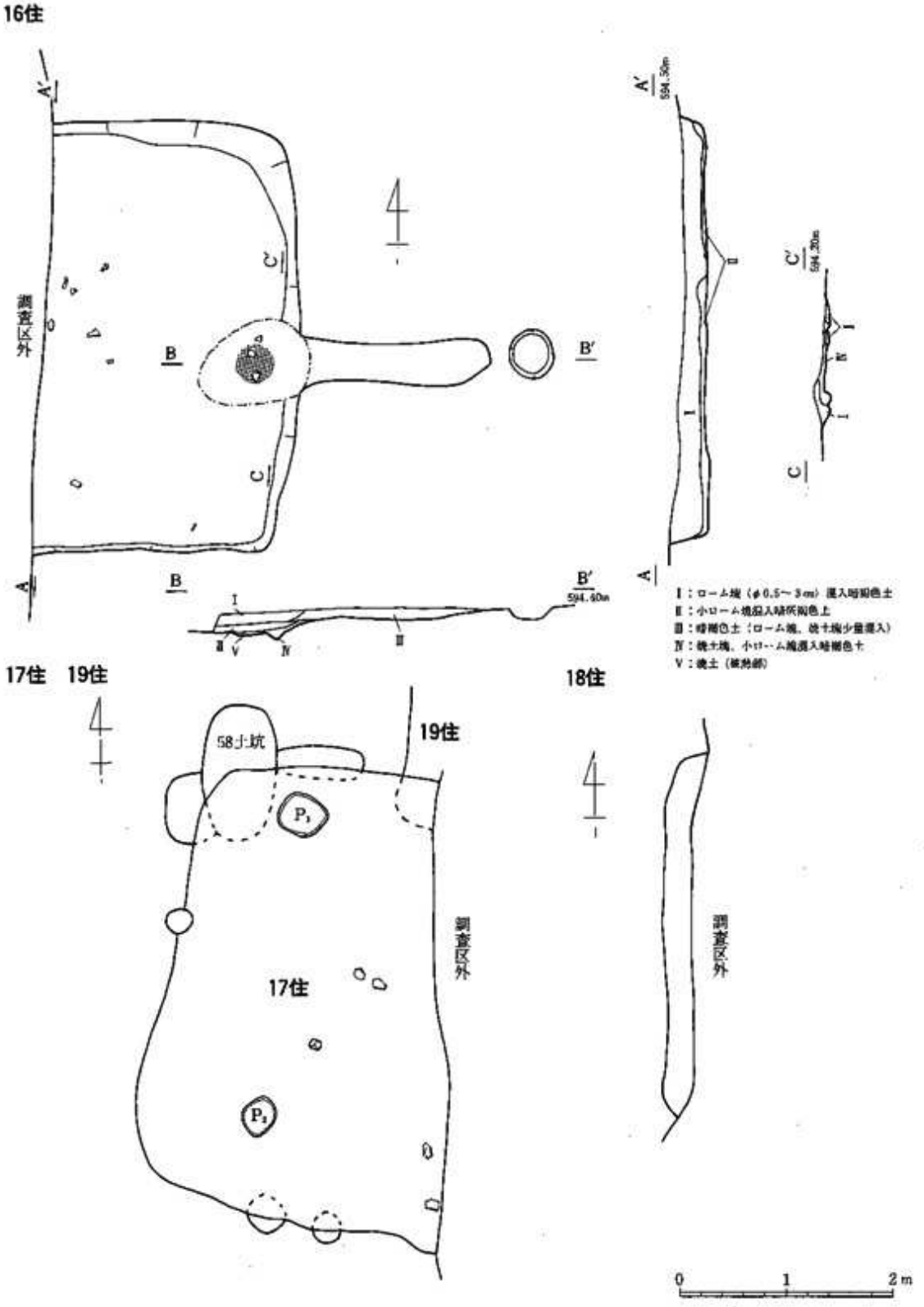
遺物は未調査の為、上面にて得たほんの数点にとどまり、帰属時期などは与えられない。

第20号住居址

北に15住があり、土層観察により本址が旧いものと判った。ほとんどが調査区外である為、概要は分からない。ただ床面までは30～35cmと壁が高い為、黄褐色の床面も明瞭に確認できる。

遺物は、狭い割には量的に多い。

土器は、須恵器類が多く、坏などがある。又、鉄器に刀子茎らしきものが1点ある。土器と切り合い関係から本址には島立南栗Ⅸ期を与える。



第17図　第16～19号住居址

第1表

SK IV 住居址一覧表

住居No.	平面形(m) 大きさ南北×東西	主軸方位	面積 (m²)	残存 壁高(cm)	カマド 位置	カマド 形態	ピット	遺物 (数字は土器番号)	備考(切合)	時期	図	備考
1	不整方形 4.79×5.08	N−83.5°−W	22.84	18〜32			1	1〜9		IX	7	
2	不整方形 3.41×3.55	N−4.0°−W	9.98	69〜105			1	10〜15	3住、45土坑を切る。ピットに切られる	中世	8	
3	楕円形 3.15×4.54	N−84.5°−W	12.89	56〜76			1	16〜18	2住、土坑・ピット多数に切られる	中世	〃	
4	胴張方形 5.44×5.35	N−92.5°−W	26.31	11〜15	西壁中央	粘土袖	8	19〜24	15建を切る	II	9	
5	不整方形 4.45×4.53	N−97.5°−E	18.79	7〜19	東壁中央部	?	3	25〜41	1建、68土坑に切られる	XI	10	
6	隅丸方形 7.68×6.85	N−98.0°−E	49.81	16〜32	東壁中央	粘土袖	5	42〜68	周溝あり	III	11	
7	隅丸方形 (1.23×5.82)		(5.98)	33〜38				69〜72	周溝あり。8・9住に切られる。焼失家屋	III	12	$\frac{3}{4}$範囲外
8	隅丸方形 3.72×3.31	N−98°−E	11.67	17〜28	東壁中央	石芯粘土袖		73〜96	7住を切る	IX	〃	
9	隅丸方形 (2.26)×4.49	N−103°−E	(10.01)	12〜13	東壁中央部	?		97〜106	7住を切る	X	13	$\frac{1}{2}$範囲外
10	正方形 4.33×(2.77)		(11.64)	5〜13			2	107		II	〃	$\frac{1}{3}$範囲外
11	正方形 3.36×2.90	N−94.0°−E	9.34	16〜22	東壁中央	石芯		108〜111		IX	14	
12	隅丸長方形 4.40×2.94	N−20°−E	12.76	14〜19	不明			112〜120		III	〃	
13	隅丸方形 4.36×4.76	N−10.5°−E	19.97	19〜25	北壁中央	石芯粘土袖		121〜148		XI	15	
14	隅丸方形 4.65×(1.96)		(7.76)	25〜42				149〜155		X	16	$\frac{2}{3}$範囲外
15	隅丸方形? (1.34)×(3.80)		(3.54)	40〜50				162〜168	20住を切る	X	〃	$\frac{1}{2}$範囲外
16	正方形 4.08×(4.18)	N−90°−E	(10.04)	19〜35	東壁中央	壁掘込 (煙道をもつ)		169〜172		II	17	
17	隅丸方形 4.33×(2.80)		(10.83)	0			2	173〜175	19住、58土坑、ピット等と重複	IX	〃	$\frac{1}{2}$範囲外
18	方形		(0.85)						未発掘	中世	〃	
19	方形								未発掘		〃	
20	? (2.46)×(0.53)		(1.25)					176	15住に切られる	IX	16	$\frac{1}{2}$範囲外

2）建物址

第1号建物址

調査区南東隅に位置する。12個のピットから成る側柱式の建物址である。南東隅の P_{42} は5住の貼床下に検出した。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN－6°－Eを示す。規模は東西3間5.1m、南北3間5.5mを測る。柱間寸法は桁行1.7～2.2m、梁行1.6～1.9mである。柱穴規模の平均値は62.9×56.9×26.5cmと小形で円形もしくはそれに近い楕円形を呈する。埋土は黒色土一層であり、柱痕は全く確認できなかった。

実測可能な遺物2点が P_{49} から出土している。

第2号建物址

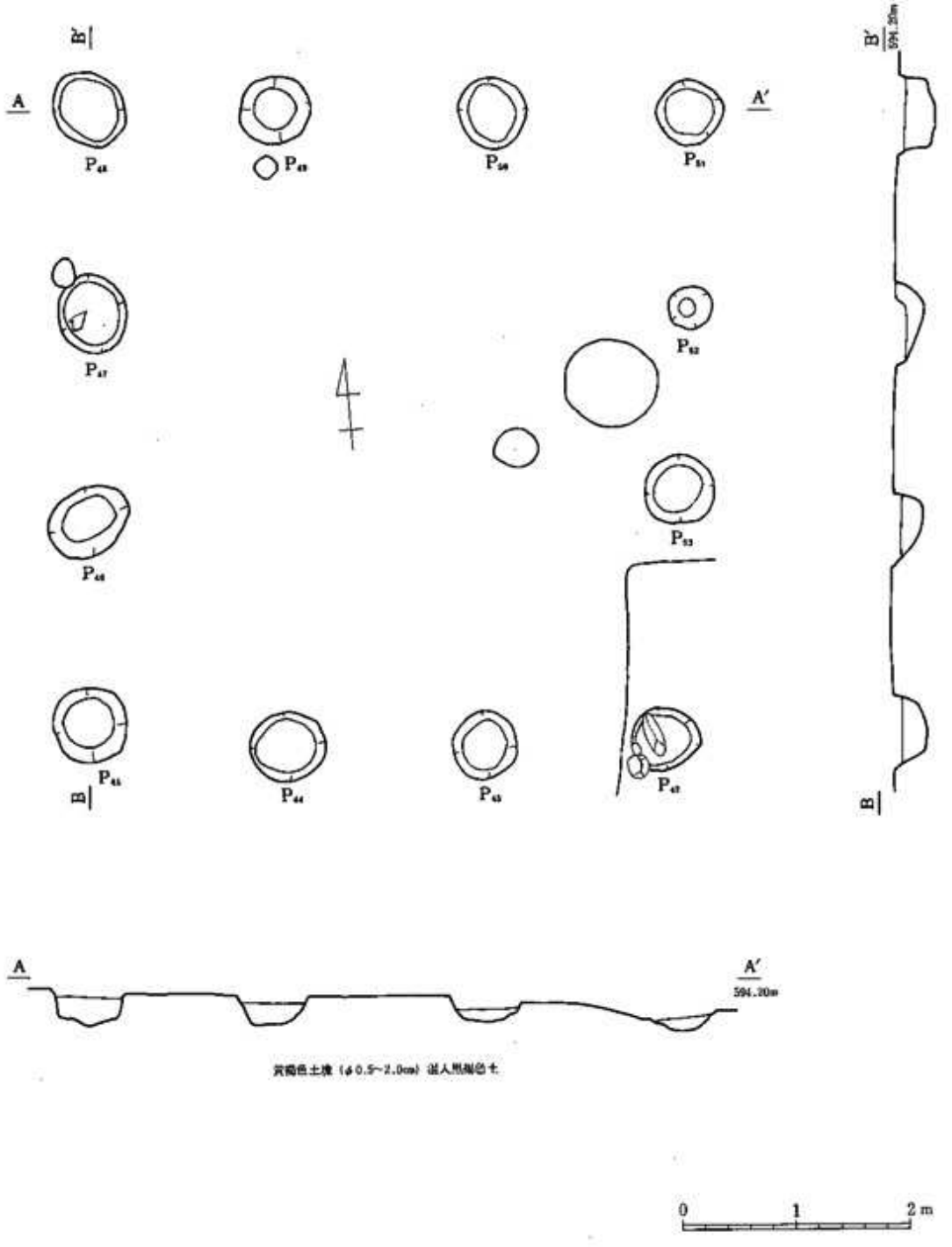
調査区中央南東寄りに位置する。7個のピットから成る側柱式の建物址である。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN－3°－Eを示す。規模は東西2間3.8m、南北2間4.2mを測り、柱間寸法は桁行1.8～2.1m、梁行1.7～2.0mである。柱穴規模の平均値は69.1×62.5×21.1cmと中形で円形に近い。7個のうち5個が二段底を呈する。柱痕は土層断面で黄褐色土粒混入暗灰色土がそれらしきものである。又、P_{62} の柱穴底部、二段底の最深部に柱立てによる土の堅さを確認した。

第3号建物址

中央南寄りに位置する。7個のピットから成る側柱式の建物址である。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN－1°－Eを示す。規模は東西2間3.4m、南北2間3.8mを測り、柱穴規模の平均値は90.4×77.7×37.2cmと大形で、ほとんどのものが不整形を呈するが、深さもある。柱痕は土層断面にて、P_{64}、P_{66}、P_{67}、P_{70}、P_{71} に表れており又、P_{68} の柱穴底部に柱立てによる土の堅さを確認した。又、本址と僅かに切り合っている P_{72}、P_{73} は本址の古いものであろうか。

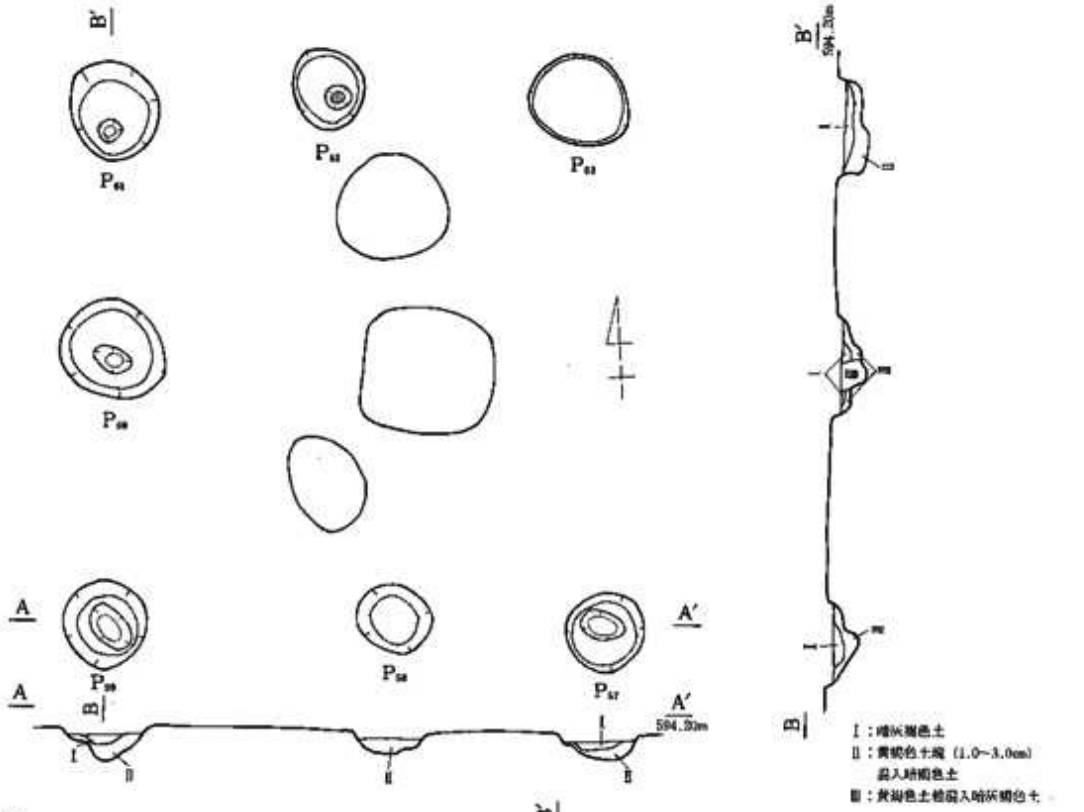
第4号建物址

中央やや東寄りに位置する。側柱式の建物址である。平面形は正方形に近く主軸方向はN－5.5°－Eを示す。規模は東西2間4.6m、南北3間4.9mを測り、柱間寸法は桁行1.5～1.7m、梁行1.7～2.6mである。この梁行寸法は東西で大きく違いこれほどバラつきがあるのは本址のみである。P_{74}～P_{79}、P_{81}～P_{84} の計10個のピットから成るが P_{85}、P_{90} はそれぞれ P_{74}、P_{84} の前に使用されたと思われる。又、P_{80}、P_{87} も使用された可能性があり、ここに掲げている個々の柱穴は大小、浅深あり形も不揃いである。なお、柱痕等は全く確認できなかった。

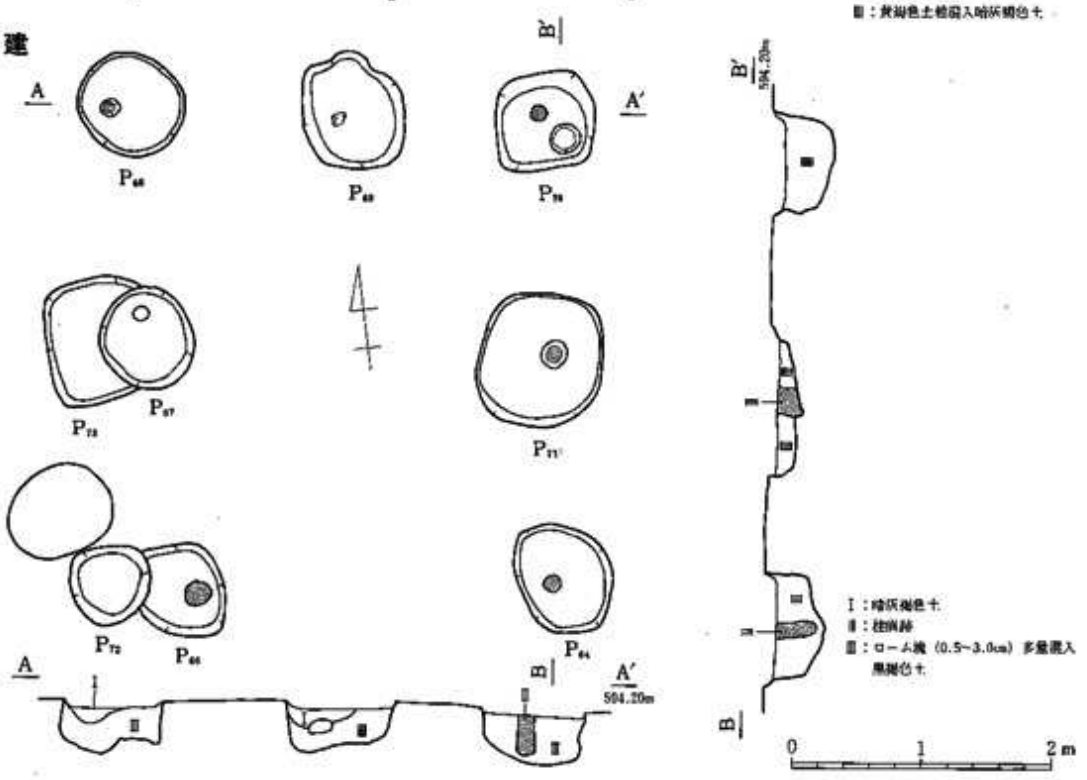


第18図　第１号建物址

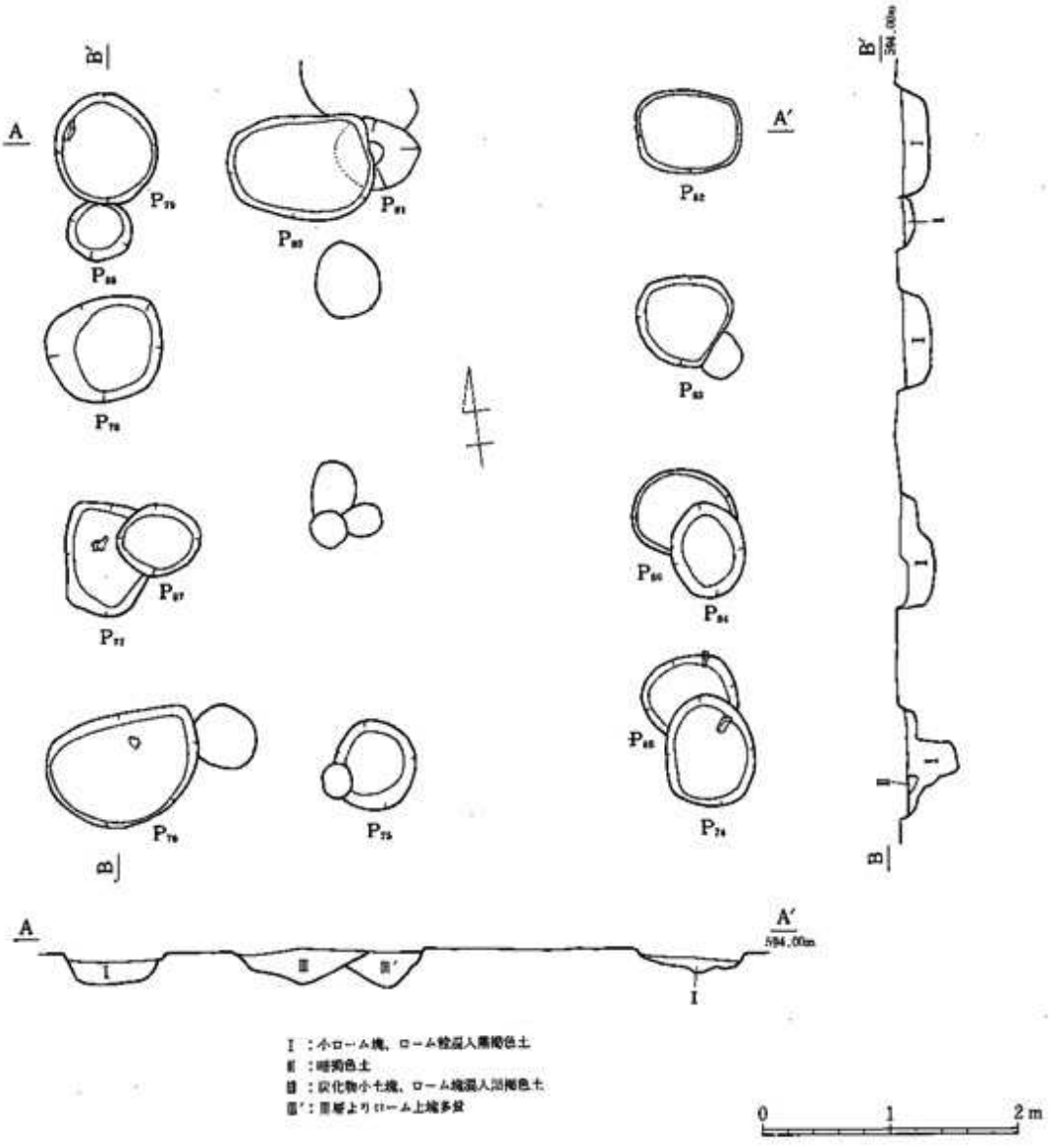
2建



3建



第19図　第2・3号建物址


A
A′
B
B′
584.00m
I：小ローム塊、ローム粒混入黒褐色土
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：炭化物小土塊、ローム塊混入黒褐色土
Ⅲ′：黒層よりローム上塊多数
0
1
2 m

第20図　第４号建物址

第5号建物址

調査地中央に位置する。側柱式の建物址である。平面形は正方形を呈し、主軸方向はN—9.5°—Eを示す。規模は東西2間3.4m、南北2間3.6mを測る。柱間寸法は桁行1.5～1.9m、梁行1.5～2.0mである。P_{92}～P_{99}の8個のピットから成り柱穴は円形ないし楕円形を呈する。柱穴規模の平均値は79.5×64.5×20.3cmと中形程度のものである。中央に南北に並ぶ小形のP_{101}～P_{103}は総柱の為のものと考え、ここに掲げている。柱痕については全く見ることができなかった。なお覆土は暗褐色土一層である。

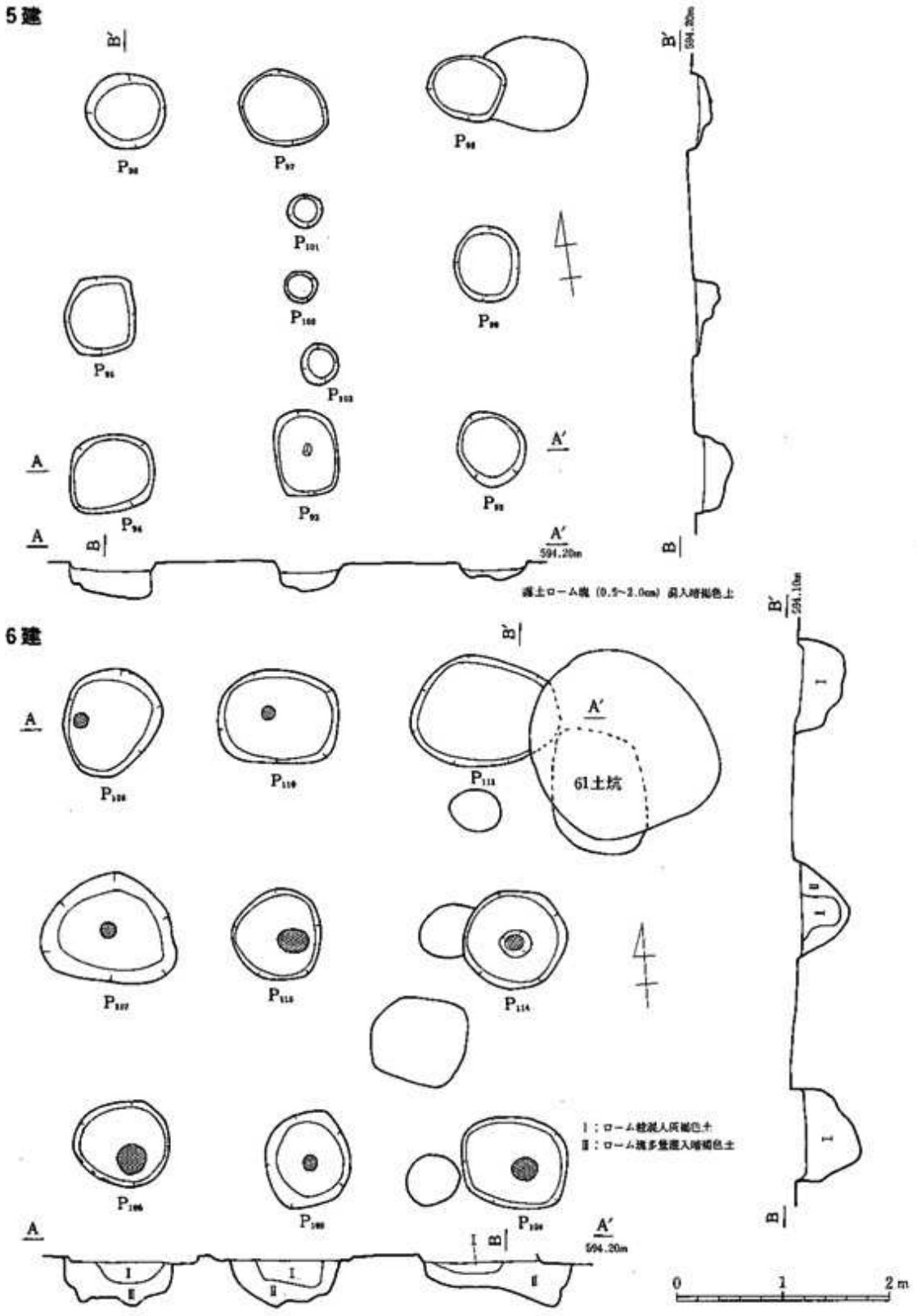
第6号建物址

調査地中央に位置する。総柱式の建物址である。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN—0.5°—Eを示す。規模は東西2間3.7m、南北2間4.1mを測り、柱間寸法は桁行1.9～2.2m、梁行1.6～2.1mである。円形ないし楕円形の9個のピットから成り、柱穴の規模平均値は107.8×87.7×50.1cmと今回調査したもののうちで一番大形であり深さがある。検出面や土層断面には見られないが、P_{111}を除いたすべての柱穴底面に柱立ての痕跡として土の堅さを確認した。

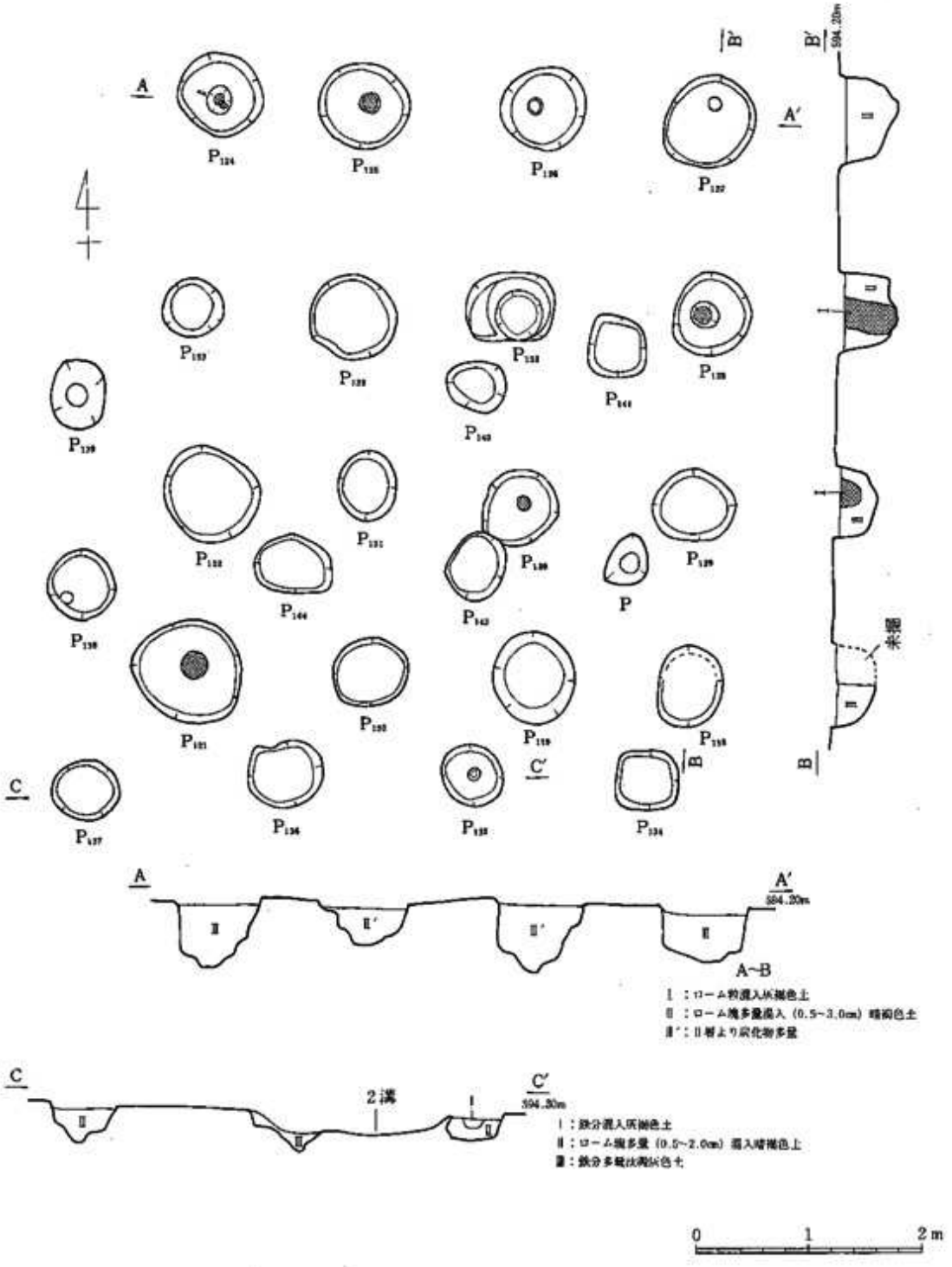
実測可能な遺物は、P_{107}(186)、P_{115}(115)から出土している。

第7号建物址

中央部やや南西部に位置する総柱式の建物址である。本址及び8建の柱穴のいくつかは、第1検出面において確認された中世の2溝の底部よりすでに検出していた。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN—35°—Eを示す。規模は東西3間4.4m、南北3間5.1mを測り、柱間寸法は桁行1.6～1.9m、梁行1.4～1.6mである。16個のピットから成り、柱穴は円形ないし楕円形である。規模平均値は77.3×67.8×45.8cmで中形程度の大きさをもち、しっかりと掘り込まれておりかなり深い。土層断面に表れた柱痕を見ると、P_{128}は柱穴の底面まで達し、P_{129}は埋土の途中まで埋没されていたことが分かる。又、P_{121}、P_{130}及び二段底を示すもののうちP_{124}、P_{126}には堅い柱穴底面があり、柱の痕跡を残すものと考える。ピットの大きさには中程度を主として小形のものも見える。



第21図　第5・6号建物址



第22図　第７・８号建物址

第8号建物址

7建と重複するが、切り合い関係で本址が7建より古いものであることが分かる。平面形は正方形を呈する総柱式の建物址である。主軸方向はN－0°－Eを示す。規模は東西2間3.4m、南北2間3.5mを測り、桁行1.7～1.8m、梁行1.5～1.6mである。8個のピットから成り、柱穴は円形ないし楕円形でそれらの平均規模は62.0×51.7×27.8cmと小形のものである。柱痕については、上面及び土層面を観察しても確認できなかった。なおP_{135}中に見える鉄分を混入したI層は、あきらかに中世の柱穴と考える。

第9号建物址

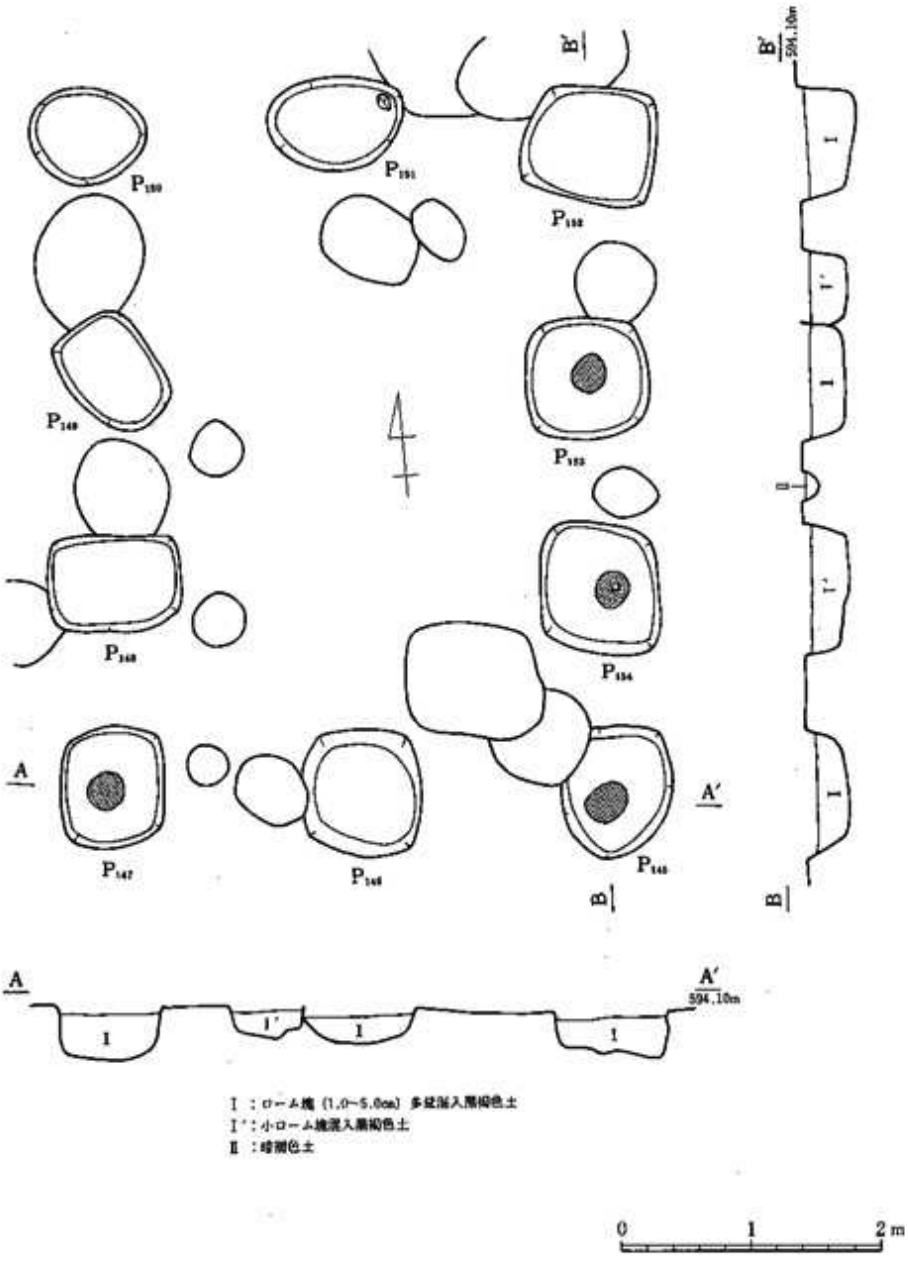
中央部やや北寄りに位置する。側柱式の建物址である。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN－5.5°－Eを示す。規模は東西2間3.9m、南北3間5.1mを測り、桁行1.7～1.9m、梁行1.9～2.0mである。P_{145}～P_{154}の10個の柱穴から成る。これらは楕円形ないし方形的なもので平面形は概して大形である。柱痕跡は土層断面においては確認されなかったが、P_{145}、P_{147}、P_{153}、P_{154}の柱穴底面に堅い所が残っており、これを柱立ての痕跡として把えている。桁側部分に切り合う柱穴類があるが、これも使用されたのであろうか。

第10号建物址

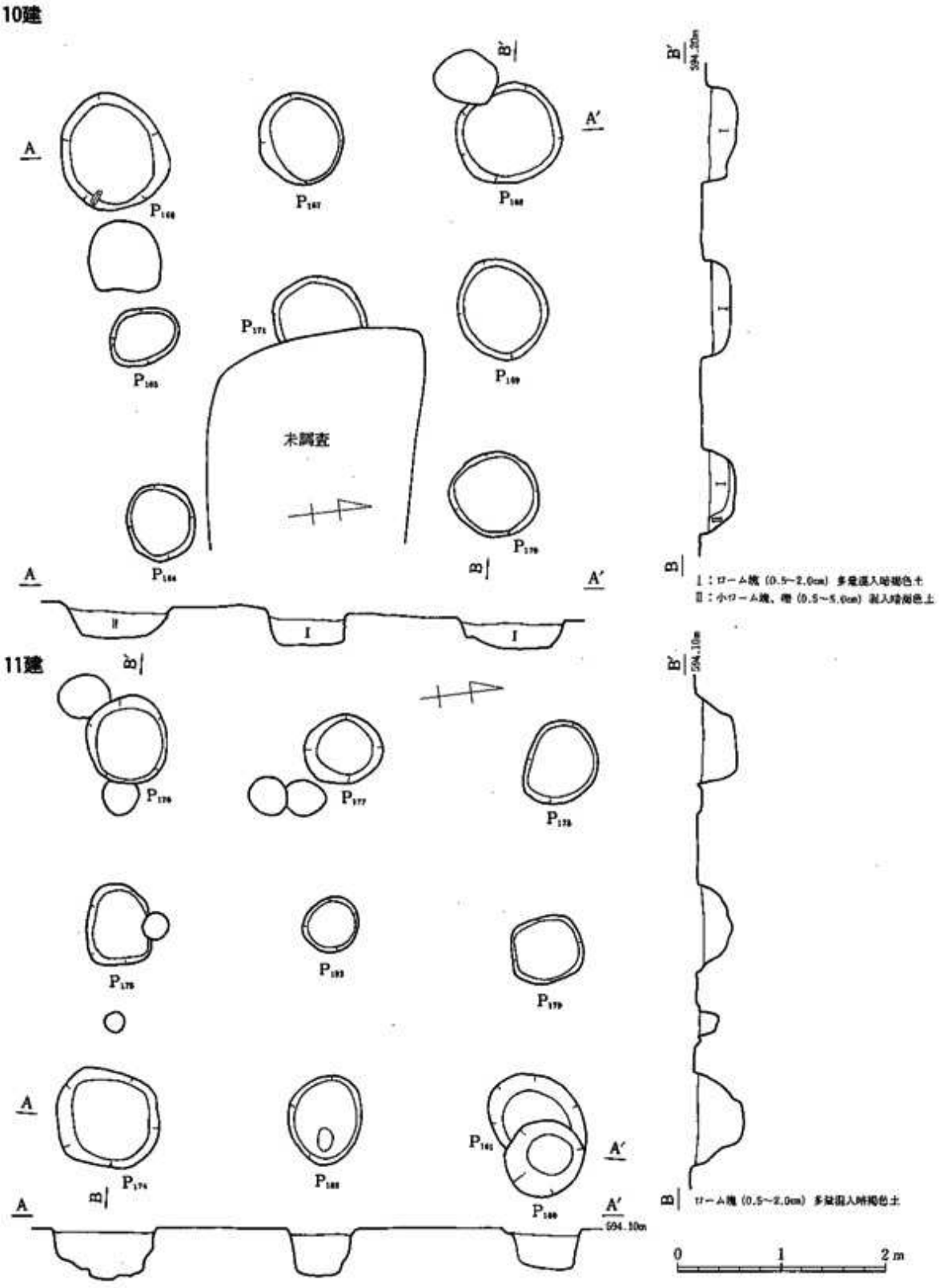
中央北寄りに位置する。8個のピットから成る総柱式の建物址である。平面形は正方形に近く、主軸方向はN－6°－Eを示す。規模は東西2間3.6m、南北2間3.8mを測り、桁行1.8～2.0m、梁行1.7～1.8mである。中央東側にも存在すると思われるが、測量の都合で未掘のまま残してしまった。柱穴は円形に近い楕円形で、それらの平均規模は、89.7×81.8×30.4cmで平面形は大形であるが、深さはさほどでない。柱痕は上面、土層断面、底面においても全く確認できなかった。なおここは検出面が小礫層となり、当時としてもかなり掘り込みにくい場所であった筈である。

第11号建物址

調査区北寄りに位置する。総柱式の建物址である。平面形は長方形で主軸方向はN－10.5°－Eを示す。規模は東西2間3.7m、南北2間4.3mを測り、桁行2.0～2.2m、梁行1.8～1.9mである。楕円形ないし不整の円形を呈する9個の柱穴から成り、北東隅には2個の柱穴が重複する。それらの平均規模は、80.4×70.3×39.0cmで中形程度の大きさをもち、深さもしっかりと掘り込んである。柱痕は全く確認できず、埋土はすべて暗褐色土一層であった。


A
A′
B
B′
594.10m
Ⅰ：ローム塊（1.0～5.0cm）多量混入黒褐色土
Ⅰ′：小ローム塊混入黒褐色土
Ⅱ：暗褐色土
0
1
2m

第23図　第９号建物址



第24図　第10・11号建物址

第12号建物址

北寄りに位置する。側柱式の建物址である。平面形は正方形に近く、主軸方向はN－15.5°－Eを示す。規模は東西2間3.6m、南北2間3.9mを測り、桁行1.6～2.2m、梁行1.8～2.0mである。桁行の中央にある、P_{188}とP_{189}、P_{193}とP_{194}は重複関係をなし、どちらも考えることができる。柱穴は楕円形ないし円形を呈する。それらの平均規模は、大きいP_{191}で103×88cm、小さいP_{189}、P_{194}で52×45cmと大小ある。土層を観察すると、埋土は暗褐色土一層となっており、柱痕は全く検出できなかった。

第13号建物址

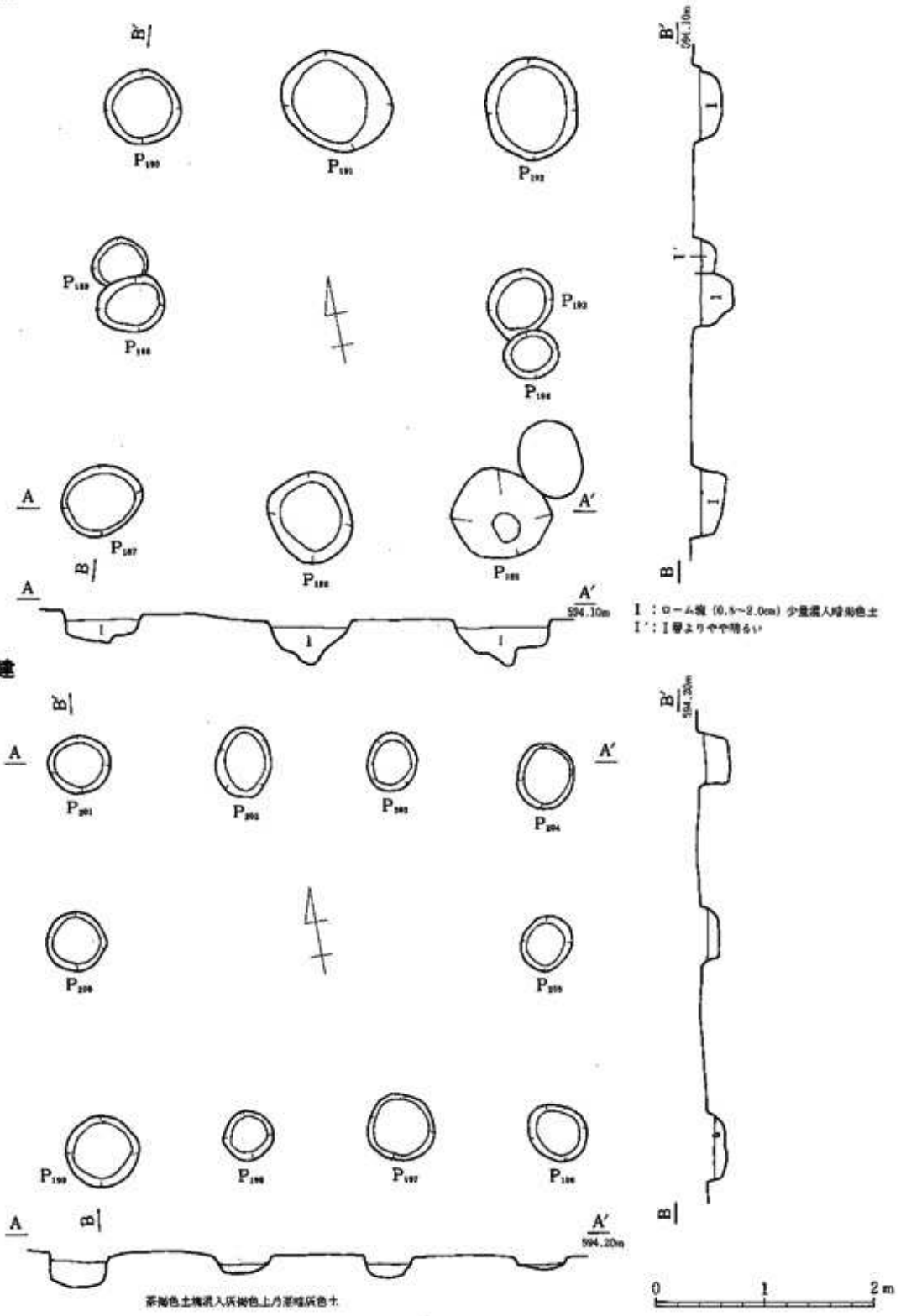
北東隅に位置する。側柱式の建物址である。平面形は長方形を呈する。主軸方向はN－78.5°－Wを示し、これのみ他のものとは90°異なっている。規模は東西3間4.3m、南北2間3.4mを測り、桁行1.4～1.5m、梁行1.5～1.9mである。円形ないし、楕円形の10個の柱穴から成り、これらは小形のものばかりである。平均規模を見ると、57.3×51.6×14.3cmで今回特に小さく又浅い。覆土はすべて一層であり、灰色のつよい褐色土を埋土としている。なお、柱痕は見ることができなかった。

第14号建物址

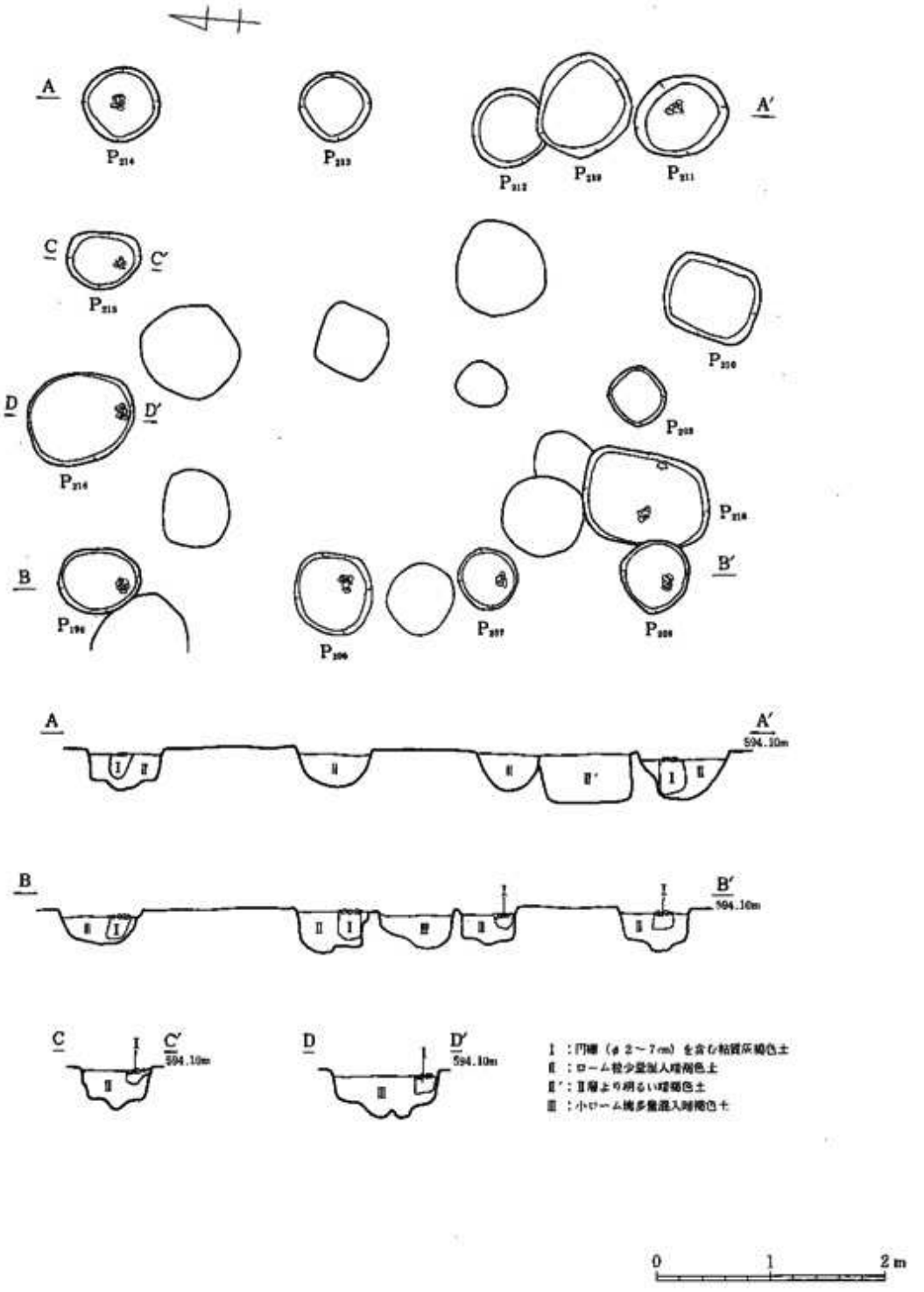
中央北側に位置する。側柱式の建物址である。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN－5.5°－Wを示す。規模は東西3間4.2m、南北3間4.8mを測り、桁行1.4～2.0m、梁行1.3～1.5mである。本址はP_{195}、P_{206}～P_{208}、P_{211}～P_{216}の10個の柱穴から成る。これらは平面形が円形ないし楕円形が多く、その点でP_{209}、P_{210}、P_{218}はこれらから外れるといえる。なお前記の柱穴の平均規模は71.0×62.9×38.0cmとなり、中形程度のものといえよう。本址が他の建物址と特に異なる点は、検出面上に現れた小礫である。これらは直径2～7cmの自然円礫で、4～10個ほどがまとまって、灰褐色土の、それも上部に多く見られる。北西側のピット列は見事に通っており、これらは柱の根元に入れた詰め石と考えられる。なお柱痕はほとんど掘り方の底部より浮かして、かつ又、北側の列では柱が内部（南側）に向かって埋設されていたことが分かる。

実測可能な遺物は2点ある。182は、P_{211}、P_{210}からの接合遺物、185は、P_{211}から得たものである。

12建



第25図　第12・13号建物址



第26図　第14号建物址

第15号建物址

調査地南西寄りに位置する。側柱式の建物址である。南東部に4住があり、柱穴2個もこの床面下から検出している。平面形は長方形で規模は東西1間3.2m、南北2間3.5mを測り、桁行1.7～1.9m、梁行3.1～3.3mである。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、その平均規模は65.6×62.8cmと中形のものである。なお土層断面については観察できなかった。又、底面に柱の痕跡は見えていない。

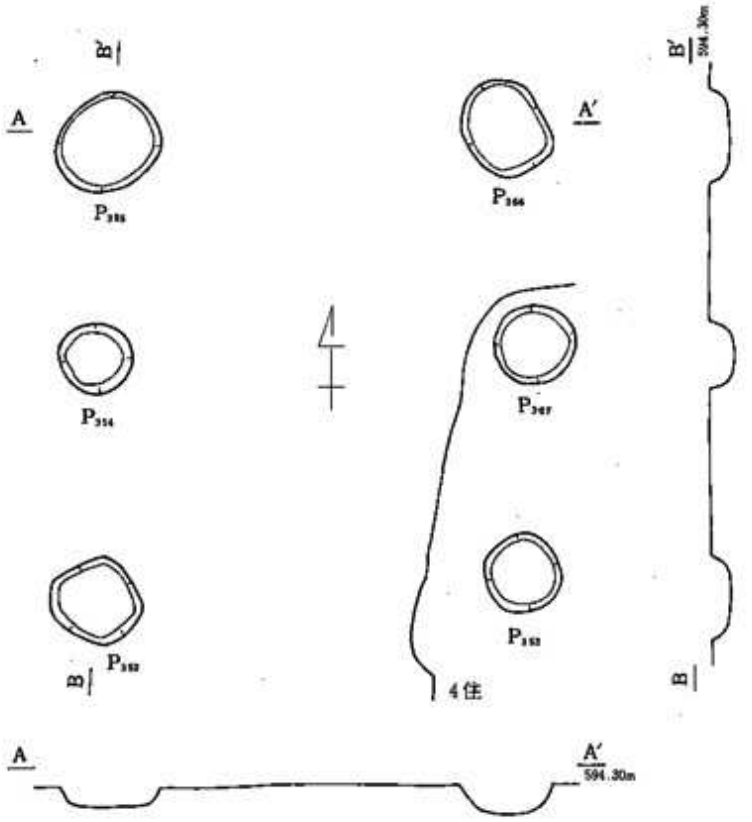
第16号建物址

図整理作業中に並んだピット、土坑から建物址と考えられるとして選んだ遺構である。このうちから、P_{343}、P_{363}、P_{358}、65土坑の5個の組み合わせを想定している。規模は南北3間で東側はすぐ調査区外となる為、2間しか分からない。南北の柱列は、1.5～1.69mの柱間寸法を測り、N－18.5°－Eを示している。なおP_{358}には現場にて、土層断面に柱痕跡を確認している。

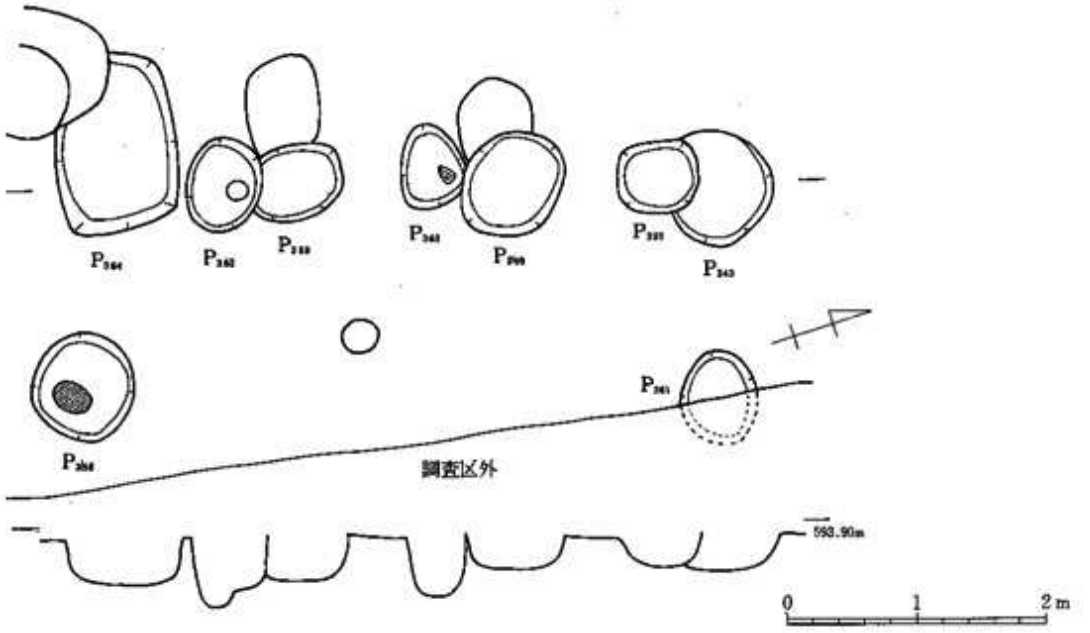
建物址からの出土遺物と帰属時期

建物址の出土遺物はすべてこれを構成する個々のピット内より出土したものである。これらは、16棟分合わせた総量を見ても少なく、土器の他に鉄器が1点である。まず鉄器は、紡輪が9号より出土した。土器は、須恵器坏・蓋・短頸壺など、土師器に坏・埦などがあるが、遺構間で時期的ばらつきが大きく、図示したものが、出土遺物を代表するものとは言い難い。このような中で4号の須恵器坏（180）及び、6号の土師器坏（184）、須恵器短頸壺（186）などは、その所属時期を明確に示しているものと言え、この両者には島立南栗Ⅵ期を与えることができる。このほかには、1、9、14、16号などからの遺物を図示するが、上記のような理由で一概に時期を与えられない。なお、出土遺物をみて量的に主体をなすものを中心にこれらに時期を与えたものを「表所見」に掲げている。これによると、Ⅸ～Ⅺ期がほとんどになった。当地の今迄の調査では小形ピットより大形ピットで形成される建物址が概して古いということを示しているようであるがともかく総量が少ないため、これらの時期は参考程度に考えたい。

15建



16建



第27図　第15・16号建物址

第2表　　SK IV　建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
1建	長方形	N－6°－E	3間×3間	桁 1.7～2.2	42	61	55	29	楕円形		5住に切られる
			5.1×5.5	梁 1.6～1.9	43	57	55	33	円形		
	側柱式				44	70	61	34	楕円形		
					45	67	65	24	円形		
					46	75	55	22	楕円形		
					47	71	60	23	楕円形		
					48	71	60	28	楕円形		IX～X
					49	62	61	24	円形		
					50	61	57	15	円形		
					51	59	57	33	円形		
					52	40	37	25	円形		
					53	61	60	28	円形		
2建	長方形	N－3°－E	2間×2間	桁 1.8～2.1	57	62	61	18	円形	二段底	
			3.8×4.2	梁 1.7～2.0	58	58	50	18	楕円形		
	側柱式				59	67	63	24	円形	二段底	
					60	82	73	24	不整円形	〃柱痕か?	
					61	76	68	24	不整円形	〃	
					62	64	54	22	不整円形	〃	
					63	75	69	18	楕円形		
3建	長方形	N－1°－E	2間×2間	桁 1.5～2.2	64	95	73	43	楕円形	柱痕あり	
		(N-3°-E)	3.4×3.8	梁 1.5～1.9	66	78	70	40	楕円形	〃	
			(3.5×3.7)	(桁1.8～1.9 梁1.5～1.9)	67	80	72	27	円形	〃	
					68	84	76	40	円形	〃	
	側柱式				69	92	79	43	不整形		IX?
					70	92	78	40	不整形	柱痕あり	
					71	112	96	28	楕円形		
4建	方形	N－5.5°－E	3間×2間	桁 1.5～1.7	74	87	69	52	楕円形		
			4.6×4.9	梁 1.7～2.6	75	71	65	17	円形		
	側柱式				76	122	87	51	楕円形		
					77	95	67	26	不整形		
					78	95	81	25	楕円形		
					79	89	80	25	楕円形		
					80	114	82	24	不整形		
					81	67	55	27	楕円形		VI?
					82	85	65	17	楕円形		
					83	76	70	23	不整形		
					84	75	57	37	楕円形		
					87	67	56	17	楕円形		
					88	51	49	14	円形		

SK IV　建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
5建	正方形	N−9.5°−E	2間×2間 3.4×3.6	桁 1.5~1.9 梁 1.5~2.0	92	72	61	14	円形		
					93	85	61	24	楕円形		
	側柱式 (総柱式)				94	91	72	33	楕円形		
					95	82	66	25	不整円形		
					96	74	68	22	円形		
					97	85	69	10	楕円形		
					98	75	57	20	楕円形		XI?
					99	72	62	15	円形		
6建	長方形	N−0.5°−E	2間×2間 3.7×4.1	桁 2.2~1.9 梁 1.6~2.1	104	108	86	64	楕円形	柱痕あり	
					105	98	80	48	円形	〃	
	総柱式				106	87	77	45	楕円形	〃	
					107	127	98	54	楕円形	〃	
					108	105	85	44	楕円形	〃	
					110	117	88	47	楕円形	〃	VI
					111	140	100	47	不整楕円形		
					114	98	91	49	円形	柱痕あり	
					115	90	85	53	不整円形	〃	
7建	長方形	N−3.5°−E	3間×3間 4.4×5.1	桁 1.6~1.9 梁 1.4~1.6	118	70	57	38	楕円形		8建に切られる
					119	82	73	54	円形		
	総柱式				120	67	61	42	楕円形		
					121	102	92	40	楕円形	柱痕あり	
					122	89	83	45	楕円形		
					123	56	53	53	円形		
					124	77	75	55	円形	柱痕あり 二段底	
					125	80	76	36	円形	〃	IX~X
					126	78	74	64	円形	二段底	
					127	89	75	48	楕円形	〃	
					128	75	68	47	不整円形	柱痕あり 二段底	
					129	75	64	37	楕円形	柱痕あり	
					130	74	52	45	不整円形	〃	
					131	63	51	43	楕円形		
					132	77	72	43	不整円形		
					133	83	60	43	不整楕円形	二段底	
8建	方形	N−0°−E	2間×2間 3.4×3.5	桁 1.7~1.8 梁 1.5~1.6	135	58	54	24	円形		7建を切る
					136	65	55	31	不整楕円形		
	総柱式				137	62	55	27	楕円形		
					138	62	57	27	円形		
					139	62	46	32	楕円形		X以降
					140	55	45	23	楕円形		

SK IV　建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
					143	61	50	23	楕円形		
					144	71	52	28	楕円形		
9建	長方形	N−5.5°−E	2間×3間	桁 1.7~1.9	145	104	86	29	楕円形	柱痕あり	
			3.9×5.1	梁 1.9~2.0	146	110	87	27	不整円形		
	側柱式				147	93	80	40	不整方形	柱痕あり	
					148	102	76	36	長方形		
					149	93	69	35	不整方形		IX
					150	90	75	25	楕円形		
					151	106	72	28	不整楕円形		
					152	101	88	41	正方形		
					153	96	95	28	不整円形	柱痕あり	
					154	102	93	33	不整方形	柱痕あり	
10建	正方形	N−6°−E	2間×2間	桁 1.8~2.0	164	72	64	?	円形		東側中央部未調査
			3.6×3.8	梁 1.8~1.7	165	68	52	29	不整楕円形		
	総柱式				166	112	104	31	不整楕円形		
					167	90	85	32	楕円形		
					168	100	98	31	円形		X~XI
					169	98	85	27	楕円形		
					170	89	82	33	不整円形		
					171	89	85	30	楕円形		
11建	長方形	N−10.5°−E	2間×2間	桁 2.2~2.0	174	102	89	45	不整楕円形		
			3.7×4.3	梁 1.8~2.0	175	80	63	34	不整楕円形		
	総柱式				176	71	65	39	不整円形		
					177	75	66	45	楕円形		
					178	80	68	42	不整楕円形		IX~X
					179	74	65	42	不整円形		
					180	75	71	42	円形		
					181	(80)	80	41	楕円形		
					182	87	82	48	楕円形		
					183	55	54	12	円形		
12建	正方形	N−15.5°−E	2間×2間	桁 1.6~2.2	185	89	83	43	不整円形		
			3.6×3.9	梁 1.8~2.0	186	83	72	38	円形		
	側柱式				187	75	64	27	不整円形		
					188	62	50	37	楕円形		
					189	52	45	21	不整円形		?
					190	68	68	27	円形		
					191	103	88	27	楕円形		
					192	94	84	24	円形		
					193	63	58	11	円形		

SK IV　建物址一覧表

No	平面形 柱配り	主軸方向	規模(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模(cm) No	長径	短径	深さ	柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
					194	52	45	29	円形		
13建	長方形	N-78.5°-W	2間×3間 3.4×4.3	桁 1.4~1.5 梁 1.5~1.9	196	58	50	11	楕円形		
					197	63	61	11	円形		
	側柱式				198	47	43	12	円形		
					199	66	65	17	円形		
					200	55	52	12	円形		
					201	56	53	24	円形		
					202	64	51	17	楕円形		IX~XI
					203	54	44	19	楕円形		
					204	60	52	11	楕円形		
					205	50	45	9	不整円形		
14建	長方形	N−5.5°−W	3間×3間 4.2×4.8	桁 1.4~2.0 梁 1.3~1.5	195	72	58	29	楕円形		
					206	75	67	39	楕円形	栗石あり	
	側柱式				207	54	52	30	円形	〃	
					208	65	60	36	円形	〃	
					211	84	72	40	楕円形	〃	
					212	70	66	33	円形		
					213	62	59	57	円形		
					214	68	65	41	円形	栗石あり	X~XI
					215	65	50	37	不整楕円形	〃	
					216	95	80	38	楕円形	〃	
15建	長方形	N−0.5°−W	1間×2間 3.2×3.5	桁 1.7~1.9 梁 3.1~3.3	352	60	59	18	円形		4住に切られる
					353	70	65	14	不整円形		
	側柱式				354	58	55	20	円形		
					355	77	(75)	16	楕円形		
					356	78	66	25	楕円形		
					357	63	60	17	円形		
16建	長方形?	N-18.5°-E	3間×?	1.5~1.7	358	84	78	31	円形	柱痕あり	
					土坑65	138	93	32	不整楕円形		
	側柱式?				359	75	58	35	不整楕円形		
					362	73	58	53	楕円形		
					360	91	74	23	不整円形		IX~X
					363	65	52	46	不整楕円形		
					343	90	82	32	不整円形		
					320	63	57	25	不整円形		
					361	?	?	15	?		

3） 土坑・ピット

1　土坑

土坑は68基を検出した。第１検出面では、１号～55号･66号の計56基があり、２基を除いて南半部に所在する。又、第２検出面では56号～68号（66号を除く）の12基で、多数の建物址に隠れ、数としては多くはない。

平面形について分類すると、楕円形もしくは、それに近いものが27基あり、次いで円形的なものが14基、更に正方形ないし長方形的なものが各12基で、不整形は３基と少ない。なお規模については小形の５号（75×62 cm）から、大きいものには楕円形の66号（後述）までが見られる。

断面形について概観すると、逆台形、舟底がほとんどであるが、他には方形の３号・31号及び68号等が確認された。床面の状況と、検出面からの深さについては、片側に傾斜した９号が93 cmと一番深いものである。次いで平坦な64号が83 cm、U字状の７号が70 cmを測る。概観する限りでは平･断面形を含めた形状などから、既定されている事項は何ら見当たらないようである。

覆土についてみると、灰色土がもっとも多く、次いで暗灰色土、褐色土があり、他に暗褐色土がある。前三者は、第１検出面のほとんどを占め、第２検出面にも見えている。

遺物をも含め、特徴的なものについて触れると以下のようになる。

多量の焼土、人骨、炭化材を出土する方形の１号･45号は火葬墓である。伴葬品には銭（１号―４点、45号―２点）がある。又、１地区北部には38号、39号の２基のみしか存在せず、共に炭化材と人骨はあるものの、焼土、銭などは見当たらない。38号には多量の石などが入れてあった。墓址としてはこの他に円形の47号がある。床面中央が堅くなり、その周囲壁際が中央部より４cmと、僅かであるが凹んでいた。人歯は北壁際より出土し、隣接する48号からも人歯及び銭片が出土した。最も大きな66号は東西に長い楕円形を呈し、規模は410×308 cm、深さは76 cmを測る。床面は平坦で堅く、西側は床面より25 cm高い位置に中段がある。北側には同時期の２・３住がある。ここからは敲き石が６点出土した。住居址というより、作業工房址という用途であろうか。又、35号からは火箸らしき鉄器を、27号より土製紡錘車を得ている。図示した遺物では、７号より陶器の皿・擂鉢と内耳鍋などを、40号からは陶器皿などを得ている。これらは中世15～16世紀の遺構である。

古代の土坑としては、P_{112}に上部を破壊された61号がある。不整の楕円形を呈し、規模は115×85 cmを測る。壁面は被熱により焼土化しているが、これは土器焼成のような特殊な使用をしたことを示すものである。ここから出土した土器はごく少量であったが一般的に遺物は多く、土師器坏･埦･小形甕・甕、須恵器坏・広口壺・甕、灰釉碗等を見ることができ、これらの時期も古代住居址を越える範囲のものではない。

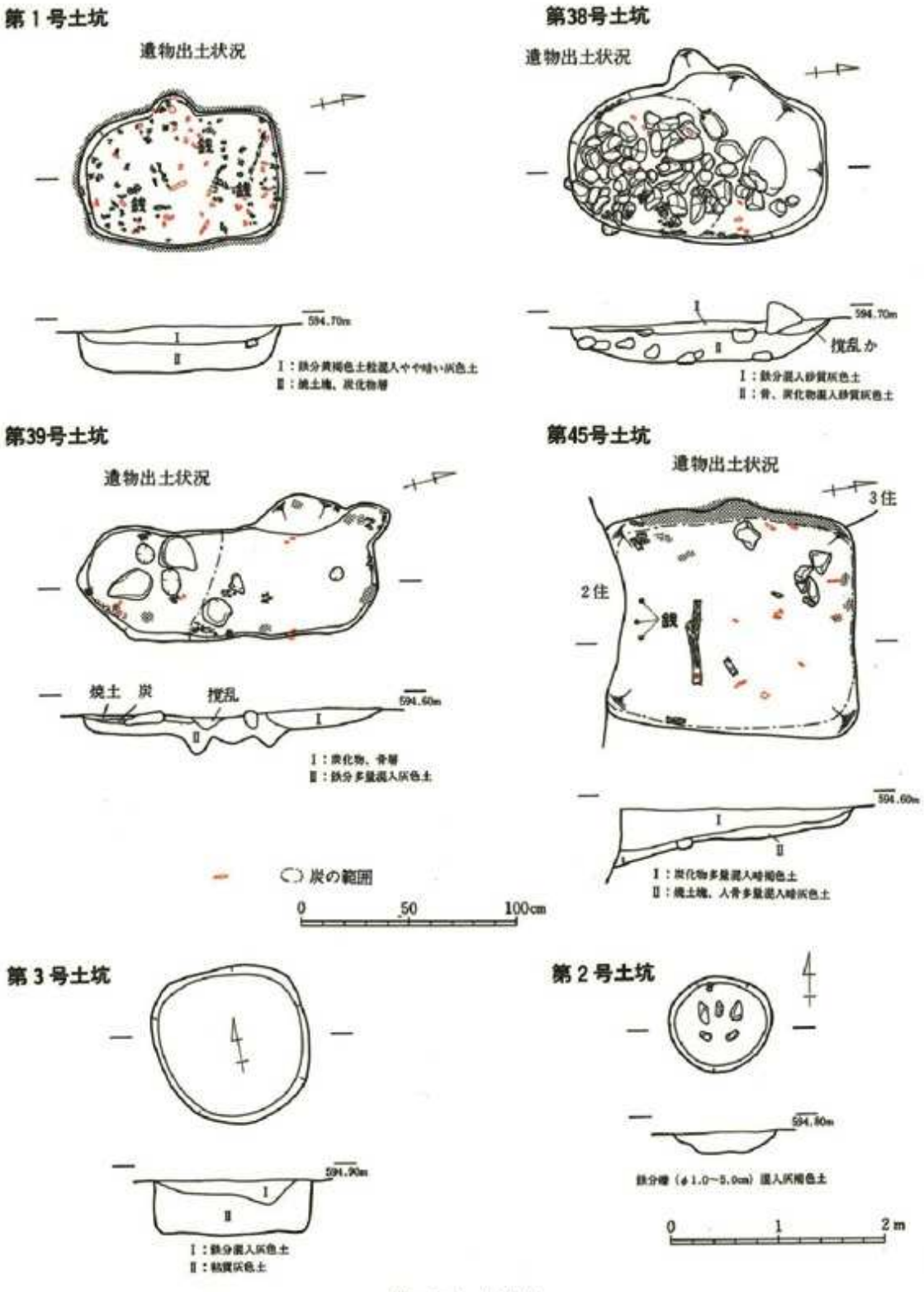
2　ピット

ピットは総計658個を調査した。

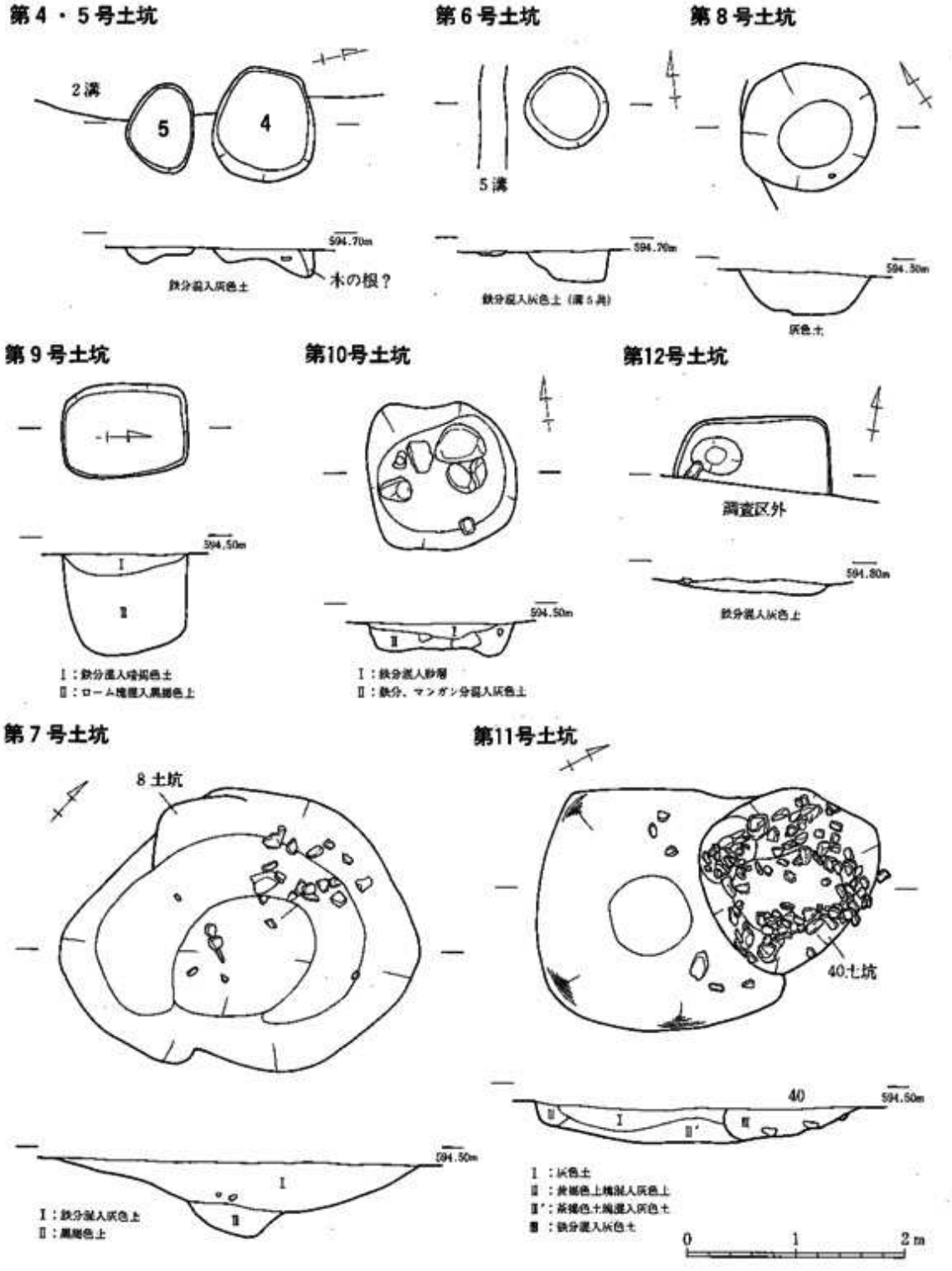
このうち167個は、第1検出面において検出し、その範囲は土坑と同様に、数個を除き発掘区南半部に集中する。これらの直径は、20㎝或いは40㎝前後、深さは10～25㎝のものが多い。覆土は鉄分を多量に沈澱させた青灰色土ないし、灰色土がほとんどである。167個のうち、拳大以上の礫を含むもの、或いは小片の土器、鉄器などの遺物を出土するものが、計41個ある。このうち調査区南西部、3住覆土中に所在した38号（34×30×16㎝）からは、小柄の握り、ないし笄（こうがい）と思われるものの一部、28号からは鉄器を得ている。

第2検出面では、491個のピットを検出した。その3割、157個は建物址として組み合わせられる。これらは、調査区の中央、9建を中心とした地区に集中し南北端へは徐々に少なくなっていくようである。個々の規模はほぼ建物址を構成するピットに見られる範囲であり、覆土も同様の土色を見せている。遺物についてみると、建物址部分を除いた334個のうちの約半数、160個のピットから出土している。14住の西際に所在する297号（80×80×14㎝）からは、小形甕・甕など、3点（209～211㎝）の土師器甕を出土した。同じく14住の北に所在する364号（43×41×16㎝）からは土師器坏が3点（156～158）置かれたように出土した。またこの両者の中間、やはり14住際であるが、土師器の坏・甕などが3点（159～161）並んで検出面より出土した。掘り込みの浅い住居址があったかもしれない。また、10建北西に位置する278号（83×82×28㎝）からは、小豆大から拳大までの鉄滓・溶滓が出土した。これらの総量は約1㎏となる。なお他には148号から450ｇ、251号からも350ｇの鉄滓を得ている。6住南西隅にある225号（72×67×25㎝）の覆土層からは臼玉1点が出土、272号からはベンガラ或いは水銀朱と思われる鉱物片を得ている（註）。これら以外にはピット4個から土師器、須恵器の坏などを得ているが小片である。又、鉄器なども4点見ているが、いずれも器種不明である。13住の南東に位置する重複した方形ピット314号（72×65×84㎝）、351号（100×84×48㎝）には明瞭に残った柱痕を確認した。柱痕に関しては、この他にいくつもあるが、建物址としたピットの方が多い。

註　分析を行なったところ、酸化第二鉄（ベンガラ）と判明した。本資料中からは鉛の反応はなく、水銀は検出されなかった。（森　義直氏の御教示による）

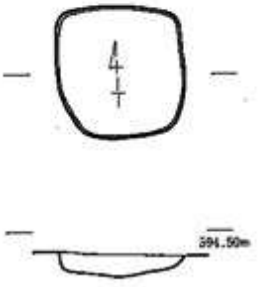

第１号土坑
遺物出土状況
鉄
594.70m
Ⅰ：鉄分黄褐色土粒混入やや暗い灰色土
Ⅱ：焼土塊、炭化物層
第38号土坑
遺物出土状況
594.70m
撹乱か
Ⅰ：鉄分混入砂質灰色土
Ⅱ：骨、炭化物混入砂質灰色土
第39号土坑
遺物出土状況
焼土
炭
撹乱
594.60m
Ⅰ：炭化物、骨層
Ⅱ：鉄分多量混入灰色土
第45号土坑
遺物出土状況
3住
2住
鉄
594.60m
Ⅰ：炭化物多量混入暗褐色土
Ⅱ：焼土塊、人骨多量混入暗灰色土
炭の範囲
0
50
100cm
第３号土坑
594.90m
Ⅰ：鉄分混入灰色土
Ⅱ：粘質灰色土
第２号土坑
594.80m
鉄分塊（φ1.0～5.0cm）混入灰褐色土
0
1
2m

第28図　土坑(1)

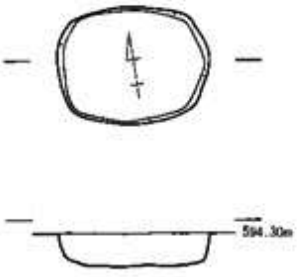

第４・５号土坑
2溝
5
4
594.70m
鉄分混入灰色土
木の根？
第６号土坑
5溝
594.70m
鉄分混入灰色土（溝５跡）
第８号土坑
594.50m
灰色土
第９号土坑
594.50m
Ⅰ：鉄分混入暗褐色土
Ⅱ：ローム塊混入黒褐色土
第10号土坑
594.50m
Ⅰ：鉄分混入砂層
Ⅱ：鉄分、マンガン分混入灰色土
第12号土坑
調査区外
594.80m
鉄分混入灰色土
第７号土坑
8土坑
594.50m
Ⅰ：鉄分混入灰色土
Ⅱ：黒褐色土
第11号土坑
40土坑
40
594.50m
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：黄褐色土塊混入灰色土
Ⅱ'：茶褐色土塊混入灰色土
Ⅲ：鉄分混入灰色土
0
1
2m

第29図　土坑(2)

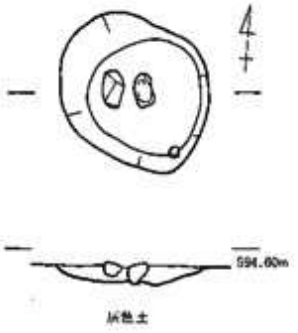
第13号土坑



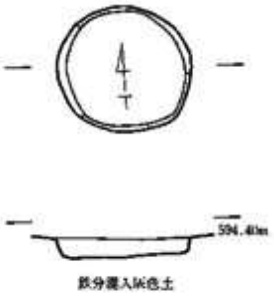
第14号土坑



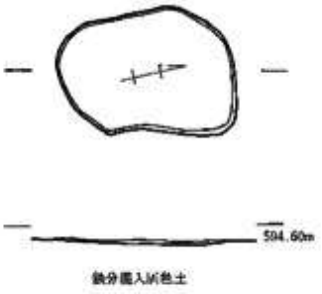
第15号土坑



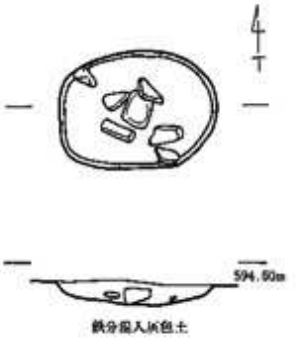
第19号土坑



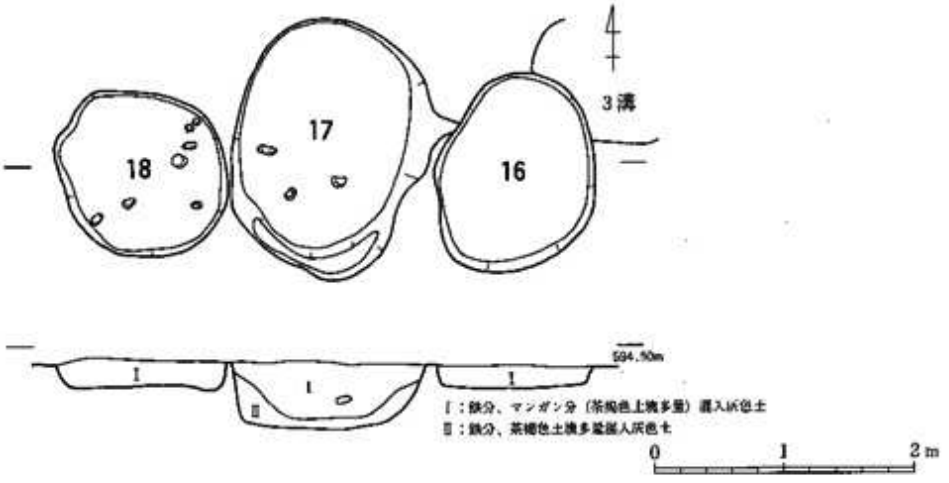
第20号土坑



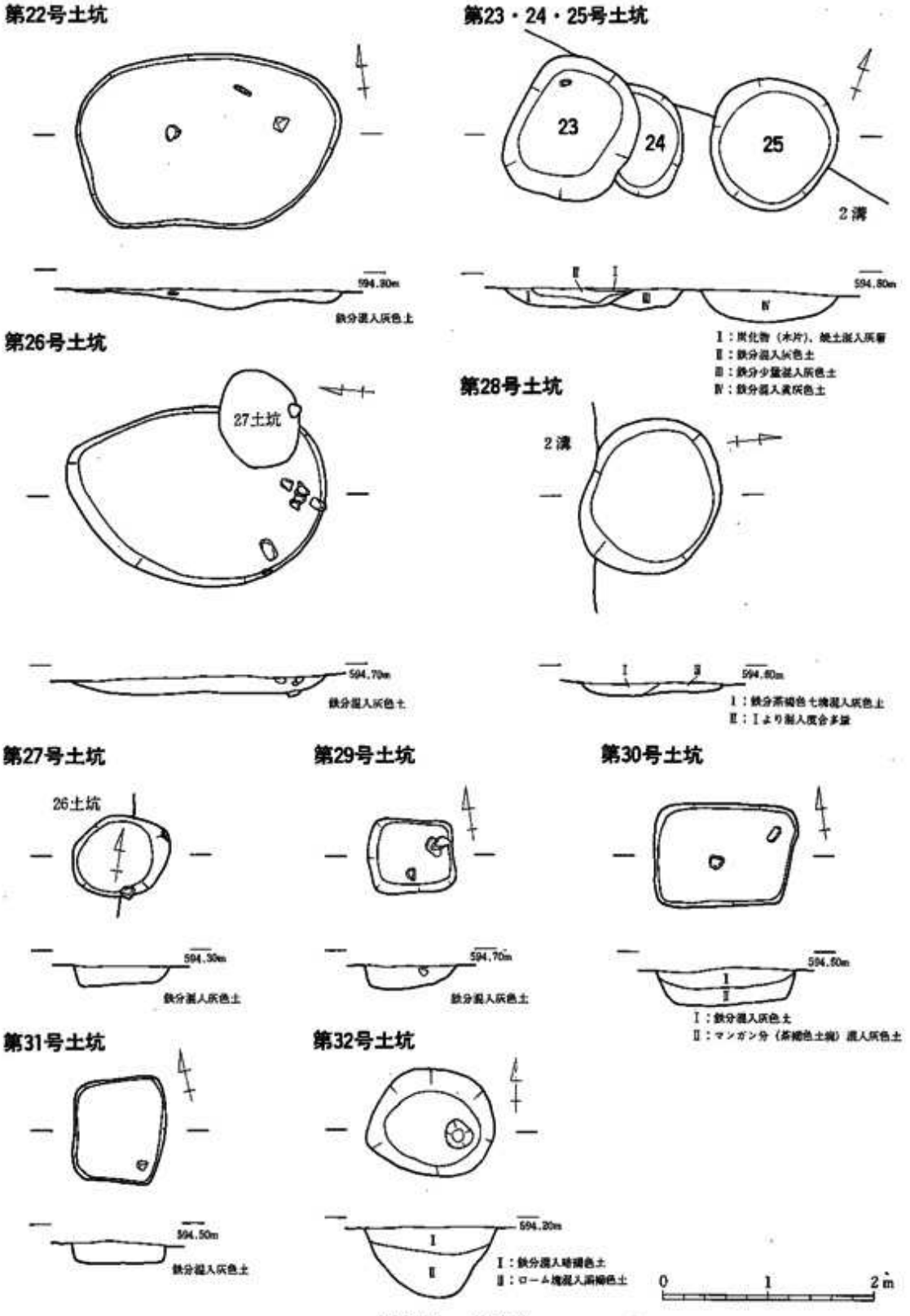
第21号土坑



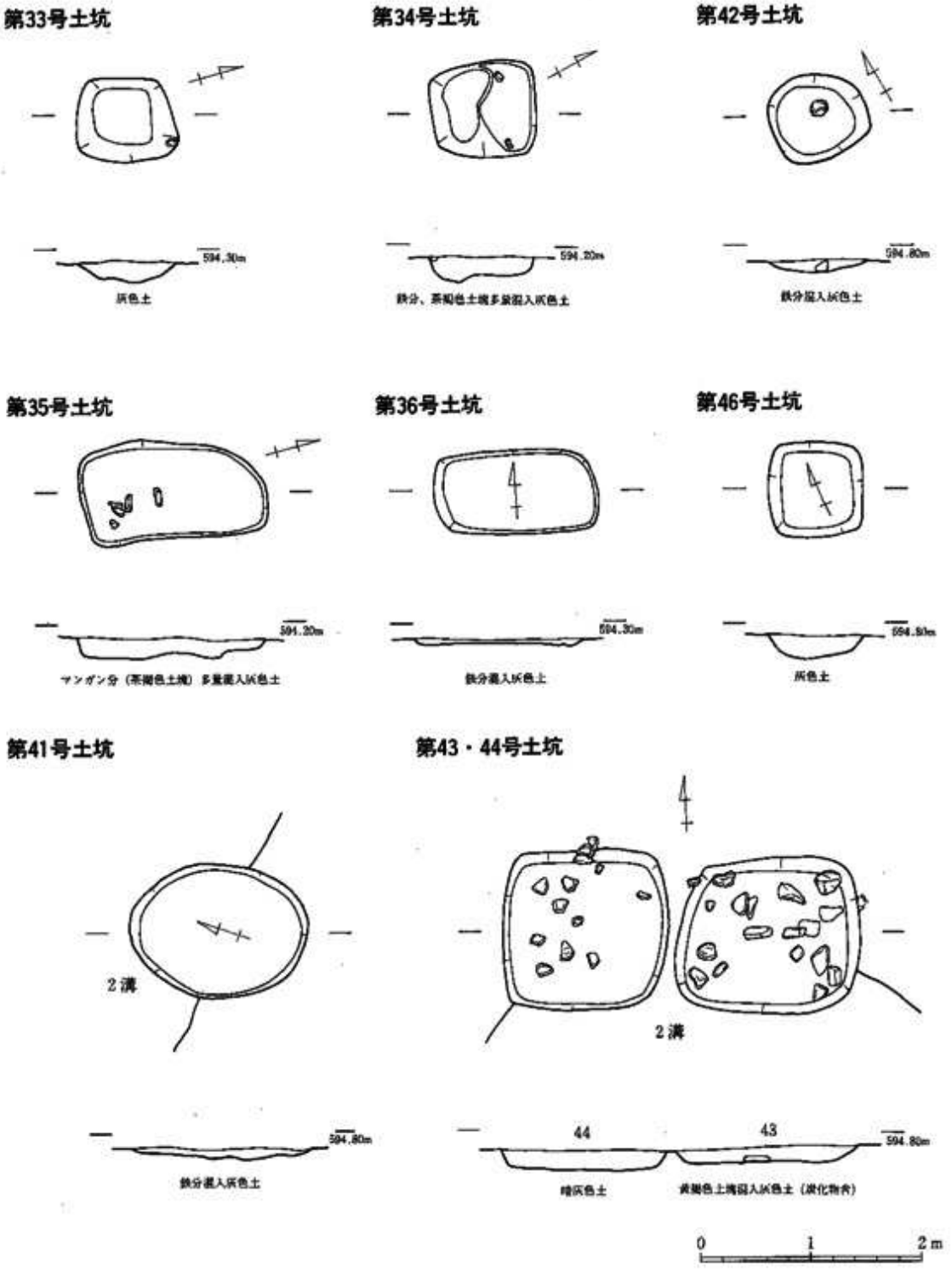
第16・17・18号土坑



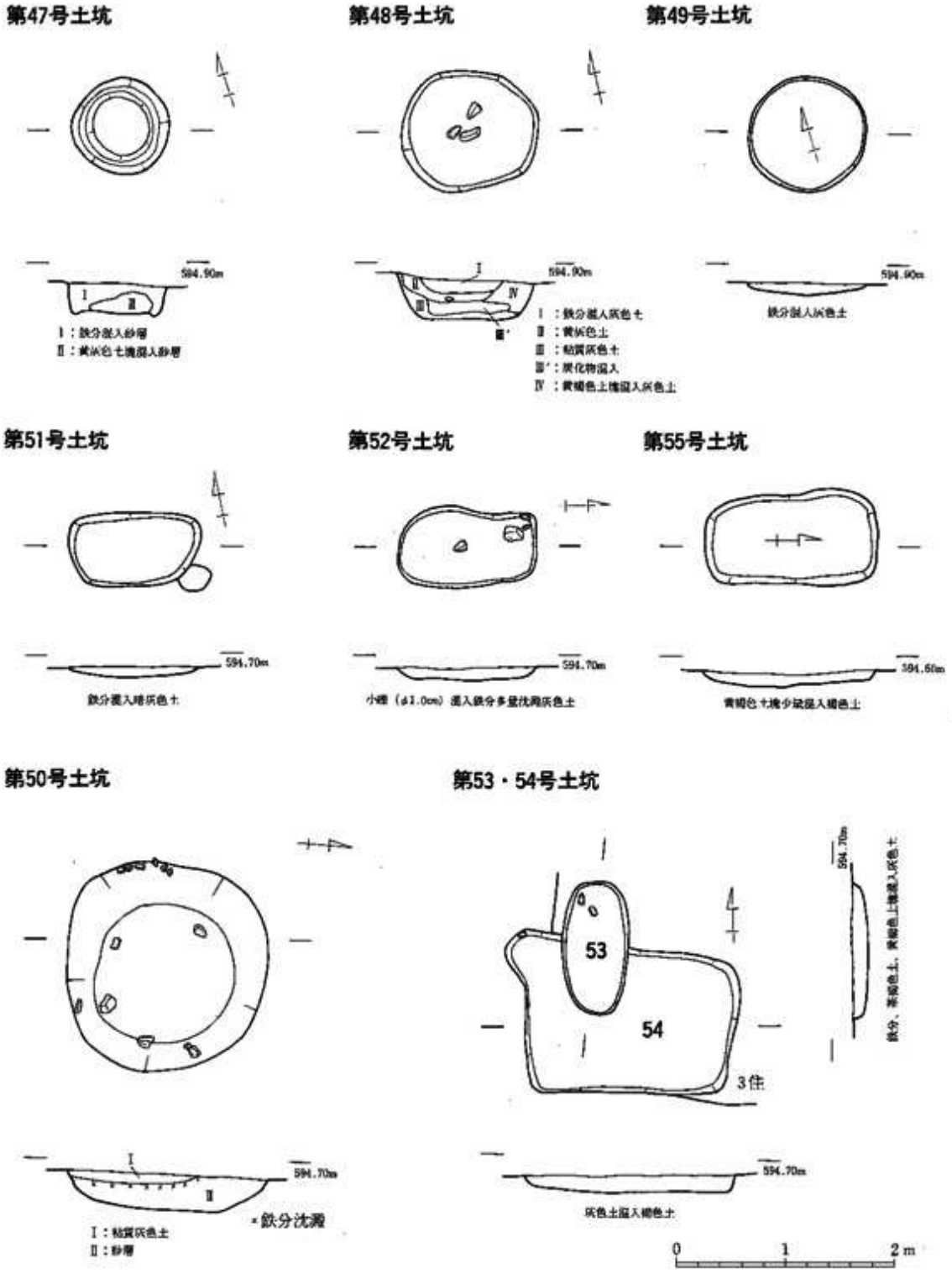
第30図　土坑(3)


第22号土坑
594.30m
鉄分混入灰色土
第23・24・25号土坑
23
24
25
2溝
594.80m
Ⅰ：炭化物（木片）、焼土混入灰層
Ⅱ：鉄分混入灰色土
Ⅲ：鉄分少量混入灰色土
Ⅳ：鉄分混入黄灰色土
第26号土坑
27土坑
594.70m
鉄分混入灰色土
第28号土坑
2溝
594.80m
Ⅰ：鉄分茶褐色土塊混入灰色土
Ⅱ：Ⅰより混入度合多量
第27号土坑
26土坑
594.30m
鉄分混入灰色土
第29号土坑
594.70m
鉄分混入灰色土
第30号土坑
594.50m
Ⅰ：鉄分混入灰色土
Ⅱ：マンガン分（茶褐色土塊）混入灰色土
第31号土坑
594.50m
鉄分混入灰色土
第32号土坑
594.20m
Ⅰ：鉄分混入暗褐色土
Ⅱ：ローム塊混入黒褐色土
0
1
2m

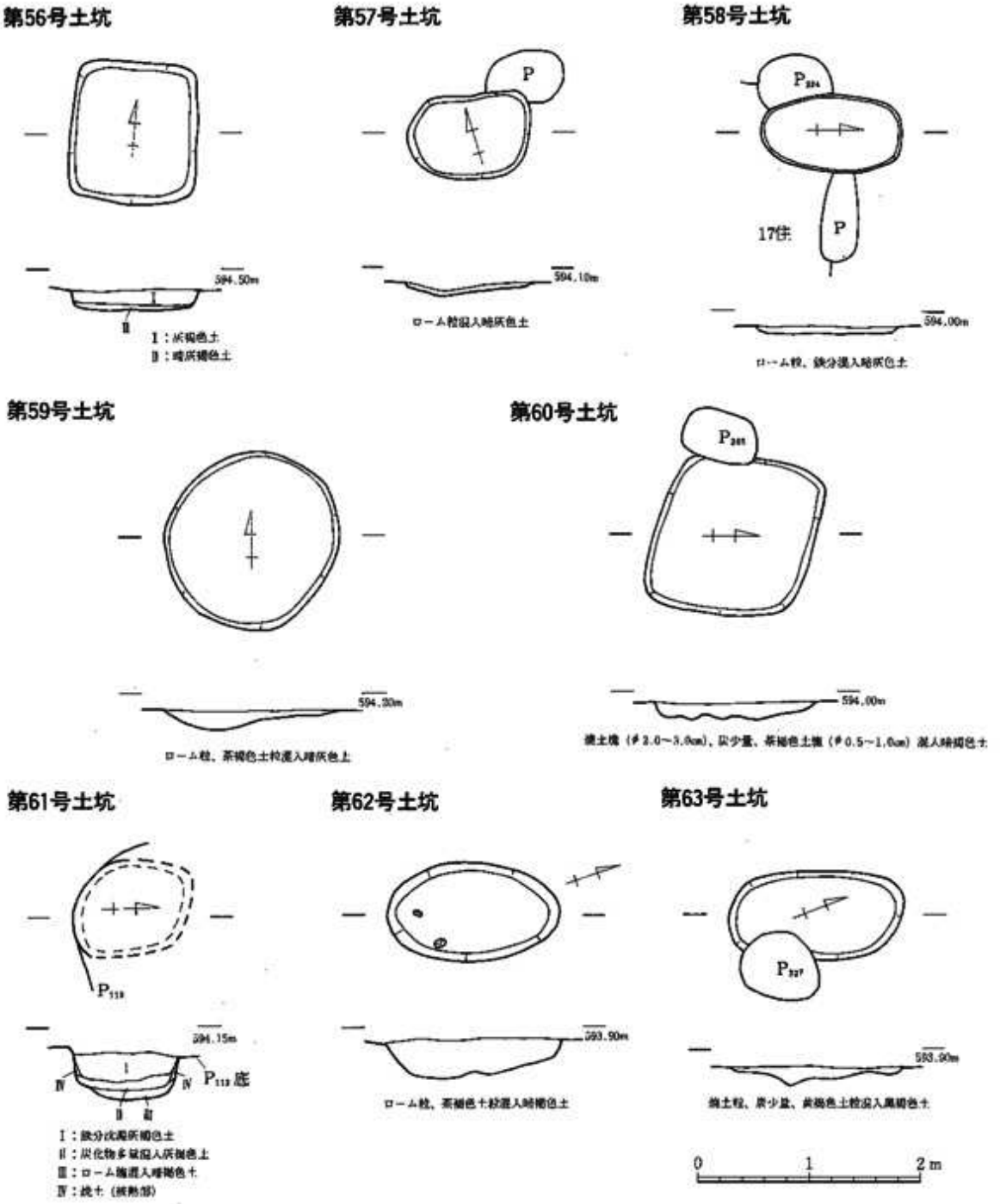
第31図　土坑(4)


第33号土坑
594.30m
灰色土
第34号土坑
594.20m
鉄分、茶褐色土塊多量混入灰色土
第42号土坑
594.80m
鉄分混入灰色土
第35号土坑
594.20m
マンガン分（茶褐色土塊）多量混入灰色土
第36号土坑
594.30m
鉄分混入灰色土
第46号土坑
594.80m
灰色土
第41号土坑
2溝
594.80m
鉄分混入灰色土
第43・44号土坑
2溝
44
43
594.80m
暗灰色土
黄褐色土塊混入灰色土（炭化物含）
0
1
2m

第32図　土坑(5)

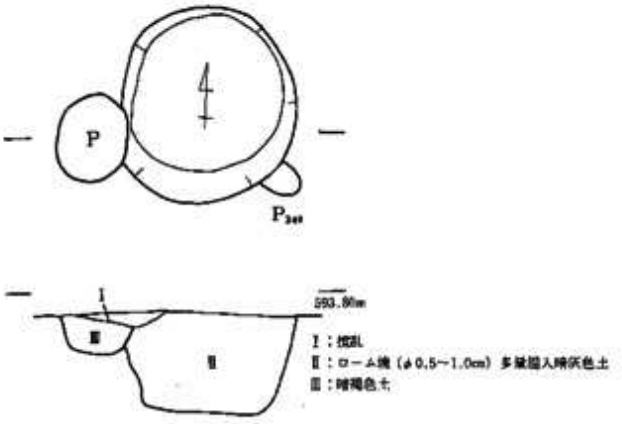

第47号土坑
第48号土坑
第49号土坑
594.90m
Ⅰ：鉄分混入砂層
Ⅱ：黄灰色土塊混入砂層
Ⅰ：鉄分混入灰色土
Ⅱ：黄灰色土
Ⅲ：粘質灰色土
Ⅲ'：炭化物混入
Ⅳ：黄褐色土塊混入灰色土
鉄分混入灰色土
第51号土坑
第52号土坑
第55号土坑
594.70m
鉄分混入暗灰色土
小礫（φ1.0cm）混入鉄分多量沈澱灰色土
594.60m
黄褐色土塊少量混入褐色土
第50号土坑
第53・54号土坑
53
54
3住
Ⅰ：粘質灰色土
Ⅱ：砂層
×鉄分沈澱
灰色土混入褐色土
0
1
2 m

第33図　土坑(6)


第56号土坑
594.50m
Ⅰ：灰褐色土
Ⅱ：暗灰褐色土
第57号土坑
P
594.10m
ローム粒混入暗灰色土
第58号土坑
P
17住
P
594.00m
ローム粒、鉄分混入暗灰色土
第59号土坑
594.30m
ローム粒、茶褐色土粒混入暗灰色土
第60号土坑
594.00m
焼土塊（φ2.0～3.0cm）、炭少量、茶褐色土塊（φ0.5～1.0cm）混入暗褐色土
第61号土坑
594.15m
Ⅰ：鉄分沈澱灰褐色土
Ⅱ：炭化物多量混入灰褐色土
Ⅲ：ローム塊混入暗褐色土
Ⅳ：焼土（被熱部）
第62号土坑
593.90m
ローム粒、茶褐色土粒混入暗褐色土
第63号土坑
593.90m
焼土粒、炭少量、黄褐色土粒混入黒褐色土
0
1
2 m

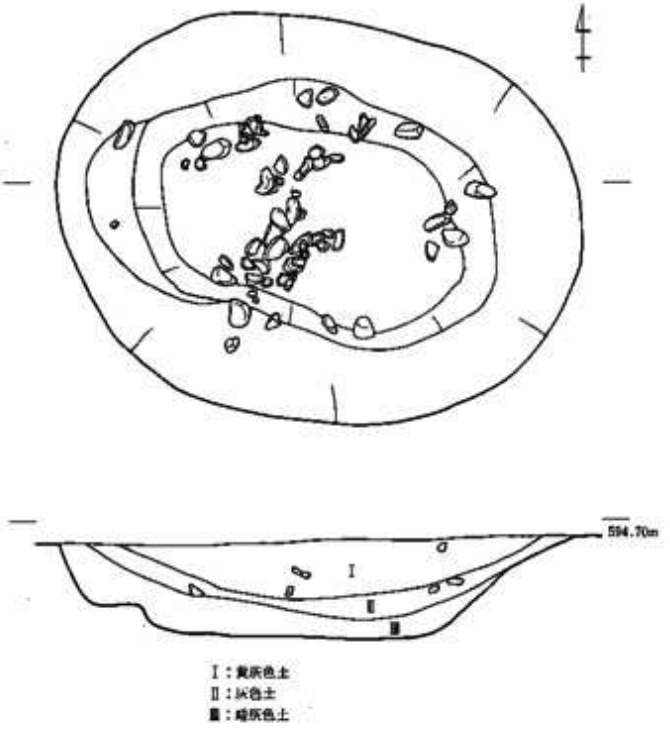
第34図　土坑(7)

第64号土坑

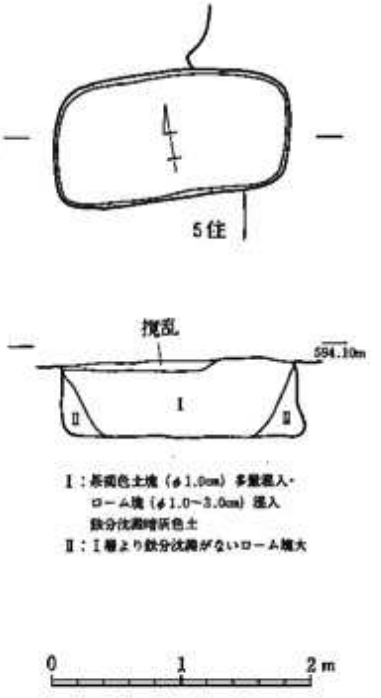


第67号土坑

第66号土坑

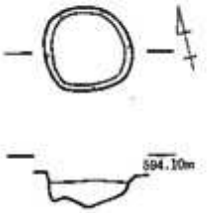


第68号土坑



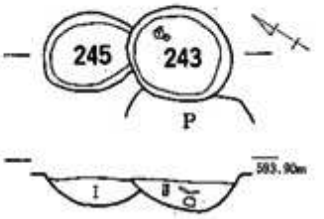
第35図　土坑(8)

ピット225



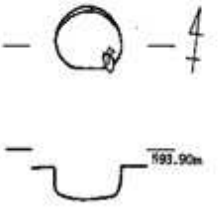
ローム粒、茶褐色土粒混入暗褐色土

ピット243・245

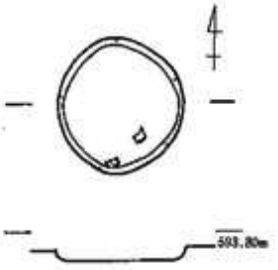


I：ローム粒混入黒褐色土
II：ローム粒混入暗褐色土

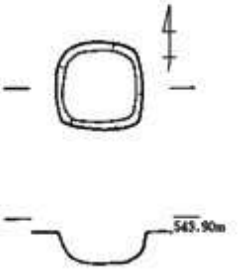
ピット259



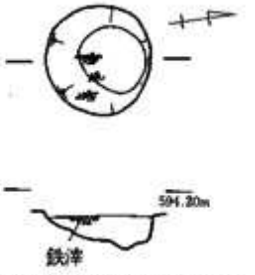
ピット267



ピット277

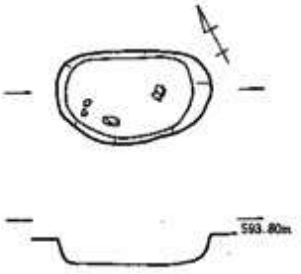


ピット278

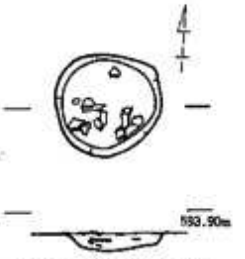


ローム塊（0.5～2cm）少量混入暗褐色土

ピット295

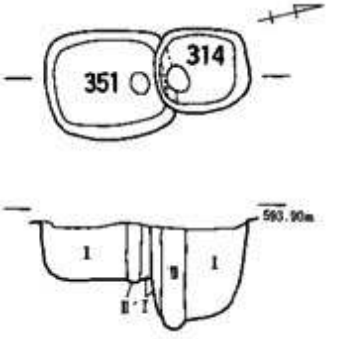


ピット297



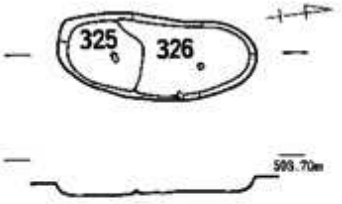
小ローム塊、焼土塊混入暗褐色土

ピット314・351

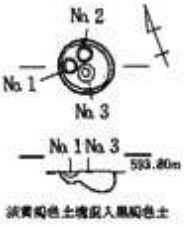


I：ローム塊（φ0.5～5cm）多量混入暗褐色土
II：ローム塊（φ3cm）、茶褐色土塊混入灰色土
II'：茶褐色土塊、ローム粒混入灰色土

ピット325・326



ピット364



淡黄褐色土塊混入黒褐色土

第36図　ピット

第3表　　SK IV　土坑一覧表

番号	平面形	規模(cm) 長径×短径×深さ	長軸方向	遺物 (数字は土器番号)	備考
1	長方形	95× 62×23	N−10.5°−E	骨、炭化物多量、銭	火葬墓
2	円形	98× 89×20	N− 0°−E	礫少量	
3	不整円形	159×145×49	N−10.5°−W	指頭大の骨有り、188	
4	不整楕円形	105× 95×15	N−63°−W		2溝より新
5	楕円形	75× 62×10	N−54.5°−W		〃
6	円形	75× 74×31	N−42°−W		
7	楕円形	331×258×70	N−49.5°−E	礫あり、187、202、203	
8	円形	120×117×41	N−56.5°−W	199	7土坑より新
9	長方形	112× 87×93	N−0.5°−W		
10	不整形	158×137×26	N− 4°−E	大礫あり	
11	不整正方形	(222)×219×33	N−34°−E		
12	不整正方形	143×(68)×10	?		南側用地外へのびる
13	不整正方形	102× 97×20	N− 4°−E		
14	不整楕円形	117× 91×27	N−83°−W		
15	不整楕円形	131×113×17	N−28°−W	礫2個	
16	不整楕円形	156×124×13	N−11.5°−E		17土坑、3溝より新
17	不整楕円形	203×151×52	N−0.5°−E		
18	不整円形	142×127×23	N−67.5°−W		
19	円形	105× 96×13	N−45°−W		
20	不整楕円形	145× 95× 6	N−12°−E		
21	楕円形	121× 90×18	N−87.5°−W	礫あり	
22	不整楕円形	248×159×17	N−83.5°−W		
23	不整楕円形	140×115×23	N−13.5°−E	炭化物層なす	2溝、24土坑より新
24	楕円形	103×(75)×18	N−12.5°−W		
25	円形	124×122×29	N−6.5°−W		2溝より新
26	不整楕円形	248×170×17	N−6.5°−W		
27	楕円形	95× 76×17	N−81.5°−E	土製紡錘車	26土坑より新
28	楕円形	155×125×10	N−43.5°−W		2溝より新
29	不整長方形	81× 70×24	N−81°−W		
30	長方形	135× 96×36	N−81.5°−W		
31	不整長方形	101× 89×21	N−15.5°−E		
32	不整楕円形	116×103×65	N−72°−W		
33	不整長方形	91× 80×21	N−16.5°−E		
34	不整方形	92× 85×32	N−32°−E		

SK IV　土坑一覧表

番号	平面形	規模（cm）長径×短径×深さ	長軸方向	遺物（数字は土器番号）	備考
35	不整長方形	104× 91×16	N－13.5°－E	鉄器あり	
36	長方形	149× 72× 9	N－85°－W		
37	正方形	125× ？ ×？	？		東側は用地外へのびる
38	不整楕円形	129× 82×19	N－5.5°－E	礫多量、骨、炭化物	火葬墓
39	不整形	140× 57×15	N－12°－E	骨、炭化物	〃
40	不整形	167×151×34	N－5°－E	礫多量、189、201	11土坑より新
41	楕円形	160×122× 7	N－18°－W		2溝より新
42	不整円形	95× 85× 9	N－46°－W		
43	不整形	167×145×15	N－88°－W	礫あり	2溝より新
44	正方形	150×143×19	N－89°－E	礫あり	2溝より新
45	正方形	110×103×21	N－3.5°－E	骨、炭化物、銭	火葬墓、2住より新、3住より旧
46	正方形	87× 86×24	N－24.5°－E		
47	円形	89× 86×28	N－0°－E	人歯あり	
48	円形	125×109×44	N－77.5°－W	人歯あり、銭	
49	円形	107×106×11	N－38°－W		
50	不整円形	202×184×31	N－36.5°－E		2溝より新
51	不整楕円形	123× 68×10	N－82°－W		
52	不整長方形	128× 74× 9	N－1.8°－E		3住より新
53	不整楕円形	123× 63×14	N－0°－E		3住より新、54土坑より新
54	不整長方形	196×135×11	N－80°－W	196	3住より新
55	長方形	155× 82×14	N－4°－E		
56	正方形	128×112×20	N－1°－W		
57	不整楕円形	114× 77×11	N－79°－W		
58	不整楕円形	125× 70× 7	N－0°－E		17住と重複、P224より新
59	円形	116×115×19	N－39.5°－E		
60	不整正方形	146×137×13	N－72°－W	197	P265より旧
61	不整楕円形	115× 85×41	N－7°－E	壁面焼土化	P112と重複
62	不整楕円形	155× 78×32	N－18°－E	191、198	
63	不整楕円形	157× 80×17	N－32.5°－E	190、192、195	P327より旧
64	不整円形	155×134×83	N－25°－E	193、194	
65	不整楕円形	138× 93×32	N－65°－W		
66	楕円形	410×302×76	N－75°－W	礫あり	
67	不整楕円形	164×126×11	N－77.5°－W	200	
68	長方形	181×103×56	N－80.5°－W		5住より新

4）溝址

溝は6本を検出した。すべて第1検出面にあり、以下順に見ていく。

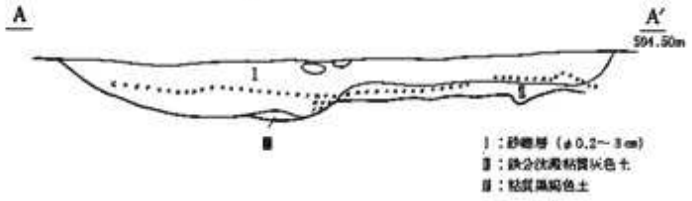
1号は北部に位置する。ここは遺構のほとんど見られない所である。北西及び、南西からの5～7mの幅の2本が合流し、東へ向かう。途中北へ幾筋か分流するがはっきりとはつかめない。覆土は砂礫層一層で、中層に鉄分が多量に沈澱する。沈澱幅は一定でなく、最大10mまで確認できる。又、底部もゆるやかに起伏している。遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器片が若干見えるが非常に少ない。この北側20mには現在西から東へと境沢が流れており、その氾濫した自然流路であろうか。

2号は南西部に検出した。西側は調査区外となる為、南北47m、東西30m以上の範囲までを確認した。北には内・外側の2本があり、それが東で合流し南へ向かい更に西へ曲がってゆく。重複した遺構との前後関係をみると、本址は7建、8建上につくられ、埋没後10基余りの土坑とピットが成立している。溝の幅及び、深さについて観察すると、最も幅狭く浅い箇所は北外側溝で幅1.6m、深さ40cmである。幅広い箇所は東部にあり、4m、又深い箇所は南側で、100cmを測る。断面は、ゆるやかに段をなす舟底状を呈し、底面は平坦な所が多い。鉄分が多量に沈着し、堅い底面がつづくが砂などは見当たらず、流水した溝ではないことが分かる。覆土と、遺物出土状況についてみると、まず土層面から人為的埋没ではないと考える。ただ、東側と南側には、中層～上層にかけ、拳大の礫が多量に投入されている箇所があり、その中に混入する内耳土器が、主たる遺物であった。北内側にはIV層上に広がった少量の焼土と炭化物、灰が見られ、付近からは人歯も出土した。土層図からは、IV層まで一気に埋没し、その後の埋没が始まるまで暫く時間があったものと推測する。又、この東際壁中に斜めに柱痕の入った小ピットを検出した。

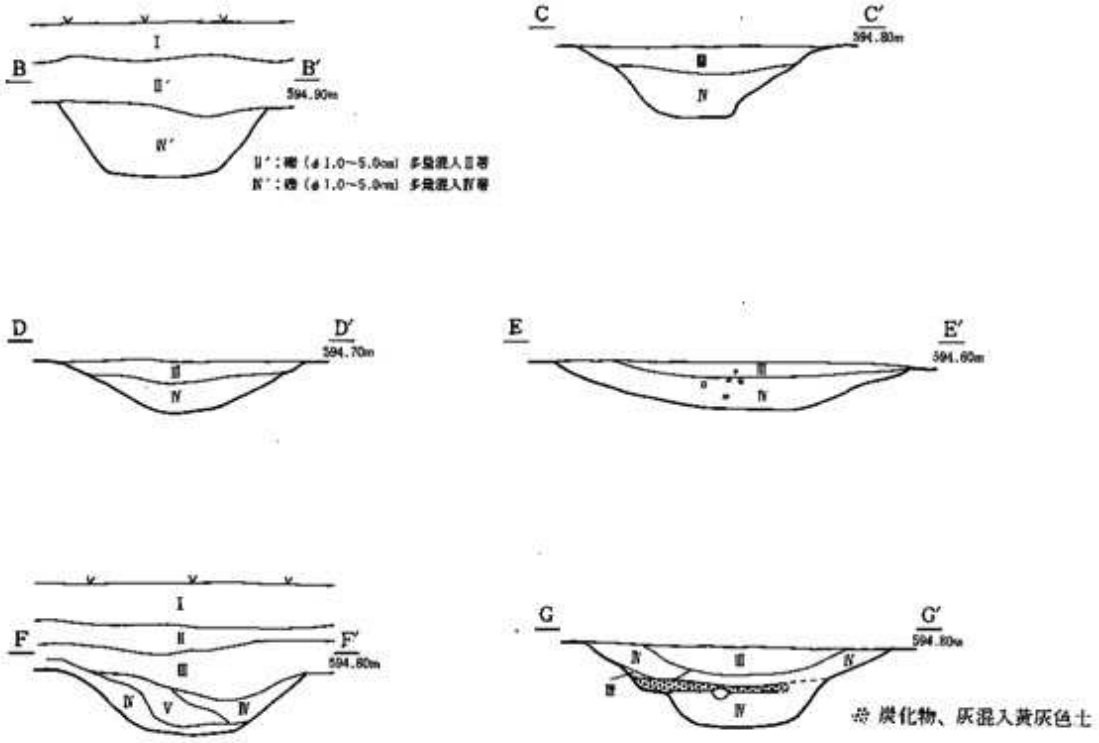
3号～6号は、2号の東側に検出している。3号は幅55cm～110cm、長さ14.5mで用地外東方へ伸びている。4号は長さ5m、6号は長さ2.5mと短い。共に、溝幅60cm、深さ7～8cmと浅い。5号は2溝に平行して途切れ乍らも、長さ15m、幅30cm前後のものである。途中、検出中に一部を削平してしまった。これは更に、調査区外南方へ伸びている。明確な水路と思われる痕跡もないが3号・5号は現在の水田区画に添っているようである。

出土遺物は2号が一番多く、焼物には天目茶碗・丸皿・碗などの施釉陶器、白磁碗、他に須恵器の坏・蓋、内耳鍋等の土器類もある。石器としては破損品であるが、搗き臼・粉引き臼があり、また、凹石9点、敲石12点、砥石2点などを図示できた。なお鉄器としては釘が見える。3号には須恵器広口壺、弥生土器らしき古いものが見えている。さてこれらの時期であるが、2溝については、少量の焼物そして中世住居をとり囲む溝である点を考慮すれば2・3号住居址同様、室町中～後期のものと考えたい。又、古代末期の遺物を見せる1溝は、状況から見て中世初期までは存在したものと推定する。

第１号溝址

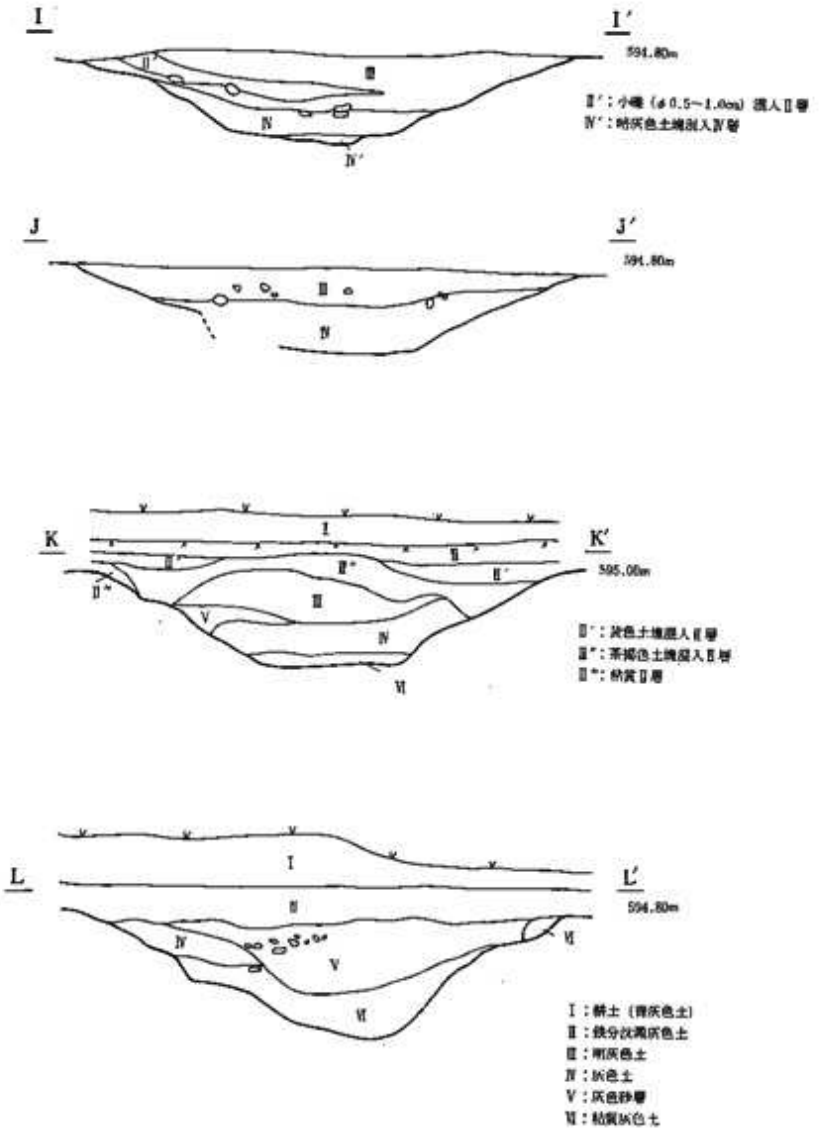


第２号溝址



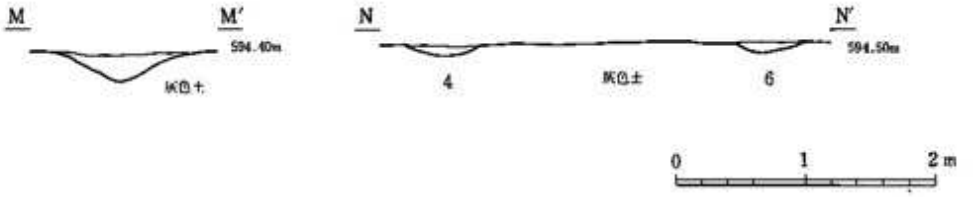
第37図　溝址(1)

第２号溝址



第３号溝址

第４・６号溝址



第38図　溝址(2)

3．遺物

1）土器

概要

今回の調査では、各遺構の覆土、底面および検出面から多量の土器の出土を見た。そのほとんどが土師器、須恵器であり、若干の灰釉陶器、微量の縄文土器、弥生土器、陶磁器、内耳土器が混じる。これらは一部の混入品を除いて、当地方の古墳時代末から中世後半にかけての土器様相中に位置付けられるものと考える。

出土土器の報告にあたっては、実測可能なもののみについて、遺構単位に図示、出土土器一覧表で提示し、時期ごとに記述した。

2）器種と器形

本遺跡を含む島立地区では、過去6年間に及ぶ発掘調査で膨大な資料を得て、当該時期の土器については、器種組成のあらましが明らかとなってきている。本調査における出土土器の器種、器形の分類については、文献5・6・7・8を基調にしながら、最終的には、文献12・13に従う。

1　古墳時代の土器

島立南栗編年のII期に相当し、今回出土したものの中で最古に位置付けられる。非ロクロ調整の坏Aを組成にもつ土器群で、第4号住居址出土土器群(以下4住土器群と略す)、10住土器群が該当する。食膳具は須恵器が少なく土師器が圧倒的に多い。須恵器坏Aは皆無で、土師器坏Aと須恵器坏Bで大部分を占める。煮炊具は甕A、小形甕Cがある。土師器坏・甕、須恵器坏を取り上げ、少し詳しく見てみたい。

1）土師器坏A

4点が図示されている（19・20・107・169)。体部に稜（あるいは段）をもって屈曲するものと、体部に稜が無く内湾しながら開くものに大別される。体部下半にケズリ調整、内外面にミガキ調整が施されている。このうち20・107・169は内面に黒色処理が施される。

2）甕

甕Aは4点（21・24)、小形甕Cが2点（22・23）図示できた。甕Aは大別すると胴部器面がハケメ調整によるもの（24）と、ヘラ状工具あるいは板状工具によるナデ調整が施されるもの（21）の2種類に分けられる。胴部外面の工具ナデとハケメは縦か斜めに施され、内面は横方向に施される。

3）須恵器坏

土師器に比べ、須恵器坏の出土量は極めて少ない。すべて坏Bで、1点（170）のみ図示できた。すべて底部にヘラ切り痕やヘラケズリ痕を残す。

2　奈良・平安時代の土器

III期

II期で大半を占めていた、土師器坏Aが減少し、須恵器坏Bの割合が高くなる。6住土器群、7住土器群が該当する。

1）土師器坏

坏Aが3点（44・112・115）図示されている。出土した大半のものは稜が無く内湾しながら開くもので、有稜のものは微量である。坏Aはこの時期で消滅する。

2）土師器甕

9点図化、提示した。甕Aと小形甕Cによりほとんどが占められる。甕Aは胴部外面に工具によるナデが施されるもの（61・62・70）とハケメ調整が施されるもの（63～68）に大別される。数量的には後者の方が多い。胴部内面調整は、工具ナデと指オサエで、口縁部は内面に横方向のハケメをもち、外面はヨコナデがなされる。小形甕Cは胴部外面がハケメ調整で内面は工具ナデ、口縁部はヨコナデがなされる（59）。

3）須恵器坏

すべて坏Bで6点図化した。製作技法は、底部にヘラ切り痕を残すもの（46・50・71）と回転ヘラケズリ痕を残すもの（48・51・114）、さらにそこに指や工具でナデたもの（47・49）が見られる。114は、体部がほぼ直に立ち上がり口径9.0 cm、器高3.4 cmと小形のものである。底部には重ね焼き痕が見られる。

IV～VIII期

欠落

IX期

土師器坏Cが主体となり、須恵器坏C・Dが存在する。土師器埦Aは当該期に発生している。土師器甕はE・F・Dが見られるがEが主体となる。1住土器群、8住土器群、11住土器群、20住土器群が該当する。

1）土師器坏

内面黒色処理した土師器（黒色土器）坏Cですべてが占められる。ロクロ成形され、内面にミガキが施されている。底部は回転糸切痕が見られる。外形は、平坦な底部から内湾して立ち上がり口縁部でやや外反するが、そのまま収まる。

2）土師器埦

埦A・Bが見られる。埦Aは、内面に黒色処理され、ミガキを施されたもので当該期より出現する。図示できたのは1点（81）のみである。埦Bは内面黒色処理されないもので3点（82・83・84）図示している。

3）須恵器坏

坏C・Dが見られる。須恵器は数量的にかなり減少し、土師器主体となる。図示できたのも坏C1点（5）、坏D4点（77・108・109・110）のみである。77は回転糸切りが雑で、体部下半まで糸

切り痕が残る。

4）土師器甕

甕はE（91・93・94・95・96）が主体となり、小形甕E（87・88・90・92）が加わる。甕Eは破片ばかりで全様を知り得るものはない。

X期

土師器坏Cが多数を占め、埦A・皿Aもその半数程を占める。須恵器はさらに減少し、坏C・D・Eがある。土師器甕はEのみである。9住・13住・14住・15住・17住土器群が、X期に該当すると考えられる。

1）土師器坏

前期に引き続き、坏Cが主体となり5点図化できた。（100・101・154・168・175）。数が少ないためはっきりしないが法量は大小2法量に分けられそうである。大形は口径15.8～20.0 cm、器高6.8 cm前後、小形は口径13.6～14.6 cm、器高6.1 cm前後に集中する。

2）土師器埦・皿

埦A 2点（102・103）、皿A 2点（99・173）を図化した。いずれも内面黒色処理されており、高台が付く。図化できたものは微量で、残存度も悪いため詳細は不明である。

3）須恵器

坏C 1点（158）、坏D 5点（162～167）、坏E 2点（97・98）の計8点を図化した。坏Cはさらに減少し、この時期をもって消滅する。坏Dは体部の開きが強くなり、ロクロ目が目立ち器厚は薄くなる。坏Eは当該期には確実に出現している。焼成が不良で胎土が粗く、灰白色に焼き上がり、黒斑の残るものが多い。

4）土師器甕

甕はE（104・105・106・141・142）と小形甕E（138・139・140・143）が見られる。完形になるものがなく、すべて破片である。甕Eは、口縁部が残存しているもので観察する限りでは、すべて口縁内面にカキメが入る。胴部内面にはハケメが入らずに工具によりナデられている。

XI期

土師器は坏Cが多数を占めながらも、同坏Dがある程度の量を占めてくる。須恵器は坏DがXI期前半で消滅し、同坏Eが主体を占める。5・13住土器群が該当する。

1）土師器坏

坏C 3点（26・127・128）、坏D 8点（25・28・29・30・31・130・131・132）が図化できた。坏Dはその口径においてI（口径15～20 cm）、II（同12～15 cm）の2法量に細分できる。

2）土師器埦・皿

埦A 3点（36・37・129）、皿A 2点（32・35）が図示できた。いずれも内面は黒色処理されている。

3）土師器甕

甕はE（141・142）と小形甕E（38・138・139・140）の組み合わせである。

4）須恵器坏

須恵器は坏DがⅪ期の古い段階で消滅し、坏Eのみとなる。量的にみても減少の一途をたどり、図化できたのは3点（33・124・126）のみである。

＜遺構外の出土遺物＞

遺構外から出土した特異な遺物について触れてみたい。

瓶（231）　第1検出面から出土している。美濃須衛窯産と考えられる。

蓋（243）　つまみ部が二段になっており、外面に自然釉が付着する。美濃須衛窯産の可能性がある。

註1　美濃須衛古窯址群の稲田山古窯跡群第13号窯出土品に類似例がある。

3　中世の土器・陶磁器

遺構内外より総破片数約100点が確認されている。それらのうち図化、提示できたものは20点である。焼物の種別は土器、陶器、磁器の3種類で、器種は碗、皿、鉢、擂鉢、おろし皿、内耳鍋がある。以下、種別ごとに述べる。

1）土器

a　土師質土器皿

名称については「かわらけ」、中世土器皿、土師器、土師質土器などと呼ばれている素焼きの皿である。この土器に対する認識は研究者毎に異なっており、古代の土師器の系譜を引いていると考えて土師器とする見解（小林　1977）や、形態・胎土・製作技法が土師器と「かわらけ」では異質で共伴遺物も違いをみせることから、「かわらけ」を土師器の系統から分離する見解（本沢　1983）など様々である。ここでは「かわらけ」の系統まで論及できないので、とりあえず土師質土器皿の名称を用いることにする。

本調査で出土した土師質土器皿は2点で、うち1点のみ図化している(16)。両者ともロクロ成形で底部に回転糸切痕を残し、底部から口縁にかけてヨコナデ痕がみられる。器厚は分厚く、体部下半でやや丸味をもって開く。16は口縁外面の一部にタールが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。

b　内耳鍋

5点図化している（14・15・41・199・203）が、いずれも破片であるため全体の形状は不明であ

る。

2）陶器

a　瀬戸美濃系陶器

天目茶碗、古瀬戸系陶器及び大窯製品については藤澤良祐氏に従う（藤澤　1982、1984、1986）。

11は、高台が直線的に削り込まれ、高台脇に明瞭な段を有する。体部はやや丸みを帯び、口縁端部が外反する。高台周辺に鉄化粧が施されている。古瀬戸系最末期の製品と考えられる。

12は、口縁部のくびれが弱く、体部は内湾しながら立ち上がる。釉は灰釉が厚くかかり、ガラス状を呈する。

262は、体部の下方は直線的で、口縁部は内傾し、端部は再び外反しS字状を呈する。古瀬戸後期様式に比定される。

縁釉皿

188は土坑より出土した。体部外面に線刻がある。口縁部のみに灰釉が漬掛される。15世紀中ごろの様相をもつ。

丸皿

187は7土坑から出土した。釉は内外面に灰釉が施される。261は、体部がやや開きながら立ち上がり、口縁端部で外反する。

卸皿

268は底部に回転糸切痕を残し、体部がやや直線的に立ち上がる。釉は乳白色の灰釉が施される。

263は古瀬戸後期様式に比定される。口縁端部が内外にふたまたに開く。

b　肥前系陶器

10は肥前系陶器で17世紀後半に現れる特徴的な京焼風陶器である。淡黄色の灰釉が体部内外面に及び高台内部にも施される。胎土はやや粗く、高台は台形に削り込まれ、比較的大振りの碗である。時期は17世紀後半から18世紀前半があてられる。

3）磁器

白磁と青磁が1点ずつ出土している。分類については横田賢次郎、森田勉氏の研究の成果に従う（横田、森田　1978）。

a　白磁

底部しか残存していないため全体の形態は不明である。胎土は純白できめが細かく、釉は光沢があってやや透明感のある白色を呈し、貫入が見られる。高台は削り出しで内側には漆が付着している。白磁碗Ⅰ類に似ているが、明代の白磁碗である可能性もある。

b　青磁

底部のみの破片である。龍泉窯系の碗と見られる。高台の断面は四角で高台部畳付およびその内部は露胎であり、底部の器肉が非常に厚い。内底見込み部には、僅かに片彫りが確認できるが詳細

は不明である。これらの特徴より碗Ⅰ類に分類できる。

4）無釉陶器

擂鉢と皿がある。内耳土器の胎土に類似し、質感は土師質であるが硬質である。202の擂鉢は、体部及び口縁部に指頭圧痕が見られ、口縁部にヨコナデ、体部に板状工具ナデ、ケズリ痕が残され非ロクロ調整と見られる。内面には擂目がみられ器面の観察状況により焼成後に鋭利な工具により施されたと考えられる。189は、202に類似する質感をもつが、底部に回転糸切り痕がみられ体部はロクロ調整により成形されている。

註1　器種・器形の分類については第11表を参照していただきたい。

参考文献

1　松本市教育委員会　1981　『松本市新村条里的遺構』

2　〃　1981　『松本市笹賀神戸遺跡』

3　〃　1983　『松本市新村秋葉原遺跡』

4　〃　1984　『松本市下神、町神遺跡』

5　〃　1984　『松本市島立南栗遺跡』

6　〃　1985　『松本市島立南栗、北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』

7　〃　1986　『松本市島立南栗遺跡』

8　〃　1987　『松本市島立北栗遺跡、条理的遺構』

9　〃　1987　『推定信濃国府一第五次調査報告書』

10　塩尻市教育委員会　1983　『吉田向井』

11　〃　1986　『君石遺跡』

12　松本市教育委員会　1988　『松本市島立条里的遺構』

13　〃　1989　『松本市島立条里的遺構Ⅲ』

14　小林秀夫　1977　「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市その５－』

15　本沢慎輔　1978　『柳ヶ御所跡発掘調査報告書』　平泉町教育委員会

16　藤澤良祐　1982　「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』　第８号

1984　「"古瀬戸"概説」『美濃陶磁歴史館報』　Ⅲ

1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要』Ⅴ

17　横田賢次郎、森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』　4

18　原明芳　1989　「吉田川西遺跡における食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』3　吉田川西遺跡　（財）長野県埋蔵文化財センター

19　各務原市教育委員会　1984　『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』

第4表　　SK IV　土器器種構成一覧表（土師器）

器種	器形		遺構	1住	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	20	建物址	ピット	第1検	第2検	検北	土坑	溝	排土	竪穴	器種器形別合計
土師器	坏	A	内黒				1		1				1		2				1			1	3		3						13
							1																								1
		C	内黒					1			3	2				2	1	1		1			1	1			1				14
		D						5	1							3	2						1	1				1			14
		E																				1									1
	高坏								1						1																2
	坏 or 椀	内黒		1																											1
				1				1																							2
	壺	A	内黒					2			1	2				1											1				7
		B									3														1						4
	甕	A	内黒					1				1								1				2							5
								1																			1				2
	鉢		内黒					1																							1
				3												1															4
	不明																														0
	甕	A			1		2		5	1					2																11
		A′							3																						3
		D																													0
		E									5	3				2							1	2	1		1				15
		F																													0
		G																													0
		不明							1														1 AorE						1 甕 or 鉢		3
	小形甕	C				1	2		3	1													1		1						9
		E						1			4					4															9
		F																													0
		不明							1																1 小 or 鉢		1				4
	甑			1																											1
	土師器合計			6	1	1	6	13	16	2	16	8	1	0	5	13	3	1	1	2	0	2	8	6	8	0	5	1	1	0	127

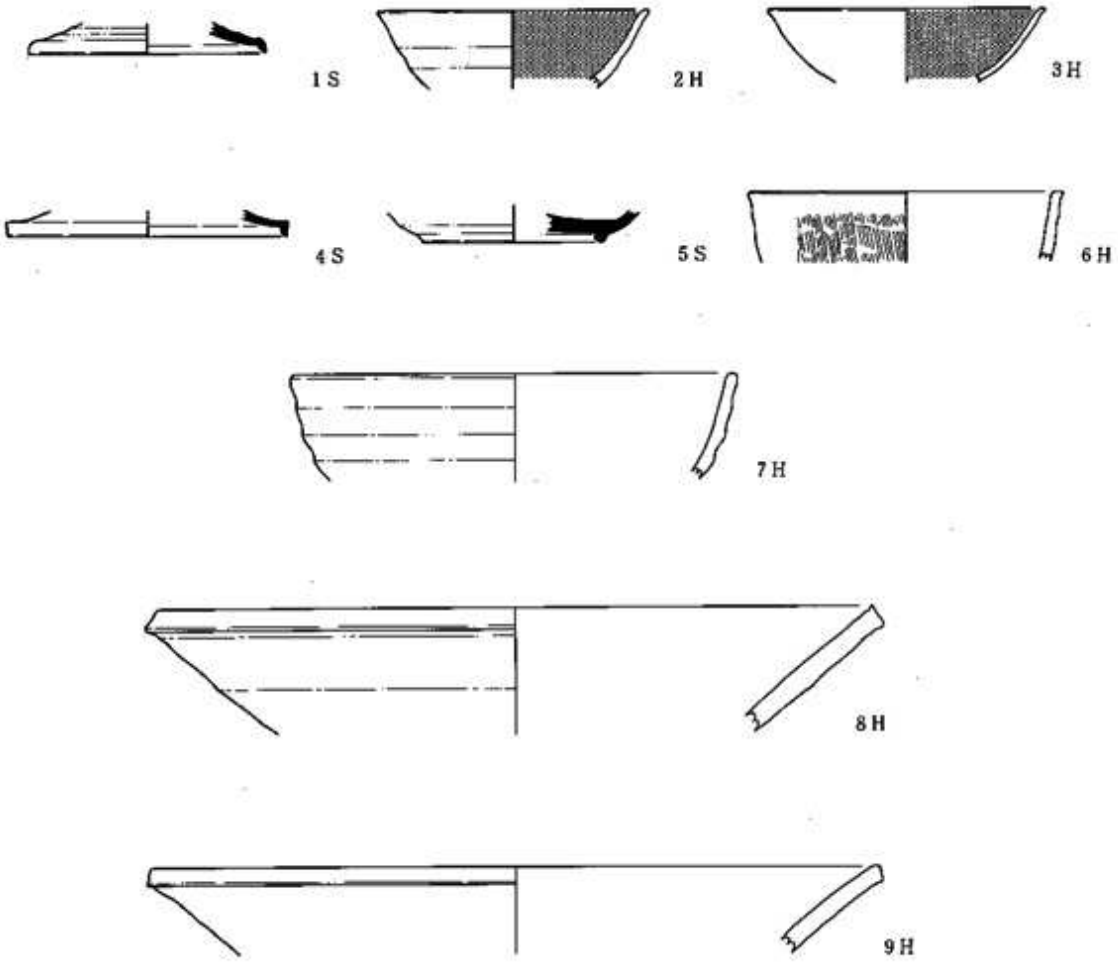
SK IV　土器器種構成一覧表（須恵器）

器種	器形＼遺構		1住	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	20	建物址	ピット	第1検	第2検	検北	土坑	溝	排土	竪穴	器種器形別合計
須恵器	坏	B						6	1					1				1			1				1					11
		C	1												2	1								1			1			6
		D								1			3				5			1	1	2			1	1				15
		B・D																			2									2
		C・D			1																									1
		E					1				2				2						1					1				7
		不明								2 EorD														1	1					4
	高坏							2																						2
	壺		2					1		1					2						1	1	1	3	1		1			14
	盤（高盤）							1																						1
	鉢																									1				1
	甑鉢													2												1				3
	甕	長頸																					1					1		2
		短頸											1	1				1			1							1		5
		広口													2											1	1			4
		不明					1										1						1							3
	四耳壺																	1												1
	瓶																						1					1		2
	横瓶									1																				1
	甕	長頸							1						1															2
		広口																					1							1
		不明					1	1							1											1				4
	その他不明																							1 ??						1
	須恵器合計		3	0	1	0	3	11	2	5	2	0	4	4	10	1	6	3	0	1	7	3	5	6	4	6	3	3	0	93

SK IV　土器器種構成一覧表（灰釉陶器・施釉陶磁器・他）

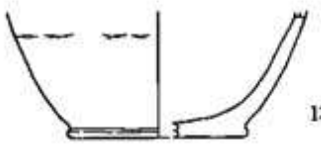
器種	遺構／器形	1住	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	20	建物址	ピット	第1検	第2検	検北	土坑	溝	排土	竪穴	器種器形別合計
灰釉陶器	碗								3					3	3			1		1		5	2	1	1		1		21
	皿													1									1						2
	瓶（不明）													1															1
	その他不明																							1 溝or畝					1
	計								3					5	3			1		1		5	3	2	1		1		25
施釉陶磁器	天目茶碗		3																							1		1	5
	（丸）皿																								2	2			4
	捏鉢																										1		1
	（丸）碗																										1		1
	擂鉢																					1							1
	白磁碗																									1			1
	青磁（丸碗）																									1			1
	不明																					1							1
	計		3																			2			2	5	2	1	15
その他土器	土師器土器・内耳鍋		2	1		1																			2	1			6
	縄文																								1				1
	弥生																									1			1
	計		2			1																			3	2			8
	灰釉・施釉・他合計		5			1			3					5	3			1		1		7	3	2	6	7	3	1	48
	合計	9	6	3	6	17	27	4	24	10	1	4	9	28	7	7	4	3	1	10	11	18	17	6	17	11	7	1	268

第１号住居址

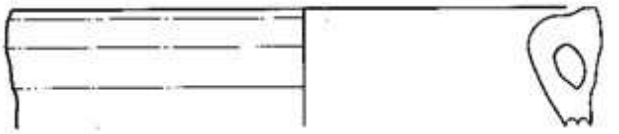


第２号住居址

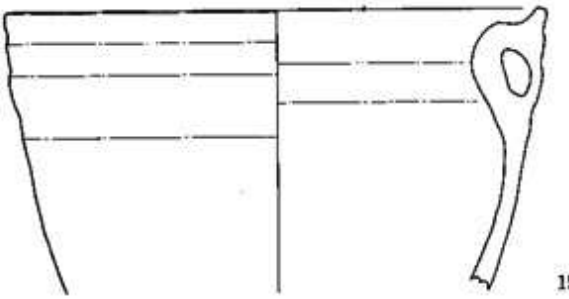
第39図　出土土器(1)



13H

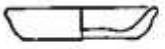


14 内耳土器



15 内耳土器

第３号住居址



16H

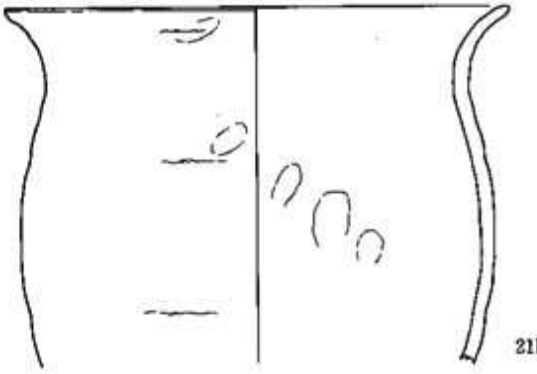
17H

18S

第４号住居址

19H

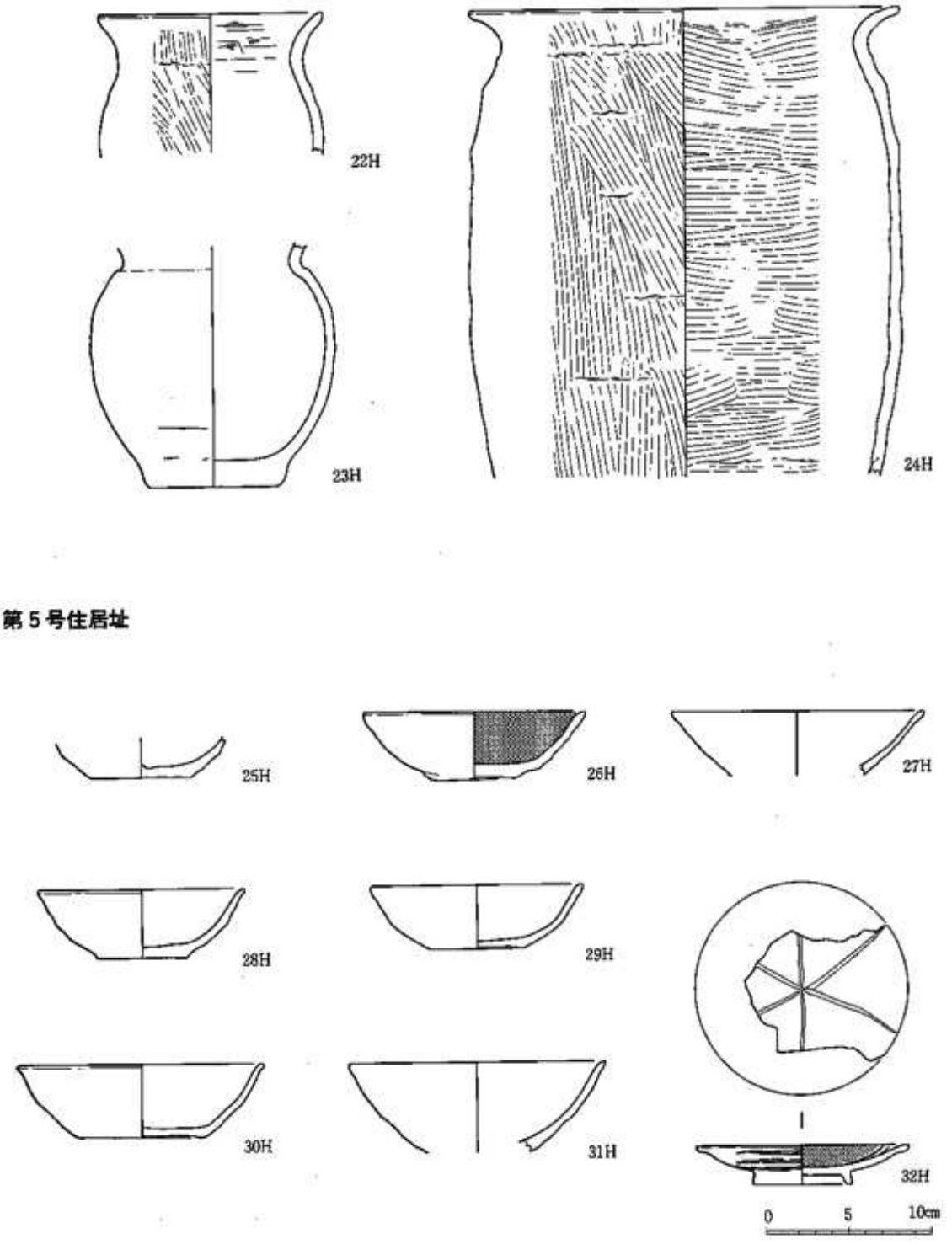
20H



21H

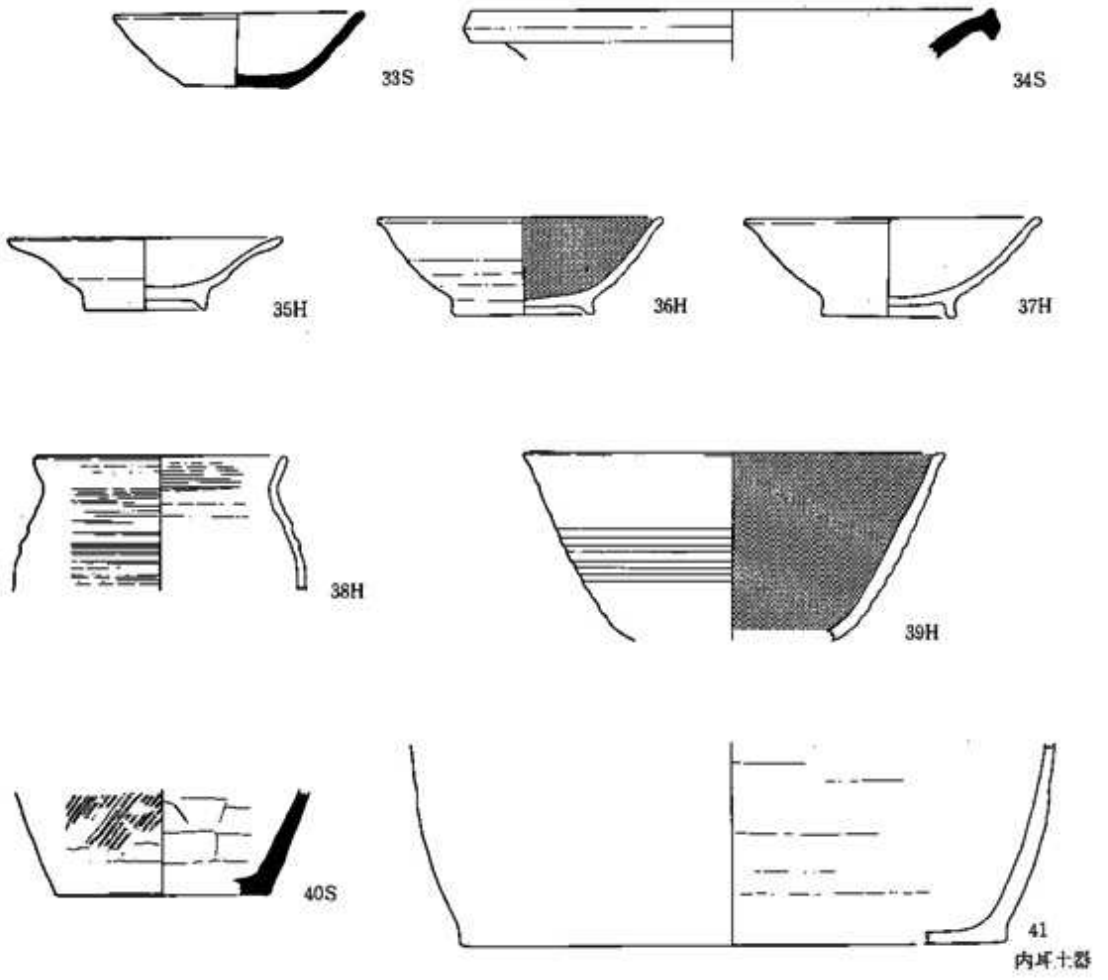
0　5　10cm

第40図　出土土器(2)

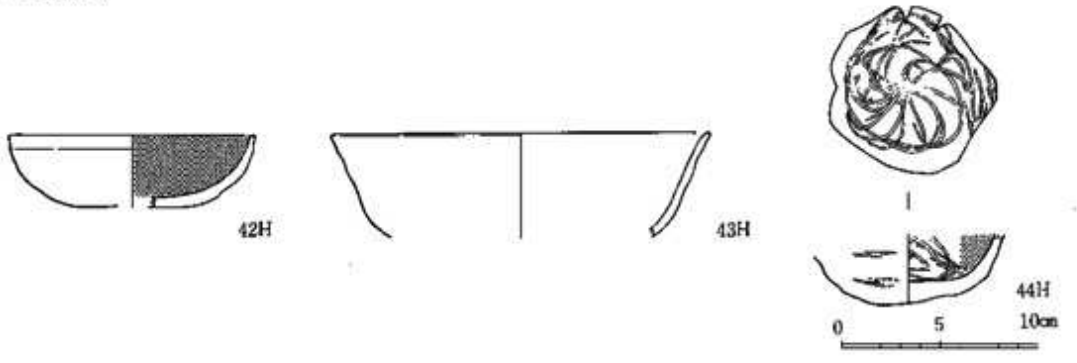


第５号住居址

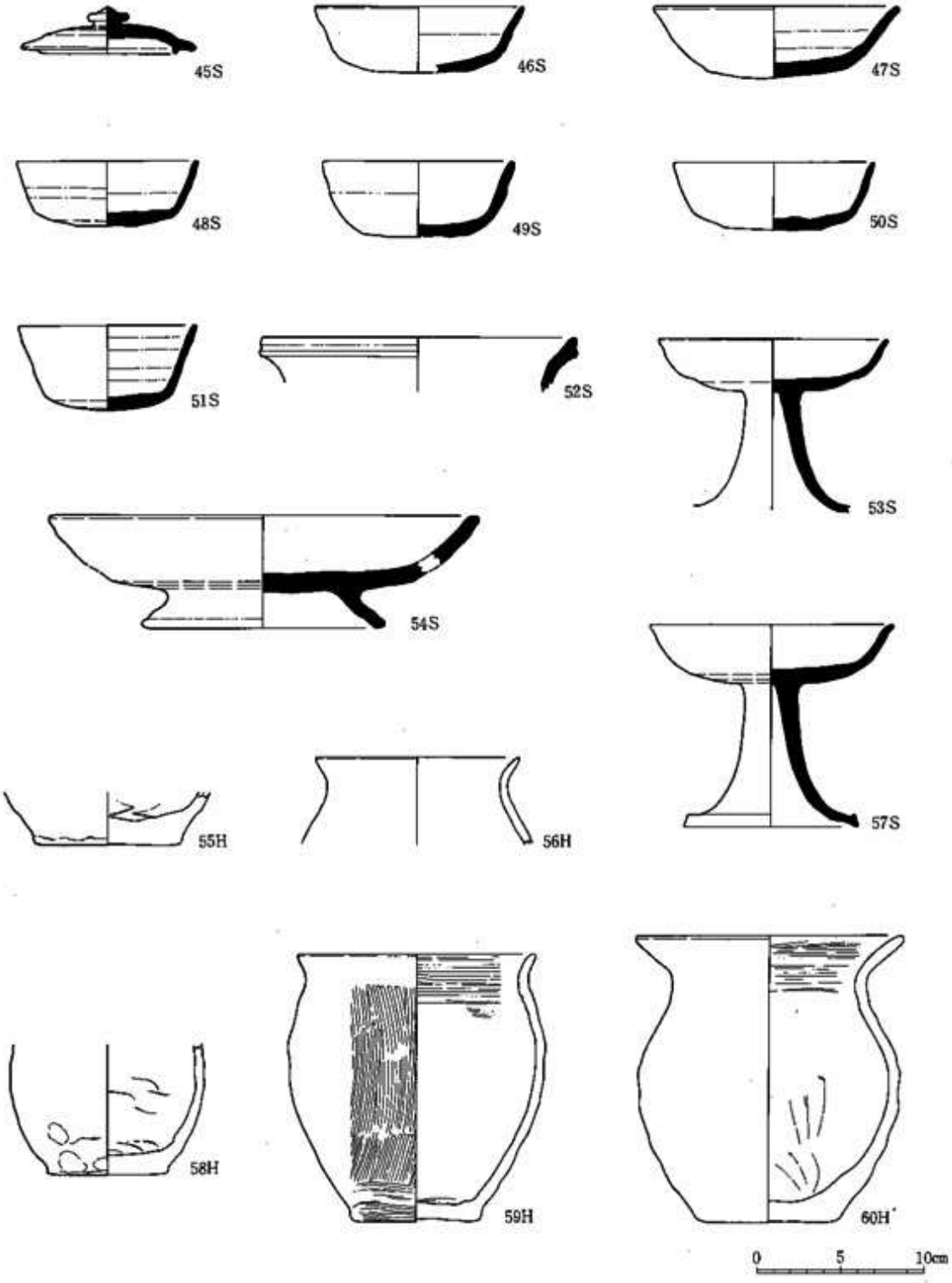
第41図　出土土器(3)



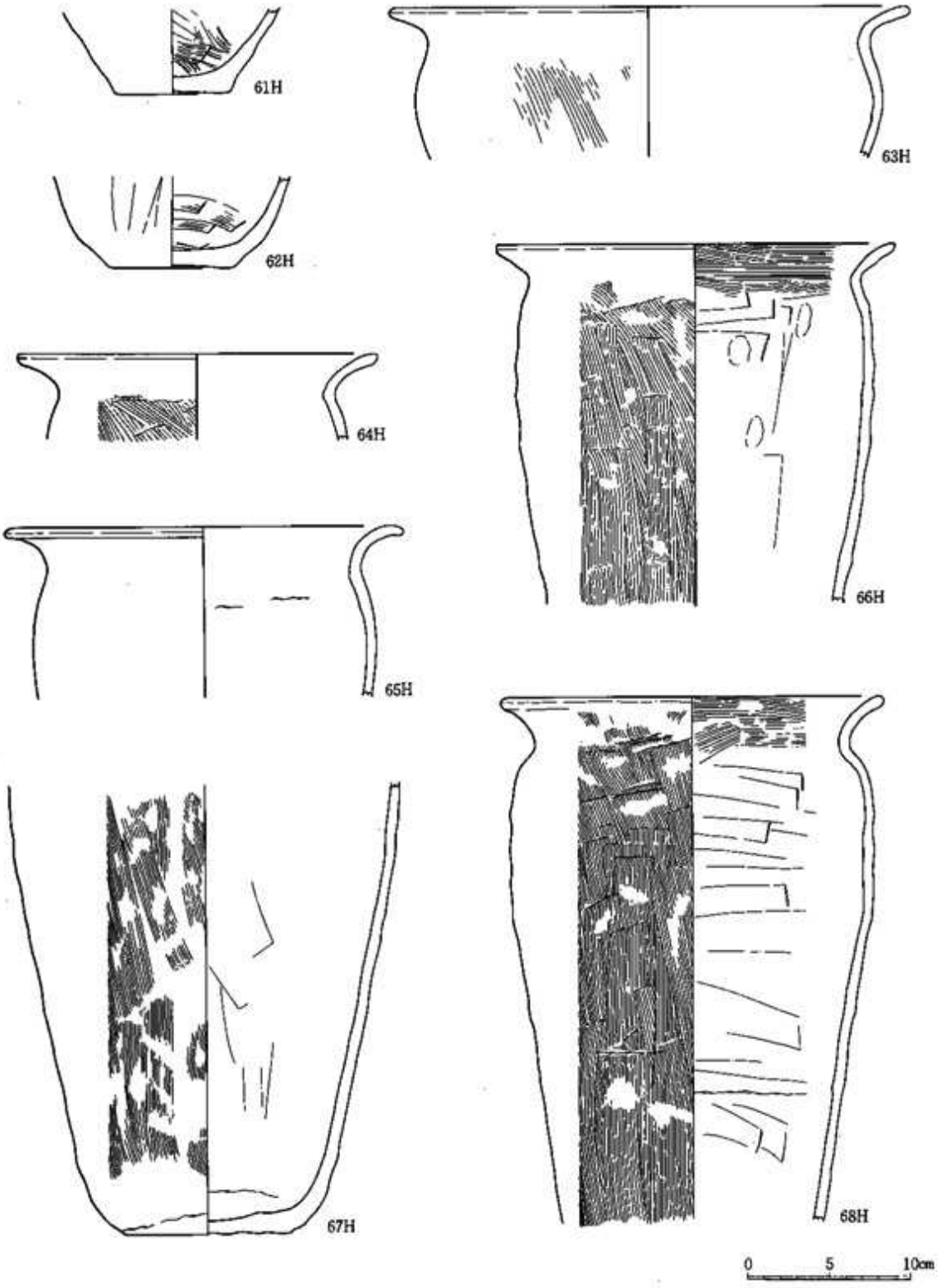
第6号住居址



第42図　出土土器(4)

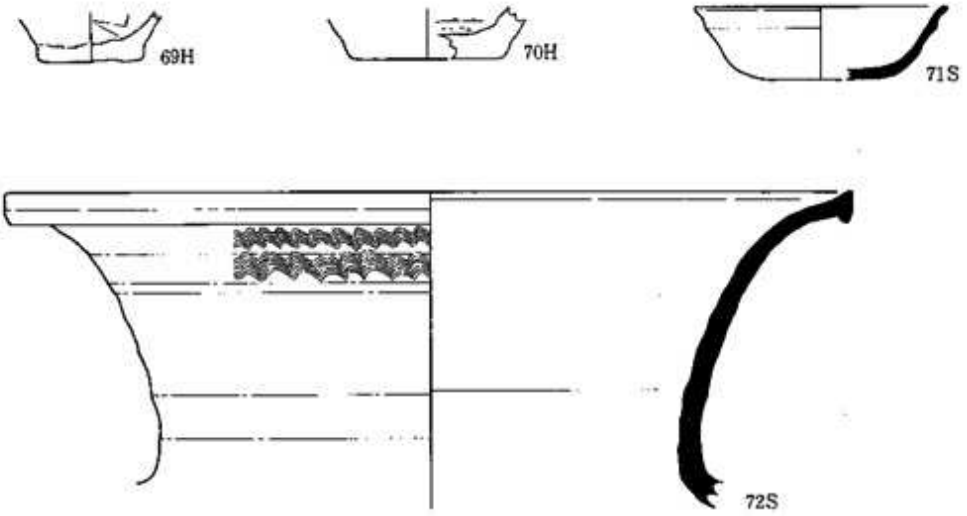

45S
46S
47S
48S
49S
50S
51S
52S
53S
54S
55H
56H
57S
58H
59H
60H
0
5
10cm

第43図　出土土器(5)

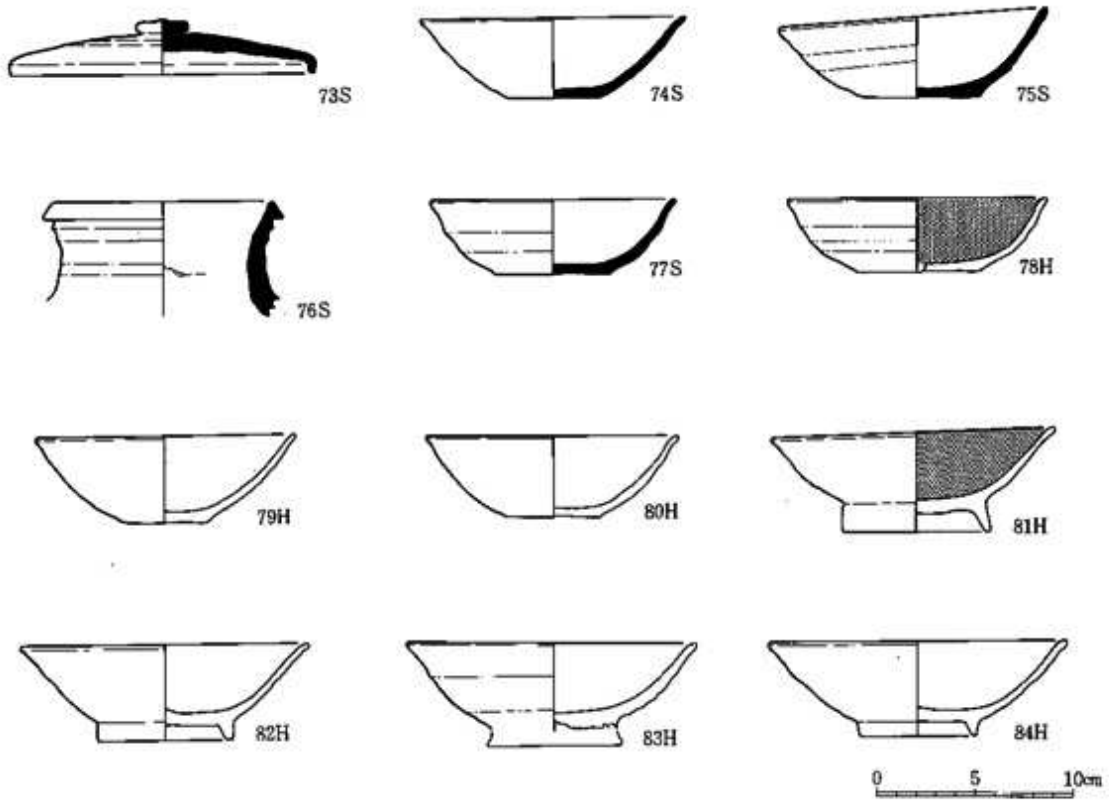


第44図　出土土器(6)

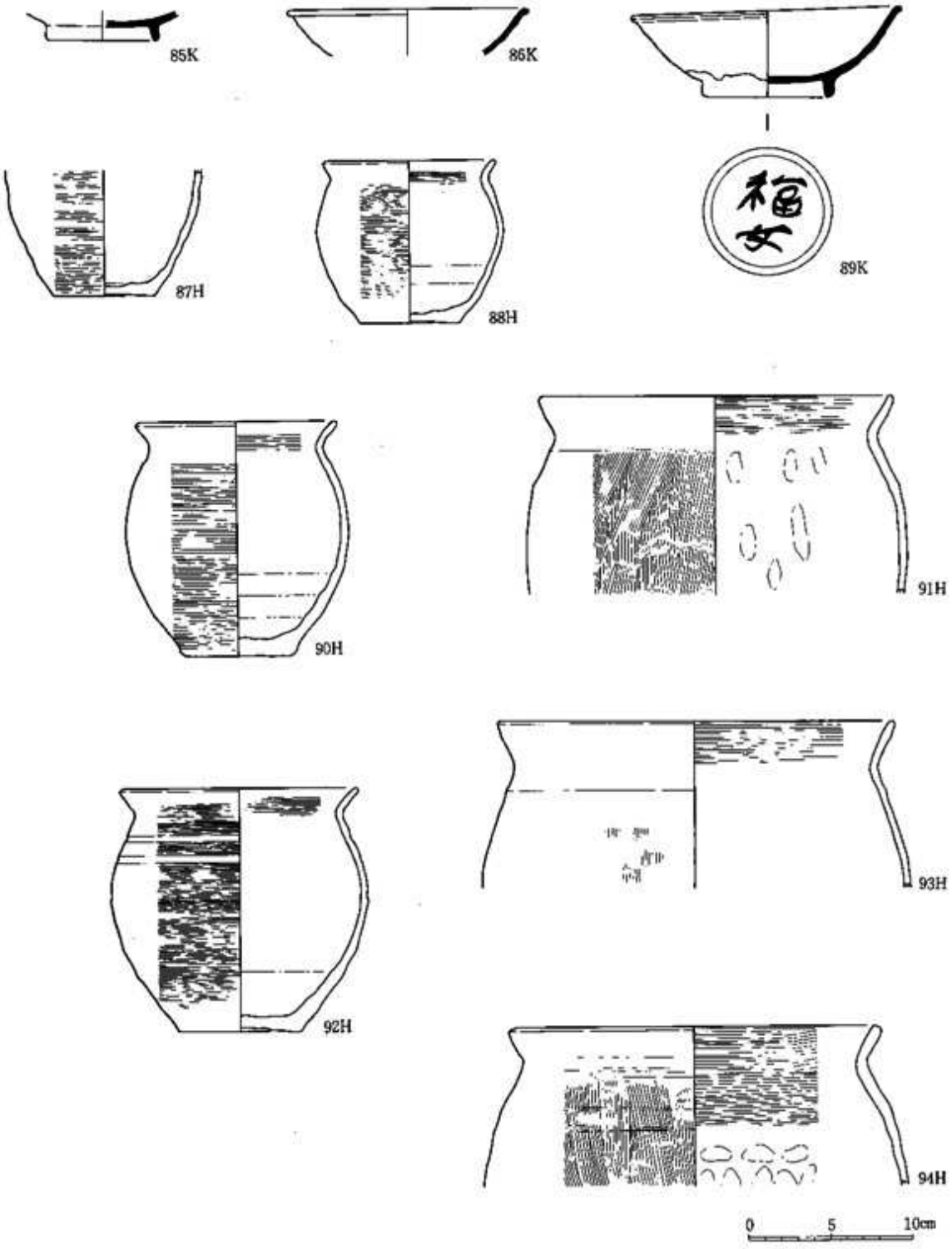
第７号住居址



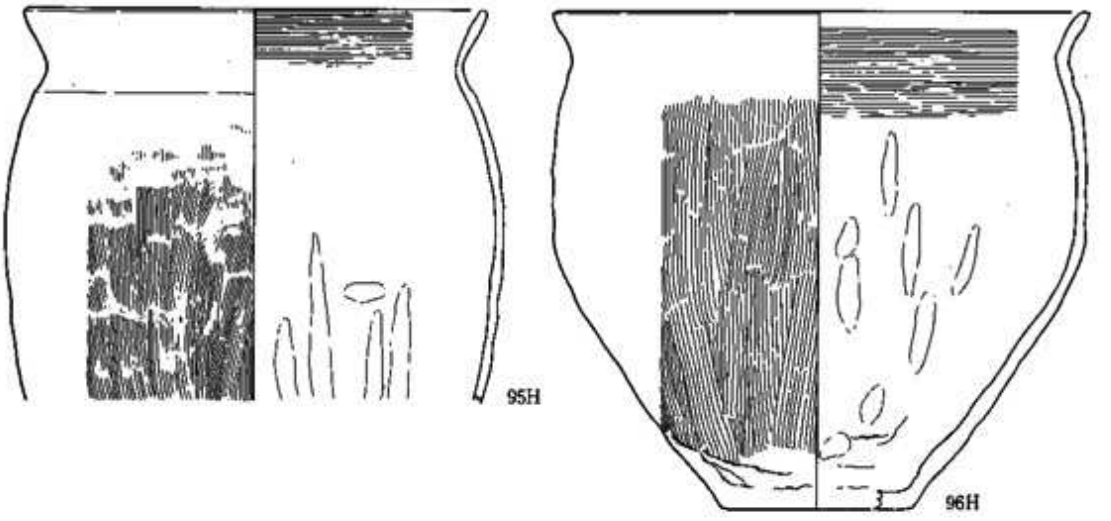
第８号住居址



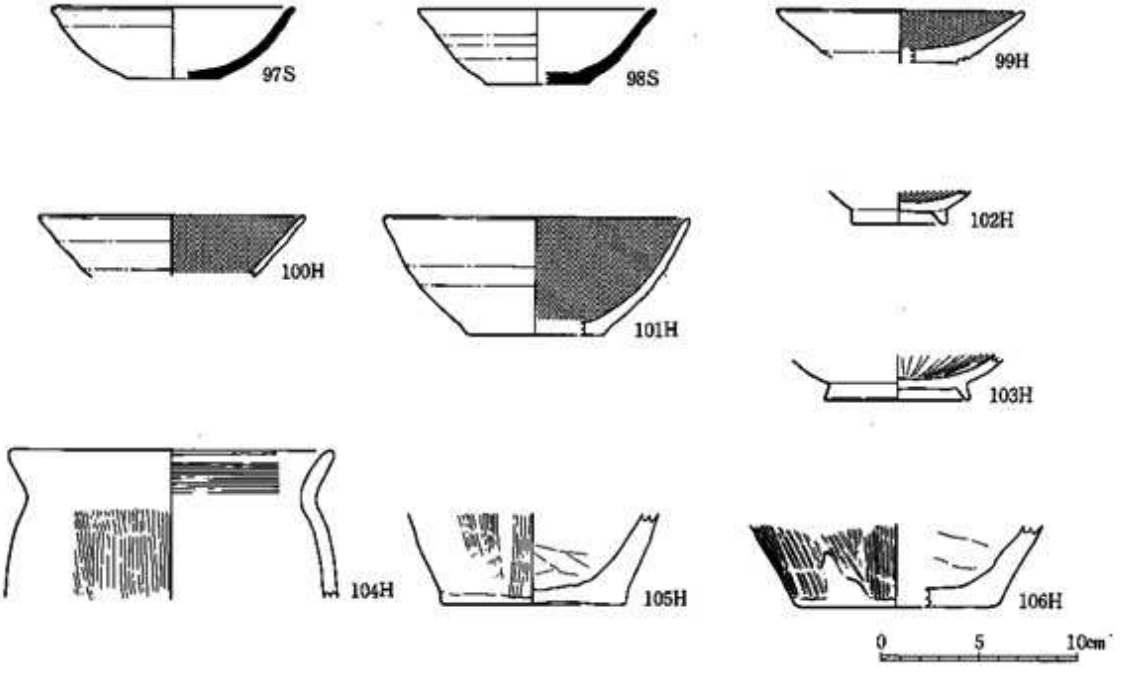
第45図　出土土器(7)



第46図　出土土器(8)

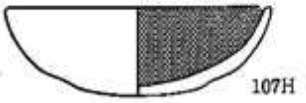


第９号住居址

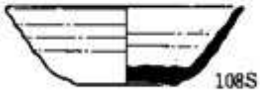


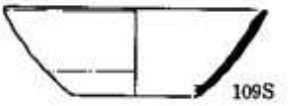
第47図　出土土器(9)

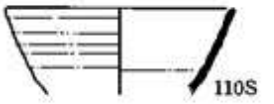
第10号住居址

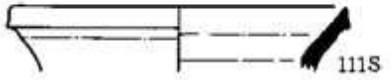


第11号住居址

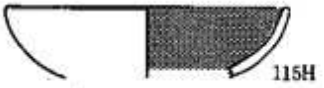


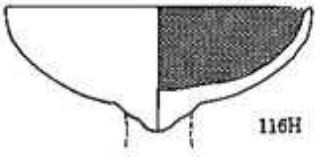




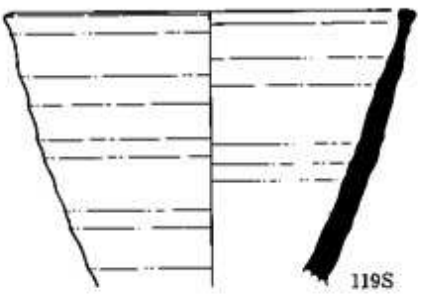


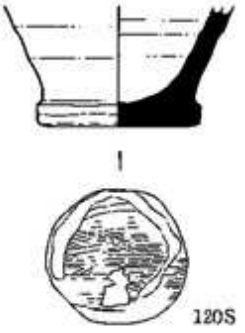
第12号住居址



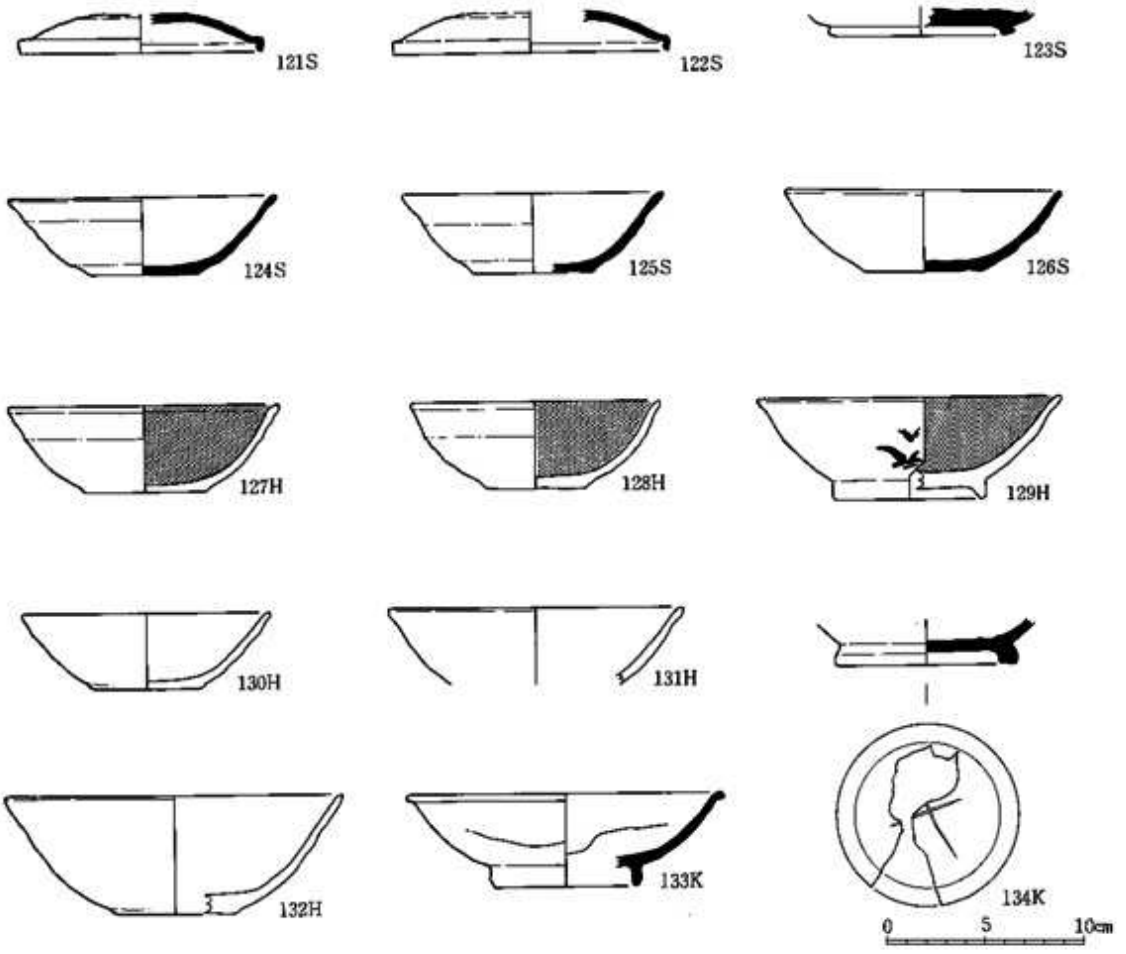


第48図　出土土器(10)

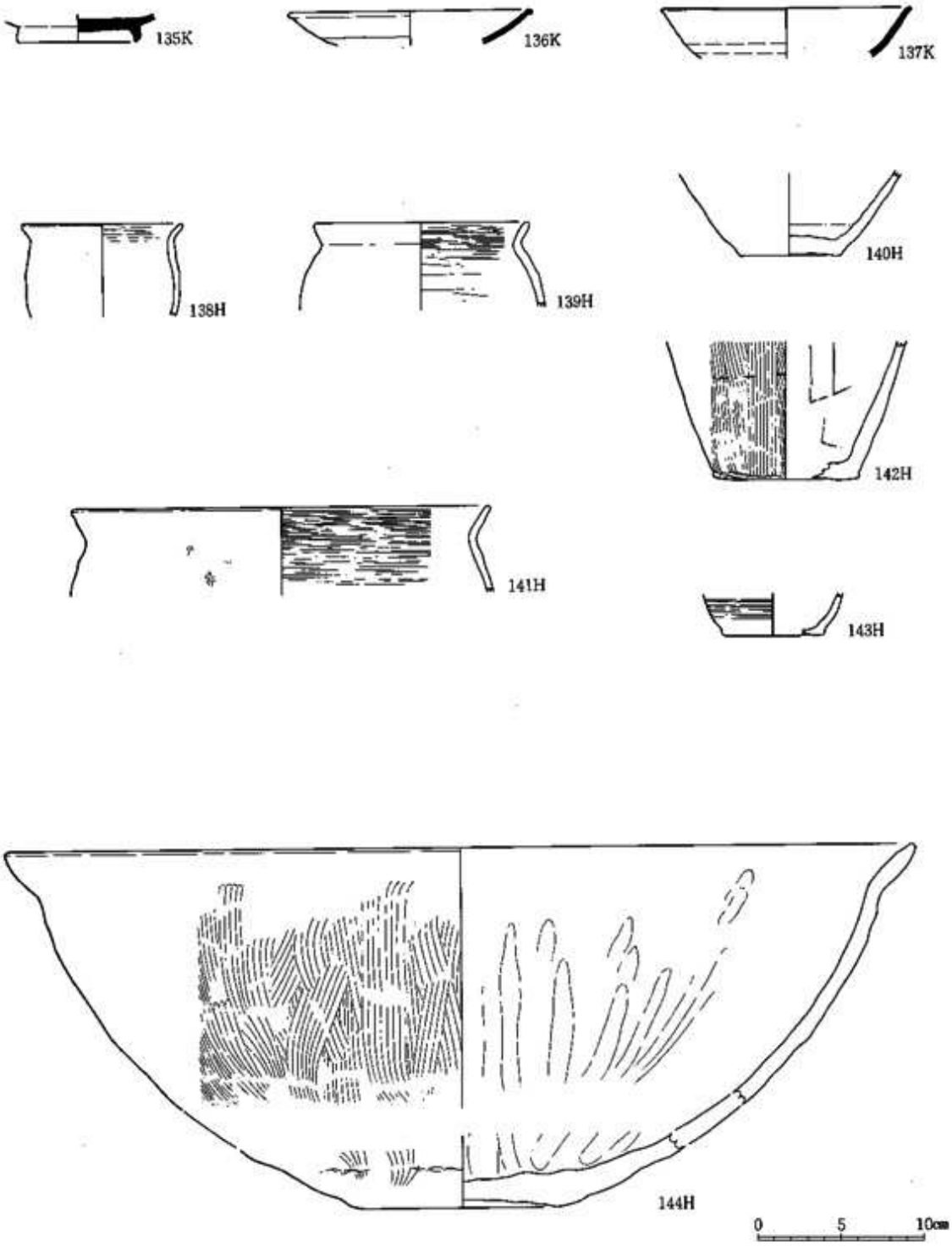




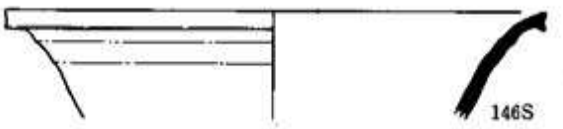
第13号住居址

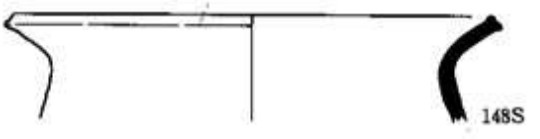


第49図　出土土器(1)

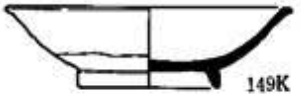


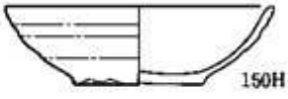
第50図　出土土器(12)

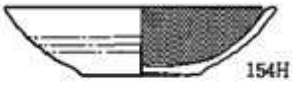




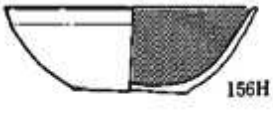
第14号住居址

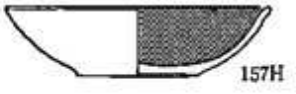


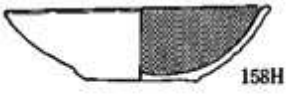




ピット364

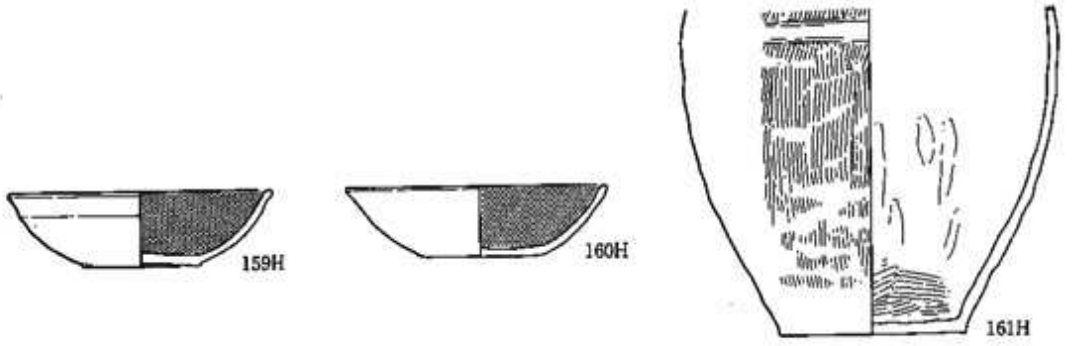




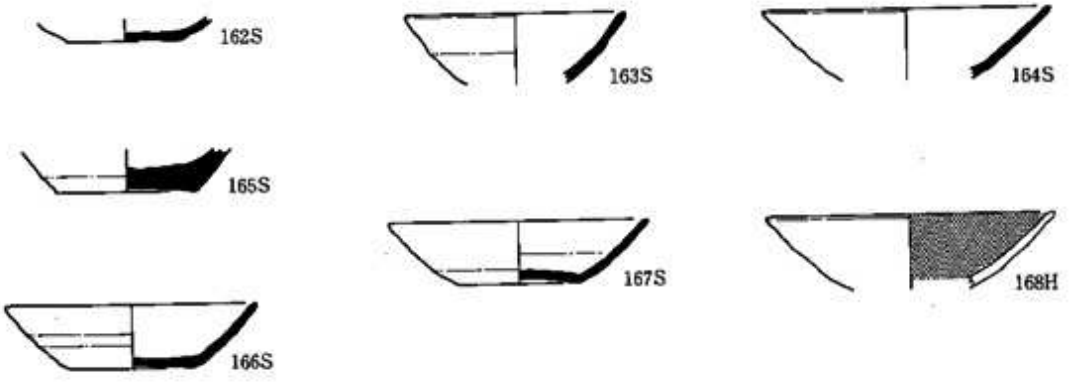


第51図　出土土器(13)

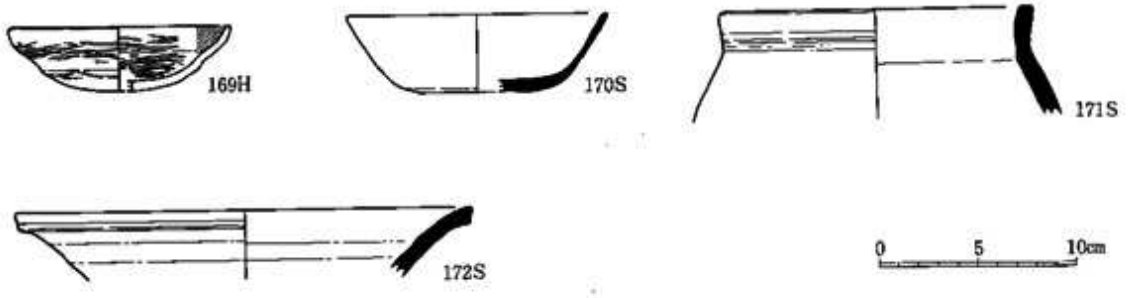
第２検出面



第15号住居址

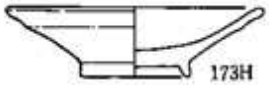


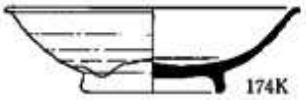
第16号住居址

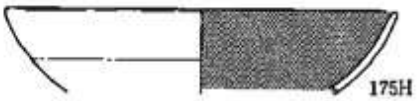


第52図　出土土器(4)

第17号住居址


173H


174K


175H

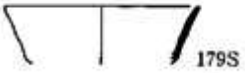
第20号住居址

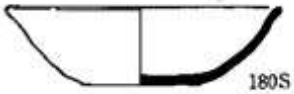
176S

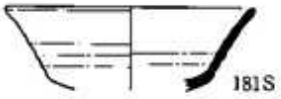
建 物 址

177S

178S


179S

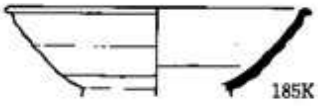

180S

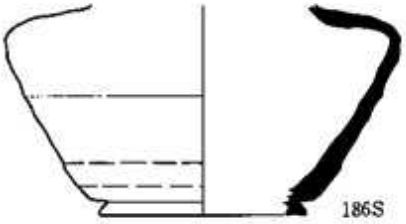

181S

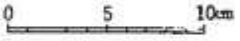
182S

183H

184H

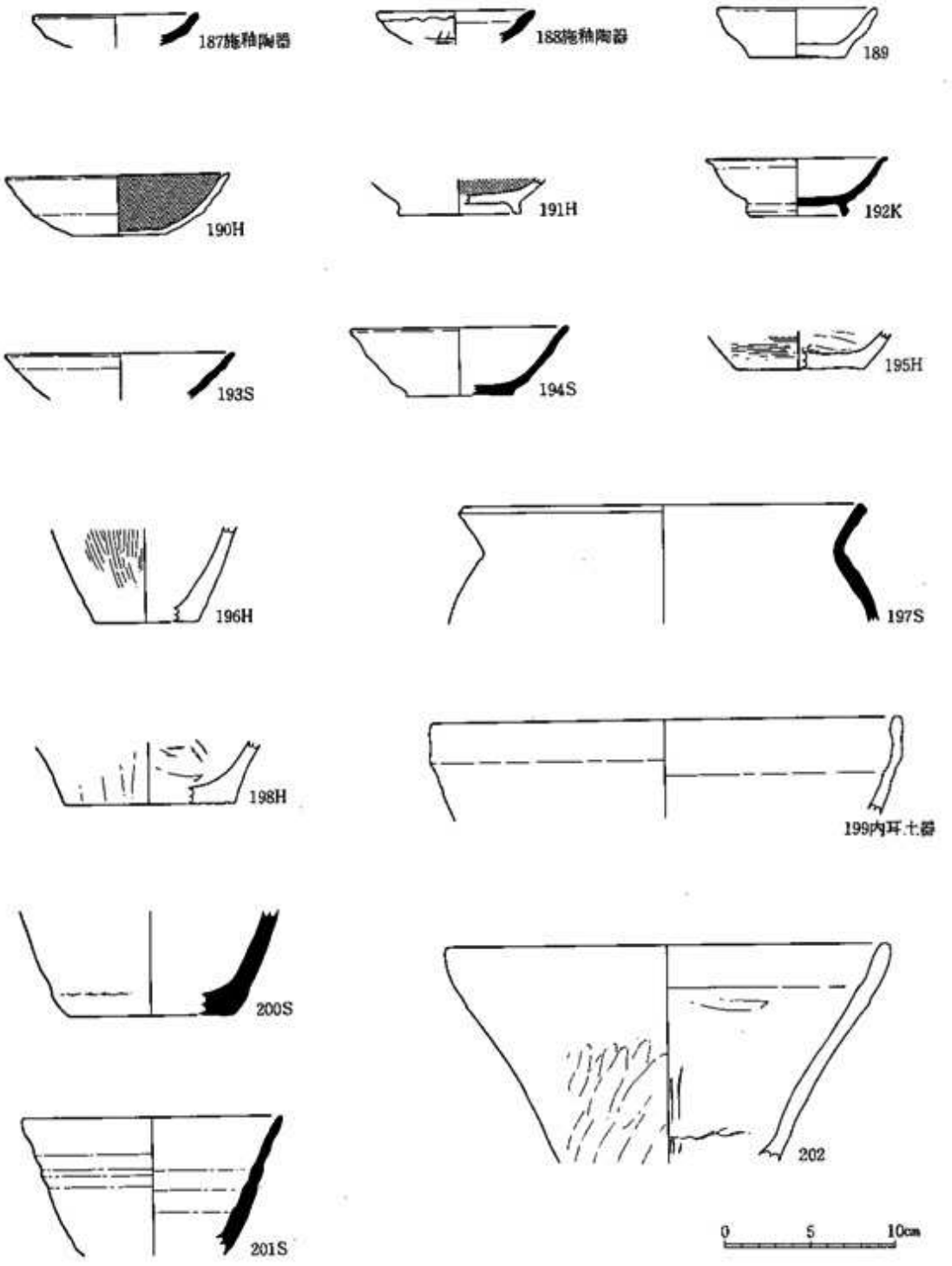

185K


186S

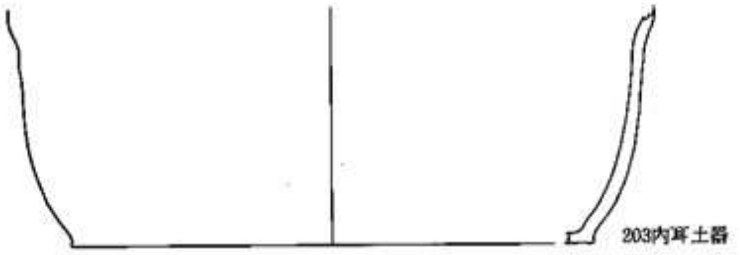


第53図　出土土器(15)

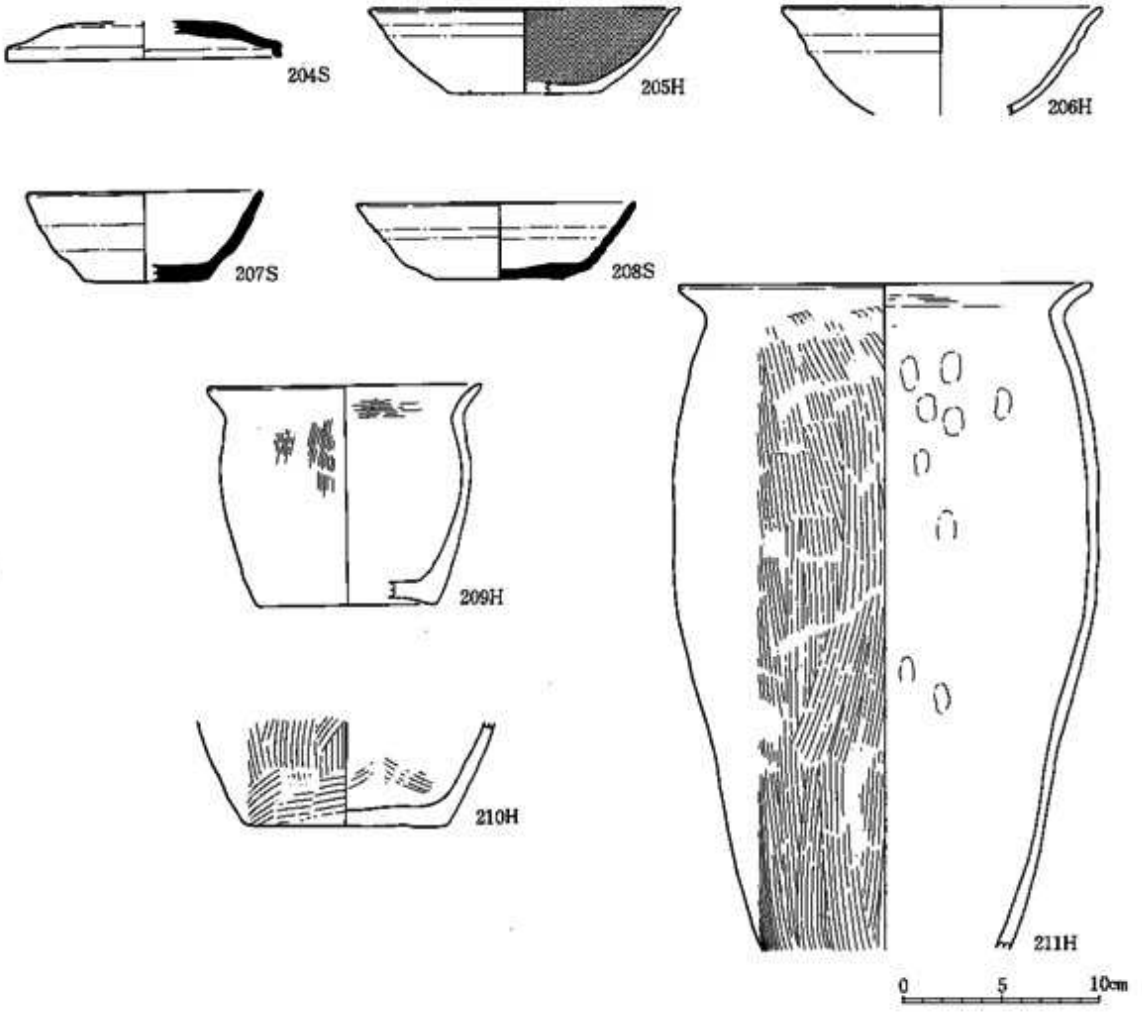
土坑



第54図　出土土器(16)



ピット



第55図　出土土器(17)

溝址

212S

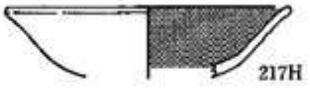
213S

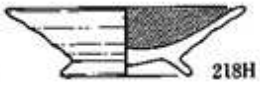
214H

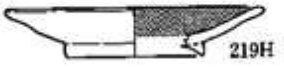
215S

216内耳土器

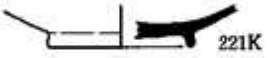
第1検出面


217H


218H

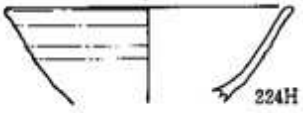

219H

220K

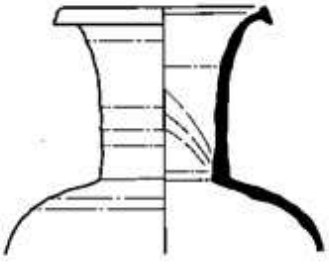

221K

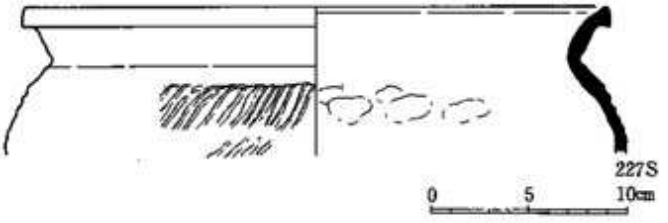
222K

223K


224H

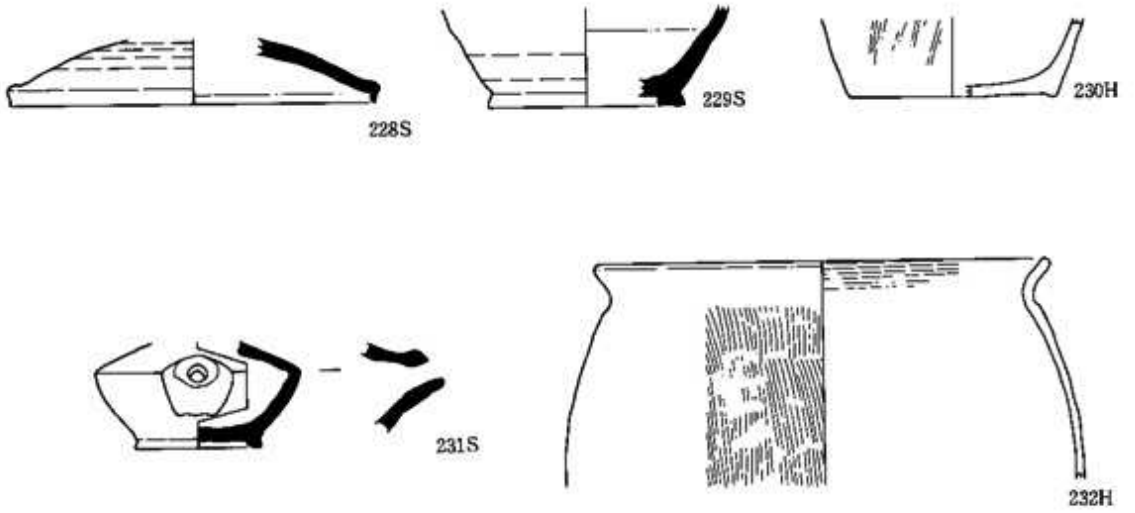
225K


226S

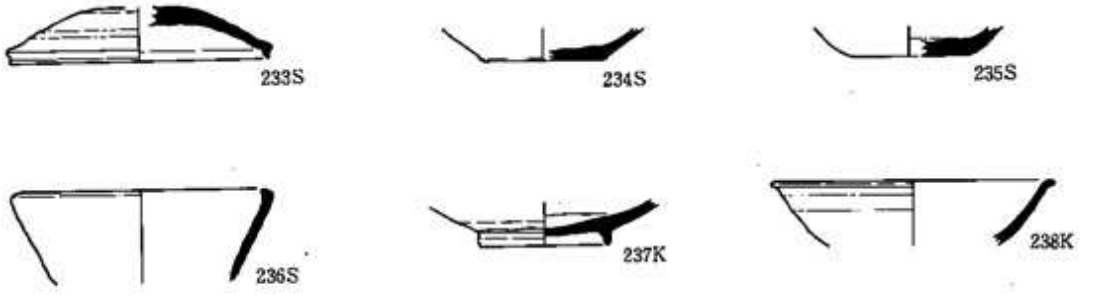


227S

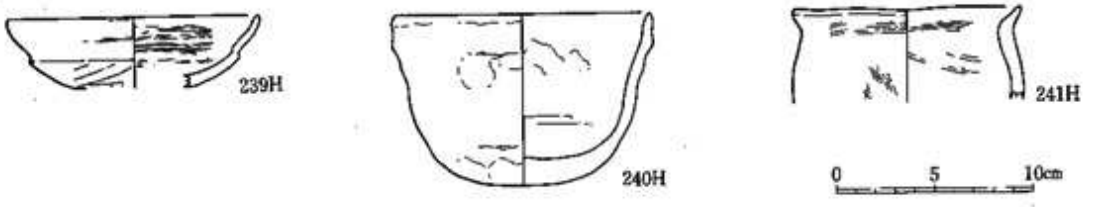
第56図　出土土器(18)



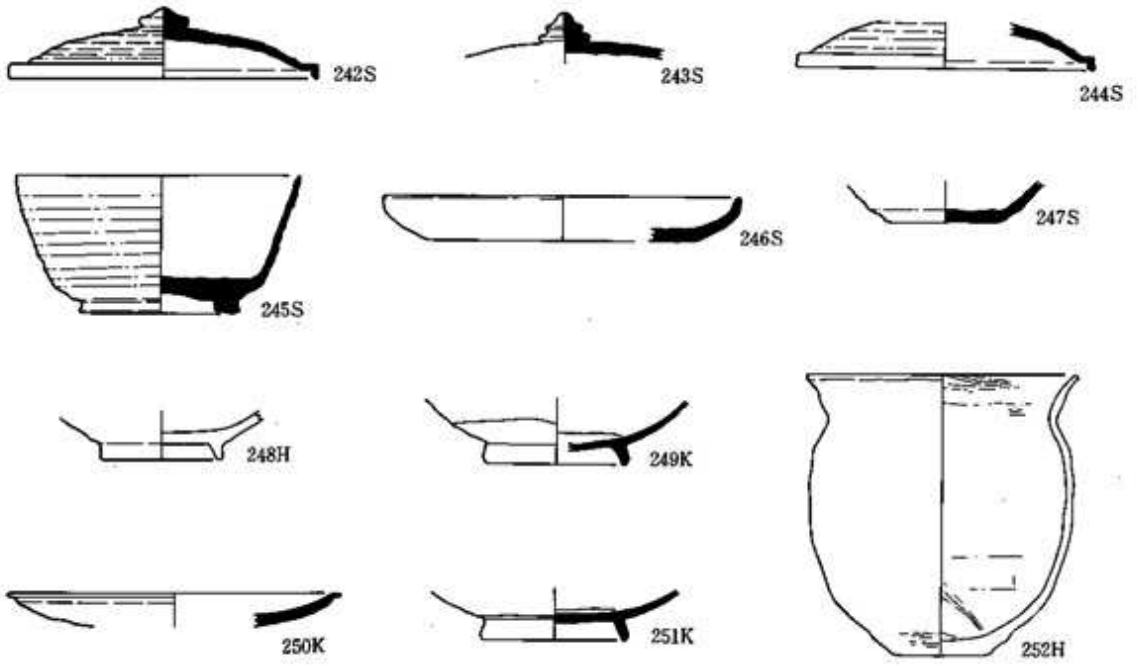
検出面北



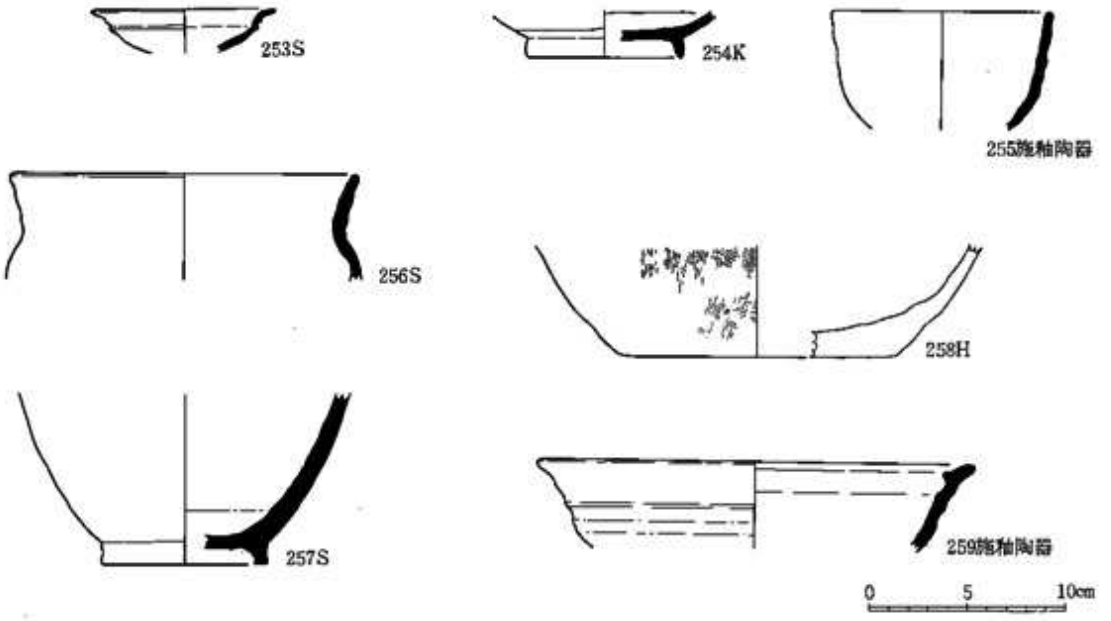
第２検出面



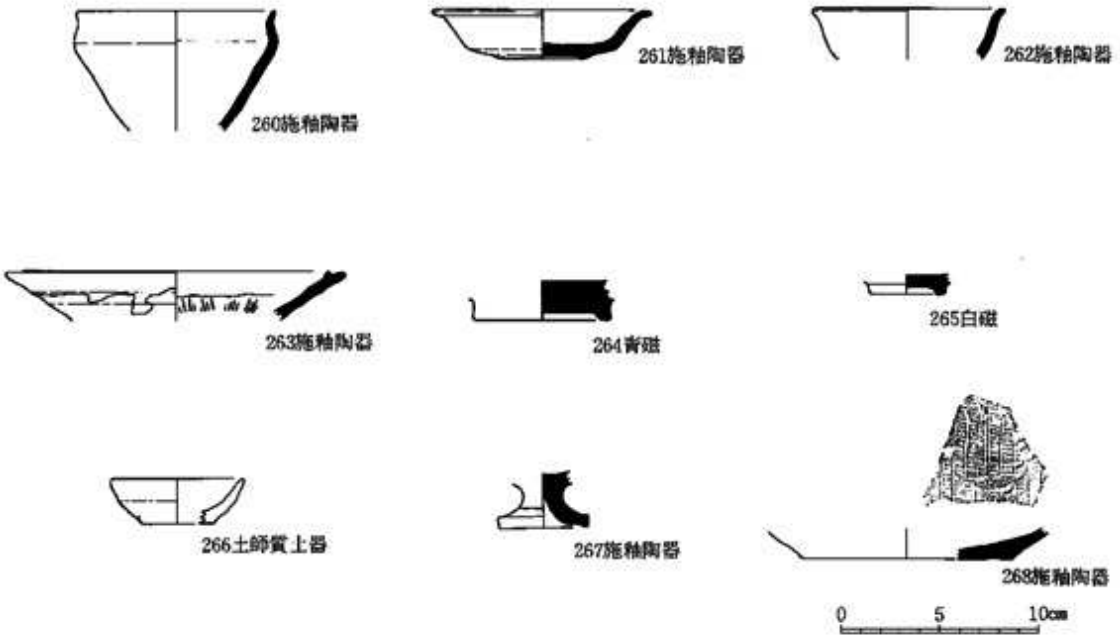
第57図　出土土器(19)



排土



第58図　出土土器(20)


260施釉陶器
261施釉陶器
262施釉陶器
263施釉陶器
264青磁
265白磁
266土師質土器
267施釉陶器
268施釉陶器
0
5
10cm

第59図　出土土器(21)

第5表

SK IV　出土土器観察表

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
1	1住	須恵器	甕C	12			1／6	灰	灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ、ゆがみ大		7
2	〃	土師器	坏C or 椀A	13.8			1／8	黒	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理		5
3	〃	土師器	坏C or 椀A	14.0			1／6	灰褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理		3
4	〃	須恵器	甕C	14.2			1／8	灰・暗灰	灰	ロクロナデ、口縁端部ヨコナデ		9
5	〃	須恵器	坏C		9.0		(1／4)	灰	灰	ロクロナデ、底部ヘラケズリのち、付高台のちナデ、ゆがみ大		8
6	〃	土師器	甑?	16.0			1／6	橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、胴部外面ハケメ		1
7	〃	土師器	鉢	22.8			1／8	黄褐	暗橙褐	ロクロナデ、体部内面ミガキ、ロクロナデ痕明瞭		2
8	〃	土師器	鉢(台付)	38.7			1／12	橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、ロクロ痕不明瞭、口縁ヨコナデ		4
9	〃	土師器	鉢(台付)	38.6			1／24	黄褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	内面、口縁一部スス付着	6
10	2住	施釉陶器	天目茶碗		52.0		(完)	淡黄		ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ	施釉	5
11	〃	施釉陶器	天目茶碗	11.4	4.0	6.1	完	茶褐	茶褐	ロクロナデ、体部下端回転ヘラケズリ、底部ケズリ出し高台	施釉	3
12	〃	施釉陶器	天目茶碗	13.0			1／6	黄灰	黄灰	ロクロナデ、口縁部内彎、体部下端回転ヘラケズリ、高台部分欠損	釉厚くガラス状、細かいヒビ割れ	4
13	〃	土師器	甕A		9.2		1／2	暗褐	灰炭褐	内面、胴部外面雑なナデ、底部木葉の圧痕	粘土積上げ痕、混入品(?)	6
14	〃	内耳土器	内耳鍋	29.6			1／20	暗褐	橙褐	ロクロナデ	耳部内面黒斑	2
15	〃	内耳土器	内耳鍋	27.4			1／12	暗褐	橙褐・黒褐	ロクロナデ、耳部外面指圧痕	内面黒斑、外面炭化物付着	1
16	3住	土師質土器	皿	7.6	5.9	1.6	(2／3)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸きり	灯明皿	1
17	〃	土師器	小形甕C		5.4		一部	暗褐	淡褐	胴部内面ナデ・外面ハケメ、底部ナデ、内外面摩滅顕著		3
18	〃	須恵器	坏D or C	11.0			1／6	淡灰	淡灰	口縁ヨコナデ、体部内外面ロクロナデ	混入品(?)	2
19	4住	土師器	坏A	10.8			(2／3)	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ		2
20	〃	土師器	坏A	11.8			1／4	橙褐	黒	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ、黒色処理		1
21	〃	土師器	甕A	25.6			一部	暗橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面ナデ指圧痕・外面ナデ		4
22	〃	土師器	小形甕C	13.4			一部	暗橙褐	淡橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面ナデ・外面粗いハケメ(横・斜め方向)	口縁内面板状工具によるナデ痕(?)	3
23	〃	土師器	小形甕C		7.8		(完)	暗褐	暗褐～淡橙褐	頸部・体部内外面ナデ、内面上半黒変、底部内面指圧痕・外面ナデ		5
24	〃	土師器	甕A	25.6			1／2	淡橙褐	淡橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面粗いハケメ(横方向)・外面粗いハケメ(縦・斜め方向)		6
25	5住	土師器	坏D		6.0		(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、底部回転糸きり		3
26	〃	土師器	坏C	13.4	5.3	4.1	(完)	暗～黄橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸きり、黒色処理		1
27	〃	土師器	坏C or 椀A	15.2			1／8	淡橙褐	暗褐一部黒変	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内外面雑なミガキ(縦方向)		4
28	〃	土師器	坏D	12.6	5.4	4.15	(完)	淡黄褐	淡黄褐一部黒変	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		8
29	〃	土師器	坏D	12.8	5.8	3.8	(1／3)	黄橙褐	黄橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、内外面摩滅		2
30	〃	土師器	坏D	14.8	7.8	4.4	(3／4)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		7
31	〃	土師器	坏D	15.6			1／3	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面摩滅		9
32	〃	土師器	皿A	12.8	6.0	2.4	(完)	暗褐	黒	口縁ヨコナデ、体部内面放射状暗文・外面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		10
33	〃	須恵器	坏E	12.6	5.3	3.7	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	焼成不良	15

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
34	5住	須恵器	壺	26.4			1／6	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	口縁外面自然釉付着	14
35	〃	土師器	皿A	15.7	6.1	3.7	(完)	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り付高台のちナデ		6
36	〃	土師器	坏A	14.5	7.0	5.0	(一部欠)	淡橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ摩滅黒色処理、底部回転糸切り、付高台のちナデ		16
37	〃	土師器	坏A	15.1	6.7	5.0	(完)	淡橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面上半(横方向)下半(放射状)ミガキ、底部付高台のちナデ		17
38	〃	土師器	小形甕E	12.6			1／8	暗橙褐	暗褐	口縁ヨコナデ、内外面カキメ、胴部内面ナデ・外面カキメ		5
39	〃	土師器	鉢	12.6			1／4	暗褐	黒	口縁ヨコナデ、体部内外面ナデ、黒色処理	外面沈線(?)	12
40	〃	須恵器	甕		11.0		(一部)	暗灰	黄灰	胴部内面板状工具によるナデ・外面タタキメ下端ケズリのちナデ、底部ナデ		11
41	〃	内耳土器	内耳鍋		27.8		(一部)	暗褐	暗褐	胴部内外面ロクロナデ、底部ヘラケズリ	混入品(?)	13
42	6住	土師器	(高)坏	12.4			1／6	橙褐	黒	口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ黒色処理・外面ナデ(?)内外面摩滅		11
43	〃	土師器	坏D	19.4			1／6	橙褐	橙褐	ロクロナデ(?)、口縁ヨコナデ、器面摩滅		12
44	〃	土師器	坏A		7.4		(完)	暗褐	黒	体部内面暗文・黒色処理、外面ナデのちミガキ		10
45	〃	須恵器	蓋	10.3		2.8	完	暗青灰	暗灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリのちつまみ、端部ヨコナデ		26
46	〃	須恵器	坏B	12.4	9.2	4.0	1／3	暗黄灰	暗黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下端ナデ、底部ヘラ切り未調整		4
47	〃	須恵器	坏B	14.6	8.2	4.3	(完)	暗黄灰	暗黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部はヘラ切りのちナデ、器形のゆがみあり		3
48	〃	須恵器	坏B	10.8	8.4	3.9	(完)	茶～茶灰	茶灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ		25
49	〃	須恵器	坏B	11.4	6.4	4.5	(完)	暗～黄灰	黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切りのち雑なナデ		2
50	〃	須恵器	坏B	11.9	6.0	4.0	(3／4)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り		1
51	〃	須恵器	坏B	10.6	7.6	5.1	1／2	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ		24
52	〃	須恵器	甕	18.6			1／6	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		7
53	〃	須恵器	高坏	13.6			1／6	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、坏部外面下半回転ヘラケズリ、脚部ロクロナデ		5
54	〃	須恵器	壺	25.6	14.6	6.75	(完)高台1/3	黄灰	黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半および底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		6
55	〃	土師器	甕		8.6		(3/4)	暗褐	暗橙褐	内面板状工具によるナデ痕、胴部外面ナデ、明瞭な木葉圧痕		13
56	〃	土師器	小形甕C	12.2			1／3	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部内面ナデ・外面ナデ(?)		8
57	〃	須恵器	高坏	14.6	10.4	12.2	1／2	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、坏部外面下半回転ヘラケズリ、脚部ロクロナデ、脚端部ヨコナデ		27
58	〃	土師器	小形甕C		7.1		(一部欠)	暗褐	暗橙褐	胴部内面雑なナデ(一部板状工具使用)外面雑なナデ指圧痕あり、木葉圧痕		9
59	〃	土師器	小形甕C	14.2	7.6	16.0	(完)	暗～暗橙褐	暗～暗橙褐(一部黒変)	口縁ヨコナデ、内面ハケメ、胴部内面ナデ・外面ハケメ(縦方向)下端(横方向)、木葉圧痕		17
60	〃	土師器	小形甕	16.0	8.6	17.3	(完)	暗赤橙褐	暗赤橙褐	口縁ヨコナデ、内面ハケメ、胴部内面板状工具によるナデ・外面摩滅により調整不明、木葉圧痕		16
61	〃	土師器	甕A		7.0		(完)	暗赤褐	暗褐	内面板状工具によるナデ痕、胴部外面ナデ(?)、器面摩滅、木葉圧痕		18
62	〃	土師器	甕A		7.4		(完)	暗橙褐	暗橙褐	内面板状工具によるナデ痕、胴部外面一部板状工具によるナデ痕、摩滅により不明瞭、木葉圧痕		19
63	〃	土師器	甕A'	31.8			1／8	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面ナデ・外面ハケメ、内外面摩滅によりハケ痕わずか		21
64	〃	土師器	甕A'	22.0			1／6	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面ナデ・外面ハケメ、口縁ゆがみ有り		14
65	〃	土師器	甕A	24.4			1／8	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ナデ		20
66	〃	土師器	甕A'	24.4			1／3	暗橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面板状工具によるナデ、上端指圧痕、外面ハケメ		15

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
67	6住	土師器	甕A′		10.4		(一部欠)	暗黄褐	暗黄褐	内面板状工具によるナデ、胴部外面摩滅細いハケメ・下端ナデ(横方向)、木葉圧痕		22
68	〃	土師器	甕A′	23.6			1/6	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面板状工具による密なナデ痕・外面目の細いていねいなハケ		23
69	7住	土師器	小形甕C		5.2		完	暗褐	暗褐	内面板状工具によるナデ痕、胴部外面ナデ(?)摩滅顕著、木葉圧痕		2
70	〃	土師器	甕A		8.0		(1/4)	暗褐	淡橙褐	内面板状工具によるナデ、胴部外面ナデ、木葉圧痕		3
71	〃	須恵器	坏B	12.8	6.4	3.7	(1/3)	暗黄灰	暗黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り未調整	焼成不良	1
72	〃	須恵器	壺	43.0			1/4	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口頸部外面波状文あり		4
73	8住	須恵器	蓋	15.4			1/4	淡緑灰	淡灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリのちつまみ、端部ヨコナデ	美濃須衛(?)	20
74	〃	須恵器	坏E(?)	13.6	4.8	4.1	(完)	淡黄褐	暗~淡黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り(?)	焼成不良	3
75	〃	須恵器	坏E(?)	13.5	6.3	4.2	(一部欠)	暗~淡褐	暗~淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、器形は片側傾斜	彩色(?)	4
76	〃	須恵器	横瓶	11.0			一部	淡灰	淡灰	口縁ヨコナデ、頸部内外面ロクロナデ	自然釉	18
77	〃	須恵器	坏D	12.6	6.0	3.8	(一部欠)	茶褐	暗茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、外面中央から底部へ糸切り痕あり		5
78	〃	土師器	坏C	13.2	6.4	3.8	(3/4)	淡橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ・黒色処理、底部回転糸切り		8
79	〃	土師器	坏C	13.3	4.6	4.5	(完)	淡橙褐	暗~淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		23
80	〃	土師器	坏C	13.0	4.9	4.1	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		22
81	〃	土師器	埦A	14.5	7.5	5.0	(完)	淡橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(?)黒色処理、底部回転糸切り、付高台のちナデ		9
82	〃	土師器	埦B	14.6	6.8	4.85	(完)	淡黄~暗褐	黒~黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(?)、底部回転糸切り、付高台のちナデ		6
83	〃	土師器	埦B	14.9	6.4	4.4	(完)	茶褐	暗茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り		21
84	〃	土師器	埦B	15.2	6.0	4.9	(完)	淡橙褐	暗赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(?)、底部回転糸切り(?)、付高台のちナデ	体部内面朱彩	7
85	〃	灰釉陶器	碗		6.6		(2/3)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉刷毛塗り、外面一部に墨書	12
86	〃	灰釉陶器	碗	14.6			1/4	乳灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	釉刷毛塗り、半透明、淡黄緑色	13
87	〃	土師器	小形甕E		6.2		(完)	暗~淡褐	淡褐	内面ロクロナデ、胴部外面カキメ(中央部摩滅顕著)、底部回転糸切り		1
88	〃	土師器	小形甕E	10.6	6.2	9.9	(完)	赤~橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、口頸部内面カキメ、胴部内面ロクロナデ・外面カキメ、底部回転糸切り		2
89	〃	灰釉陶器	碗	16.5	7.8	5.3	(完)	乳灰	乳灰	口縁ヨコナデ、体部内面および外面上半ロクロナデ・下半回転ヘラケズリのちナデ、底部付高台のちナデ	釉刷毛塗り、底部墨書	24
90	〃	土師器	小形甕E	12.4	6.2	14.4	(完)	橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内面ロクロナデ、明瞭なロクロ目・外面カキメ・摩滅、底部回転糸切り		11
91	〃	土師器	甕E	21.2			1/5	暗橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内面ナデ、指圧痕・外面ハケメ		14
92	〃	土師器	小形甕E	14.6	7.6	14.9	(完)	淡~橙褐	淡~橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内面ロクロナデ・外面カキメ、底部静止糸切り		10
93	〃	土師器	甕E	24.0			1/6	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内外面ロクロナデ、外面一部ハケメ		15
94	〃	土師器	甕E	22.8			1/4	暗黄褐	暗黄褐	口縁ヨコナデ、口縁内面および口頸部明瞭なカキメ、胴部内面指圧痕・外面ハケメ		16
95	〃	土師器	甕E	23.6			1/4	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内外面上半ロクロナデ、内面下半ナデ(縦方向)・外面ハケメ		17
96	〃	土師器	甕E	27.2	9.6	25.3	1/2	暗~暗橙褐	暗~暗橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内面ナデ、指圧痕あり・外面ハケメ、外面下端および底部雑なナデ		19
97	9住	須恵器	坏E	12.4	4.6	3.7	1/4	灰白~灰	灰白~灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、やや雑な調整、摩滅顕著	焼成不良	1
98	〃	須恵器	坏E	12.2	5.2	3.8	完	灰白、黒	灰白、黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、ロクロナデ痕明瞭、やや雑な調整、摩滅顕著	焼成不良	2
99	〃	土師器	甕A	12.6			9/10	暗茶褐~黒	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面ミガキ・黒色処理、底部回転糸切り付高台のちナデ、高台部分欠損		3

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
100	9住	土師器	坏C	13.6			1／4	淡黄褐～黒	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面ミガキ・黒色処理、摩滅顕著		5
101	〃	土師器	坏C	15.8	6.8	6.0	(1／10)	黄褐～黒	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面ミガキ・黒色処理、摩滅顕著、底部回転糸切り		4
102	〃	土師器	椀A		4.8		(3／4)	暗黄褐	黒	ロクロナデ、内面黒色処理、底部回転糸切りのち付高台のちロクロナデ		11
103	〃	土師器	椀A		7.4		(完)	黄褐	黒	ロクロナデ、内面黒色処理・放射状暗文、底部回転糸切りのち付高台のちロクロナデ		9
104	〃	土師器	甕E	16.4			1／4	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部外面ハケメ、内外摩滅顕著		8
105	〃	土師器	甕E		9.4		(1／4)	暗橙褐～暗褐	暗橙褐～暗褐	内面不定方向ナデ、外面ハケメ	内面炭化物付着	6
106	〃	土師器	甕E		10.0		(1／4)	暗灰褐	黄褐	内面不定方向ナデ、外面ハケメ、底部と胴部の接合痕あり		10
107	10住	土師器	坏A	13.4	2.0	4.5	(3／4)	暗橙褐	黒	ロクロナデ、体部内面ミガキ・黒色処理、外面摩滅顕著のため調整不明瞭		1
108	11住	須恵器	坏D	12.4	5.2	4.0	(完)	青灰	淡青灰	ロクロナデ、ロクロナデ痕明瞭、口縁ヨコナデ		1
109	〃	須恵器	坏D	13.4	6.0	4.4	1／10	淡黒灰	薄青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部調整不明		2
110	〃	須恵器	坏D	11.6			1／16	灰褐～青灰	灰褐	ロクロナデ、ロクロナデ痕明瞭、口縁ヨコナデ		3
111	〃	須恵器	壺類底	17.0			1／10	灰褐	淡青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、頸部と体部の接合痕あり		4
112	12住	土師器	坏A	12.6	4.0	3.2	(4／5)	暗橙褐～黒	暗橙褐～黒	口縁ヨコナデのちミガキ、体部内面ミガキ・外面ケズリのちミガキ、摩滅顕著	口縁下有段、外面一部黒変あり	6
113	〃	土師器	甕A		7.8		(3／4)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、胴部外面下端、底部との接合痕あり		8
114	〃	須恵器	坏B	9.0	8.2	3.4	(3／5)	青灰	淡青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、重ね焼き痕跡あり	外面一部自然釉付着	1
115	〃	土師器	坏A	14.4			1／3	暗黄褐	黒灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面黒色処理		7
116	〃	土師器	高坏	15.2			坏部(3／4)	黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面黒色処理、摩滅顕著のため調整不明瞭、脚部欠損		9
117	〃	須恵器	短頸壺	7.6			1／6	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、ていねいな調整	南壁	5
118	〃	土師器	甕A	10.4			1／5	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、胴部内面ミガキ（横方向）・外面ミガキ（?）、摩滅顕著		2
119	〃	須恵器	盤鉢	20.8			1／2	灰白	灰白	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内面強いナデ痕の沈線、全面ロクロナデ痕明瞭		4
120	〃	須恵器	盤鉢		8.2		(完)	青灰	淡青灰	ロクロナデ、胴部外面下端不定方向ユビナデ、底部ハケメ		3
121	13住	須恵器	蓋	12.2			1／10	青灰	青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、重ね焼き痕（?）、天井部回転ヘラケズリ		22
122	〃	須恵器	蓋	14.0			一部	暗紫灰	暗紫灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ		23
123	〃	須恵器	坏C		9.4		(1／4)	青灰	青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		21
124	〃	須恵器	坏E	13.6	5.4	3.9	(完)	暗～橙褐	暗～橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、内外面摩滅顕著		5
125	〃	須恵器	坏C	13.2	6.2	4.1	(1／3)	黒～灰	黒～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、内外面摩滅顕著	焼成不良	3
126	〃	須恵器	坏E	14.0	5.8	4.1	(完)	黒～灰	黒～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	焼成不良	2
127	〃	土師器	坏C	13.6	6.2	4.4	1／2	暗橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、底部回転糸切り		1
128	〃	土師器	坏C	12.6	5.1	4.4	(完)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、底部回転糸切り		4
129	〃	土師器	椀A	15.4	7.8	5.2	(1／2)	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ内面ミガキ（横方向）、体部内面ミガキ（縦方向）摩滅、底部付高台のちナデ	外面墨書	7
130	〃	土師器	坏D	12.6	6.0	3.85	(1／2)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、外面摩滅		9
131	〃	土師器	坏D	15.0			1／4	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ		8
132	〃	土師器	坏D	17.2	6.6	6.0	1／8	褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ（?）、底部回転糸切り		6

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底径)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
133	13住	灰釉陶器	碗	16.3	7.4	4.7	1／6	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下端回転ヘラケズリのちナデ、底部付高台のちナデ	内外面施釉、漬け掛け	16
134	〃	灰釉陶器	瓶		9.2		(2/3)	淡灰	淡灰	ロクロナデ(明瞭なロクロメ)、体部外面下部および底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	底部外面ヘラ記号あり	20
135	〃	灰釉陶器	碗		7.1		(完)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、重ね焼き痕		19
136	〃	灰釉陶器	皿	14.8			1／5	乳灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、ゆがみ大、薄手	内外面施釉	18
137	〃	灰釉陶器	碗	15.0			1／6	淡灰	淡灰(釉薄緑)	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、胴部下半回転ヘラケズリ	内外面施釉	17
138	〃	土師器	小形甕E	9.6			1／6	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ・内面ナデ、胴部内面ロクロナデ・外面ナデ、摩滅		13
139	〃	土師器	小形甕E	12.8			1／6	暗橙褐	暗褐	口縁ヨコナデ・内面カキメ、胴部内面板状工具によるナデ・外面ナデ、摩滅		12
140	〃	土師器	小形甕E		6.0		(完)	暗橙褐	暗褐	ロクロナデ、底部回転糸切り		10
141	〃	土師器	甕E	25.0			一部	淡橙褐	暗褐	口縁ヨコナデ、口頸部内面カキメ、胴部外面ハケメ(?)、摩滅のため不明瞭		15
142	〃	土師器	甕E		8.8		(1/4)	暗褐	暗褐	内面板状工具によるナデ痕、胴部外面ハケメ(縦方向)、輪積み痕、底部ナデ		11
143	〃	土師器	小形甕E		6.0		(一部)	橙褐	暗褐	内面ロクロナデ、胴部外面カキメ、底部回転糸切り		14
144	〃	土師器	鉢(?)	46.4	9.6	16.4	(2／3)	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、体部内面ナデ・外面ハケメ、外面下端および底部ナデ	内面白っぽい炭化物付着	28
145	〃	須恵器	甕	20.6			1／6	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	口縁内面自然釉付着	26
146	〃	須恵器	甕	27.4			1／8	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	口縁内面・端部下自然釉付着	25
147	〃	須恵器	広口壺	20.0			一部	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		24
148	〃	須恵器	広口壺	24.2			一部	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		27
149	14住	灰釉陶器	碗	14.6	7.0	4.15	(2／3)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	外面施釉、漬け掛け	11
150	〃	土師器	坏D	13.6	6.7	4.0	(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
151	〃	土師器	坏D	16.0			1／4	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、一部工具痕		1
152	〃	灰釉陶器	碗		7.6		(2／3)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、体部外面下部および底部回転ヘラケズリのちナデ、付高台のちナデ	体部内面下部および外面一部施釉、漬け掛け	12
153	〃	須恵器	坏C		9.6		(1／4)	青灰	青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		9
154	〃	土師器	坏C	13.6	6.1	3.5	(完)	黒～橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(上半横方向、下半放射状)、黒色処理、底部回転糸切り		6
155	〃	灰釉陶器	碗		7.6		(一部欠)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	外面釉付着	10
156	ピット364	土師器	坏C	12.7	5.8	4.3	完	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、摩滅、底部回転糸切り		3
157	〃	土師器	坏C	13.6	6.2	3.5	(完)	暗褐～橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(横方向)、黒色処理、底部回転糸切り		7
158	〃	土師器	坏C	13.5	5.7	3.7	1／3	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、摩滅顕著、底部回転糸切り		8
159	第2検出面	土師器	坏C	13.2	6.0	3.9	(完)	暗黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、摩滅、底部回転糸切り		2
160	〃	土師器	坏C	13.2	6.2	3.6	(完)	暗橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、底部回転糸切り		5
161	〃	土師器	甕E		9.4			橙褐	橙褐	胴部内面ナデ指圧痕、下部および外面ハケメ(縦方向)、底部内面ハケメ・外面ナデ		13
162	15住	須恵器	坏D		5.8		(2／3)	青～黄灰	黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		4
163	〃	須恵器	坏D	11.2			1／6	青灰	青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		6
164	〃	須恵器	坏D	14.6			1／8	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、内外面摩滅顕著		7
165	〃	須恵器	壺		7.2		(3／4)	暗～淡灰	淡灰	ロクロナデ、体部外面下部回転ヘラケズリ、底部回転糸切り		3

No	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考		実測No.
166	15住	須恵器	坏D	12.8	6.2	3.25	(1/2)	青灰	青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り			2
167	〃	須恵器	坏D	13.2	6.0	3.2	(1/2)	青灰	青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り			1
168	〃	土師器	坏C	14.6			1/8	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理			5
169	16住	土師器	坏A	11.2	2.0	3.3	1/4	黒～黒褐	黒	口縁強いヨコナデ、体部内外面ミガキ、内面黒色処理、外面中央部強いナデによるくぼみ、底部手持ちヘラケズリのちミガキ			1
170	〃	須恵器	坏B	13.4	6.0	3.9	(1/2)	灰白	灰白～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部摩滅顕著、底部回転ヘラ切り			2
171	〃	須恵器	短頸壺	16.0			1/8	灰白	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、口頸部外面カキメ様の沈線			4
172	〃	須恵器	四耳壺	23.4			1/12	暗青灰～灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ			3
173	17住	土師器	皿A(?)	13.2	5.4	3.5	(完)	灰褐～黄褐	黒灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りのち付高台のちロクロナデ			1
174	〃	灰釉陶器	碗	15.0	6.8	4.3	(完)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面重ね焼き痕、底部回転ヘラケズリのち付高台のちロクロナデ	体部内外面施釉		2
175	〃	土師器	坏C	20.0			1/14	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理			3
176	20住	須恵器	坏D		6.0		(1/2)	淡灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、底部外面反り			1
177	建物址	須恵器	蓋	15.2			1/7	暗灰	黄～淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	外面自然釉	注記No(16建)	6
178	〃	須恵器	坏B	8.8	6.0	3.2	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り未調整		〃 1建	3
179	〃	須恵器	坏BorD	9.8			1/5	黒灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		〃 (16建)	9
180	〃	須恵器	坏E	14.1	6.0	4.0	(完)	白灰(1/2黒変)	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	焼成不良	〃 4建	2
181	〃	須恵器	坏BorD	12.8			1/6	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		〃 9建	10
182	〃	須恵器	坏D	13.0	5.6	3.4	(完)	青灰	青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		〃 14建	7
183	〃	土師器	坏A	11.0	7.0		(1/3)	黒褐	黒褐	口縁強いヨコナデ、体部内外面ミガキ、摩滅		〃 1建	5
184	〃	土師器	坏E	12.0			1/6	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面縦方向細かいミガキ・外面ミガキ(?)	カイ型	〃 6建	4
185	〃	灰釉陶器	碗	15.6			1/4	淡黄緑灰～灰	淡黄緑灰～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部付高台のちナデ	釉漬け掛け	〃 14建	1
186	〃	須恵器	短頸壺		10.6		(1/3)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、肩部外面接合痕、体部外面下回転ヘラケズリ、底部付高台のちナデ	自然釉	〃 6建	8
187	土坑	施釉陶器	皿	9.6			1/6	淡緑	淡緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	施釉	〃 7土坑	11
188	〃	施釉陶器	皿	9.2			1/6	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	施釉	〃 3土坑	12
189	〃	陶器	皿	9.2	5.4	2.9	(2/3)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		〃 40土坑	14
190	〃	土師器	坏C	13.0	5.4	3.5	(2/3)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面黒色処理、底部回転糸切り		〃 63土坑	4
191	〃	土師器	甕A		7.2		(1/2)	淡橙褐	黒	ロクロナデ、体部内面黒色処理、底部回転糸切り、付高台のちナデ		〃 62土坑	5
192	〃	灰釉陶器	碗	10.5	5.4	3.4	(完)	淡黄灰	淡乳緑	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部付高台のちナデ		〃 63土坑	1
193	〃	須恵器	坏D	13.4			1/8	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		〃 64土坑	2
194	〃	須恵器	坏E	12.8	6.2	4.0	(1/3)	淡褐灰	淡褐灰(一部黒変)	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	焼成不良	〃 64土坑	3
195	〃	土師器	小形甕		7.4		(1/2)	赤橙褐	黄褐	胴部内面ナデ・外面横ハケ、底部回転糸切り(?)		〃 63土坑	7
196	〃	土師器	甕E		6.2		(1/4)	暗橙褐	橙褐	胴部内面ナデ(摩滅により不明瞭)・外面ハケメ、底部ナデ		〃 54土坑	6
197	〃	須恵器	広口壺	24.0			1/8	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		〃 60土坑	9
198	〃	縄文?	壺		10.0		(1/5)	黄褐	黒	内外面板状工具によるナデ		〃 62土坑	10

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径〈底部〉	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考		実測No.
199	土坑	内耳土器	内耳鍋	27.4			一部	黒褐	黄褐	胴部ヨタヨナデ、口縁ヨコナデ		注記No.8 土坑	15
200	〃	須恵器	壺		9.8		(一部)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、胴部外面下端部なナデ、接合痕あり、底部板状工具によるナデ		〃 67土坑	8
201	〃	須恵器	鉢	15.2			一部	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面摩滅により不明瞭・下部ケズリ		〃 40土坑	13
202	〃	陶器	擂鉢	26.2			1/4	暗褐	暗黄褐	口縁ヨコナデ、端部調整ゆがみ有り、体部内面ナデ下部沈線・外面ケズリ痕およびナデ		〃 7土坑	17
203	〃	内耳土器	内耳鍋		26.6		(1/6)	黒褐	茶褐	内外面ロクロナデ		〃 7土坑	16
204	ピット	須恵器	蓋	14.0			1/4	黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ	外面自然釉(?)	〃 P277	4
205	〃	土師器	坏C	15.8	7.8	4.5	(1/3)	褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面黒色処理、底部回転糸切り		〃 P267	2
206	〃	土師器	坏D	16.2			1/6	淡橙褐	淡赤褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ		〃 P325 P326	1
207	〃	須恵器	坏D	12.0	6.2	4.5	(1/2)	暗黄～青灰	暗黄～青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		〃 P259	3
208	〃	須恵器	坏D	14.2	6.6	3.9	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内外面ヒダスキ痕（?）、底部回転糸切り		〃 P295	5
209	〃	土師器	小形甕C	14.0	9.2	11.2	(1/3)	橙褐	淡橙褐	口縁ヨコナデ、内面ハケメ、胴部内面ナデ・外面ハケメ（内外面摩滅）、底部ナデ		〃 P297	7
210	〃	土師器	甕AorE		10.4		(1/5)	暗橙褐	橙褐	胴部内面ハケメ痕（摩滅）・外面ハケメ（下部縦方向、下端横方向）・木葉圧痕(?)		〃 P297	6
211	〃	土師器	甕E	21.0			1/6	黄～橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内面ナデ指圧痕（摩滅顕著）・外面ハケメ		〃 P297	8
212	溝	須恵器	坏C	13.4	9.4		(1/3)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		〃 2-2溝	1
213	〃	須恵器	広口壺		7.0		(一部)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、体部外面下端および底部回転ヘラケズリ		〃 3 溝	2
214	〃	弥生(?)	壺		9.6		(1/3)	暗褐	淡黄褐	内外面板状工具によるナデ痕、木葉圧痕		〃 3 溝	3
215	〃	須恵器	蓋	13.2			1/8	茶褐～暗青灰	茶褐～暗青灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ		〃 2-2溝	4
216	〃	内耳土器	内耳鍋	29.0			一部	暗橙褐	橙褐	ナデ、口縁ヨコナデ		〃 2-2溝	5
217	第1検出面	土師器	坏C	14.6			一部	暗～暗橙褐	黒	ロクロナデ、体部内面ミガキ黒色処理			2
218	〃	土師器	皿	12.4	7.2	3.5	1/2	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面黒色処理、底部回転糸切り付高台のちナデ			9
219	〃	土師器	皿A	13.2	7.0	3.5	1/3	橙褐	黒	ロクロナデ、体部内面ミガキ（?）黒色処理、底部付高台のちナデ、内外面摩滅			1
220	〃	灰釉陶器	碗		6.4		(1/2)	灰白	灰白	ロクロナデ、底部内面重ね焼き痕、体部外面下部ヘラケズリ痕、底部回転ヘラケズリのち付高台のちナデ	釉刷毛塗り		14
221	〃	灰釉陶器	碗		7.4		(1/3)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリのち付高台のちナデ			6
222	〃	灰釉陶器	碗		6.6		(1/2)	灰	灰	ロクロナデ、底部内面重ね焼き痕・外面回転糸切りのち付高台のちナデ			15
223	〃	灰釉陶器	碗		7.0		(1/2)	灰白	灰白	ロクロナデ、体部外面下部ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り、付高台のちナデ	内外面施釉、刷毛塗り		11
224	〃	土師器	坏D	14.8			1/8	淡橙褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	内面炭化物（?）付着		12
225	〃	灰釉陶器	碗	18.0			1/8	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	内外面施釉、刷毛塗り		13
226	〃	須恵器	長頸壺	10.4			1/4	淡青灰	淡青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、頸部と体部の接合痕あり			10
227	〃	須恵器	壺	29.8			一部	暗青灰	暗青灰	口縁ヨコナデ、胴部内外面タタキ			7
228	〃	須恵器	蓋	18.4			1/8	暗青灰	淡青灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ			4
229	〃	須恵器	壺		10.0		(1/4)	黒褐	暗紫褐	ロクロナデ、体部外面回転ヘラケズリ、剥離、底部付高台のちナデ			5
230	〃	土師器	甕E		10.4		1/5	橙褐	橙褐	内面ナデ、胴部外面ハケメ、内外面摩滅			3
231	〃	須恵器	瓶		6.4		(完)	灰	白灰	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、肩部ケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	自然釉付着		16

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
232	第1検出面	土師器	甕E	23.2			一部	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、内面カキメ、胴部内面ナデ・外面ハケメ		8
233	検出面北	須恵器	蓋	13.2			1/24	淡青灰	淡青灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ外反、天井部回転ヘラケズリ、つまみ欠損		4
234	〃	須恵器	坏D		6.5		(1/4)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		3
235	〃	須恵器	坏B		5.6		(1/2)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、指紋の痕跡あり		5
236	〃	須恵器	坏	12.4			1/8	暗灰	暗褐灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		6
237	〃	灰釉陶器	碗 or 皿		6.6		(1/2)	灰	灰	ロクロナデ、体部外面下回転ヘラケズリのちナデ、底部回転ヘラ切り、付高台のちナデ	体部内外面施釉、刷毛塗り	1
238	〃	灰釉陶器	碗	14.6			1/12	灰白	灰白	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	全面施釉、刷毛塗り?	2
239	第2検出面	土師器	坏A	12.8			1/6	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、体部内面・外面上半ミガキ、外面下半ケズリ、外面摩滅		9
240	〃	土師器	小形甕or鉢	13.0		8.8	(完)	暗～赤褐	淡～橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内面工具ナデ・外面雑なナデ、底部調整無、外面被熱	底部正置不可	11
241	〃	土師器	小形甕	11.6			1/3	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、口頸内部ハケメ、ゆがみ有り、胴部内面ナデ・外面ハケメ		12
242	〃	須恵器	蓋	15.6		3.6	1/2	暗灰	暗灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ		14
243	〃	須恵器	蓋				つまみ部完	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、つまみ部欠あり	外面自然釉付着、鋼製品模倣(?)	6
244	〃	須恵器	蓋	15.0			1/6	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、端部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ		5
245	〃	須恵器	坏C	14.4	8.1	7.1	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、外面明瞭なロクロメ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		13
246	〃	須恵器	皿(?)	18.4	13.8		1/4	黄橙褐	黄橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部外面ケズリ(?)		7
247	〃	須恵器	坏		5.4		(2/3)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		4
248	〃	土師器	椀B		6.2		(完)	淡橙褐	暗～淡橙褐	ロクロナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り(?)、付高台のちナデ、全面摩滅		8
249	〃	灰釉陶器	碗		7.2		(2/5)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、体部外面下部および底部、回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉、漬け掛け	2
250	〃	灰釉陶器	皿	17.0			1/8	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面、回転ヘラケズリ	釉、刷毛塗り	3
251	〃	灰釉陶器	碗		7.2		(2/3)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉、漬け掛け	1
252	〃	土師器	小形甕C	13.7	5.0	14.4	(完)	暗褐	暗～橙褐	口縁ヨコナデ、内面ハケメ、胴部内面板状工具によるナデ・外面斜縦摩滅、底部ケズリ(?)		10
253	排土	須恵器	瓶	9.4			一部	黄灰	黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		7
254	〃	灰釉陶器	碗		8.0		(1/6)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、体部外面下回転ヘラケズリのちナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	釉、漬け掛け	3
255	〃	施釉陶器	碗	11.2			1/4	淡緑白	淡緑白	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		6
256	〃	須恵器	如意壺	17.8			1/8	暗黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		4
257	〃	須恵器	長頸壺		8.6		(1/3)	暗紫灰	淡紫灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		1
258	〃	土師器	甕 or 鉢		28.2		(1/8)	暗橙褐	暗橙褐	胴部内面ナデ・外面ハケメ、木葉底、内外面摩滅		2
259	〃	施釉陶器	擂鉢	22.4			一部	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		5
260	2溝	施釉陶器	天目茶碗	10.0			1/6			ロクロナデ、口縁ヨコナデ	釉、全面鉄釉(鉄化粧)	4
261	〃	施釉陶器	灰釉丸皿	11.2	4.8	2.5	(1/2)			ロクロナデ、口縁ヨコナデ	釉、淡緑灰色	6
262	66土坑	施釉陶器	天目茶碗	9.8			1/6			ロクロナデ、口縁強いヨコナデ、鉄釉	全面施釉(鉄化粧)	1
263	第1検出面	施釉陶器	卸皿				1/3	淡黄褐～淡黄灰	淡赤褐～淡黄灰	ロクロナデ、口縁内側強いヨコナデ	釉、淡緑灰色、口縁内面小突起、5本単位櫛目	17
264	2溝	施釉陶器	碗		6.8		(1/2)			底部削り出し高台、内面蓮華文を片彫り	青磁碗、釉青緑色	5
265	〃	磁器	白磁(碗)		3.6		(完)			ロクロナデ、底部削り出し高台	釉、白色	9
266	〃	土師器	坏D皿	6.8	3.6	2.3	1/4	淡黄橙	淡黄橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		8
267	第1検出面	施釉陶器	茶碗		4.6					底部ヨコナデ、ロクロナデ調整	オフケ釉	18
268	2溝	施釉陶器	卸皿		10.6		(1/8)			底部回転糸切り、ロクロナデ	内面乳白色釉付着、卸目工具の欠損	7

2) 鉄器

鉄器として22点、他に鉄滓・溶滓などが見られる。鉄器の内訳は、刀子・鋤鍬・紡錘車・苧引鉄・釘・火箸などである。大雑把に見ていく。

刀子3点のうち1のみ形状が分かる。棟部平造り、両関造りである。砥ぎ減りが激しく、関部から、切先にかけて内湾しながら急激に減幅する。本来の身部長よりかなり短くなっており、他は大きさや、断面形状より茎部と想定した。鋤鍬は耳部片のみである。袋部と鉄板の合わせからそれと認めた。鎌は、刈り鎌である。背断面は丸く刃付けもされている。刃部幅の狭いものであろう。紡錘車は、紡輪と紡軸である。紡輪には、直径5㎜程の軸孔もかろうじて見える。苧引鉄としたもの

第6表　　SK IV　鉄器一覧表

	種別	出土遺構	寸法(cm) 長さ	巾	厚さ	重量(g)	備考
1	刀子	第4号住居址	(8.4)	1.1	0.4	(8.2)	茎尻欠失　両関造り　棟部平造り
2.	刀子茎?	第6号住居址	(3.2)	(0.7)	(0.3)	(1.4)	両端欠失
3	刀子茎?	第20号住居址	(4.8)	(1.0)	(0.3)	(3.1)	一方欠失
4	鋤・鍬	第11号住居址	(4.8)	(1.9)	(0.3)	(8.3)	耳部破片
5	鎌	第15号住居址	(3.7)	(3.7)	(0.5)	(8.8)	両端欠失
6	紡輪	第9号建物址		5.6	0.5	(23.4)	完形　紡軸孔径5ミリ
7	紡軸?	第6号住居址	(11.1)	0.9		(13.2)	両端欠失・切損　棒状　断面円形
8	苧引鉄?	第3号住居址	(3.4)	(5.3)	0.2	(11.1)	両端欠失　木質残存　穂摘み鎌か?
9	苧引鉄か鎌	第12号住居址	(1.7)	(4.5)	(0.2)	(4.7)	両端欠失　刃付け有り
10	釘	第2号溝址	2.6	0.6	0.5	3.1	完形　頭部長方形で皿状　飾り釘か?
11	火箸?	第35号土坑	(13.4)	(0.5)	(0.5)	(8.4)	一方欠失　一部ひねり　中世か?
12	不明	第6号住居址	(8.0)	0.7	0.5	(7.5)	両端欠失　湾曲　亀裂著しい
13	不明	第1検出面	(4.7)	(0.2)		(1.6)	両端欠失　細い棒状　断面円形
14	不明	P156	(1.4)	(2.7)	(0.2)	(6.4)	板状
15	不明	第2検出面	(5.1)	(2.0)	(0.4)	(7.8)	一部を残し縁辺欠失　縁辺弧状
16	不明	第2号住居址	(4.4)	0.5	0.4	(2.1)	一方欠失　棒状　断面長方形
17	不明	第5号住居址	(8.2)	(0.6)	(0.5)	(4.3)	一方欠失・切損　棒状　断面長方形
18	不明	第2号溝址	(2.0)	(0.5)	(0.2)	(1.7)	両端欠失　棒状　断面長方形
19	不明	第20号住居址	(2.8)	(0.5)	(0.4)	(3.0)	両端欠失　棒状　断面方形
20	不明	P28	(3.5)	(0.4)	(0.3)	(2.0)	両端欠失　棒状　断面長方形
21	不明	〃	(2.5)	(0.4)	(0.4)	(1.0)	両端欠失
22	不明	P300	(1.7)	(0.5)	(0.4)	(1.1)	両端欠失　棒状　断面方形
	帯金具	第16号住居址					
23~25		第2号住居址	至道元宝　1点、皇宋通宝　1点、天禧通宝（?）1点、開元通宝（?）1点				
26~28		第1号土坑	皇宋通宝　1点、紹聖元宝　1点、他不明　2点				
29		第2号溝址	開元通宝　1点				
		第45号土坑	不明　2点				
		第48号土坑	不明　1点				

は背に木質の残る8と、左右の身幅が異なる9である。両者共、脚部欠損と考えられるが、8は、穂摘み具かもしれない。10は鍛造の角釘である。頭部は折り曲げによるものでなく、長方形の皿を付す、飾り釘を意識したものか。火箸とは棒状の途中に数回の捩じりがあるものをいう。不明品は、11点あり断面が方形、或いは円形で棒状を呈するものを中心として他に板状のもの、縁辺が弧を描くものなどがある。種別の分かるもののうち、遺構により帰属時期を求めるとすると、1・2の刀子、7の紡輪、9の苧引鉄らしきものなどが、奈良時代であり、10の釘、11の火箸が中世の所産となろう。なお鉄滓・溶滓としたものは、第1検出面より853g、2溝より103g、P_{21}より22g、3住より8g、8住より120g、7土坑より25g、8個のピットから計1,734gを得ている。

尚、小片の為図示できなかったが、銅製品として帯金具・錫帯がある。16住検出面の遺物である。

3) 石器、土製品等

石器は石製品も含めて7種37点を、又、土製品として3種5点、他に工芸品を1点図示している。これらを中心に順に見ていく。

臼には2種類あり、1は搗き臼、2は粉挽き臼である。両者共、大破したほんの一部である。凹石は10点あり、6を除きすべて周囲に敲き痕が多く認められる。欠損品6点のうち7を除いた5点（8～12）は刃物で切った如くに破損しており、これが凹の使用、或いは敲きの作業に関わるものかは分からない。13は扁平な石の中央部が非常に滑らかとなっている。砥ぎによるものかもしれない。敲石は20点あり、長さ11.7～18.7㎝、重さ275g～525g程の握りやすい石が13点（16～28）と多く扁平なものも5点ある。前者は両（片）端ないし、両側縁部、或いはそのどちらにも敲きによる剝離がみられる。又、1700gをこえる2点（14・15）は両端の他、体部周囲にもアバタ状の打痕が残っている。なお、29の表裏面には焦げた物質が付着している。敲き痕を残す石器の使用と関係あるものか。石製品に玉が1点ある。ロウ石製で丁寧に加工されている。砥石は2点ある。35は縦断面が菱形を呈し、手持ち砥用である。浮石は1点ある。矢印の部分に抉りがあり、浮子として使用されたものである。

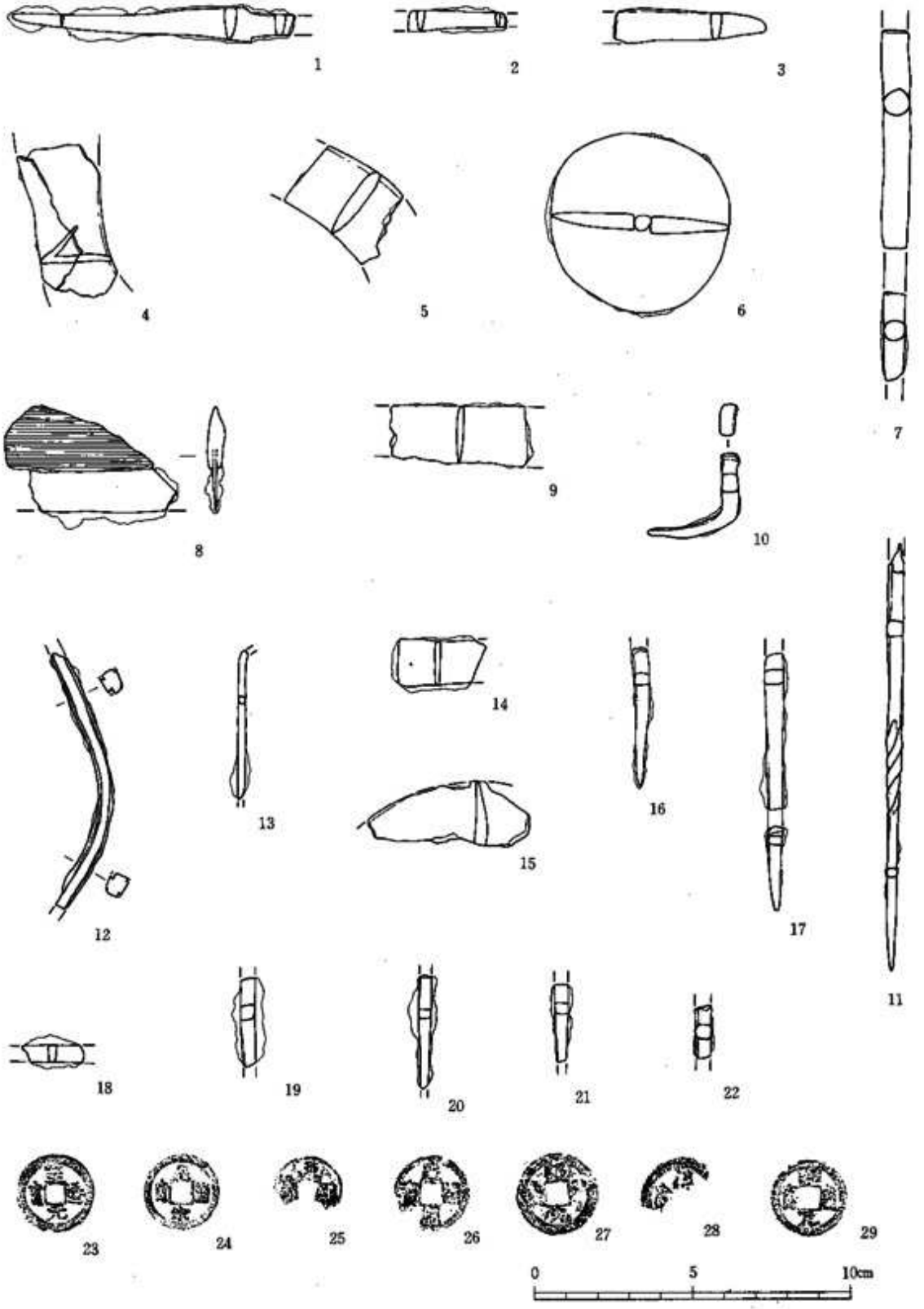
土製品には、まず紡錘車が2点ある。両方とも片半部を欠するが、その破損面に黒色ウルシ状のものが付着する。補修をした痕跡であろうか。土錘は40が1点である。紡錘形で完形品、58gと大きい。羽口は直径を計測できる2点を掲げた。これら以外に6点、計208gあるが、すべて中世生活面からのものである。43は、工芸品の一部である。詳しく見たところ、薄い紙を13枚以上貼り合わせた上に漆を塗り、その上に金粉をかけ絵を描いている。絵は小さな葉の葉脈の図柄が見えるが、大部分は剝落してしまっている。御符のようなものであろうか(註)。或いは刀の三所物の一つ、笄とも思えるが、全容が分からなく決め手を欠く。又、図示していないがP_{80}より未焼成の、6住より焼成済の少量の粘土が出土した。

なお、出土遺構からこれら石器、土製品等の時期を求めると、臼玉・浮石、土錘などが古代で、他のものはすべて中世の所産である（註．森義直氏御教示）。

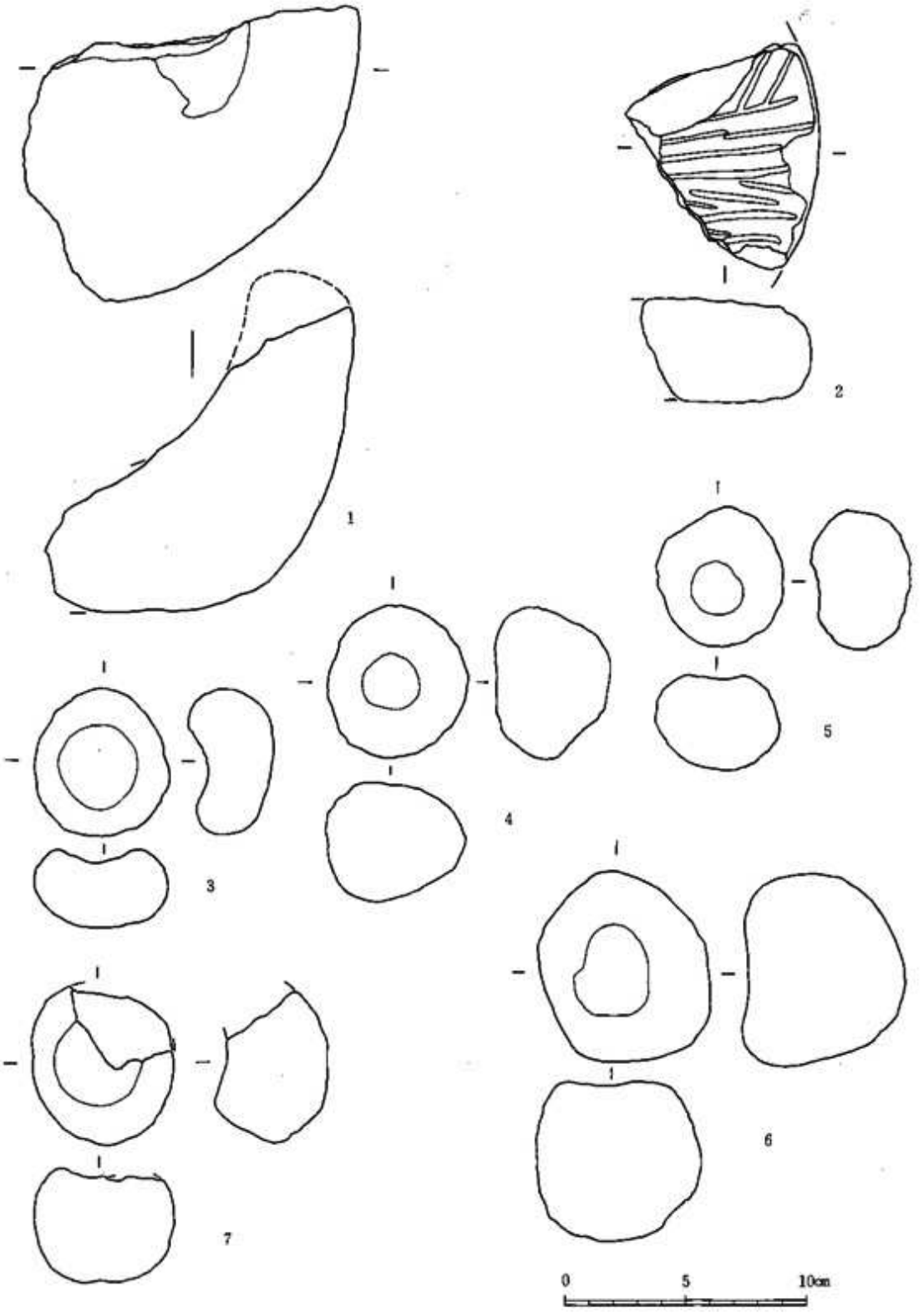
第7表　　SK IV　石器・土製品等一覧表

番号	種別	出土地	寸法(cm) 長さ	最大巾径	孔径	厚さ	重量(g)	石質	備考
1	搗き臼	第2号溝址		(31.2)		(21.6)	6850	多孔質安山岩	
2	粉挽き臼	〃		(29.0)		6.2	1150	安山岩	粉挽き用、下臼
3	凹石	〃	9.0	8.3		5.3	440	輝石安山岩	
4	〃	〃	9.3	8.6		7.2	660	安山岩	
5	〃	〃	8.5	7.7		6.0	485	〃	
6	〃	〃	11.7	10.6		10.2	1770	花崗岩	敲き痕なし
7	〃	〃	(9.7)	8.7		7.0	660	安山岩	
8	〃	〃	(8.2)	12.0		6.5	920	〃	
9	〃	〃	(9.0)	14.0		8.0	910	多孔質安山岩	
10	〃	第1号溝址	(6.2)	10.7		(4.5)	290	安山岩	
11	〃	第2号溝址	(8.2)	(8.0)		6.3	575	砂岩	
12	〃	〃	(11.7)	(6.0)		7.8	700	花崗岩	
13	砥石？	〃	15.9	14.0		3.7	1140	安山岩	
14	敲石	第66号土坑	24.1	10.8		8.4	5550	砂岩	
15	〃	第2号溝址	22.1	8.7		7.3	1710	〃	
16	〃	〃	18.1	5.0		3.0	395	〃	
17	〃	第66号土坑	15.7	5.5		2.7	355	〃	
18	〃	第2号溝址	13.4	5.5		3.2	390	〃	
19	〃	〃	14.9	4.3		3.5	305	〃	
20	〃	〃	18.7	6.1		2.6	525	〃	
21	〃	〃	11.7	5.2		3.7	345	〃	
22	〃	第40号土坑	15.8	5.5		3.6	415	〃	
23	〃	第2号溝址	14.9	4.3		2.9	305	〃	
24	〃	〃	14.2	4.8		3.3	330	凝灰岩	
25	〃	〃	13.7	5.1		4.0	340	砂岩	
26	〃	第66号土坑	14.8	5.9		2.6	370	〃	
27	〃	第2号溝址	13.4	5.1		2.7	275	〃	
28	〃	第66号土坑	13.3	4.7		3.3	320	〃	
29	〃	〃	17.4	10.7		2.9	765	〃	表裏に炭化物付着
30	〃	〃	9.5	10.2		2.0	305	〃	
31	〃	第2号溝址	9.1	11.0		3.1	460	〃	
32	〃	第40号土坑	13.5	9.5		2.7	420	〃	
33	〃	第2号溝址	7.8	12.1		2.1	325	粘板岩	
34	白玉	P225		1.1	0.3	0.8	1.4	ロウ石	
35	砥石	排土	8.9	3.1		3.1	85	粘土質岩	不定形
36	〃	第2号溝址	(9.6)	3.9		2.8	150	〃	
37	浮子	第7号住居址	5.6	5.2		3.3	38	火山岩	
38	紡錘車	第2検出面		(7.5)	(0.9)	4.0	165		
39	〃	第27号土坑		(6.2)		3.7	78		
40	土錘	第13号住居址	7.4	3.1	0.9		58		
41	羽口	第1検出面		(7.6)	(2.1)		52		
42	〃	〃		9.9	2.5		77		他に第1検出面より6点計208g
43	笄か	P38	(3.7)	(1.4)		0.2			

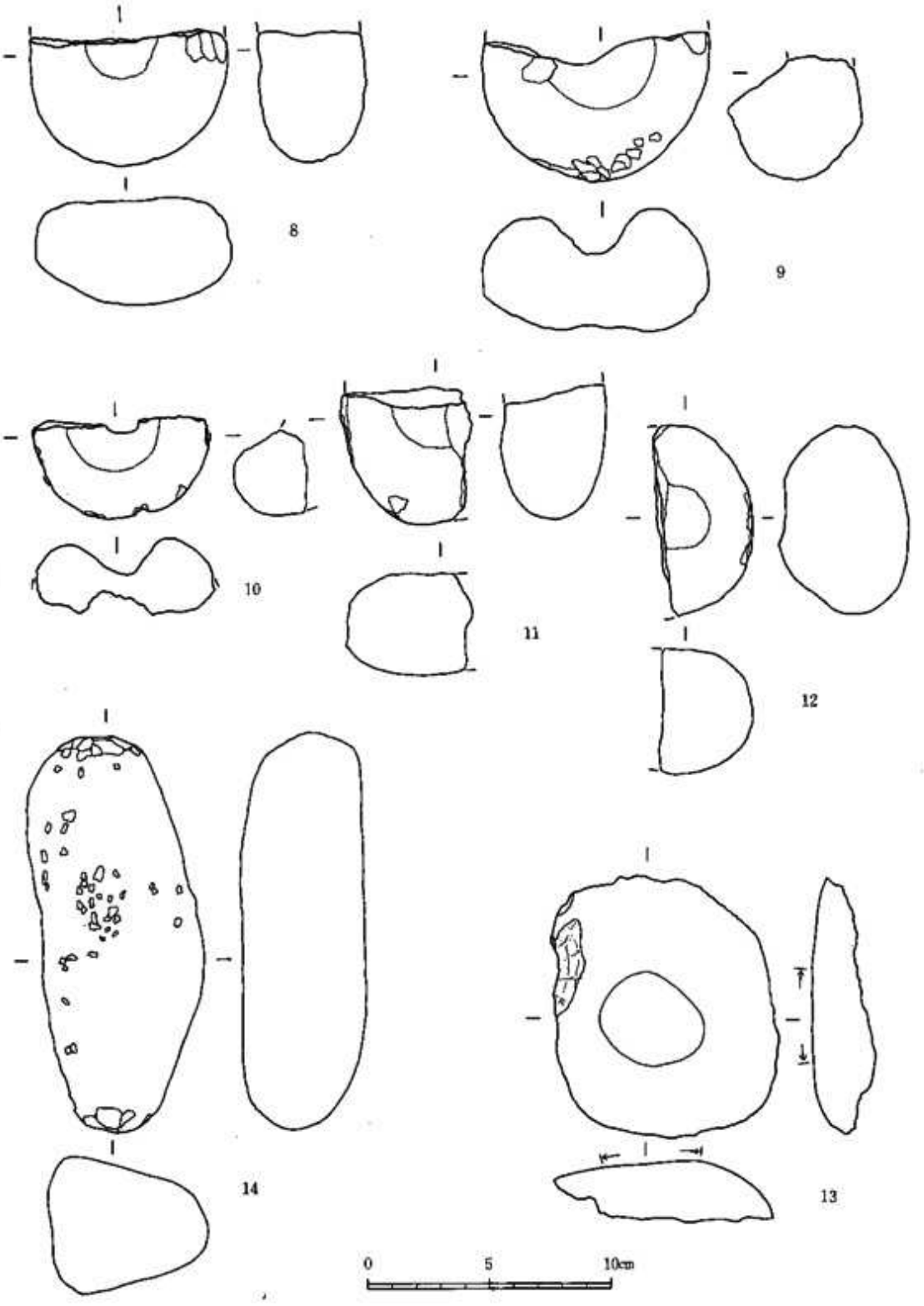
P80より粘土（未錬成）
6住より錬成済粘土


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5
10cm

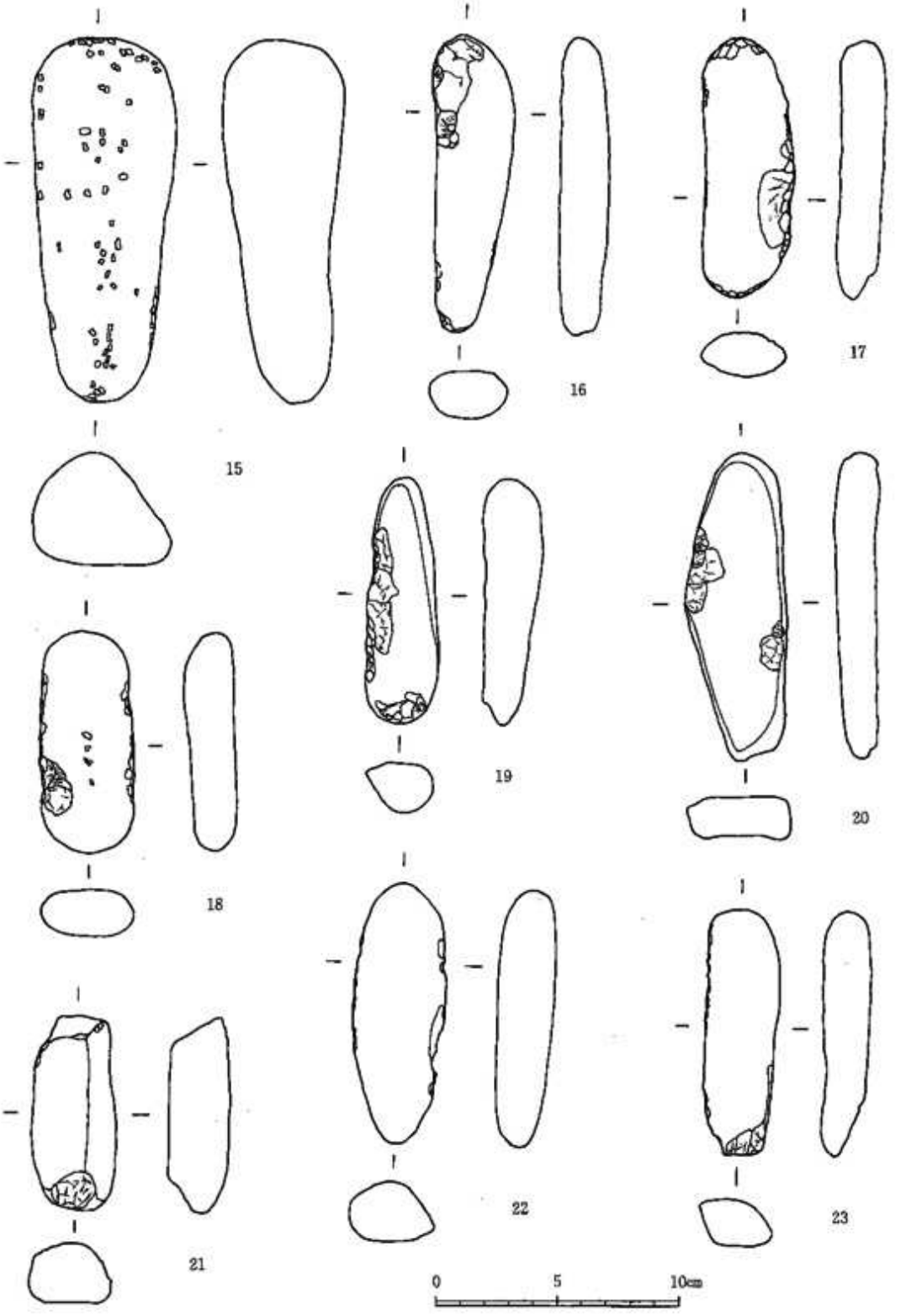
第60図　鉄器・銭



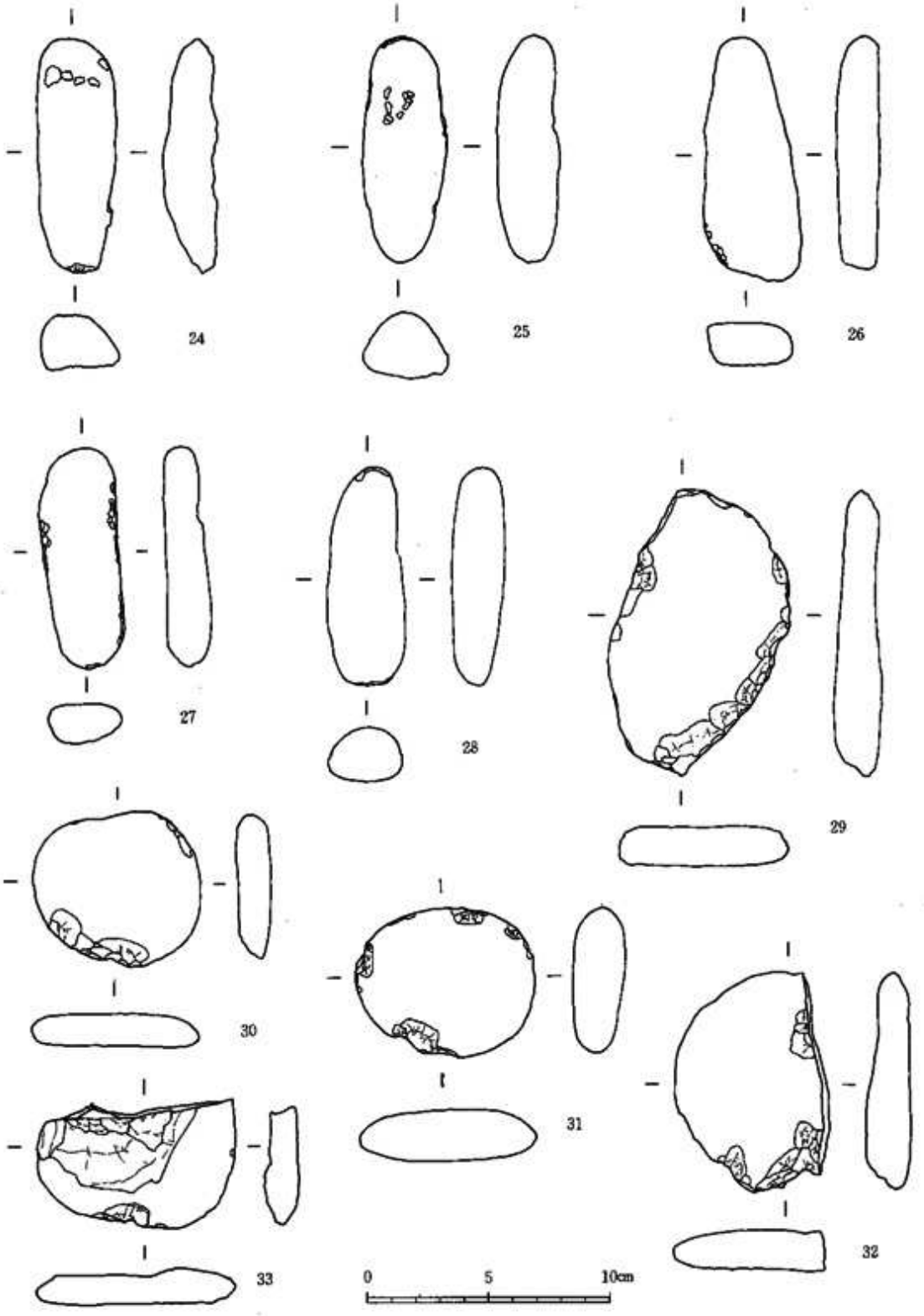
第61図　石器(1)



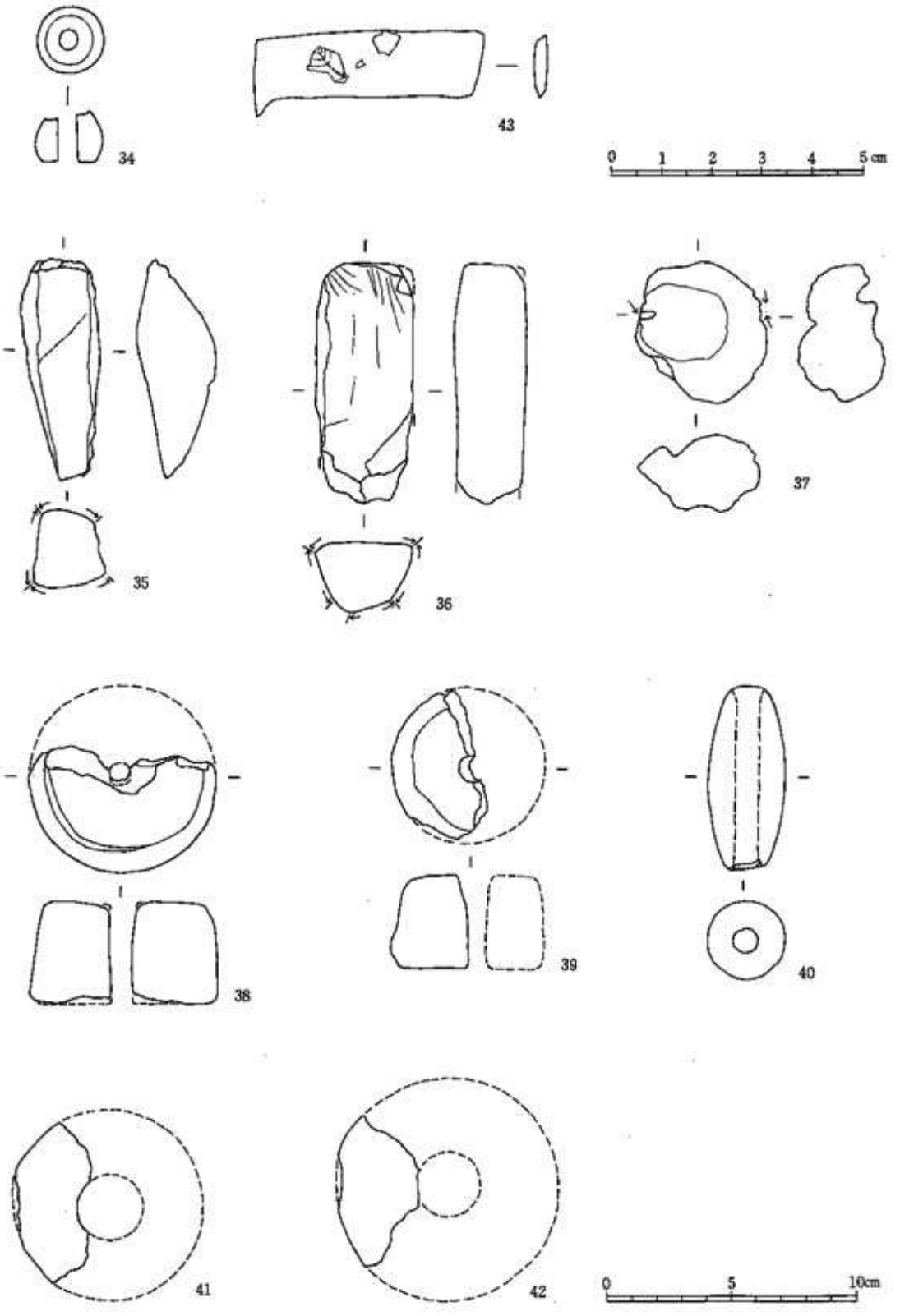
第62図　石器(2)



第63図　石器(3)



第64図　石器(4)



第65図　石器(5)・土製品

4．小結

住居址は20軒を検出したが、２軒は未掘の為18軒を調査している。全容を調査できたもので、カマドの見当たらないのは、中世の２軒を除くと１住及び12住である。１住は軟弱な壁面、起伏が激しい床面、カマド施設にふさわしい壁際を掘り込めた掘り方の様子が、住居を素掘りしたのみで放棄した遺構と考えている。又、覆土上層に多い小片土器は以後、遺物が投棄されたものと思われる。柱穴ないしピットを確認したものは８軒あるが、このうち主柱穴としてとらえられたものは、６住唯１軒である。この６住も建物址のピット等に比べると貧弱なものと言える。カマド施設は、８軒がその位置を確認、又は予想することができた。東壁６軒、西・北壁が各１軒ある。このうち用地外、切り合いによる２軒を除いて６軒より出現した。粘土袖或いは石芯で粘土袖のものが２軒ずつ、他には、石を立てたもの、長い煙道をもち、壁の一部を掘り込み中央を凹ませたものが各１軒である。建物址は16棟のうち、15建までが全容を見せている。10棟の側柱式の構成は２×２間が４棟、３×２間が３棟、３×３間が２棟、１×２間が１棟である。又、総柱式は５棟あり、２×２間が４棟、３×３間が１棟である。桁方向は真北に近く、N－0°－Eから、N－15.5°－Eが14棟で、唯、13建のみが、N－78.5°－Wと、他のものと比べ90°振っている。すぐ南には唯一の北カマドの13住があり、所有関係をうかがわせる。又、N－15.5°－Eの12建は、すぐ南に主軸方向N－20°－Eの12住があり、主軸の振り角からは深いつながりを感じさせる。土坑及び溝についてはそのほとんどが第１検出面にとらえられたものであり、２・３住を含め中世のものが主となっている。これらは、調査地の南半部に集中し、北に、西から東へと流れていた１溝の影響を強く受けている。土坑は、遺物を出土するものが少ない。土器以外のもの等より、火葬墓、土葬墓、上屋を懸けた竪穴までは容易に想像できるが、他の多くは不明である。61坑は壁面に焼土が付着しており遺物等はほとんどないが、土器焼成坑として使用されたものと考えている。溝については特に２溝に注目したい。北に２本の平行する溝があり、東で合流するが、溝の規模からは内側が外側より幅広く深いものであることが分かる。本来は内側の１本が設けられていたが、これを廃絶したのち、新たに外側の溝を設けたものか、或いは外側につけ足した溝であると思われるが明確ではない。

遺物はまず、土器、陶器、磁器類、それから金属器、石器等、炭化物、焼土、骨などもある。土器は食膳具で、全体的に煮沸の甕類が多いようである。又、８・13・14住は灰釉陶器の出土量が目につき、これらの住居址からは灰釉陶器以外も多出している。住居址と建物址を併せ見ると、住居址はII・III、そしてIX～XI期に集中する。建物址は少ない遺物乍らVI期、IX～XI期に偏っていることが分かる。鉄器については完成品は各遺構に散出するが、鉄滓は９建を中心とする半径９ｍ以内にほとんどのものが集中する。小鍛冶があったのだろうと推測する。中世の遺物についてみると２・３住及び、土坑からの、14世紀～16世紀のものを主とする。陶器、磁器などは在地産と見られる。土師質土器と内耳鍋以外は瀬戸、美濃系のものがほとんどで唯１点、京焼風の肥前系施釉陶器が特異なものである。

第2節　北栗遺跡Ⅴ

1．調査の概要

ア）調査方法

調査地を徐々に掘り下げ、3回の検出面を設定した結果、実質調査面積は2950.2 m²である。調査の方法は以下の通りである。

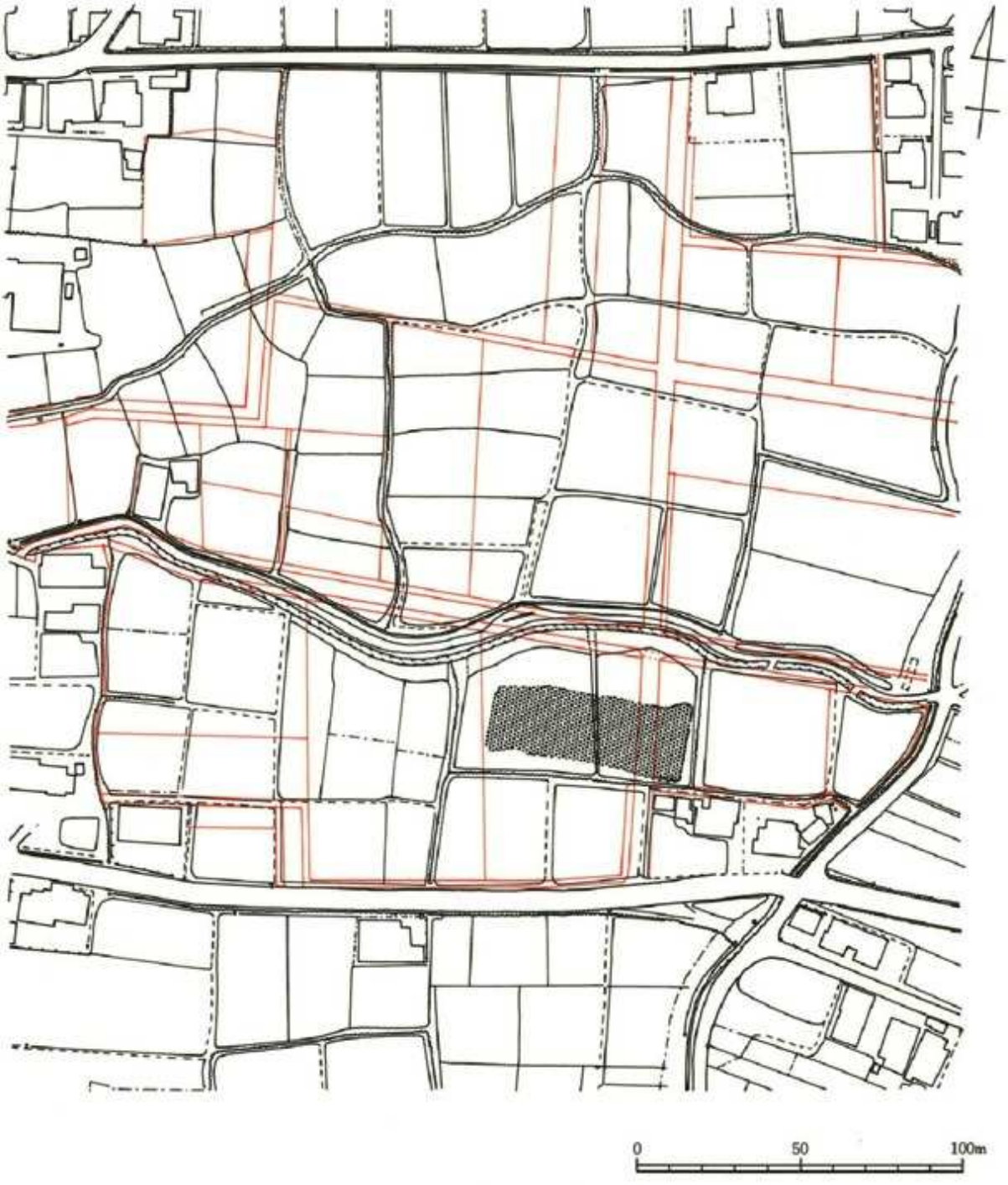
まず重機を使い表土を剝ぎ、先行トレンチを入れながら面的調査に入った。現在の水田面からの深さは、第1検出面までは30～35 cm、第2検出面までは50～55 cm、第3検出面までは65～70 cm 削平したところにある。各検出面までは、重機を使い削平し先行トレンチを入れながら面的調査に入った。遺構の掘り下げは、竪穴住居址・竪穴状遺構は土層観察用の畔を十字に残した後に全掘し、土坑は、半分割して土層を観察した後に全掘した。出土遺物の取り上げは検出面別、地区別、層位別に取り上げた。遺構内の遺物は、必要なものに関して出土地点、層位、標高を記録して取り上げ、必要に応じて図化・写真撮影を行った。測量は、基準杭を設け3 m方眼の基準線で覆い、調査地内の地点を示したり遺構の測量に用いることのできるものとした。

イ）調査の成果

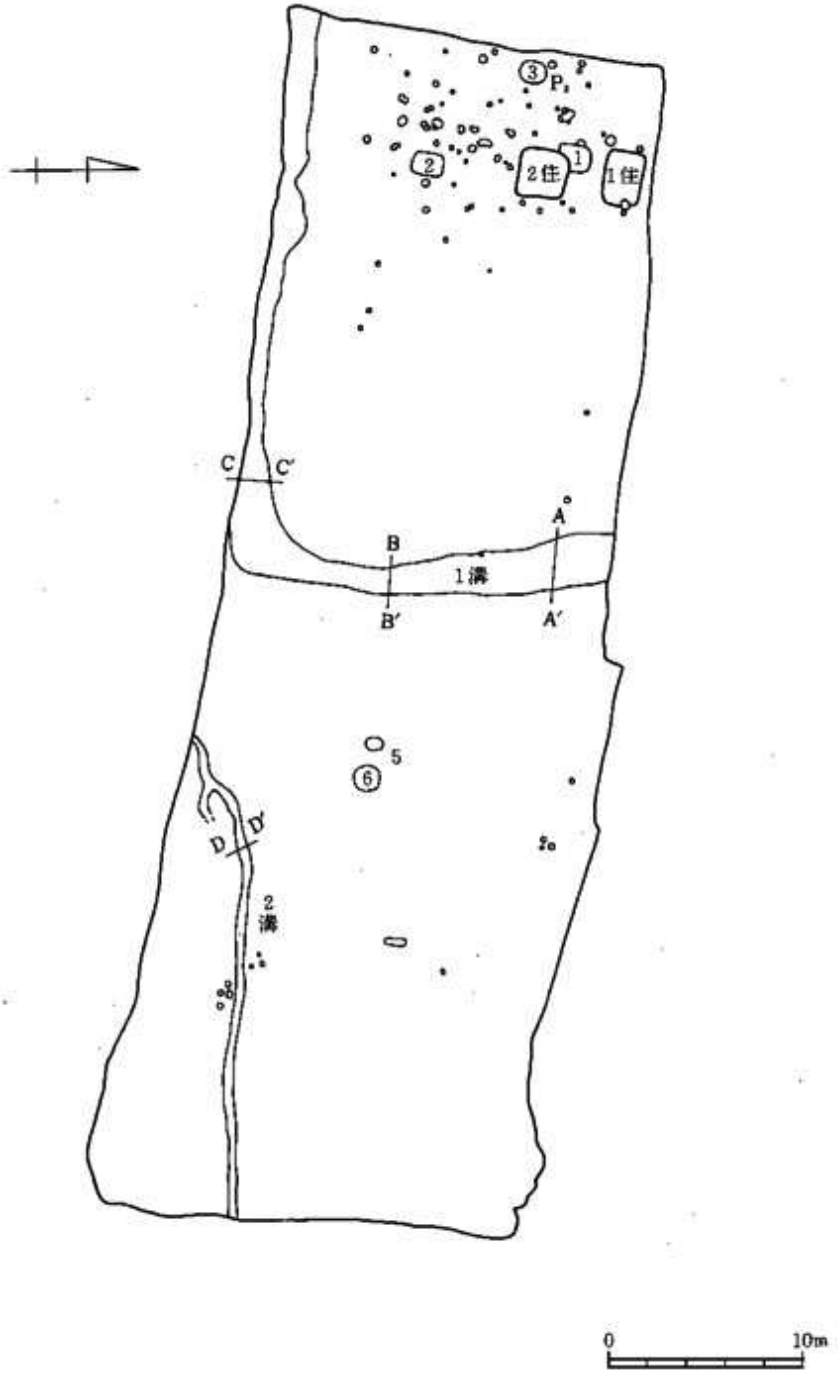
今回の調査で発見された遺構、遺物は以下に記す通りである。

検出された遺構は、竪穴住居址・掘立柱建物址・竪穴状遺構・土坑・ピット・溝址である。竪穴住居址（以下、住居址と略す）は、第1検出面、第2検出面に合計42軒発見された。時期別にみると、古墳時代後半～奈良時代6軒、平安時代前半～中頃21軒、平安時代中頃～後半2軒、中世1軒にそれぞれ帰属する。溝は7本検出されたが、1溝・2溝は中世、3溝～7溝までは古代に所属するものと考えられる。この中で1溝は、第1検出面西側に集中してみられる中世の遺構を区画するように巡り、3溝は、4・8・26住等の住居を区画するように巡っている。時期は異なるが集落を区画する性質の溝が2本検出されている。

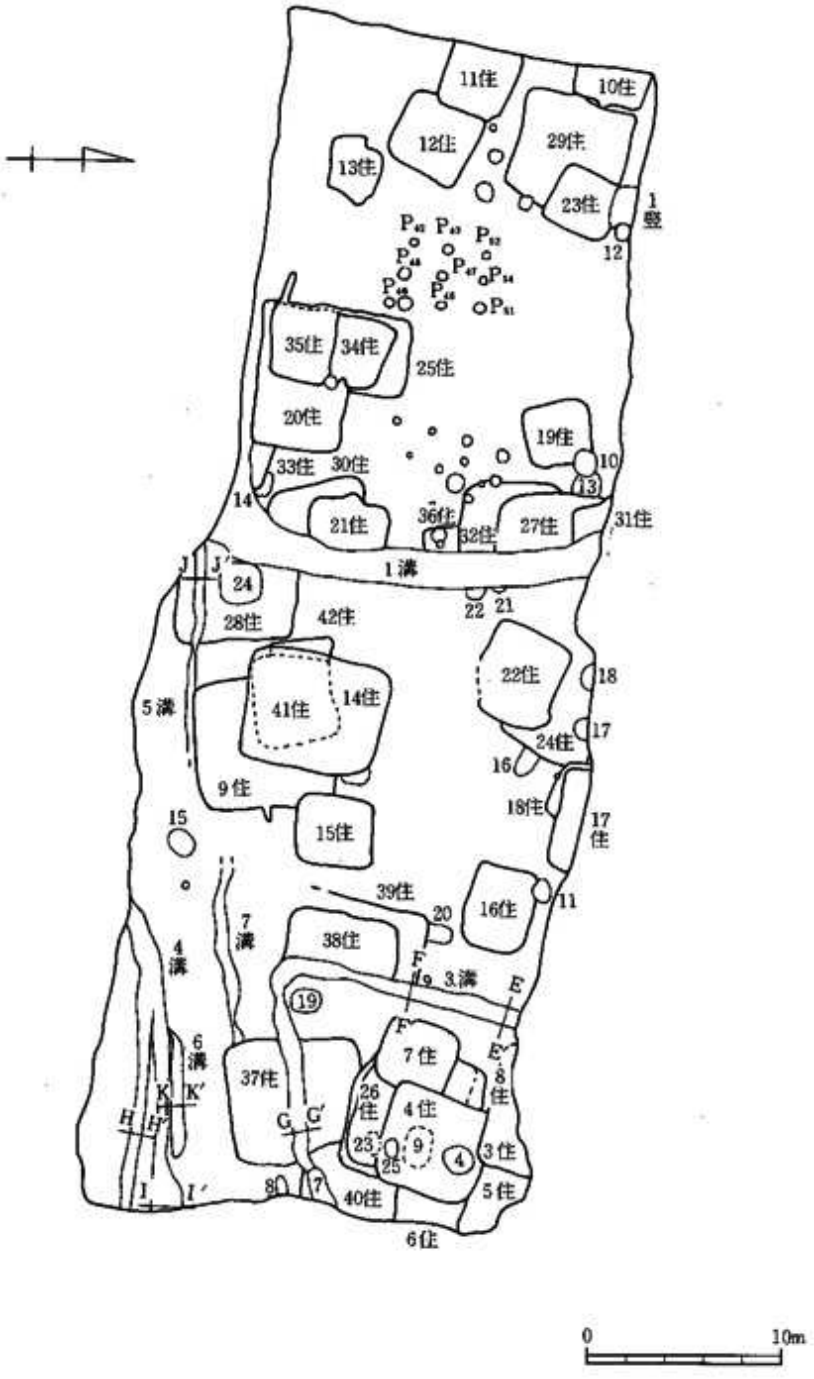
遺物は、土器・石器・土製品・鉄器・銅製品がある。特に4・26・37住からは、多量の遺物が出土している。特に4住からは、朱墨硯、水鳥の描かれた土師器、白磁、多量の鉄器、銅鋺等の特異な遺物が出土し、溝に囲まれた住居という性質を加味すれば当集落の有力者であった可能性がある。また、9・23・25土坑からは多量の土師器小形坏が一括して出土しており、土器廃棄遺構としての性格が考えられる。遺物は、量的にも質的にも良好な資料が得られているが、調査時期が冬期であり、10軒程の切り合いという状況の中で混乱を招いており、一括性には欠けた資料となっている。



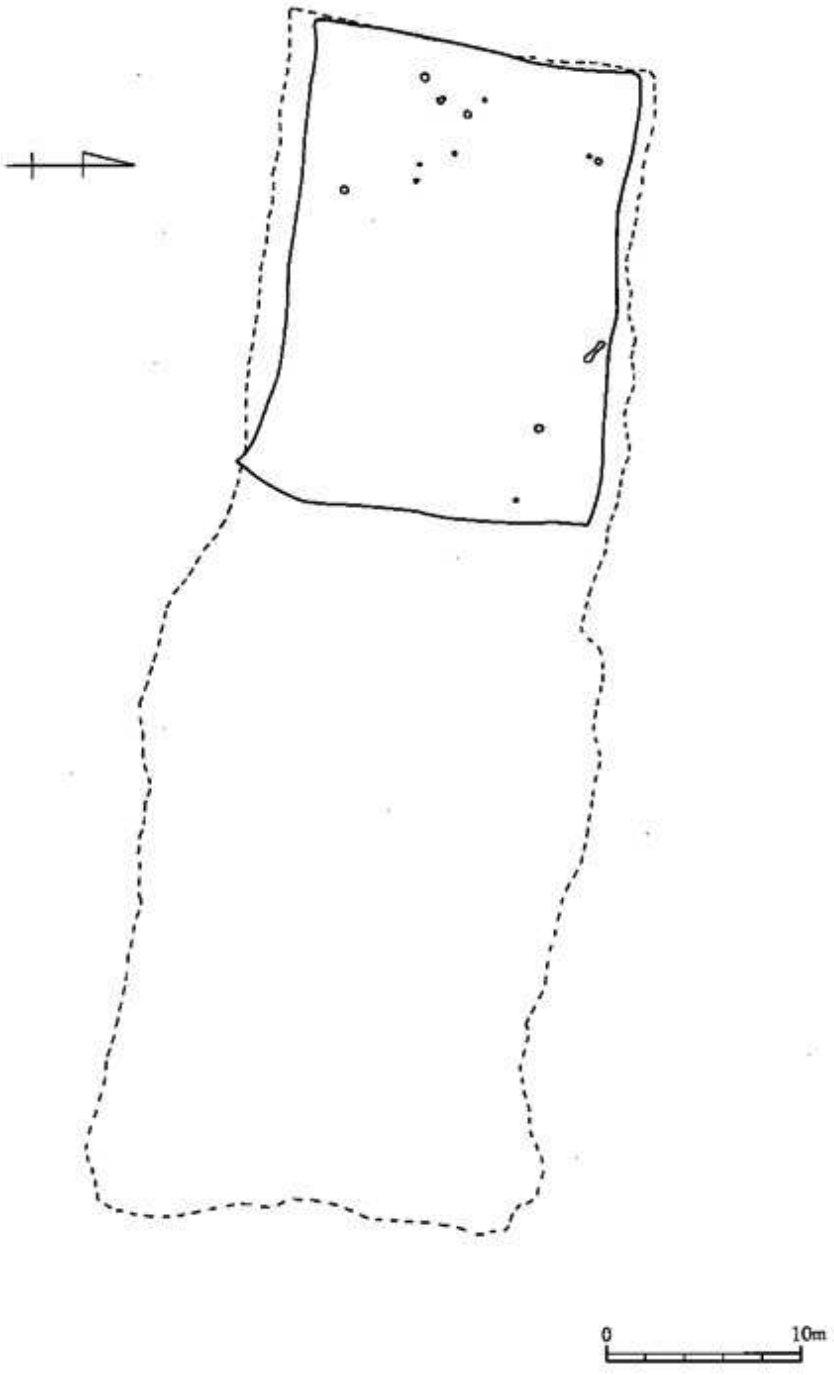
第66図　北栗Ｖの位置と範囲



第67図　北栗Ⅴ遺構配置図(1)　第1検出面



第68図　北栗Ⅴ遺構配置図(2)　第２検出面



第69図　北栗Ｖ遺構配置図(3)　第３検出面

2．遺構

1）住居址

第1号住居址

本址は調査区西部南側にP_{32}に切られて検出された。平面形状は、東西1.97 m、南北3.0 m の長方形を呈し、主軸方向はN－99°－Eを指向する。覆土は二層に分けられ、上層は茶褐色土塊、黄色土塊が混入する灰色土、下層は茶褐色土塊、黄色土塊が多量に混入する灰色土が堆積する。両層中には微量の炭化物が認められた。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁中央部での残存高は、東壁36 cm、西壁37 cm、南壁17 cm、北壁25 cm を測る。床面はほぼ平坦であるが、堅さは全く感じられない。ピット、カマド等の施設は検出されなかった。

遺物は覆土中及び床面に散在し、須恵器坏、土師器坏が少量出土した。出土量が少なく時期決定は困難である。

第2号住居址

本址は1住の南2 m に位置し、1土坑を切る。平面形状は東西2.4 m、南北2.4 m の隅丸方形を呈し主軸はN－100°－Eを指向する。覆土は灰色で二層からなる。北西部を中心に覆土中層から下層にかけて、拳大～人頭大の礫が多量に混入し、遺物の多くもこれらの礫とともに出土した。礫の埋没状況や分布から人為的に投入された可能性がうかがえる。壁はほぼ直に立ち上がり、残存高は東壁64 cm、西壁71 cm、南壁57 cm を測り遺存状況は良好である。床面は平坦に広がるが軟弱である。西壁際中央付近に直径70×60 cm、深さ10 cm の掘り込みがある。内部は上層に灰、下層に少量の焼土と炭化物が堆積し、内耳土器片が出土している。掘り込みの際壁面には中層位に灰・炭化物が付着し、焼けた痕跡が見られる。移動式のカマドの痕跡と考えられる。

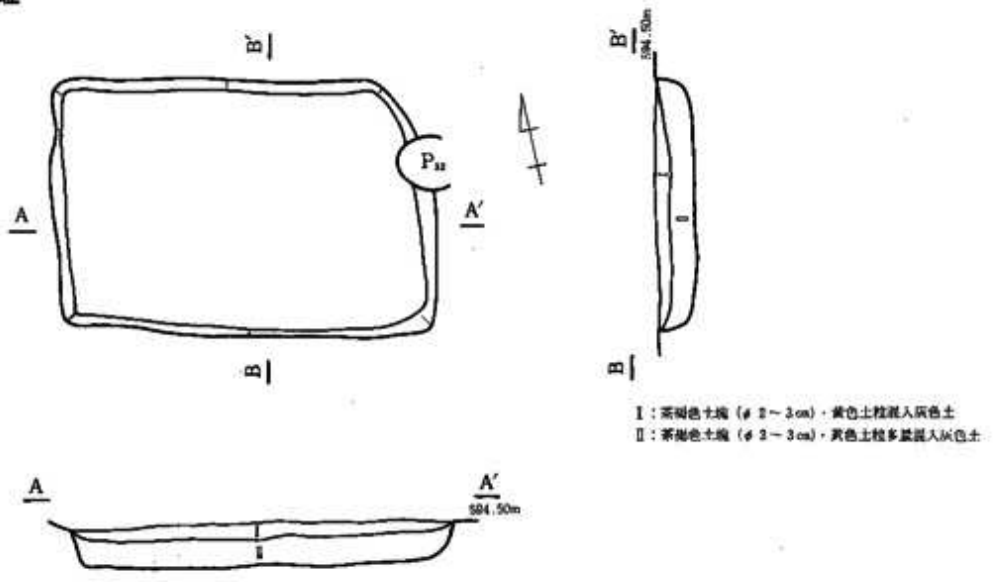
遺物は土師器・内耳土器が出土しているが、混入品が多い。切り合い関係や遺物よりみて、本址は中世の遺構と考えられる。

第3号住居址

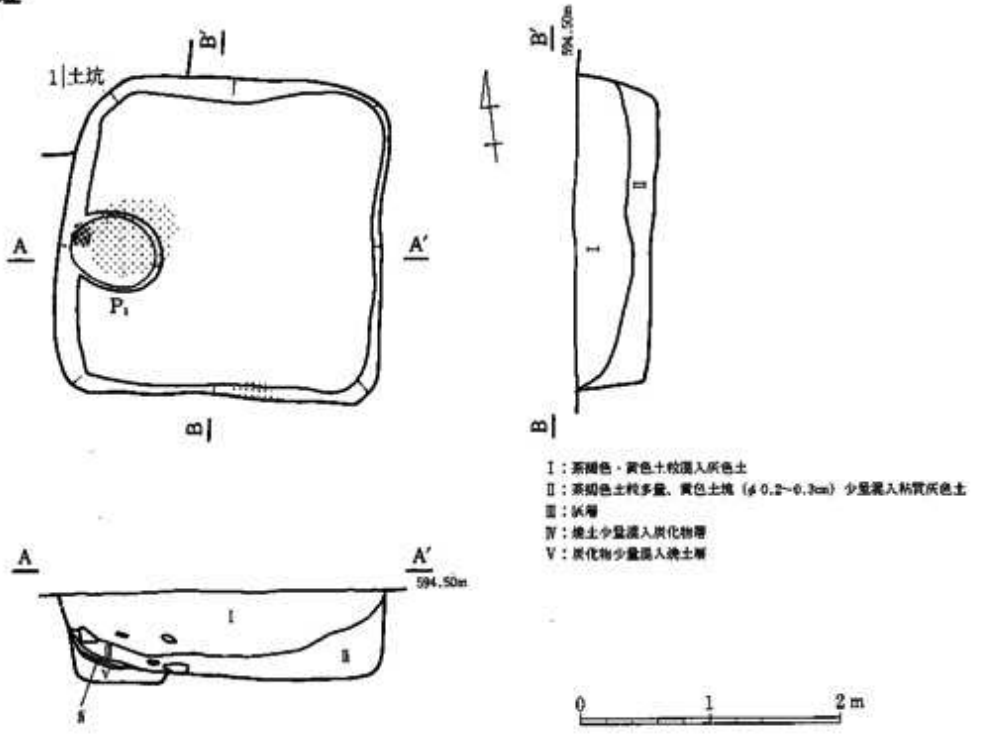
本址は調査区北東端に4・5住を切っている状態で検出された。北側約⅔が調査区域外に延び東辺で約3.0 m、西辺で約0.7 m を調査するにとどまった。平面プランは主軸方向N－70°－Eに指向する隅丸方形を呈すると推定される。覆土は三層からなる。中層、下層には炭粒が多く混入し、下層は焼土塊を少量含有する。壁はほぼ直に掘り込まれており、残存高は東壁20 cm、西壁34 cm、南壁29 cm を測る。床面は平坦で、黄褐色を呈し全体に堅く良好である。南壁際中央部付近に直径90 cm、深さ18 cm の規模をもつP_1が見られる。内部から若干量の焼土・炭化物が出土した。東壁際南寄りには焼土が検出されたが、カマドとしての施設は見られなかった。

遺物は覆土中層～床面上に多量に出土した。南東隅を中心に炭が多量に見られた他、土師器坏、灰釉陶器、白磁小片、紡輪、鑓鉋、鉄鏃2点、角釘等が出土している。遺物よりみて、島立南栗編年XII期（以下南栗○期と略す）に帰属すると考えられる。

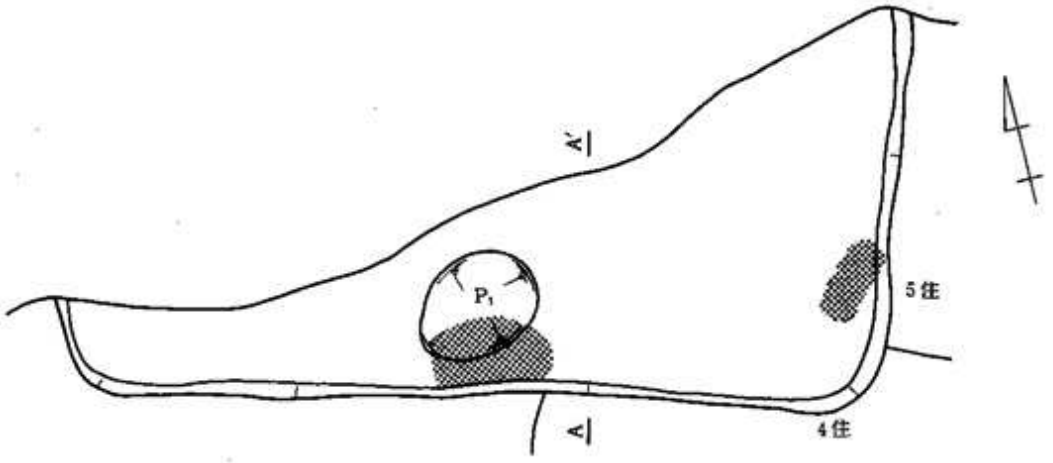
第１号住居址



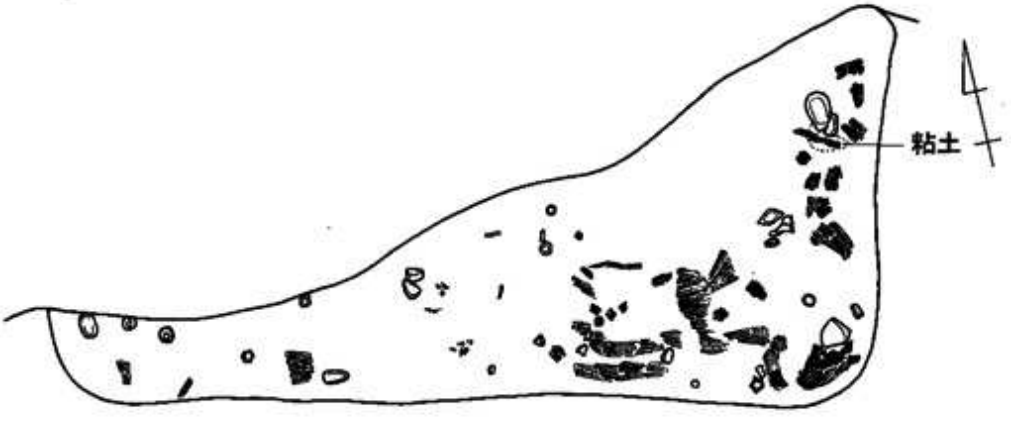
第２号住居址



第70図　第１・２号住居址

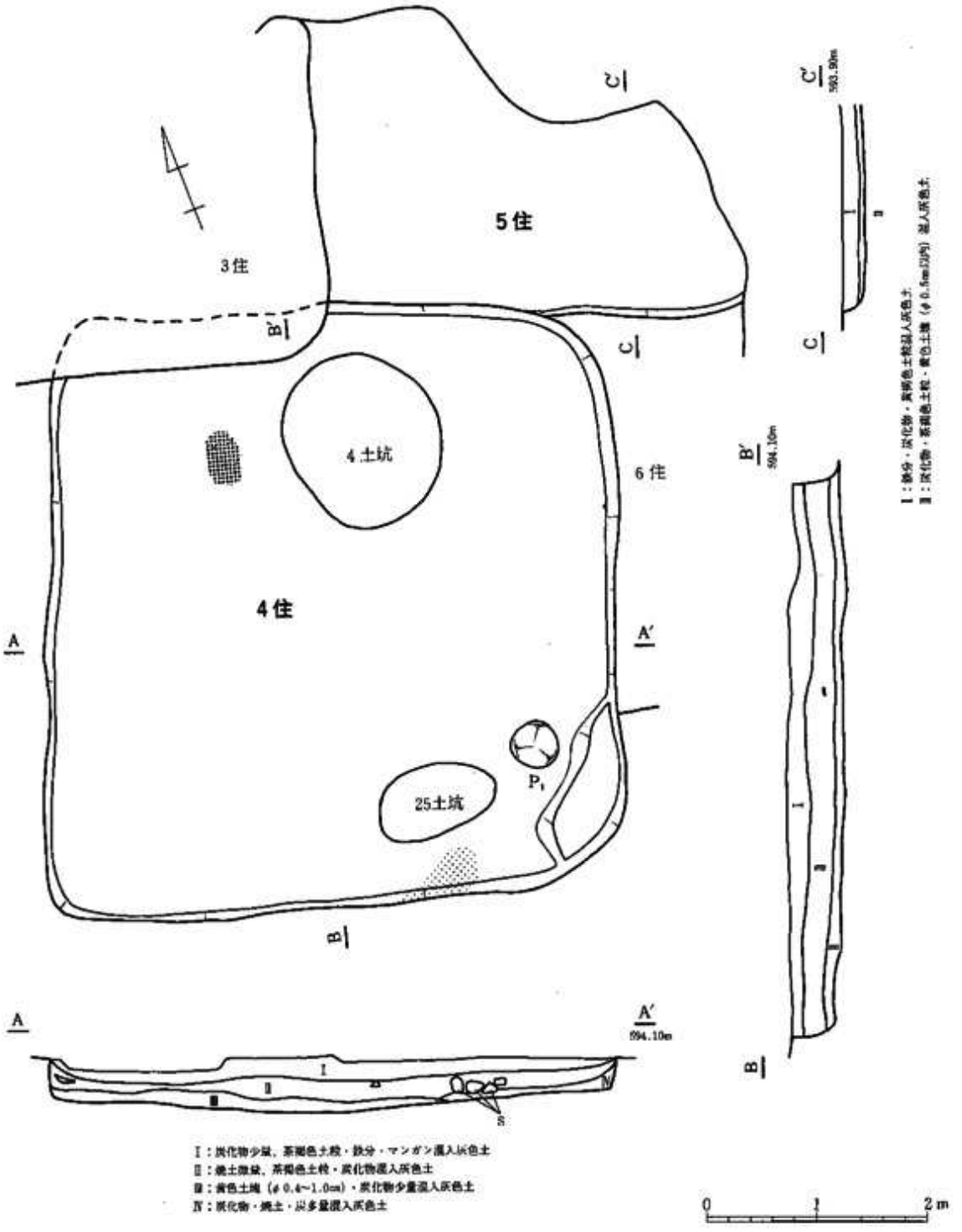


Ⅰ：茶褐色土粒・鉄分・マンガン混入灰色土
Ⅱ：茶褐色土粒・鉄分・マンガン・炭化物多量混入灰色土
Ⅲ：茶褐色土粒・黄色土塊（φ0.2～0.3cm）・焼土塊（φ 2～3cm）・炭化物混入灰色土

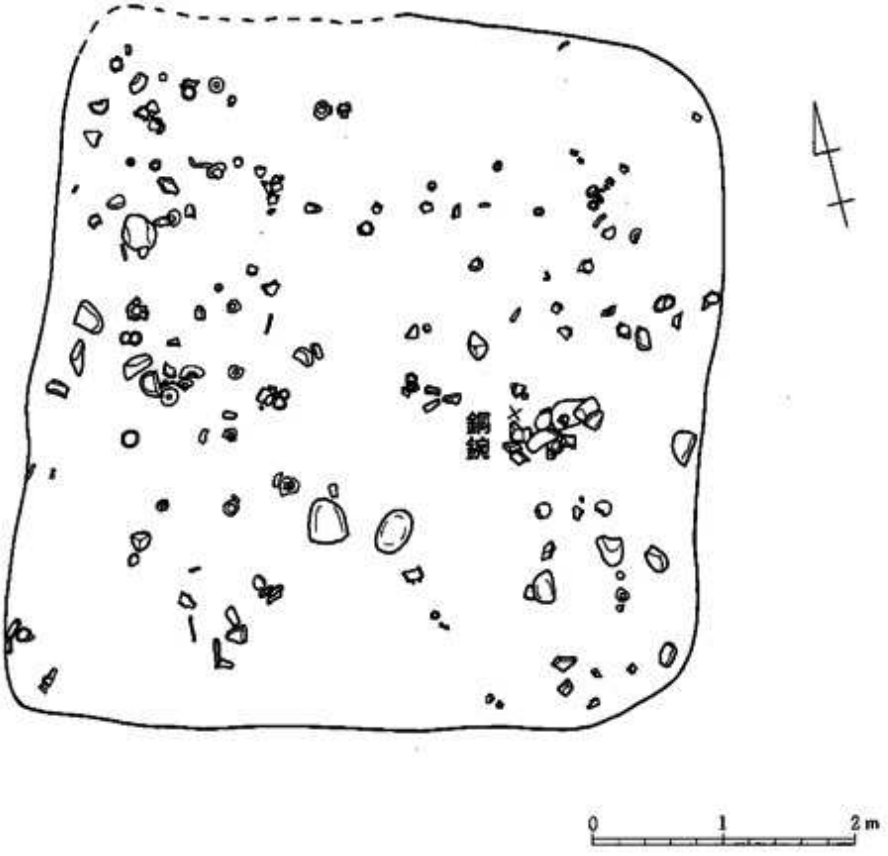


0 1 2m

第71図　第３号住居址



第72図　第4・5号住居址

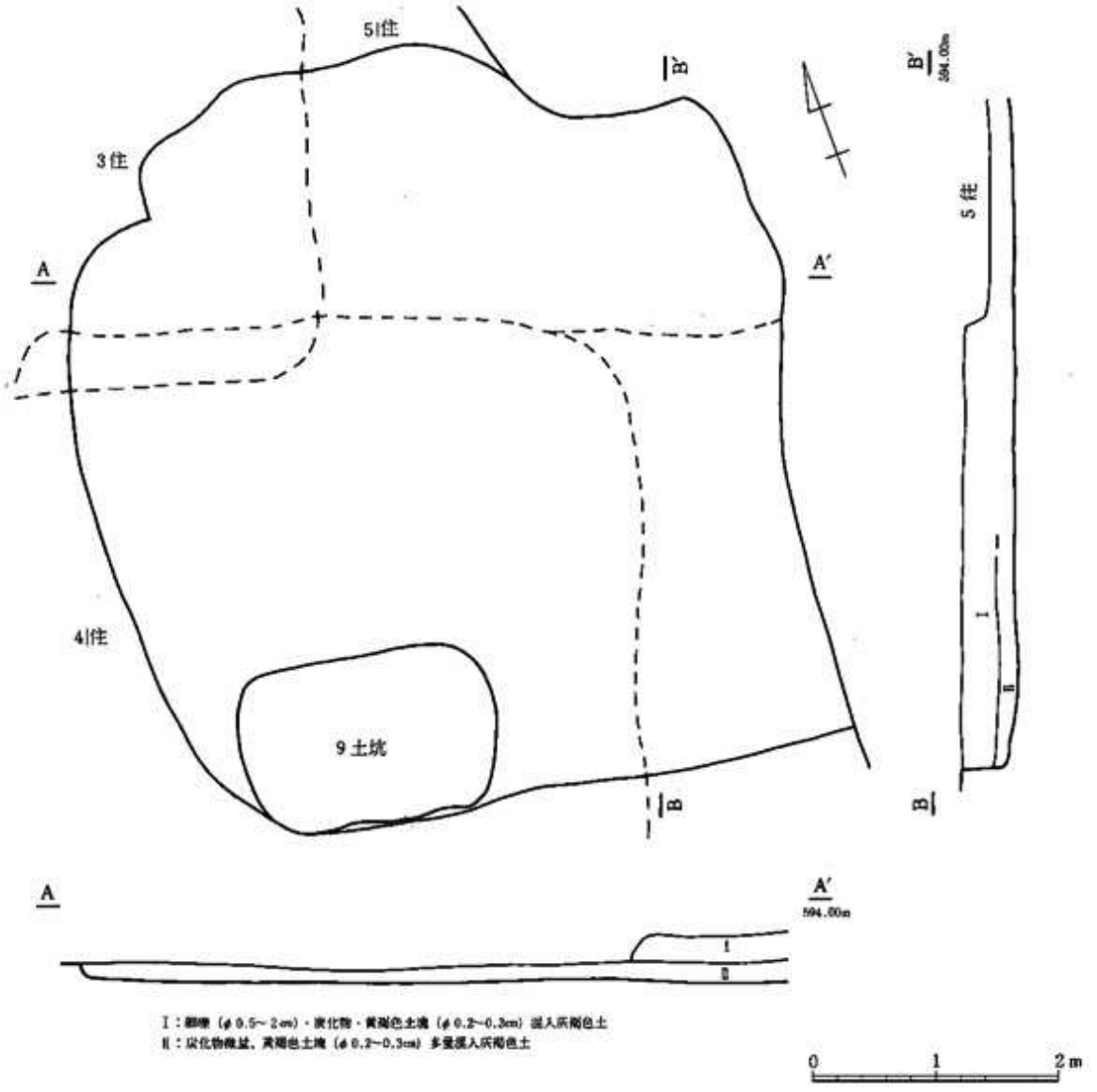


第73図　第４号住居址遺物出土図

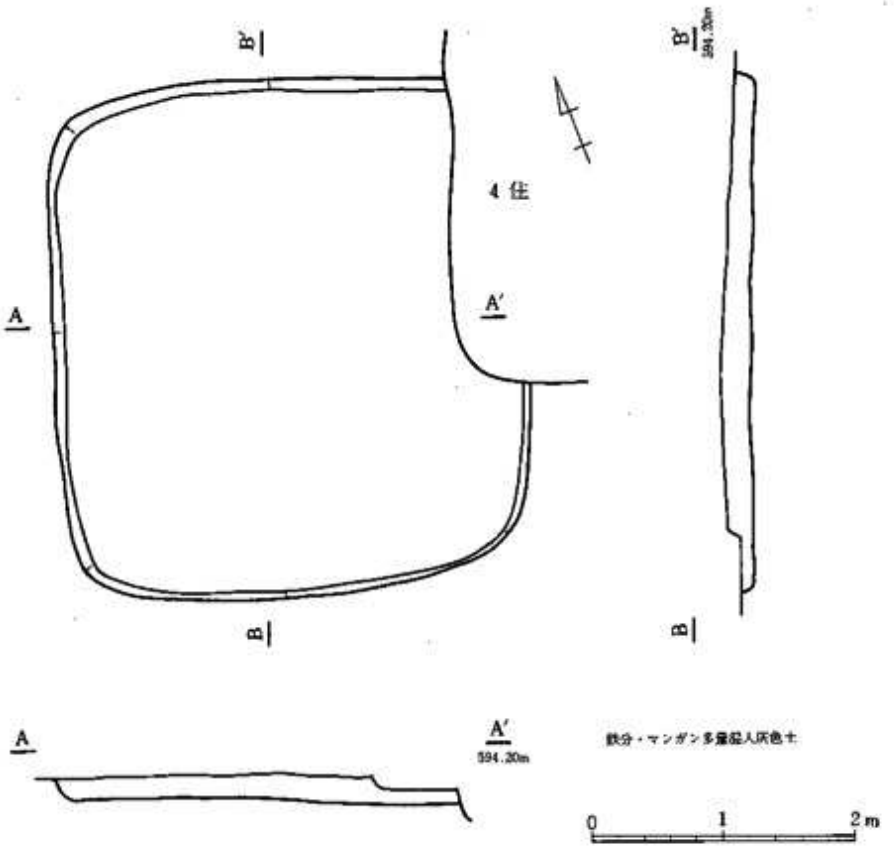
第４号住居址

本址は調査区北東隅に検出された。３住、４土坑に切られ、５・６・７・８・26住を切るという重複関係にある。平面形状は東西5.2ｍ、南北5.5ｍの隅丸方形を呈し、主軸はN－17°－Eを指向する。覆土は三層に分けられ、東壁中央付近の下層に焼土が６cm程堆積していた。壁の遺存状態は良好で残存高は東壁39cm、西壁41cm、南壁44cm、北壁35cmを測る。南東隅が若干張り出し、階段状に掘り込まれている。床面に向い緩やかな傾斜がみられ、ローム塊により堅くたたかれている。上記より張り出し部分が出入口である可能性が高い。床面はほぼ平坦で、黄褐色のローム塊により堅くたたかれている。ピットは南東隅に２個検出された。P_1（直径42cm、深さ７cm）は柱穴と考えられる。P_2（110×64×29cm）は内部に焼土塊、炭化物がかなり堆積し、土器の出土も多く見られた為、柱穴とは性格を異にすると考えられる。

遺物は覆土中より土師器坏・埦、灰釉陶器碗・皿（朱墨硯）、白磁、刀子、鎌、鉄鏃、釘、佐波理鋺が出土している。これらの遺物よりみて、本址は南栗XII～XIII期に帰属すると考えられる。


5住
3住
4住
9土坑
A
A′
B
B′
5住
I
II
594.00m
I：礫（φ0.5～2cm）・炭化物・黄褐色土塊（φ0.2～0.3cm）混入灰褐色土
II：炭化物微量、黄褐色土塊（φ0.2～0.3cm）多量混入灰褐色土
0
1
2m

第74図　第6号住居址



第75図　第7号住居址

第5号住居址

本址は調査区北東隅において3・4住に切られ、6住を貼るという重複関係で検出された。また、東側・北側の大部分が調査区域外にあたり、全体の⅓程の調査にとどまった。覆土は二層に分層され、上層、下層ともに焼土、炭化物が少量混入する。壁はほぼ直に立ち上がり、残存高は37 cmを測る。床面は平坦であるが堅さは感じられない。ピット、カマド等の施設は検出されなかった。

遺物は覆土中より土師器坏・埦、灰釉陶器、緑釉陶器、刀子、鉄釘が出土している。これらの遺物より本址は南栗XI期に帰属すると考えられる。

第6号住居址

本址は調査区北東隅に検出された。3・4・5・8住、9土坑に切られる。本址は4住掘下げ後の床面精査時にプランを確認した。覆土は三層に分けられ上層～下層まで炭化物が混入し、最下層には焼土も混入する。壁の遺存状態は良くない。床面は大半が切られており遺存状況は悪い。切り合いに関連しない南東部のみ黄褐色で堅固な床面がみられる。カマド及びピット等の付属施設は検出されなかった。

遺物は床面上より土師器坏・埦、羽釜、灰釉陶器碗、鉄鏃が出土した。これらの遺物より本址は南栗XI期に帰属すると考えられる。

第7号住居址

本址は調査区東部において4住に切られ、8・26住を貼るという重複関係で検出された。平面形状は東西3.7m、南北4.0mの隅丸方形を呈し、主軸はN—21°—Eを指向する。覆土は単層で鉄分・マンガンを多量に含む灰色土が堆積する。壁はほぼ直に掘り込まれ、残存高は東壁10cm、西壁16cm、南壁17cm、北壁16cmを測る。床面は平坦であるが、堅さは全く感じられない。床面上からはカマド、柱穴につながるようなものは検出されなかった。

遺物は覆土中より土師器坏、灰釉陶器、刀子が出土した。出土量が少なく時期決定は難しいが、南栗XI期の遺構と考えられる。

第8号住居址

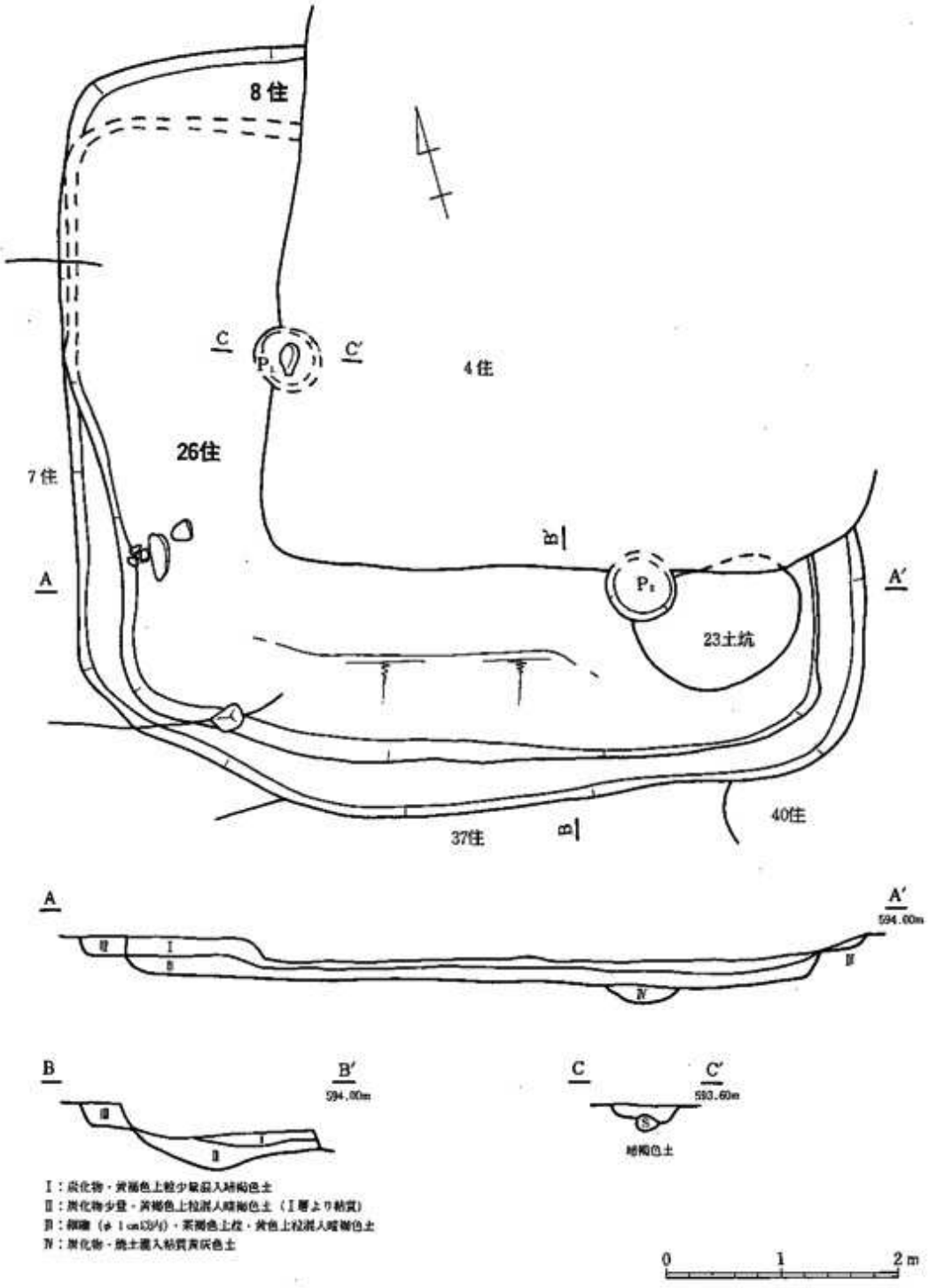
本址は調査区東部に位置し、その大半が8・24住に貼床されて検出された。平面形状は東西6.8m、南北6.4mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN—18°—Eを向く。覆土は遺存している部分で観察する限り単層である。壁は東壁がややなだらかに立ち上がるが、他は直に掘り込まれ、東壁13cm、西壁26cm、南壁19cm、北壁21cm残存する。床面は軟弱で黄褐色を呈する。検出された床面上には焼土、柱穴につながるものはない。

遺物は覆土中より土師器坏・甕、灰釉陶器、刀子が出土した。これらの遺物よりみて南栗XI期に帰属すると考えられる。

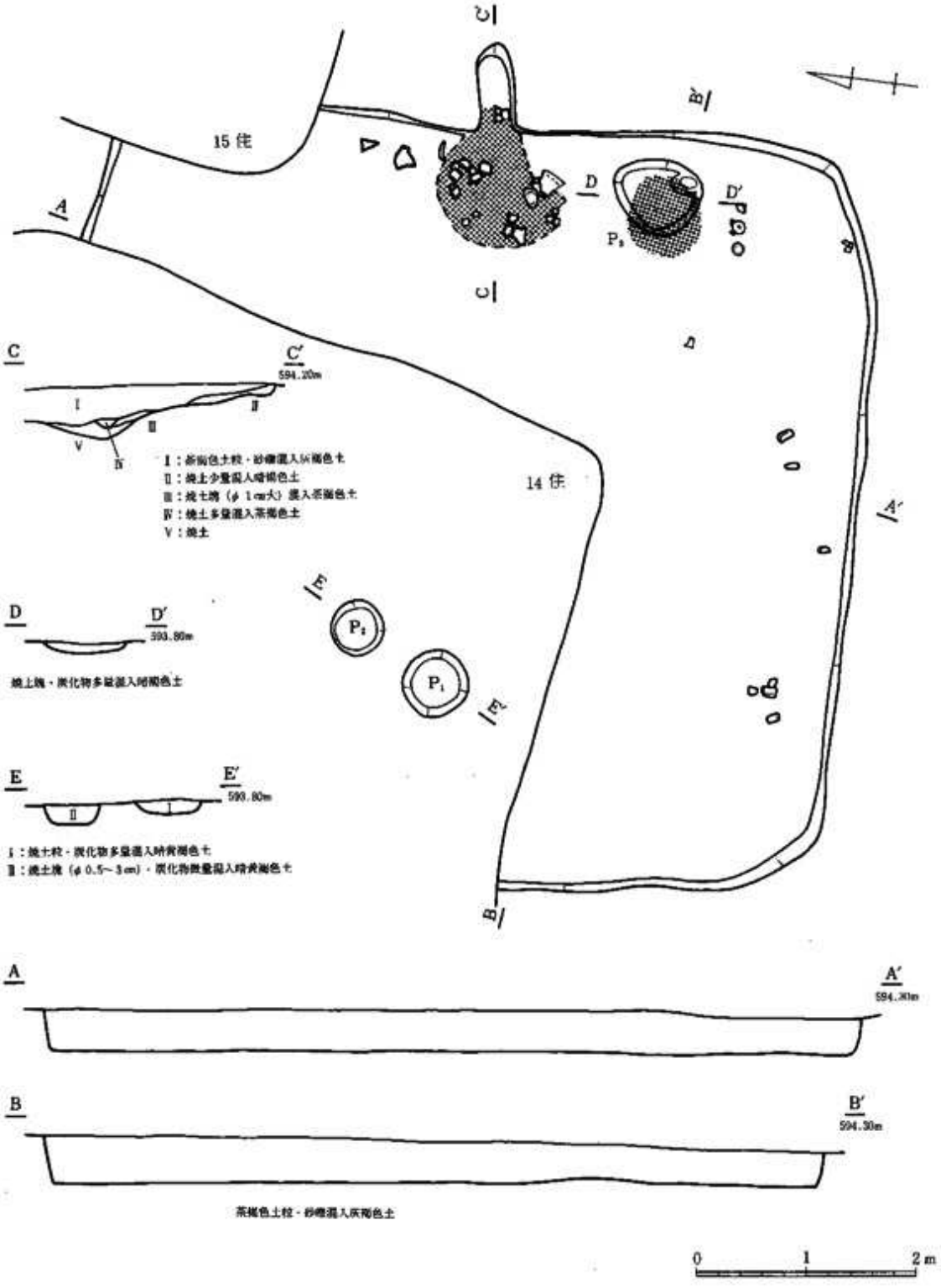
第9号住居址

本址は調査区中央南側に位置し、14住に北西¼、15住に北東隅を切られ貼床された住居址である。平面形状は東西6.9m、南北7.2mの隅丸方形を呈し、主軸はN—82°—Eを指す。覆土は単層として捉えられ、茶褐色土粒、砂礫が混入する灰褐色土が堆積する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、残存高は最高部で東壁36cm、西壁31cm、南壁34cm、北壁33cmを測る。床面は中心部のみが黄褐色土を入れて貼床しており堅く良好である。ピットは3個検出された。このうちカマド南側にあるP_3は焼土塊、炭化物を含み、内部から高坏脚部片が出土するなど、柱穴とは性格を異にする様相を示している。カマドは東壁ほぼ中央に位置する。壁を掘り込み80cm程の短い煙道を付属させている。火床部分には焼土が15cmほど堆積し、土師器甕片が多数出土した。

遺物は床面上より土師器甕、須恵器坏・蓋、鉄鏃、紡垂車、角釘、金環が出土している。これらにより本址は南栗III期に帰属すると考えられる。

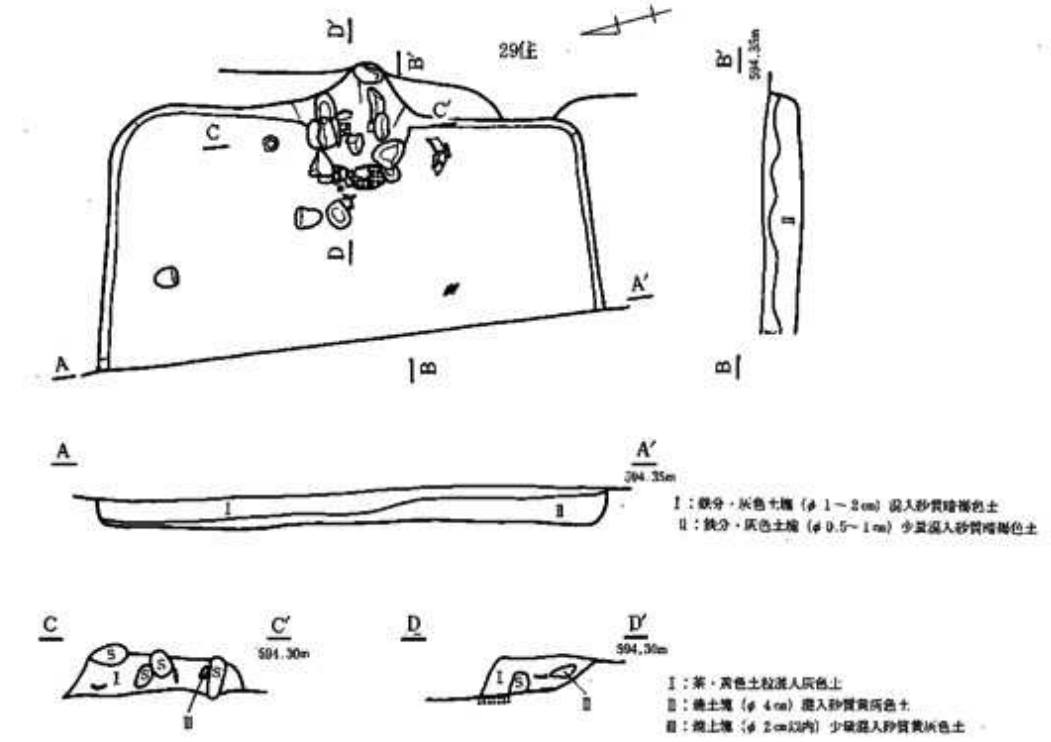


第76図　第8・26号住居址

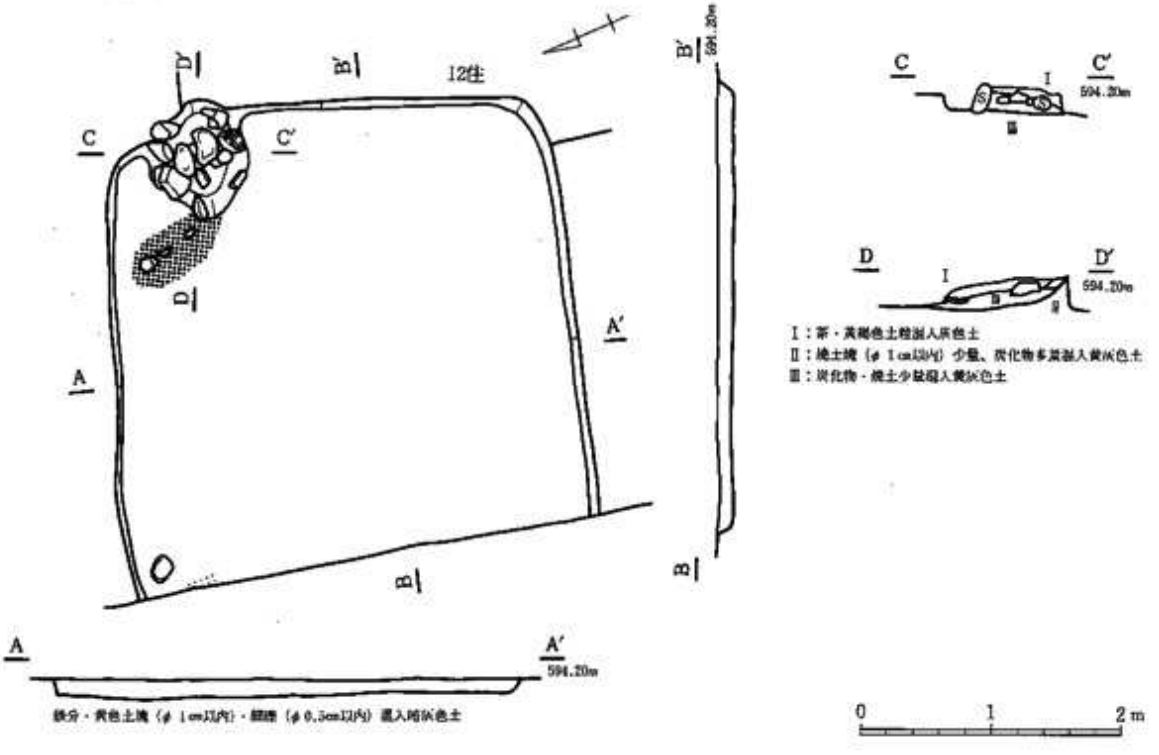

15住
14住
A
A′
B
B′
C
C′
594.20m
D
D′
593.80m
E
E′
593.80m
P₁
P₂
P₃
Ⅰ：茶褐色土粒・砂礫混入灰褐色土
Ⅱ：焼土少量混入暗褐色土
Ⅲ：焼土塊（φ 1cm大）混入茶褐色土
Ⅳ：焼土多量混入茶褐色土
Ⅴ：焼土
焼土塊・炭化物多量混入暗褐色土
Ⅰ：焼土粒・炭化物多量混入暗黄褐色土
Ⅱ：焼土塊（φ 0.5～3cm）・炭化物微量混入暗黄褐色土
594.30m
594.30m
茶褐色土粒・砂礫混入灰褐色土
0
1
2m

第77図　第9号住居址

第10号住居址



第11号住居址



第78図　第10・11号住居址

第10号住居址

本址は調査区北西端に検出された遺構である。29住を切り重複関係がある他、西半分が調査区域外へ延びている為、全貌は不明である。平面形状は一辺3.8 m 程の方形を呈すと考えられ、主軸方向はN－107°－Eを指向する。覆土は二層として捉えられた。壁は直に掘り込まれ、残存高は東壁20 cm、南壁13 cm、北壁27 cm を測る。床面は砂質で全体に軟弱である。カマドは東壁中央部付近に位置し、その主体部は石組カマドである。火床は僅かに掘り込まれ焼土の堆積が見られる。カマド石は両袖石が6個ほど立ったまま検出されたが、天井石等は、カマド内及び周辺に散乱していた。主体部内から土師器甕片、カマド南側の床面上からは須恵器四耳壺が出土した。ピット及びその他の施設は検出されなかった。

遺物は、土師器坏、須恵器坏で、これらにより本址は南栗XI期に位置付けられると考えられる。

第11号住居址

本址は調査区最西端中央部付近に位置する。西側一部が調査区外へ延びており12住の一部を切っている。平面形状は一辺3.6 m 程を測る隅丸方形を呈し、主軸方向はN－115°－Eを向く。壁はややなだらかに立ち上がり、残存高は東壁12 cm、南壁11 cm、北壁14 cm を測る。床面は、中心部堅固であるが貼床されていた。壁際は、軟弱である。ピットは検出されなかった。カマドは東壁北隅に位置する石組カマドである。袖石は、左右両側ともに内側に若干傾いて遺存していた。火床は12 cm 程落ち込み、焼土が10 cm 程堆積していた。

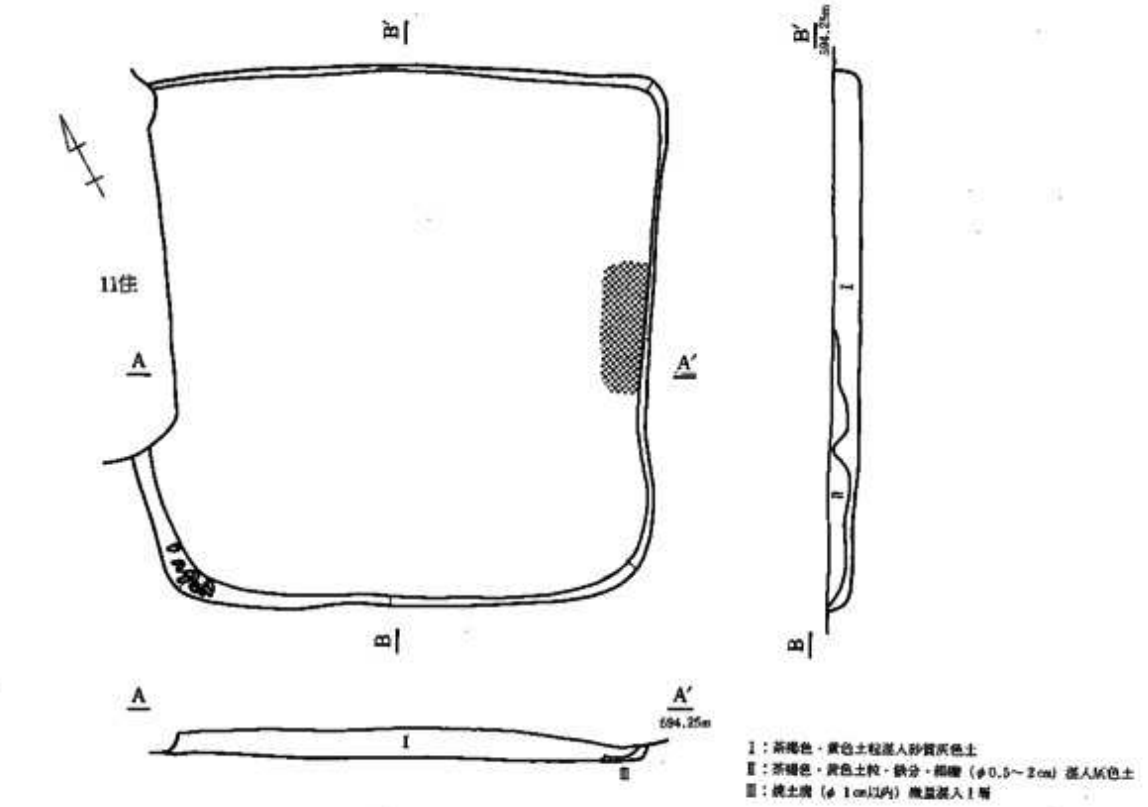
遺物は土師器坏、須恵器坏、紡輪が出土している。出土量が少なく時期決定は難しいが、南栗XI期に帰属される。

第12号住居址

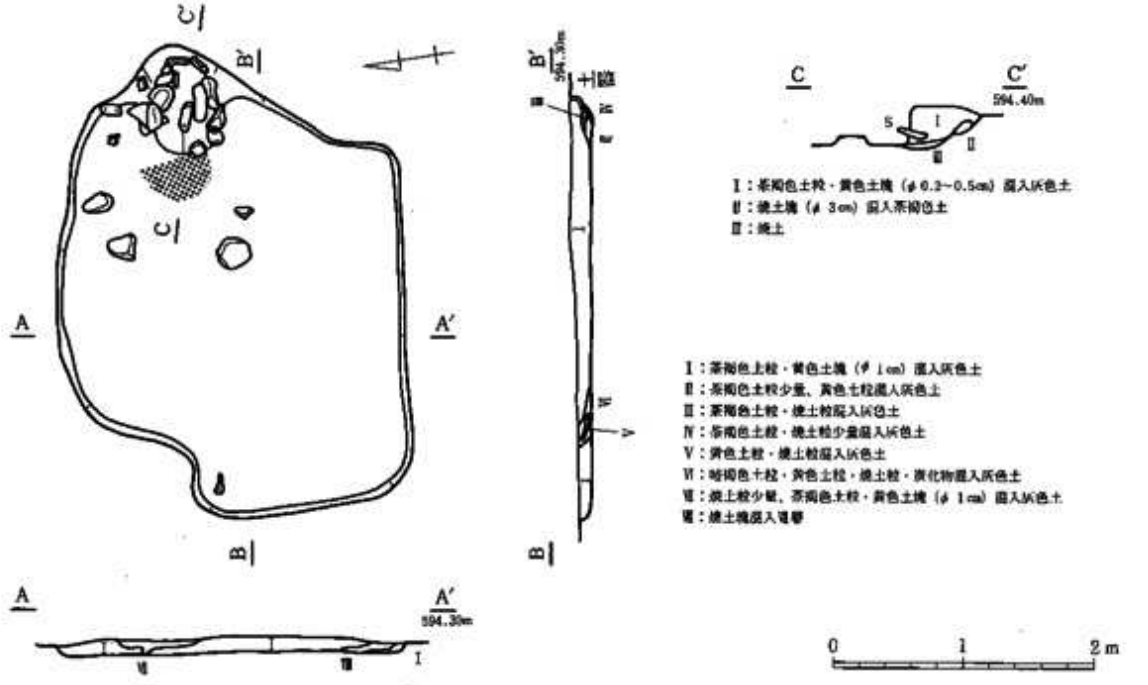
本址は調査区西側中央付近に検出された遺構である。11住と重複関係にあり、西側の大部分を掘り込まれている。平面形状は東西4.0 m、南北4.1 m の隅丸方形を呈する。長袖方向はN－62°－Wを指向する。覆土は二層に分層され、本址南西部に細礫（ϕ0.5 cm～2 cm）が混入する。壁はほぼ直に立ち上がり、残存高は最高部で東壁38 cm、西壁16 cm、南壁19 cm、北壁22 cm を測る。南西隅壁際には小集石が見られるが、長細い小礫は編物用石錘（こも石）と考えられる。床面は平坦であるが堅さは感じられない。東壁際中央付近に若干量の焼土の散布が見られるが、カマドとしての施設は見られない。焼土内からは、土師器甕片が出土している。

遺物の出土量は少量で、しかも小片が主であり、図化できたのは、土師器甕片2点のみであった。時期決定は難しいが、南栗IX期～X期に比定される。

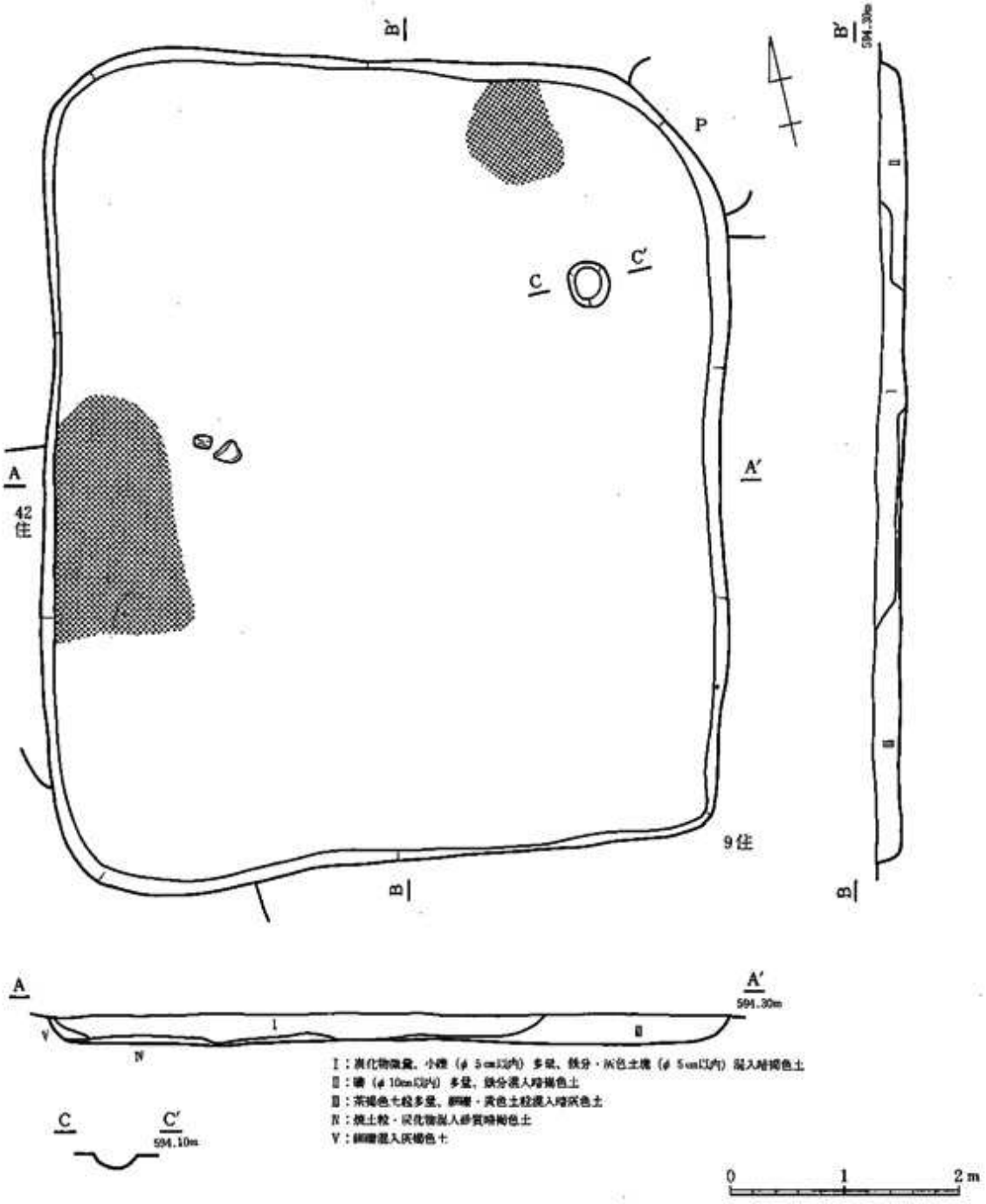
第12号住居址



第13号住居址



第79図　第12・13号住居址



第80図　第14号住居址

第13号住居址

本址は調査区西側南端付近に検出された。平面形状は東西3.2 m、南北2.7 m の不整方形を呈し、主軸方向はN－99°－Eを指向する。覆土は八層に分けられた。壁は北壁がほぼ直に掘り込まれているが、他はややなだらかである。壁の遺存状態はあまり良くなく、残存高も 6 ～10 cm を測るのみである。床面は平坦に広がるが、軟弱な黄褐色を呈する。カマドは東壁やや北寄りに構築されている。主体部は石組カマドで袖石の数点が立ったまま検出された。火床内及びカマド周辺にはカマド構築材として使用されたと思われる石が散乱しており、焼土は 6 cm 程堆積していた。ピットは検出されなかった。

遺物の出土は少量で、土師器埦・甕、鉄釘がみられる。時期決定は難しいが南栗X期に帰属すると考えられる。

第14号住居址

本址は調査区中央南寄り付近に検出された。9 住を切り、41・42住を貼床する。形状は東西6.0 m、南北7.5 m の隅丸方形を呈し、主軸方向はN－110°－Eを指向する。覆土は三層に分けられ北西部を中心に礫（ϕ 1 ～ 7 cm）が多量に混入する。東壁19 cm、西壁22 cm、南壁26 cm、北壁17 cm 残存する壁は、ほぼ直に掘り込まれている。床面は平坦である。堅さが感じられるのは南東部のみであり、全体的に軟弱である。ピットは床面北東に 1 個検出された。規模は直径40 cm、深さ10 cm で、位置的にみて柱穴と考えられる。焼土は西壁中央付近と、北壁東側付近の 2 ヵ所に検出されたが、カマドとしての施設は見られない。

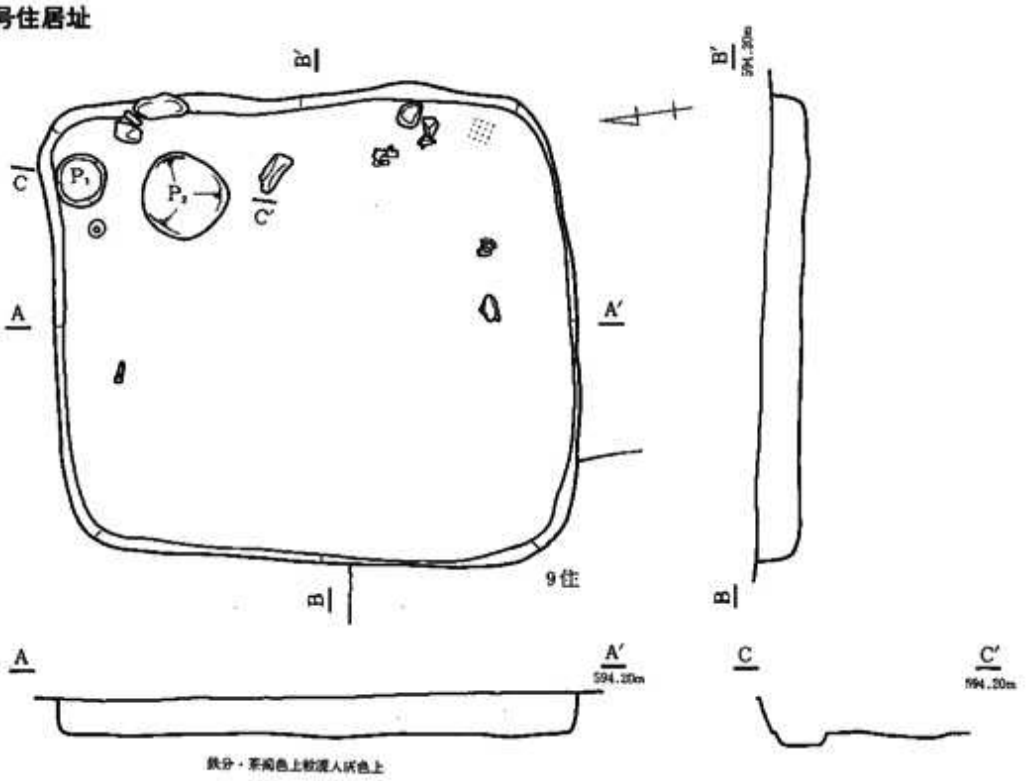
遺物の量は少ない。土師器埦、灰釉陶器、刀子が床面より出土した。明らかに混入品と見られる土器もあるが、時期は南栗IX期に帰属すると考えられる。

第15号住居址

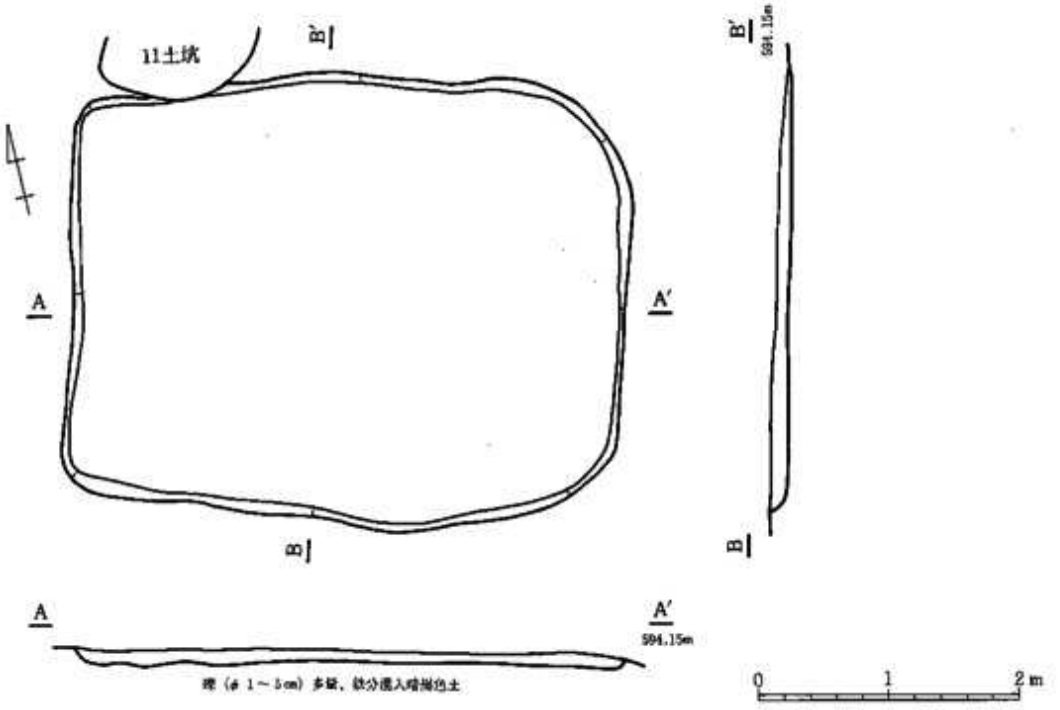
本址は調査区中央やや東寄りに検出された遺構で、 9 住を切るという重複関係にある。平面形状は隅丸方形を呈し、東西4.0 m、南北3.6 m を測る。長軸方向はN－11°－Eを指向する。覆土は単層で茶褐色土粒、鉄分混入灰色土が堆積する。ほぼ垂直に掘り込まれている壁は東壁25 cm、西壁26 cm、南壁29 cm、北壁29 cm 残存する。床面は、ほぼ平坦で中央部が堅くしまっているが、壁際周辺は軟弱である。ピットは北東隅に 2 個検出された。P_1は直径40 cm、深さ10 cm、P_2は直径70 cm、深さ 6 cm で両方とも円形で浅い。カマドにつながるようなものは検出されなかった。

遺物は土師器坏・埦・小形甕、灰釉陶器、刀子が出土した。これらの遺物よりみて本址は南栗 XI 期に帰属すると考えられる。

第15号住居址



第16号住居址



第81図　第15・16号住居址

第16号住居址

本址は調査区北東やや中央寄りに位置する。11土坑に北壁西側の一部を切られる。平面形状は、東西4.3 m、南北3.4 m の隅丸長方形を呈し、主軸はN－72°－Wを指向する。本址は調査区北東～北西に蛇行している流路を掘り込んでいるため、壁面には礫（φ 1 ～ 5 cm）が多量に露出する。壁は遺存状況が悪く 4 ～10cm 残存するのみである。覆土は礫を多量に含む暗褐色土の単層である。床面は、貼床されているが多少凹凸が見られ、やや軟弱である。ピット及びカマド等の施設は検出されなかった。

遺物は土師器坏が床面より出土した。遺物の量が少なく時期決定は難しいが、南栗 XI 期に属すると考えられる。

第17号住居址

本址は調査区北端中央付近に検出された。18住を切るという重複関係にある。また、北側約⅔が調査区外へはずれた為に全貌は明らかでない。規模は東西5.5 m を測る。覆土は二層に分けられ、上層は細礫（φ10 cm 以内）が混入し、上層下層ともに炭化物が混入する。壁はほぼ直に掘り込まれ、残存高は東壁47 cm、西壁47 cm、南壁42 cm を測り遺存状態は良い。床は黄褐色を呈しほぼ平坦であるが、砂質で堅さは全く感じられない。ピット及びカマドは検出されなかった。

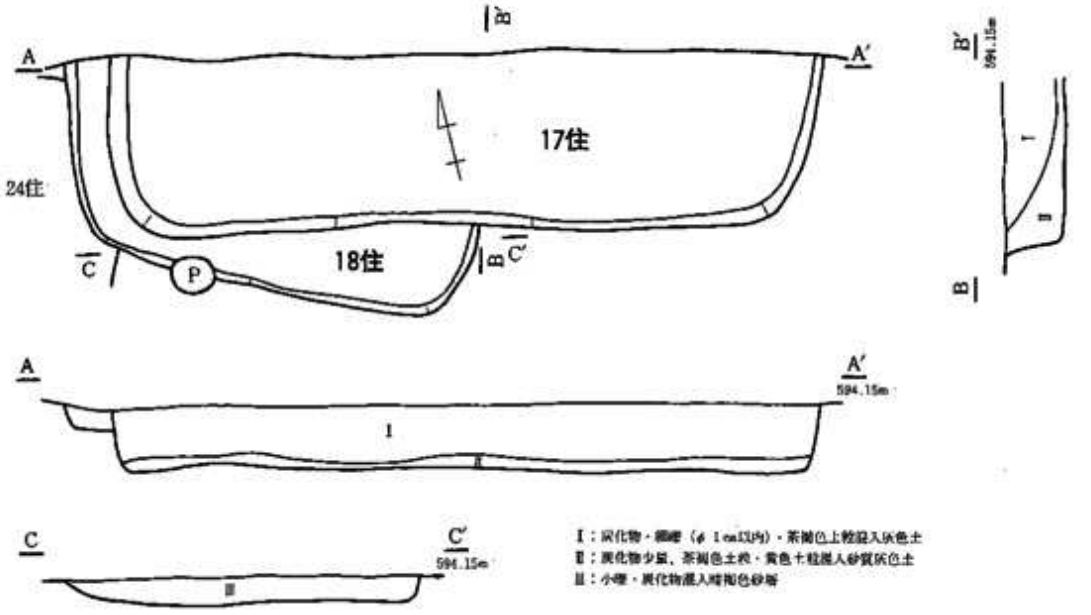
遺物は、覆土中より土師器坏・甕、須恵器甕、鉄釘である。これらの遺物よりみて本址は南栗 XI 期に帰属すると考えられる。

第18号住居址

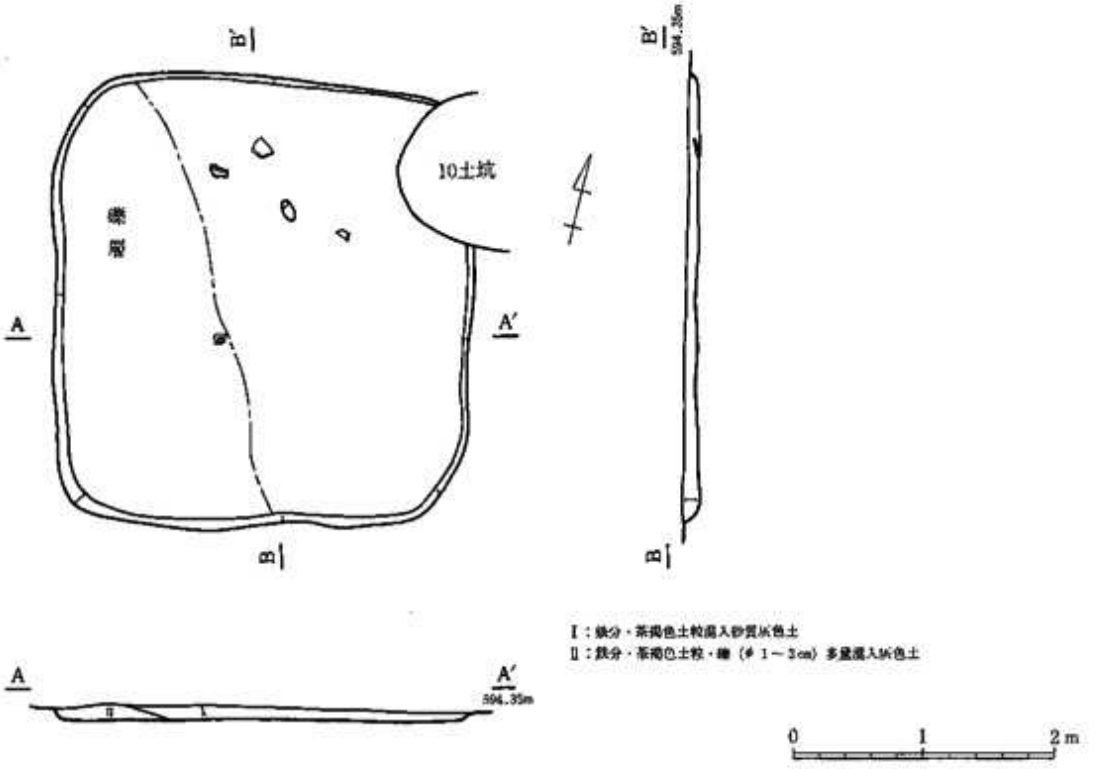
本址は調査区北端中央付近に検出された。24住を切り、17住と P_3に大半を切られている。また、北側半分が調査区外へ延びている為、全様は不明である。規模は東西3.1 m を測る。覆土は礫（φ 3 mm 以内）、炭化物が混入する暗褐色砂質土の単層である。壁はほぼ直に掘られており、残存高は最高部で東壁20 cm、西壁25 cm、南壁19 cm を測る。床は平坦であるが軟弱である。ピット、カマド等は検出されなかった。

遺物は覆土中より土器小片数点が出土しただけであった。図化し提示できるものは無かった。本址の帰属時期は南栗X ～XI 期と考えられる。

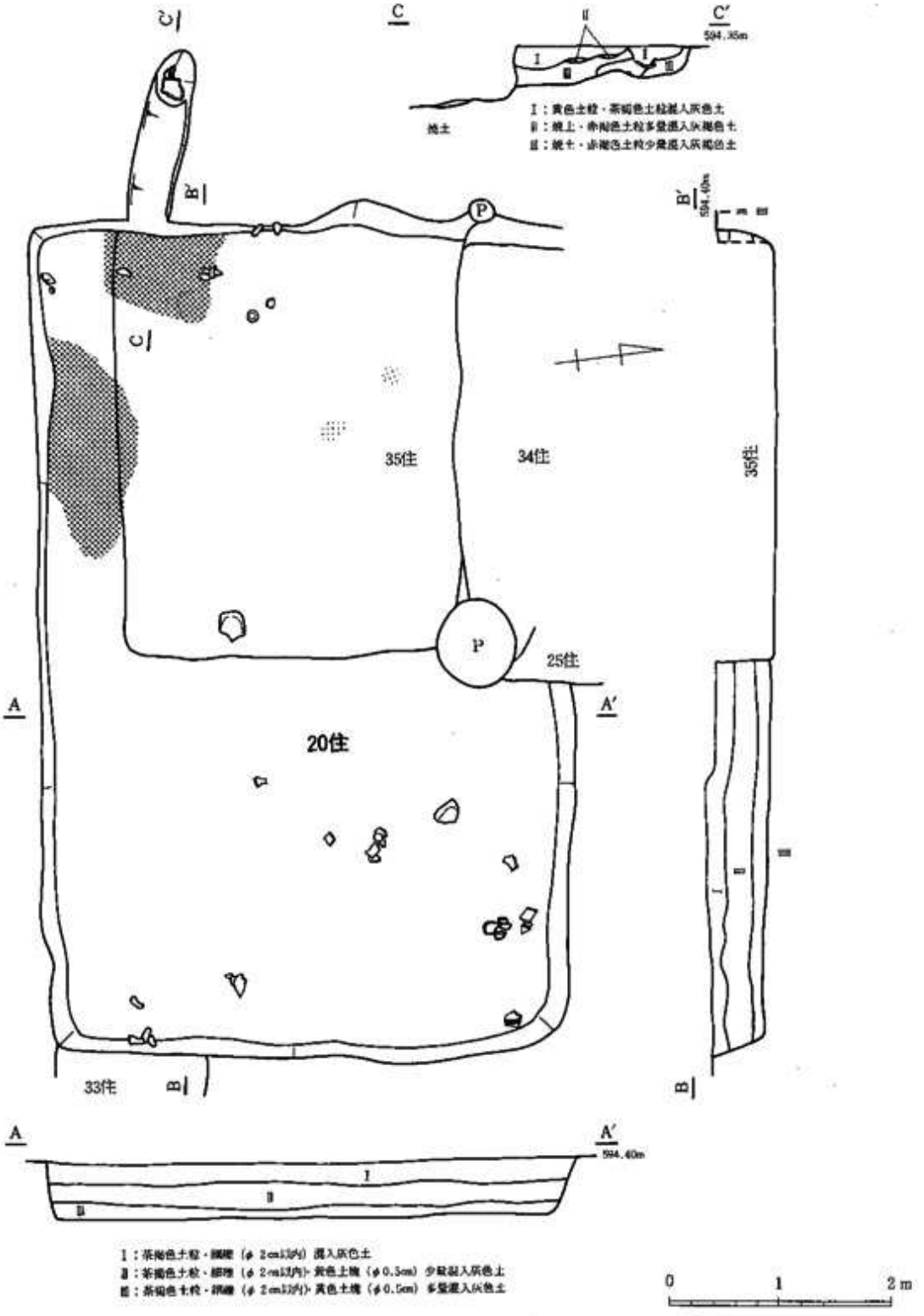
第17・18号住居址



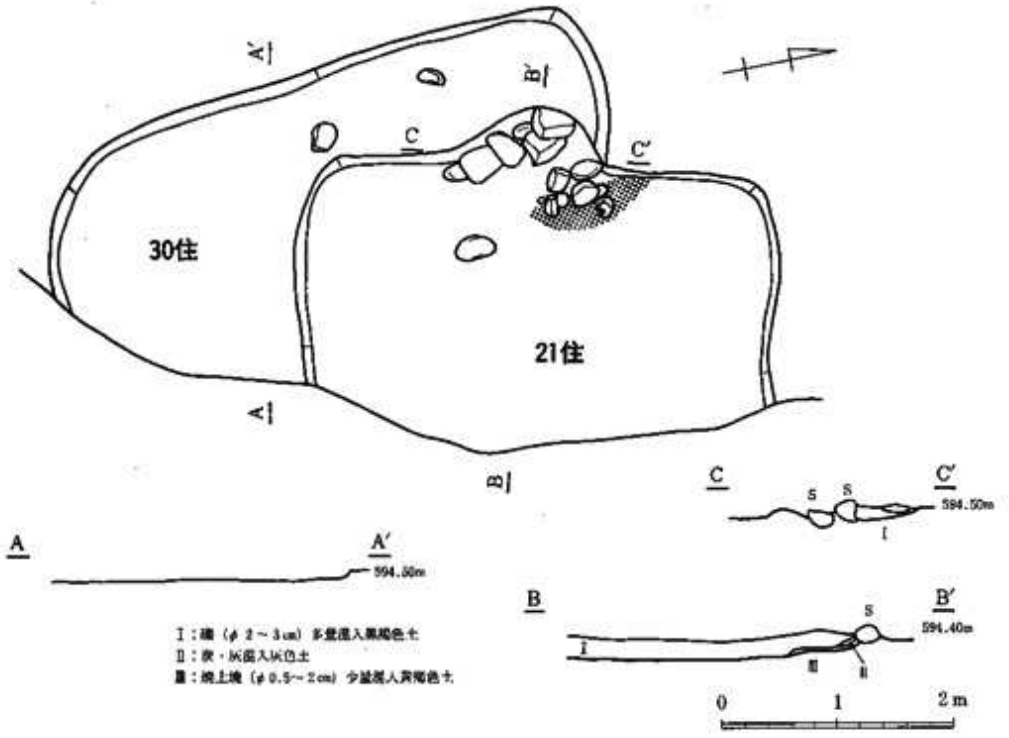
第19号住居址



第82図　第17～19号住居址



第83図　第20号住居址



第84図　第21・30号住居址

第19号住居址

本址は調査区北端やや西寄りに位置し、北東隅を10土坑に切られて検出された。西側⅓程は礫層を掘り込んでいるため、壁面や床面に礫(φ 1～7 cm)が多く露出する。平面形状は、東西3.2 m、南北3.5 m の隅丸方形を呈し、主軸方向はN－13°－Wを指す。覆土は二層に分けられ、礫(φ 1～3 cm)が多量に混入する砂質灰色土が西側から流れ込んだ様相を呈している。壁はややなだらかに掘り込まれ、残存高は東壁 7 cm、西壁 7 cm、南壁10 cm、北壁 6 cm を測る。床面は、西側に礫が露出しているため凹凸に富むが東側は平坦である。全体に堅さは見られずに軟弱である。ピット及びカマドは検出されなかった。

遺物は、床面上より土師器甕、灰釉陶器、覆土中より土器小片数点が出土しただけであった。時期決定は困難であるが、南栗X期～XI期に帰属すると考えられる。

第20号住居址

本址は調査区南端中央やや西寄りに検出された。25・34・35住と P_{37} に切られている。平面形状は長方形を呈し、東西7.7 m、南北4.9 m を測る。主軸方向はN－86°－Wを指向する。覆土は三層に分けられる。上層～下層にかけて茶褐色土粒・細礫が混入し、中層～下層になるほど黄色土塊が多く混入する。壁はほぼ直に掘り込まれ、残存高は東壁56 cm を測り、遺存状況は良好である。床面は平坦で黄褐色の堅い面が全体に広がる。カマドは西壁南側に構築されたと考えられる。主体部は35住

により破壊されており、焼土の散布のみが確認された。煙道は長さ1.6 m でその先に煙出しのピットが見られる。その内部から土師器甕片が出土した。床面上からのピットの検出は皆無であった。

遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・瓶、鉄製品１点で、本址の時期は南栗II期に帰属すると考えられる。

第21号住居址

本址は調査区中央やや南寄りに位置する。東半部を１溝に切られ、30住を切るという重複関係にある。礫層を掘り込んでいるため、壁面及び床面には小礫（φ 2 ～ 3 cm）が露出している。平面形状は一辺5.6 m 程の方形を呈すると思われ、主軸はN－81.5°－Wを向く。覆土は、小礫（φ 2 ～ 3 cm）が多量に混入する、黒褐色土の単層である。壁は遺存状態が悪く 7 ～13 cm 残存する。床面はやや凹凸に富み軟弱である。カマドは西壁中央付近に構築されている。主体部は袖石の一部が残存しており、火床及びカマド前部には、カマド構築材と思われる石が散乱している。焼土は、主体部及び前部に若干量見られた。ピットは検出されなかった。

遺物は量が少なく土師器片数点が出土しただけであった。このため時期決定は難しいが、南栗 XI 期に比定すると考えられる。

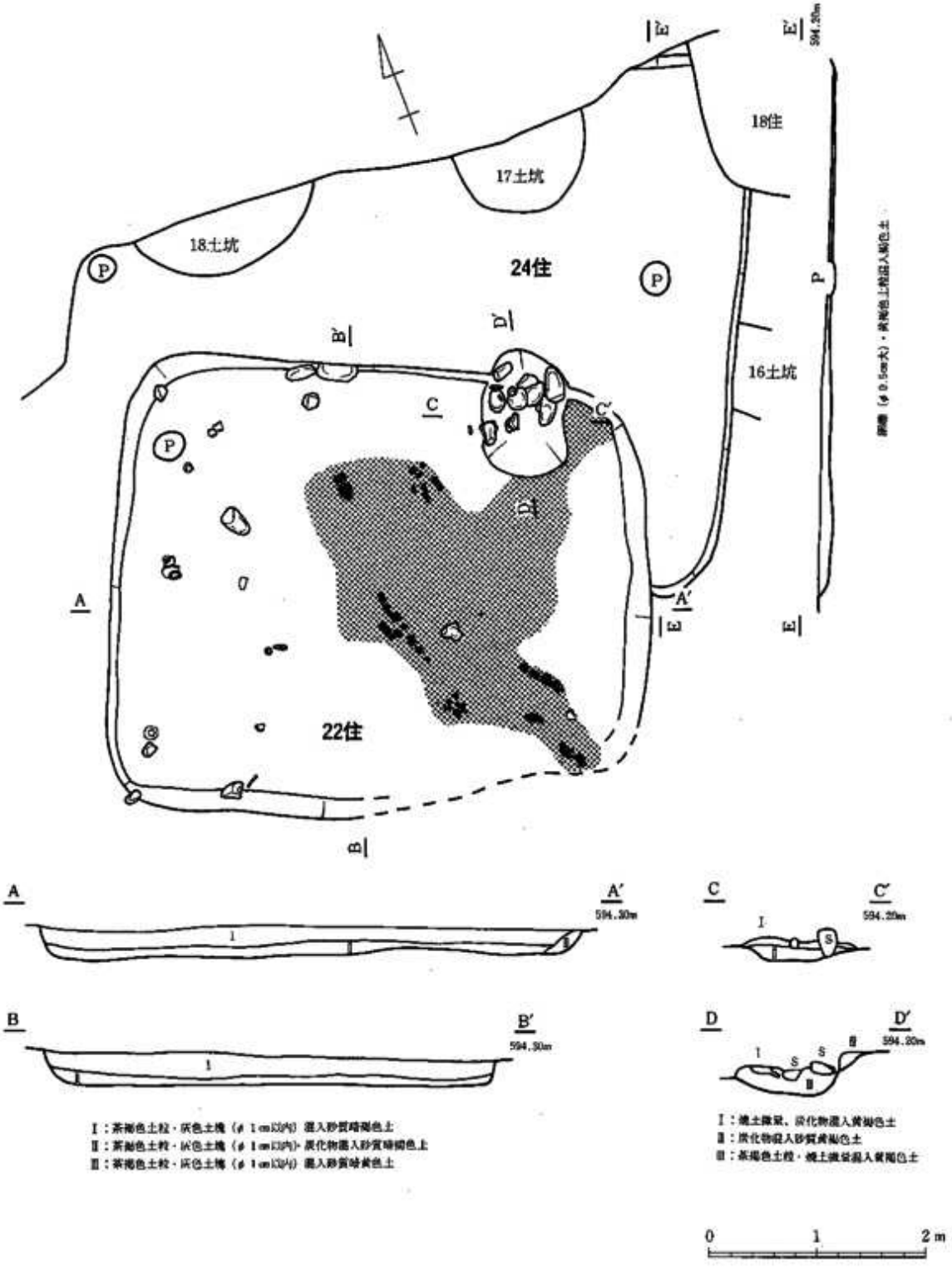
第22号住居址

本址は調査区中央北端に位置する。24住を貼床し23土坑を切るという重複関係にある。また、南東部隅は流路を掘り込んでいるため、壁面、床面に礫が露出する。平面形状は東西5.0 m、南北4.2 m の隅丸方形を呈し、主軸はN－26°－Eを指向する。覆土は三層に分けられ、全体に砂質で下層ほど炭化物が多くなる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁24 cm、西壁29 cm、南壁38 cm、北壁18 cm 残存する。床は中央部北東寄りが堅固で、炭が少量混入した黄褐色土を呈するが周辺部分は砂質で軟弱な面が広がる。カマドは北東寄りに構築されている。東側の袖石が２個立ったまま検出されたが、他の部位は崩れて残存していない。火床は15 cm ほど掘り窪められ、カマド石が散乱する。焼土は、カマド内とその周辺に多少見られる。ピットは北西隅に１個検出された。規模は径14 cm、深さ30 cm で柱穴と考えられる。

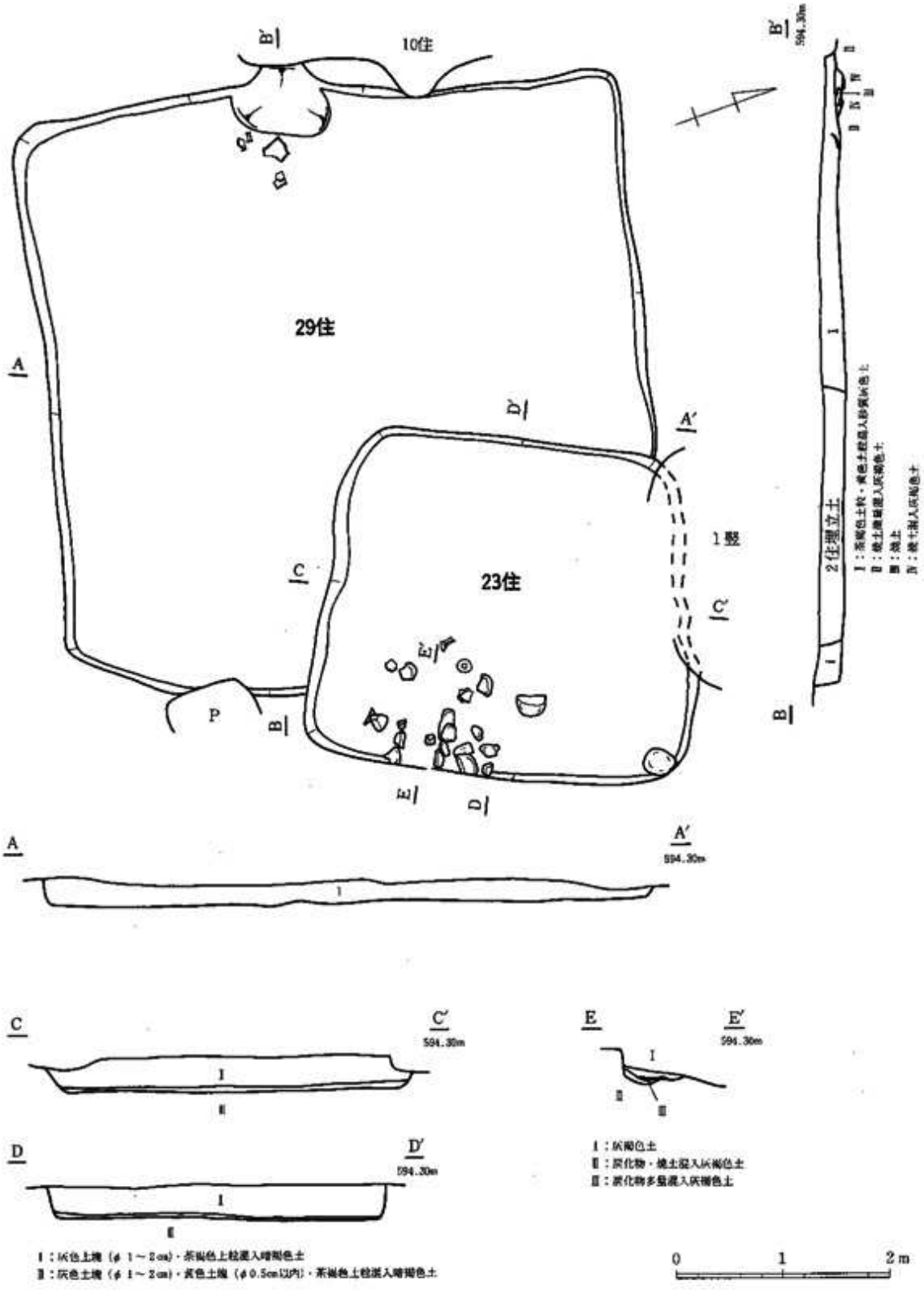
遺物は、土師器坏・埦、灰釉陶器碗、刀子、釘が覆土中より出土している。本址は南栗X期に帰属すると考えられる。

第23号住居址

本址は調査区北西部に検出された。第１号竪穴状遺構に切られ、29住を切る。平面形状東西3.2 m、南北3.2 m の隅丸方形を呈する。主軸方向はN－119.5°－Eを指向する。覆土は二層に分けられ下層は黄色土塊が多量に混入している。壁は南壁がややなだらかであるが他は直に掘り込まれている。



第85図　第22・24号住居址



第86図　第23・29号住居址

残存高は東壁30 cm、西壁36 cm、南壁25 cm、北壁20 cm を測る。北壁は1竪に切られているため遺存状態は悪い。床面は黄褐色を呈し、平坦であるが軟弱である。南東隅のカマド付近は床よりも一段高くなっており、黄色土を呈し堅さをもつ。カマドは東壁南寄りに位置する。石組のうち袖石の6個は旧状を保ち直立していた。カマド周辺には、構築材と思われる石が散乱した状態で検出された。カマドの掘り込みは僅かであり、焼土の堆積は少ない。ピットは検出されなかった。

遺物は、土師器坏・埦、灰釉陶器碗と刀子・角釘などの鉄製品が4点、また床面北東部より赤色顔料が出土している。これらより本址は南栗XI期に帰属すると考えられる。

第24号住居址

本址は調査区中央北端に位置する。18・22住、17・18・23土坑に切られ、16土坑を切る。鉄分が多く沈着している砂地を掘り込んでおり、平面形状は判然とせず東側一部のプランが検出されるにとどまった。覆土は、細礫(φ0.5 cm)、黄褐色土粒混入褐色土の一層である。壁は検出時に削りすぎ遺存状態は悪い。床面は平坦であるが砂地で軟弱である。カマド・ピット等は検出されなかった。

遺物は、土器小片が僅かに出土したのみであり、本址の時期も不明である。

第25号住居址

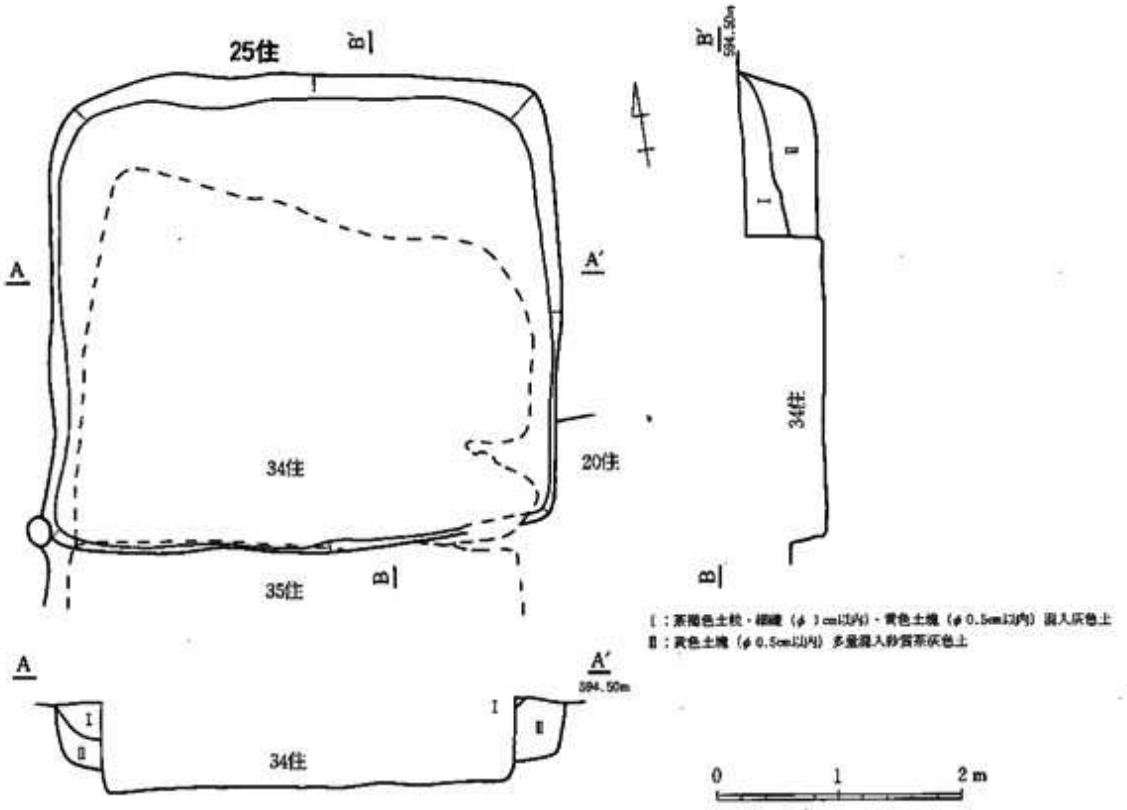
本址は調査区西部南側に位置する。20住を切り、34・35住、P_{37}に切られる。平面形状は隅丸方形を呈し、東西4.2 m、南北3.9 m を測り主軸はN－83°－Wを向く。覆土は二層に分けられ上層には細礫(φ 1 cm)、下層には黄色土塊が多量に混入する灰色土が堆積する。壁はほぼ直に掘り込まれ、東壁56 cm、西壁47 cm、北壁54 cm 残存するが、南壁は34・35住に切られているため遺存状況は悪い。床面は平坦であるが、砂質で軟弱である。カマド及びピット等は検出されなかった。

遺物は土師器坏等が出土している。本址は南栗III期に属すると考えられる。

第26号住居址

本址は調査区北東に位置する。4住に切られ、7住に貼床され、8住を切るという重複関係にある。平面形状は東西6.1 m、南北3.9 m を測り、主軸はN－17°－Eを向く。隅丸方形を呈する。覆土は二層で炭化物、黄褐色土粒が混入する。壁はほぼ直に掘り込まれているが遺存状況は悪く8～16 cm 残存するのみである。床面は多少起伏に富むが黄褐色を呈し堅く良好である。南壁際床面は、壁方向へなだらかに傾斜する。カマド及びピットは検出されなかった。

遺物は土師器坏・甕、灰釉陶器碗、刀子・釘等の鉄製品等が、本址北西隅と南東隅より集中的に出土している。これらよりみて南栗XI期に帰属すると考えられる。



第87図　第25号住居址

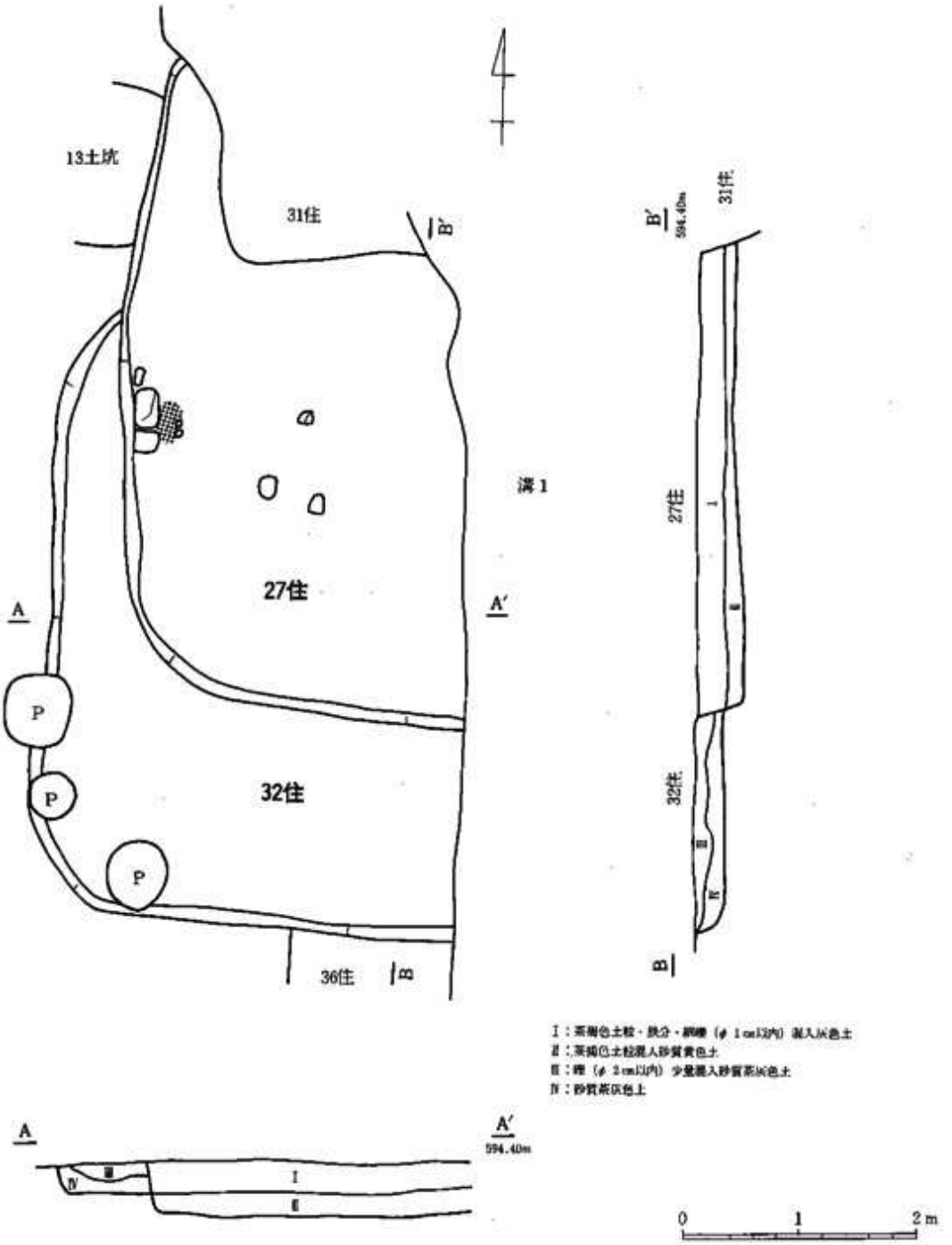
第27号住居址

本址は調査区西部北端に位置する。32住、13土坑を切り、31住、1溝に大半を切られ全貌はとらえ難い。当初は27住と32住を一軒と考えて検出したが、掘り下げ時の土層断面に27住の壁の立ち上がりを確認した。平面形状は一辺4 m四方の方形プランを呈すると考えられる。覆土は細礫(φ 1 cm以内)混入灰色土と砂質黄褐色土の二層に分層された。壁は直に掘り込まれ、残存高は最高部で西壁18 cm、北壁37 cmを測る。床面は中央部が黄褐色で堅くたたきしめられているが、壁際周辺は軟弱である。焼土は西壁中央部付近に若干量見られる。この付近から拳大～人頭大の礫の散布が見られたが、カマドの石組みの一部であるとは言い難い。ピットは検出されなかった。

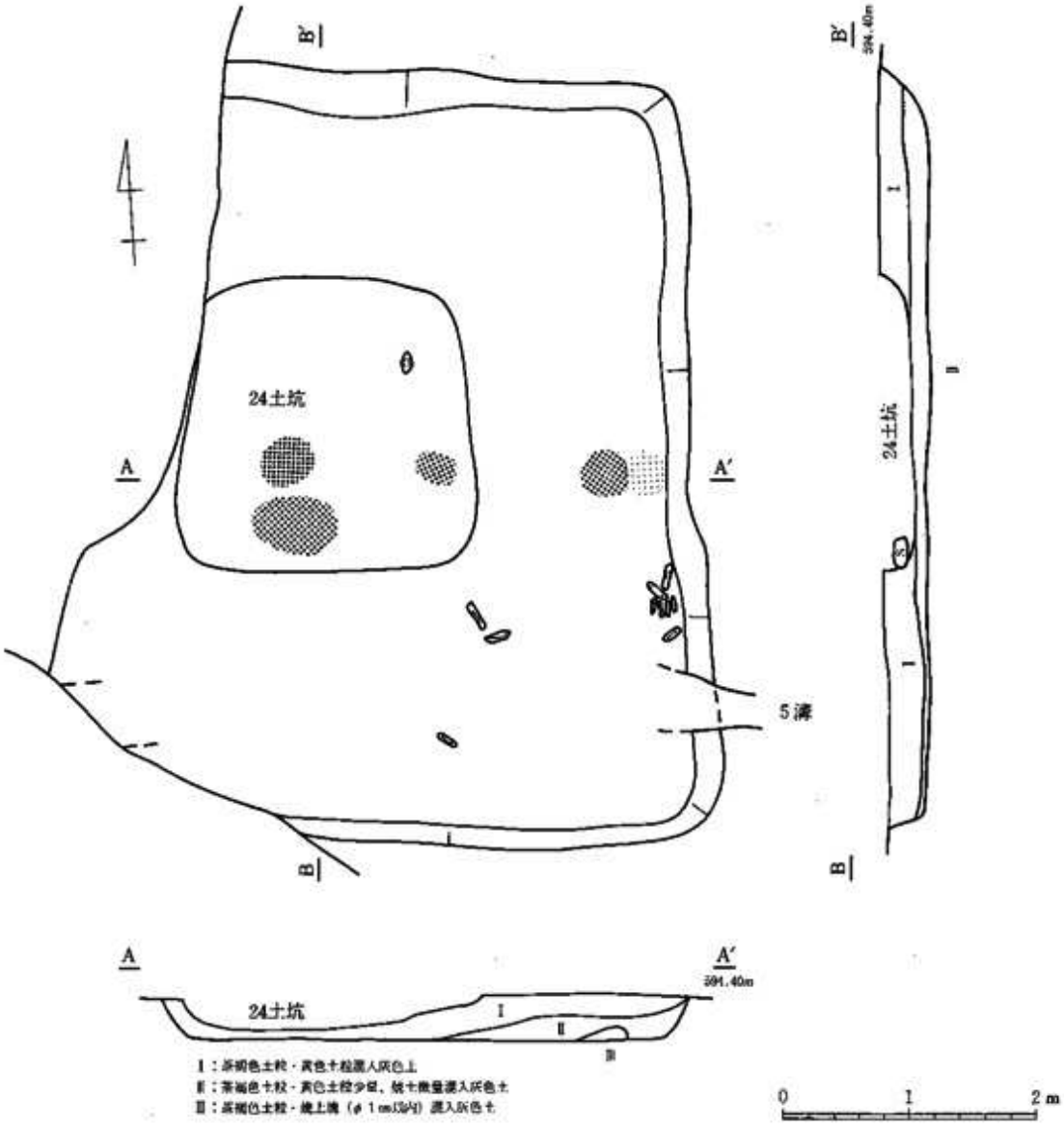
遺物は少量で土師器坏、須恵器坏、灰釉陶器片等である。出土遺物が少なく時期決定は困難であるが、南栗X～XI期に属すると考えられる。

第28号住居址

本址は調査区中央南端に位置する。1・5溝、24土坑に切られている。平面形状は、一辺6 mの方形プランを呈すると考えられる。覆土は二層に分けられる。北側は流路際を掘り込んでいるため小礫が壁、床に露出し、覆土中にも混入する。壁はややなだらかに掘り込まれ、残存高は東壁32 cm、南壁23 cm、北壁34 cm残存する。床面は平坦で灰褐色を呈する。中央部のみ堅固で、壁際は軟弱で



第88図　第27・32号住居址



第89図　第28号住居址

ある。床面南東部には小集石が見られる。これらの細長い小礫は、編物用石錘（こも石）と考えられる。焼土、炭化物は東壁中央付近に若干量見られたが、カマドとなる施設は見受けられない。ピットは検出されなかった。

遺物は土師器甕、須恵器坏・蓋・長頸壺、刀子が出土している。これらよりみて本址は南栗II期に比定される。

第29号住居址

本址は調査区北隅に位置する。10・23住に切られる。平面状は東西5.6 m、南北5.6 m の隅丸方形で、主軸はN—77.5°—Wを指す。覆土は単層で茶褐色土粒・黄色土粒混入砂質灰色土である。壁はほぼ直に立上がり東壁26 cm、西壁28 cm、南壁29 cm、北壁12 cm 残存する。床面はほぼ平坦であるが、中央部北西寄りに一部堅い面が見られるのみで大部分は砂質で軟弱である。カマドは西壁中央付近に位置する。構築材と思われる石は検出されず、主体部は10 cm 程の掘り込みを確認したのである。掘り込み内には、焼土が部分的に堆積しており土師器甕片が多量に出土した。ピットは検出されなかった。

遺物は覆土上層～床面まで点々と混入しており、土師器坏・甕等が出土している。これらの遺物から南栗II期に属すると考えられる。

第30号住居址

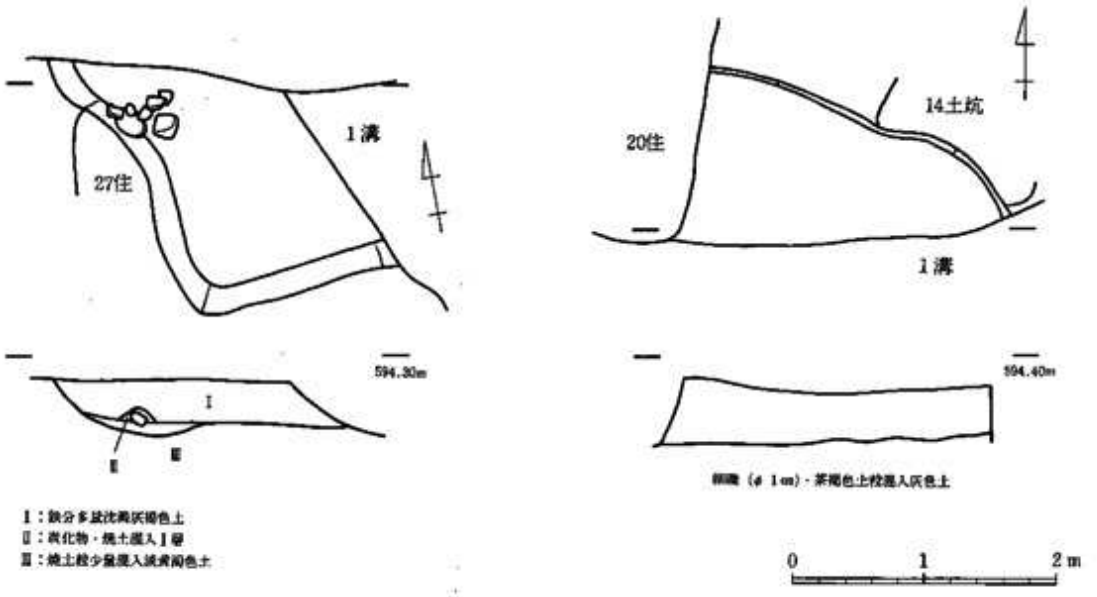
本址は調査区中央南側に位置する。21住、1溝に切られるという重複関係をもつ。規模は南北6.8 m を測り、形状は不整方形を呈すると考えられる。覆土は単層で礫（ϕ 1～4 cm）が混入する暗褐色砂礫層である。床面は平坦であるが堅さは感じられない。北西部は砂礫層を掘り込んでいるため床面、壁面には砂礫が露出する。壁の遺存状況は悪く、5～8 cm 残存するのみである。カマド及びピット等の施設は検出されなかった。

遺物は微量で土師器、灰釉陶器の小片数点が出土したのみである。時期決定は難しいが南栗X期～XI期に属すると考えられる。

第31号住居址

本址は調査区中央北端で約¼が検出された。27住を切り、1溝に切られ、北側約¾が調査区外に有り未発掘である。平面形状は不明瞭であるが、方形を呈すると考えられる。覆土は単層で鉄分が多量に沈澱する灰褐色土である。壁はなだらかに掘り込まれており残存高は10～28 cm を測る。床面は南側へゆるく傾斜しており、堅さは感じられない。カマドは西壁中央部付近に位置し、主体部は中央部～左袖の約½が検出された。火床は床面より10 cm 掘り込まれており焼土粒を多く含有する。黄褐色土が堆積する。ピットは検出されなかった。

第31号住居址　　第33号住居址



第90図　第31・33号住居址

遺物は覆土中及び床面より得られ、土師器坏、灰釉陶器等が出土している。本址は南栗XI期に帰属すると考えられる。

第32・36号住居址

本址は調査区中央北寄り検出された。32住は27住、1溝、P_{116}に切られ、36住を切る。平面形状は南北5.2 mを測り、隅丸方形を呈すると考えられる。覆土は二層に分けられ、上層には礫(φ 2 cm以内）が少量混入する。カマド及びピット等の施設は検出されなかった。

36住は1溝、32住に切られているため¼程しか残存していない。このため平面形状は不明である。覆土は単層で灰色土塊(φ0.5～2 cm)が混入する黄褐色砂層が堆積する。壁はなだらかに掘り込まれ西壁の残存高は18 cmを測る。床面は地山を床とし軟弱である。

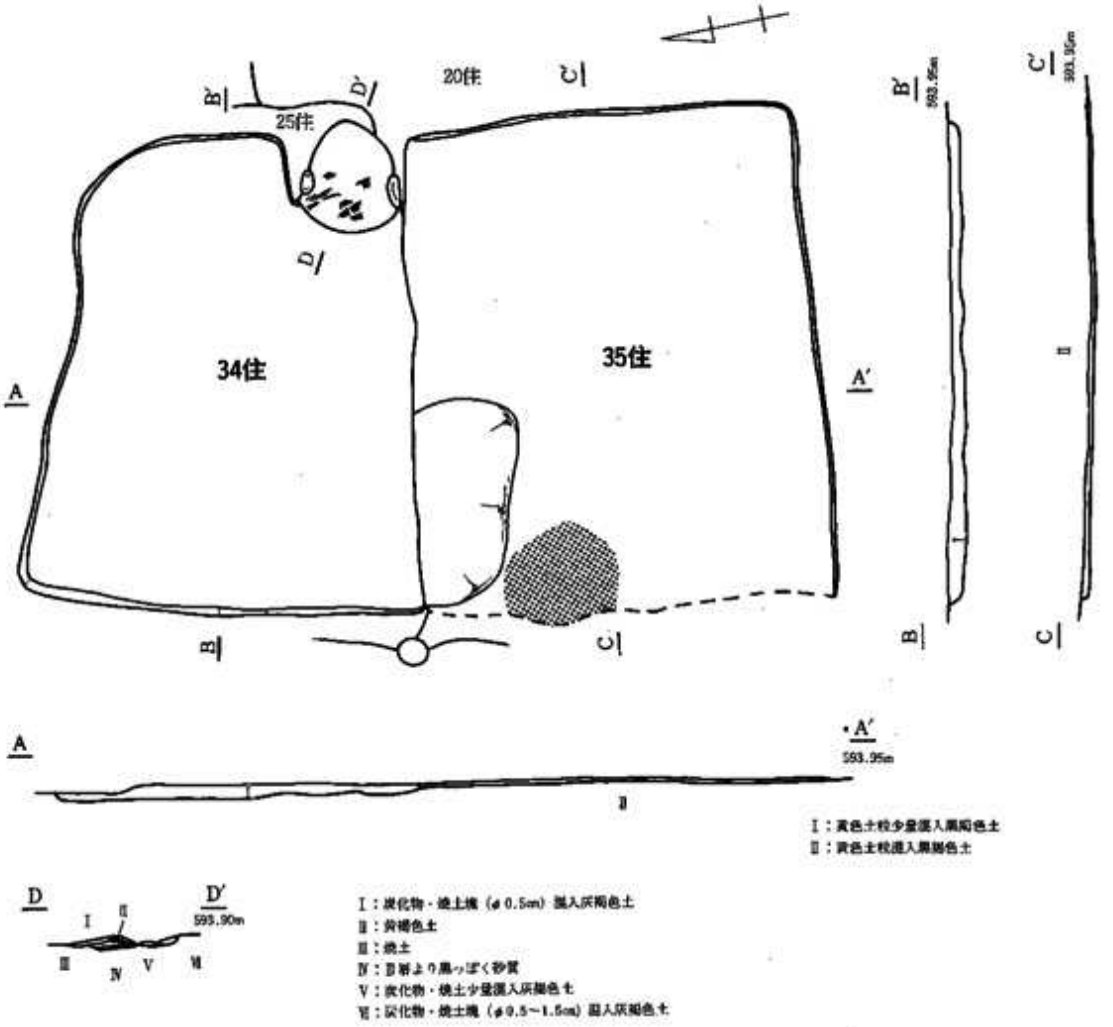
遺物の出土は両住居址共に見られず、時期は不詳である。

第33号住居址

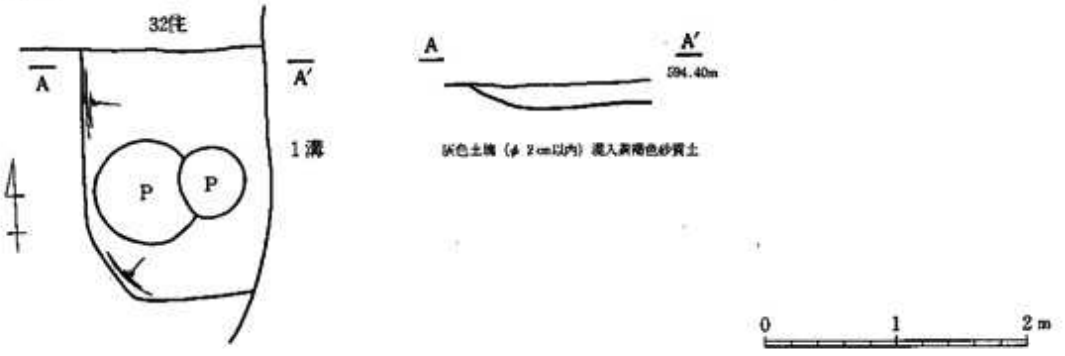
本址は調査区中央やや西寄り南端に位置する。14土坑を切り、20住、1溝にほとんどを切られ、北壁の一部が残るのみである。平面形状は北壁のみではっきりしない。覆土は単層で細礫（φ 1 cm)、茶褐色土粒混入灰色土が堆積する。壁は残存している北壁を見る限りほぼ垂直で壁高46 cmを測る。床面は軟弱で、ピット、カマド等は見られない。

遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土したが、図化し提示でき得るものは無かった。本址の帰属時期は不明である。

第34・35号住居址



第36号住居址



第91図　第34～36号住居址

第34号住居址

本址は調査区西部南側に位置する。20・25住を切り、35住に切られる。平面形状は東西3.7 m を測り、方形を呈すると考えられる。主軸方向はN－105.5°－Eを指向する。覆土は単層で黄色土粒が少量混入する黒褐色土が堆積する。壁はほぼ直に掘り込まれ、6～11 cm 残存する。壁の遺存状況が悪いのは、当時34住を確認できず、25住として掘り下げてしまったからである。床面は北西部に一部堅固な面がみられたが、全体的に軟弱である。ピットは検出されなかった。カマドは東壁中央部付近に検出された。礫の使用はほとんど見られないタイプである。火床内には炭、焼土が10 cm ほど堆積しており、土師器甕片が出土した。

遺物は土師器、須恵器甕が出土しているが、少量のため時期は決め難い。

第35号住居址

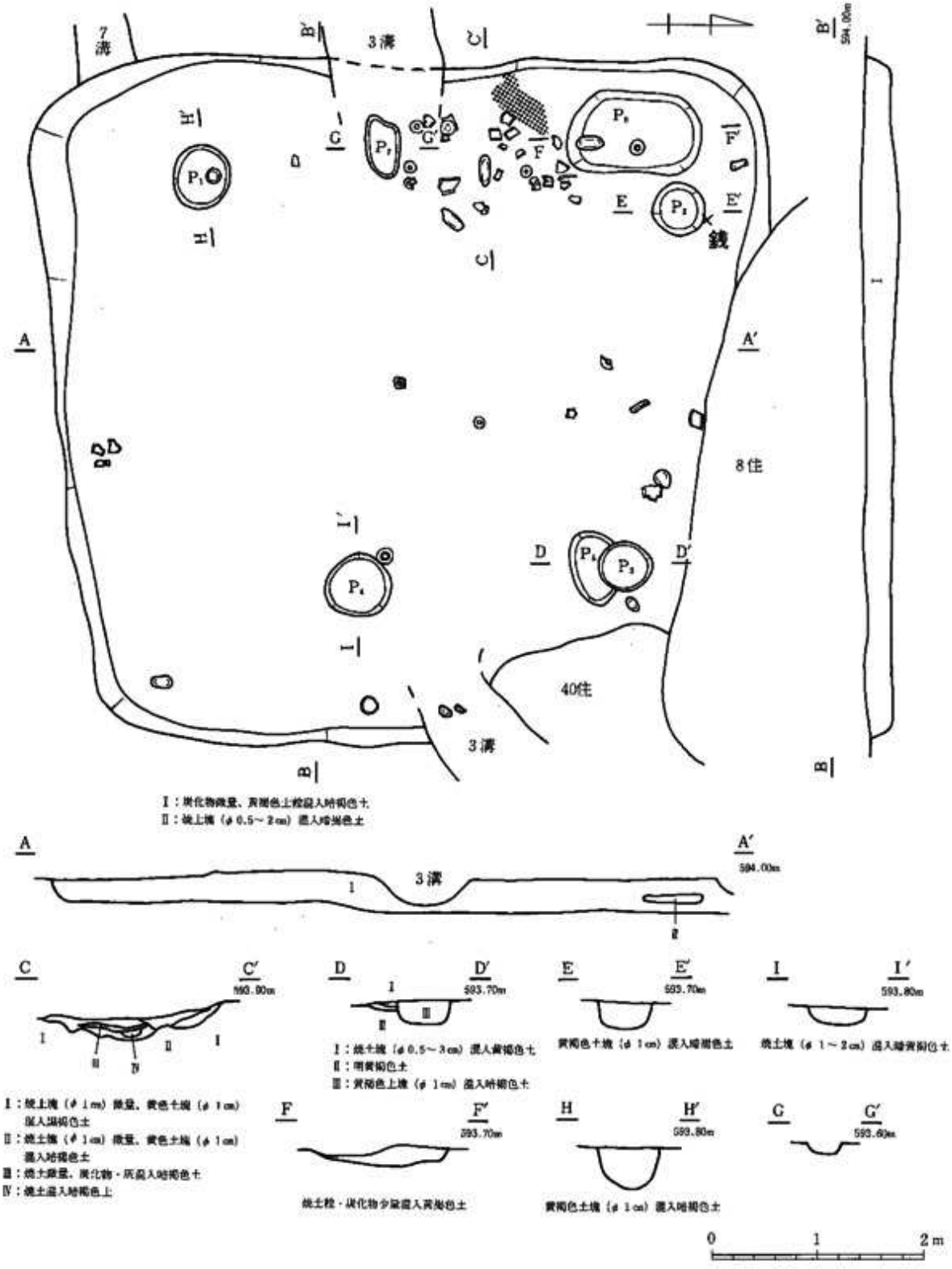
本址は調査区西部南側34住を切って検出された。平面形状は東西3.8 m、南北3.1 m を測る方形を呈し、主軸方向はN－85°－Wを指向する。覆土は単層で黄色土粒混入黒褐色土が堆積する。壁は検出面まで下げた際、上部をかなり削平してしまい、5～8 cm 残存するのみであった。床面は地山を床とし軟弱で、ほぼ平坦であるが、北西部に規模150×70 cm、深さ8 cm の窪みがみられる。内部には炭が堆積していた。また西壁中央やや北寄り付近に焼土が検出された。カマドとして施設は見られない。ピットは見られなかった。

遺物は土師器の小片が微量出土したのみであり、本址の時期は不明である。

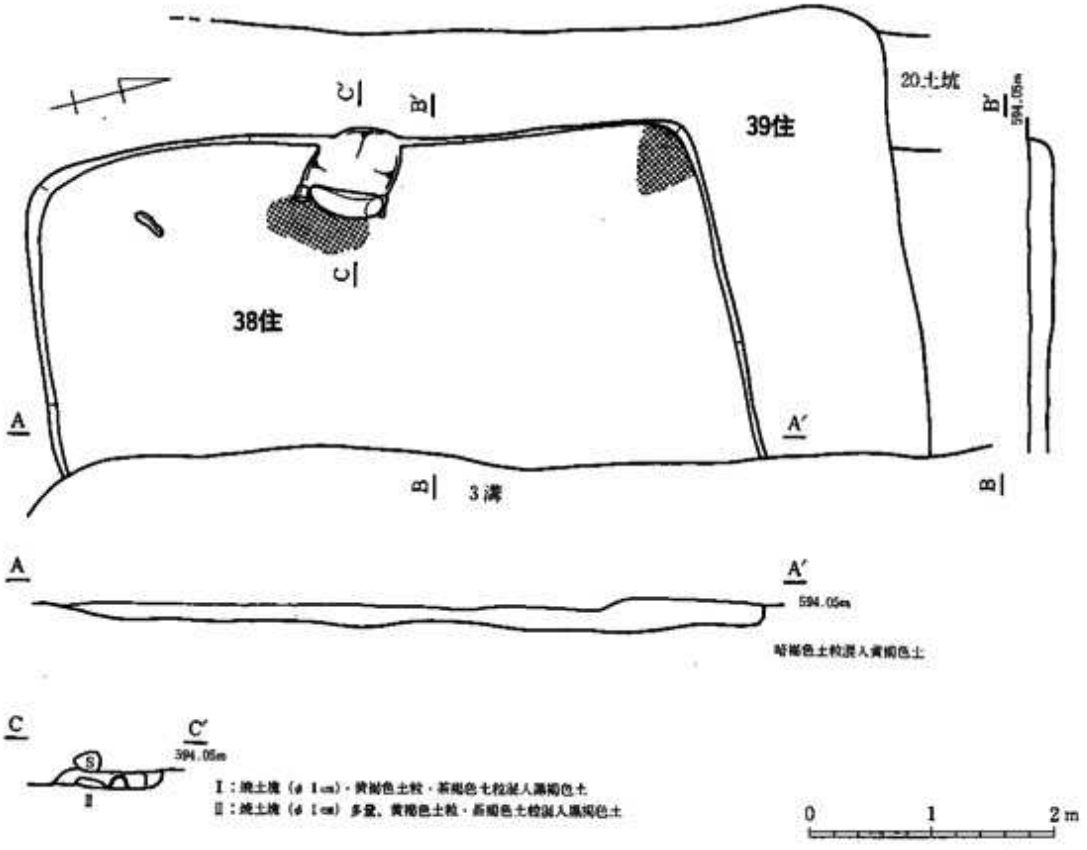
第37号住居址

本址は調査区西側中央に位置する。8・40住、3溝に切られる。平面形状は東西6.6 m、南北7.0 m を測る隅丸方形を呈し、主軸方向はN－90°－Wを指向する。覆土は単層で炭化物、黄褐色土粒混入暗褐色土が堆積する。壁はほぼ直に掘り込まれ、残存高は東壁23 cm、西壁25 cm、南壁23 cm、北壁23 cm を測る。床面はほぼ平坦であるが、カマド周辺は黄褐色を呈し堅く良好であるが、他は貼床されているものの軟弱である。ピットは西壁際に P_1、P_2、P_6、P_7、北東隅に P_3、P_5、東壁中央付近に P_4の合計7個が検出された。P_1～P_5、P_7、は柱穴と考えられる。P_6は大型の浅いピットでカマドの脇に位置するため貯蔵穴的な性格と考えられる。カマドは西壁中央やや北寄りに位置している。左袖のみが残存しており、袖石の1個は立ったまま遺存していた。火床は10 cm 程掘り窪められ、焼土、炭化物が堆積していた。カマド内部及び周辺からは土器片が集中して出土している。

遺物は覆土中及び床面から多量に出土した。土器は土師器坏・埦・皿・甕、須恵器坏等で、鉄器では刀子・巡方・丸鞆・銭で、銭は本遺跡唯一の出土品である。帰属時期は南栗IX期である。



第92図　第37号住居址



第93図　第38・39号住居址

第38・39号住居址

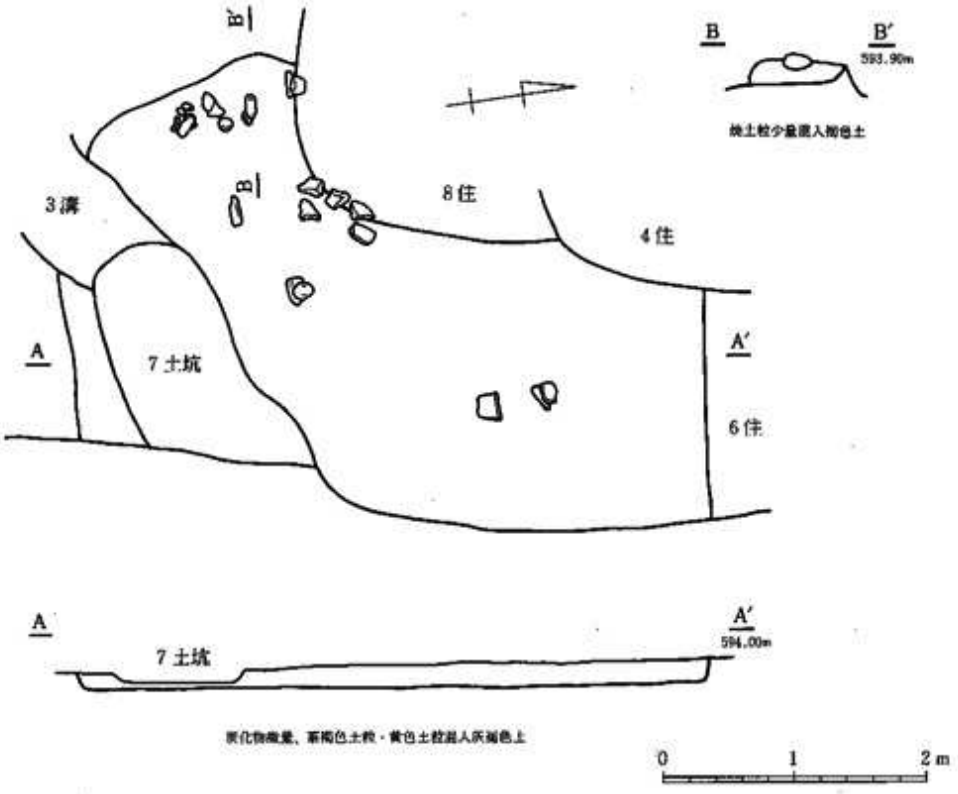
本址は調査区西側中央に位置する。38住は39住を切り、3溝は両住居址を切るという重複関係にある。

38住の規模は南北5.7 mを測り、主軸はN—79°—Wを指向する。覆土は暗褐色土粒が混入する、黄褐色土の単層である。壁は北壁がなだらかであるが、西、南壁はほぼ直に掘り込まれている。残存高は西壁18 cm、南壁10 cm、北壁18 cmを測る。床面は黄褐色を呈し、平坦であるが堅さは感じられない。カマドは、西壁中央付近に位置する石組粘土カマドである。袖石、天井石の一部が残存しているが、遺存状況はあまり良くない。火床は床面より僅かに窪み、焼土が堆積する。中央部より土師器甕が伏せた状態で出土した。床面上北西隅にも焼土が見られ、土師器甕片が出土している。ピット等は検出されなかった。

遺物は須恵器瓶、土師器が出土したが、所属時期は不明である。

39住は、北壁及び北西隅のプランは確認できたが、他のプランは不明瞭であった。覆土は砂利混入黄褐色土の単層である。壁はほぼ直に掘り込まれ、残存高は10 cmを測る。床は、北側に一部堅い面があったが他の大部分は軟弱で判然としない。ピット及びカマドは検出されなかった。

遺物は土師器、須恵器の小片が微量出土したのみで、時期決定は困難である。



第94図　第40号住居址

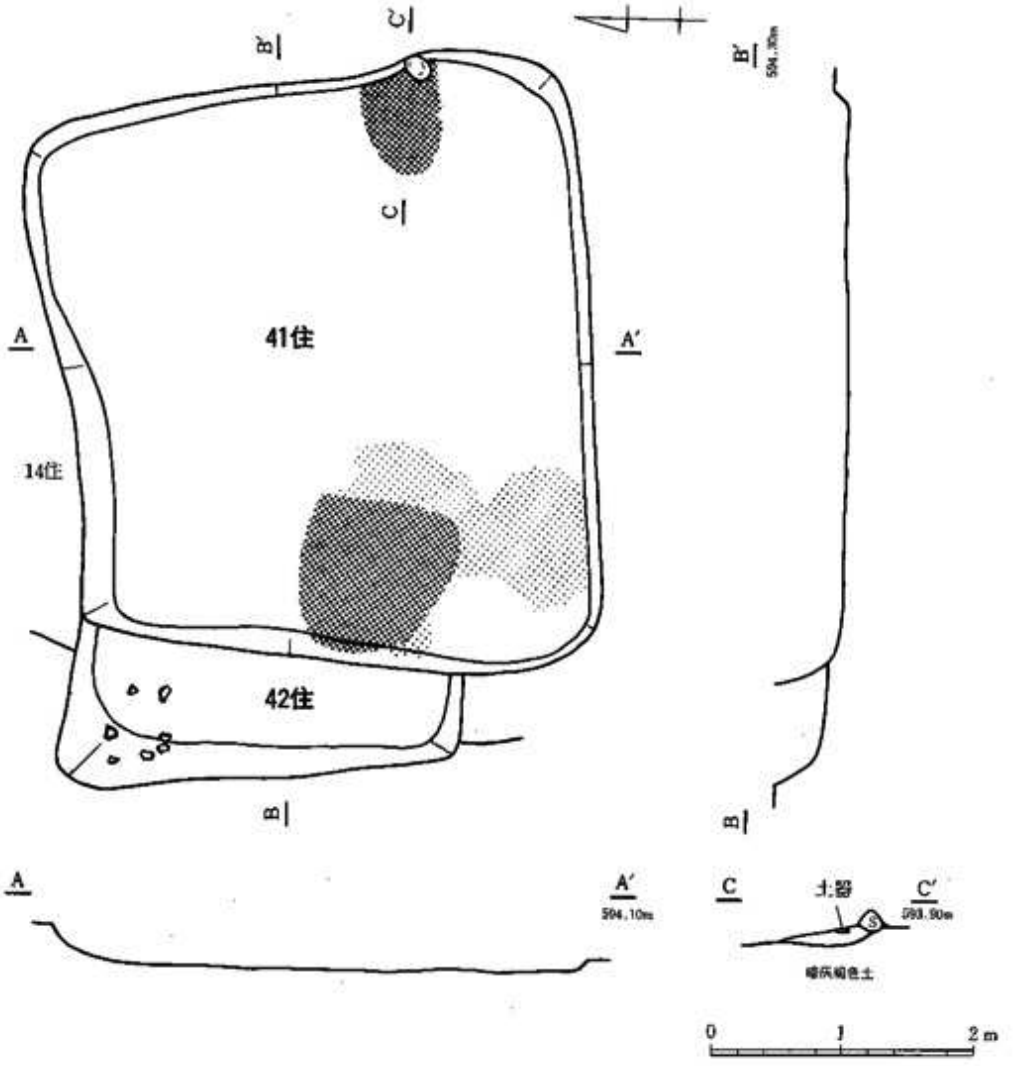
第40号住居址

本址は調査区東端中央付近に検出された。37住を切り、4・8住、3溝、7土坑に切られる。規模は南北4.5 m を測り、主軸はN—90°—Wを指向する。壁は残存する西、南壁の一部で観察すると、ほぼ直に掘り込まれており、残存高は西壁19 cm、南壁17 cm を測る。床面は中央部が黄灰褐色を呈し堅固であるが、壁周辺は軟弱である。覆土は、茶褐色土粒、黄色土粒、炭化物が混入する灰褐色の単層である。カマドは西壁南側に位置する。その主体部は両袖石の数個が残存するものの天井石等はカマド内に落ちた状態で検出された。火床部は僅かに掘り窪められ焼土粒混入の褐色土が10 cm 堆積していた。ピット等は検出されなかった。

遺物は主にカマド内及びその周辺より出土している。土師器坏・甕、須恵器坏等がみられ、本址は南栗X期に帰属すると考えられる。

第41・42号住居址

本址は調査区中央南側に位置する。41住は42住を切り、14住は41・42を貼床し、41住の平面形状は隅丸方形を呈し、東西4.8 m、南北4.2 m を測る。主軸方向はN—96°—Wを指向する。覆土は礫(φ 2～6 cm)混入暗灰褐色土の単層である。壁はややなだらかに掘り込まれており、残存高は最高部で東壁18 cm、西壁7 cm、南壁15 cm、北壁21 cm を測る。床面は南側に向ってゆるく傾斜している。



第95図　第41・42号住居址

堅さは感じられず、西側には炭化物と焼土が広範囲に見られる。カマドは東壁南側に位置し、その主体部は片側の袖石１個と火床が残存するのみである。火床部は11 cm ほど掘り窪められ、焼土が堆積する。焼土中より、須恵器片、土師器片が出土している。ピットは検出されていない。

遺物は須恵器坏、土師器甕等が出土しているが、帰属時期は不明である。

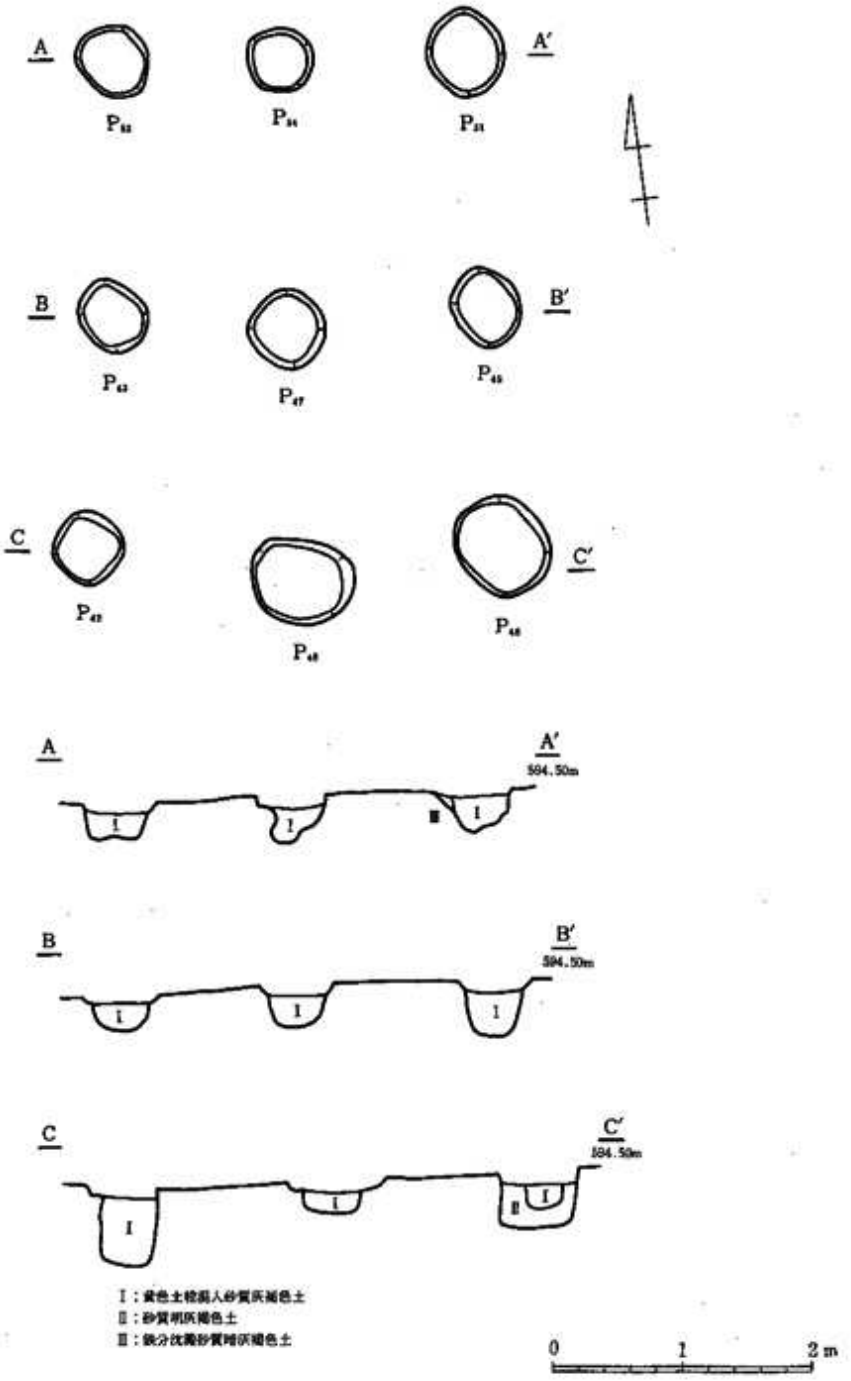
42住は大半を41住に切られているため西側⅓程しか残存していない。平面形状は一辺3.0 m 程の方形プランを呈すると推定される。覆土は黄褐色土塊が多量に混入する灰褐色土の単層である。壁は西壁で観察する限り、ややなだらかに掘り込まれ残存高は30 cm を測る。床面は平坦で軟弱である。北西隅からは、土器が集中して出土した。

遺物は土師器、須恵器の小片ばかりで図化できるものはなかった。本址の時期は不明である。

第8表　　SK V 住居址一覧表

住居No.	平面形(m) 大きさ南北×東西	主軸方位	残存壁高(cm)	カマド 位置	カマド 形態	ピット	遺物(数字は土器番号)	備考
1	長方形 3.00×1.97	N-99°-E	17～37	—		—	1	P32に切られる
2	隅丸方形 2.52×2.45	N-10°-E	57～71	—		—	2～4	1土坑を切る
3	隅丸方形？ —×6.40	N-70°-E	20～34	東壁南寄り	不明	1	5～14	4・5住を切る
4	隅丸方形 5.55×5.24	N-17°-E	35～44	東壁		1	15～49	5・6・7・8・26住を切る 3住、4土坑に切られる
5	不明 —	—	37			—	50～55	6住を切る 3・4住に切られる
6	隅丸方形 6.27×—	—	—	—		1	56～65	3・4・5・8住に切られる
7	隅丸方形 4.03×3.70	N-21°-E	10～17	—		—	66、67	4住に切られる
8	隅丸方形 6.48×6.85	N-18°-E	13～26	—		1	68～73	37・40住を切る、26住に貼られる 4住に切られる
9	隅丸方形 7.28×6.92	N-82°-E	31～36	東壁中央やや南寄り	石組	3	74～89	5溝を切る 14・15・26住に切られる
10	隅丸方形？ 3.80×—	N-107°-E	13～27	東壁中央	石組	—	90～96	29住を切る
11	隅丸方形 3.63×(4.15)	N-115°-E	11～14	東壁北寄り	石組	—	97～100	12住を切る
12	隅丸方形 4.18×(4.00)	N-62°-W	16～38	東壁中央？		—	101、102	11住に切られる
13	不整方形 2.70×3.27	N-99°-E	6～10	東壁北寄り	石組	—	103～105	
14	隅丸方形 7.55×6.09	N-11°-E	17～26	—		1	106～110	9住を切る
15	隅丸方形 3.63×4.03	N-12°-E	25～29	—		1	111～120	9住を切る
16	隅丸長方形 3.45×4.30	N-72°-W	4～10	—		—	121	11土坑に切られる
17	隅丸方形？ —×5.54	—	42～47			—	122、123	18住を切る
18	不明 —×3.15	—	19～25			—		24住を切る 17住、Pに切られる
19	隅丸方形 3.54×3.24	N-13°-W	6～10	—		—	124、125	10土坑に切られる
20	長方形 4.94×7.73	N-86°-W	56	西壁南寄り	不明	—	126～133	33住を切る 25・34・35住、Pに切られる
21	不明 5.64×—	N-81.5°-W	7～13	西壁中央	石組	—		30住を切る 1溝に切られる

住居No.	平面形(m) 大きさ南北×東西	主軸方位	残存壁高(cm)	カマド 位置	カマド 形態	ピット	遺物(数字は土器番号)	備考
22	隅丸方形 4.24×5.03	N-26°-E	18～38	北壁東寄り	石組	—	142～152	24住、23土坑を切る P41に切られる
23	隅丸方形 3.24×3.20	N-119.5°-E	20～36	東壁中央やや南寄り	石組	—	153～159	29住を切る 1竪に切られる
24	不明 —	—	—			—		16土坑を切る 18・22住、17・18土坑、Pに切られる
25	隅丸方形 3.97×4.24	N-83°-W	47～56	—		—	160～163	20住を切る 34・35住、Pに切られる
26	隅丸方形 3.94×6.15	N-17°-E	8～16	—		2	164～190	8住を切る 4住に切られる
27	不明 4.06×—	—	18～37	西壁中央？		—		32住、13土坑を切る 31住、1溝に切られる
28	方形？ 6.18×—	—	23～34	—		—	191～199	24土坑、1・5溝に切られる
29	隅丸方形 5.68×5.64	N-77.5°-W	12～29	西壁中央やや南寄り	不明	—	200、201	10・23住、Pに切られる
30	不明 6.80×—	N-100°-W	5～8	—		—	202、203	21住、1溝に切られる
31	方形？ —	—	10～28	西壁中央	石組	—	204～206	27住を切る 1溝に切られる
32	隅丸方形 5.27×—	—	—			—		36住を切る 27住、1溝、Pに切られる
33	不明 —	—	46	—		—		14土坑を切る 20住、1溝に切られる
34	方形？ —	N-105.5°-E	6～11	東南隅	粘土	—	207、208	20・25住を切る 35住、Pに切られる
35	方形 3.18×3.89	N-85°-W	5～8			—		20・25・34住を切る Pに切られる
36	不明 —	—	18			—		32住、1溝、P38・39に切られる
37	隅丸方形 7.06×6.61	N-90°-W	23～25	西壁中央北寄り	石組	9	209～265	7溝を切る 8・40住、3溝に切られる
38	不明 5.72×—	N-79°-W	10～18	西壁中央	石組	—	266～271	39住を切る 3溝に切られる
39	不明 —	—	10	—		—		20土坑を切る 38住、3溝に切られる
40	不明 4.58×—	N-90°-W	17～19	西壁隅寄り	石組	—	272、273	37住を切る 4・8住、3溝、7土坑に切られる
41	隅丸方形 4.24×4.85	N-96°-W	7～21	東壁中央南寄り	石組	—	274～276	42住を切る 14住に貼られる
42	方形？ 3.12×—	—	30	—		—	277～282	14住に貼られる 41住に切られる



第96図　建 物 址

2）建物址

建物址

本址は、調査区西側ほぼ中央に検出された。形態は桁行２間×梁行２間の長方形を呈する総柱式で、桁行方向はN－6°－Eを指向する。規模は桁行全長3.8ｍ、梁行全長2.8ｍで柱間寸法は桁行１間1.9～2.1ｍ、梁行１間1.4～1.7ｍを測る。柱穴は、掘り方はほぼ円形で、砂質灰褐色土が砂質明灰褐色土で検出された。規模は、最大85×70 cm、最小52×49cm、深さ28～58cmを測る。柱穴のほとんどがU字形に掘られているが、P_{51}はV字形、P_{44}は不整U字形を呈する。柱痕が確認できるピットはなかった。

遺物はP_{46}より土師器坏１点が出土した。他のピットからは遺物が得られなかった。出土遺物が少なく帰属時期は不明である。

第９表　　SK V 建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規模(m)	柱間寸法(m)	柱穴規模(cm)				柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見
					No.	長径	短径	深さ			
1	長方形	N－6°－E	2間×2間 4.1×3.2	桁 1.9～2.1 梁 1.4～1.7	42	55	52	58	円形		20住・25住・35住の西側に位置する。
					43	58	30	26	楕円形		
					44	52	49	35	円形	断面不整U字形	
	総柱式				45	58	55	44	楕円形		
					46	81	70	46	楕円形		
					47	64	60	33	円形		
					48	85	70	28	楕円形		
					51	70	60	29	楕円形	断面V字形	
					52	64	52	30	円形		

3）竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構

本址は調査区北西端に位置する。23住を切り、12土坑に切られる。また北側½程が調査区域外に延びており未調査である。規模は東西2.4ｍを測り、形状は隅丸方形を呈すると考えられる。覆土は鉄分、茶褐色土粒混入砂質灰色土の単層である。検出時に削りすぎて壁の遺存状況は悪く、ほぼ直に掘り込まれているが残存高は８～16 cmを測る。床面はほぼ平坦であるが砂質で軟弱である。カマド及びピット等は検出されなかった。

遺物は覆土中より土師器坏１点が出土した。出土量が少なく本址の帰属時期は不明である。

4）土　坑

今回の調査で検出された土坑は、第1検出面5基、第2検出面19基で合計24基を数える。第1検出面では調査区東側及び中央付近に集中しており、第2検出面では調査区全域に分布していた。平面形は楕円形が半数を占める。規模は最大が9土坑（径212×136 cm、深さ20 cm）で、最小は5土坑（径91×73 cm、深さ8 cm）であった。最も多いのは長径130×160 cm程のもので10基を数える。断面形はU字状を呈するものが多く、8割を占める。覆土中焼土、炭化物が見られるものは9基（2・5・7・9・10・16・17・18・23土坑）あり、このうち骨片を出土したものが2基（2・5土坑）ある。骨片を出土したものは概して平面形状は長方形を呈し、長軸方向はほぼ南北を向く。これらは墓址と思われる。土器を伴う土坑は6基（1・7・9・15・19・23土坑）ある。覆土はほとんどが単層で砂質のものが多く土色は灰色が多い。3・10・24には礫が混入する。時期、性格等が決められるものはほとんどない。以下、特徴的なものについて述べることにする。

2土坑

第1検出面東部に位置する。平面形状は径167×121 cm、深さ30 cmの長方形を呈する。覆土は灰色で茶褐色土粒、赤褐色土塊、炭化物が混入する。壁はほぼ直に立ち上がり、底面は平坦である。火を受けた痕跡は見受けられないが覆土中から焼骨と炭が出土した。人骨片は一体分に満たず、他に遺物の出土もない。性格としては墓と考えられる。

5土坑

第1検出面中央に位置する。平面形状は径91×73 cm、深さ8 cmの長方形を呈する。大部分が重機により削平されてしまい遺存状況は悪い。覆土は、多量の炭化物が堆積する。掘り込みは浅く、中央に向って緩やかに落ち込む。焼土は掘り込みに沿って輪状に見られたが、特に西側には顕著に見られた。底面のほぼ全域から人骨が多量に出土した。本址の性格は火葬墓と考えられる。

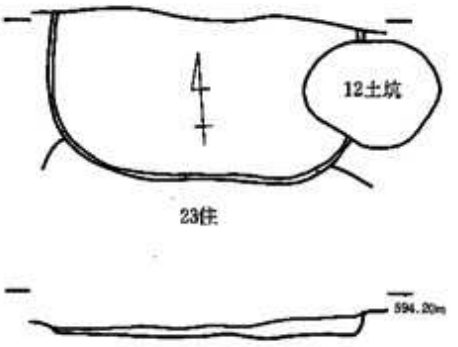
9土坑

第2検出面側に位置し、6住を切って検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、径212×136 cm、深さ20 cmを測る。覆土は黄褐色の単層で、焼土塊、炭化物が混入する。遺物は、土師器坏・埦・皿・甕等が出土している。

23土坑

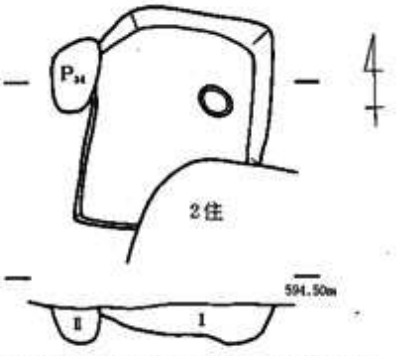
第2検出面東側で4住に貼床され8・26住を切って検出された。平面形状は楕円形を呈し径145×106 cm、深さ40 cmを測る。覆土は黒褐色土の単層で焼土塊、炭化物、茶褐色土塊が混入する。内部には拳大～人頭大の礫が多量に混入し、土師器坏が多量に出土した。土器廃棄遺構としての性格も考えられる。

第１号竪穴状遺構



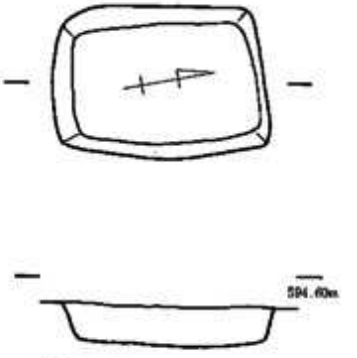
鉄分・茶褐色土粒混入砂質灰色土

第１号土坑



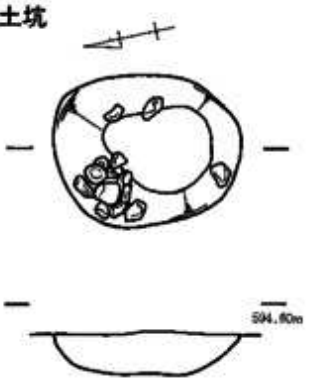
Ⅰ：茶褐色土粒（φ0.5cm）・黄色土塊（φ 2～3cm）混入灰色土
Ⅱ：茶褐色土粒（φ0.5cm）混入灰色土

第２号土坑



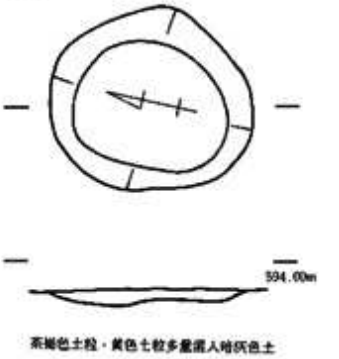
茶褐色土粒・赤褐色土塊（φ0.5cm）混入、炭化物微量混入灰色土

第３号土坑



茶褐色土塊（φ0.3～0.5cm）・黄色土粒混入灰色土

第４号土坑

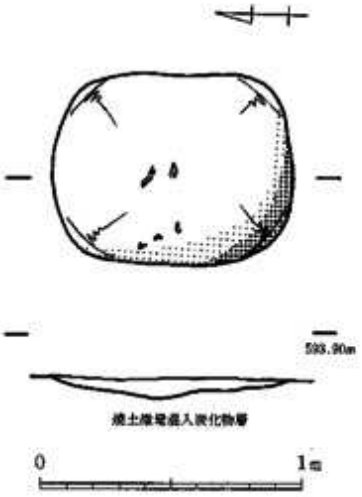


茶褐色土粒・黄色土粒多量混入暗灰色土

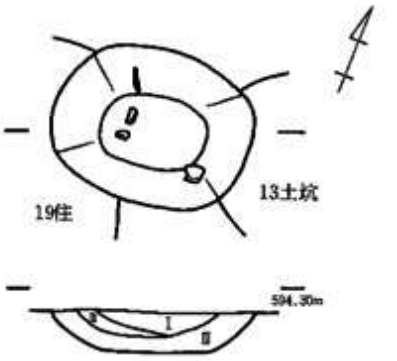
0　1　2 m

第97図　竪穴状遺構・土坑(1)

第５号土坑

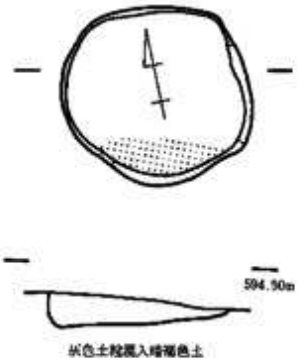


第10号土坑

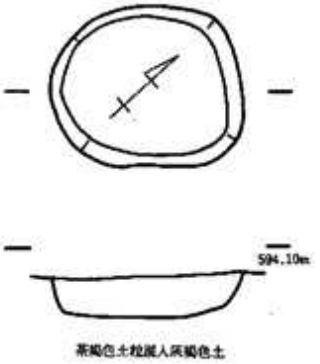


Ⅰ：鉄分・茶褐色土粒混入灰色土
Ⅱ：茶褐色土粒・炭化物・焼土微量、黒灰色土塊（φ0.5～2cm）混入灰色土
Ⅲ：茶褐色土粒・炭化物微量混入灰色土

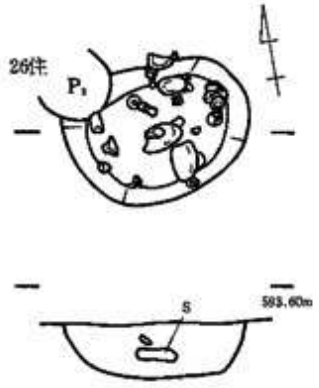
第６号土坑



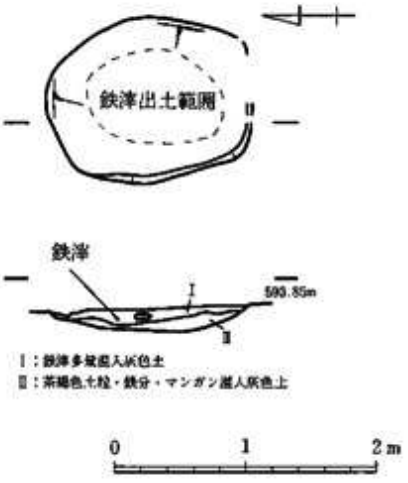
第15号土坑



第23号土坑

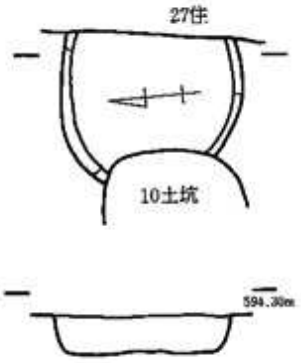


第19号土坑



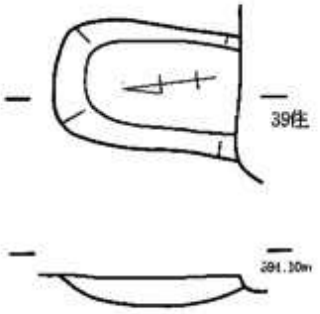
第98図　土 坑 (2)

第13号土坑



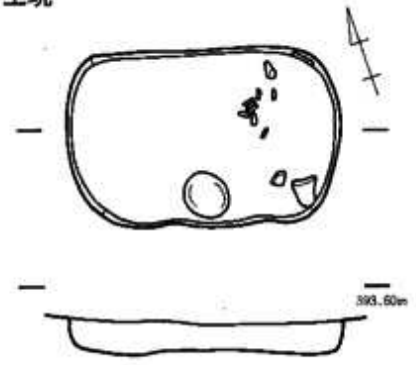
鉄分・茶褐色土粒混入暗灰色土

第20号土坑



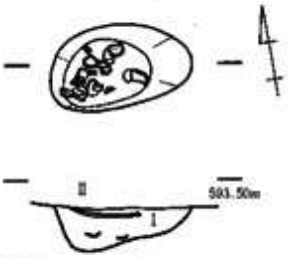
鉄分混入暗褐色土

第 9 号土坑



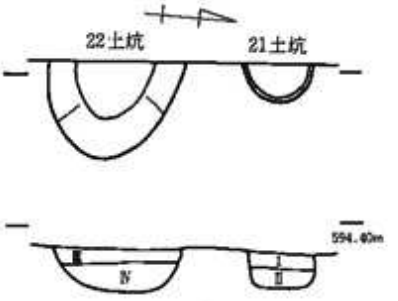
焼土塊（φ 1cm）混入、炭化物微量混入黄褐色土

第25号土坑



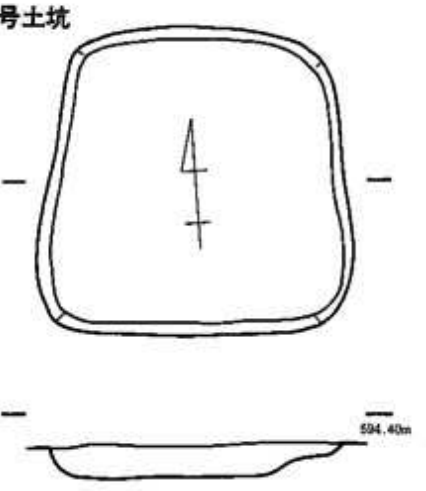
Ⅰ：焼土塊（φ 1～5cm）・炭化物・灰混入暗黄褐色土
Ⅱ：灰・炭層

第21・22号土坑



Ⅰ：鉄分・茶褐色土粒・礫（φ 2cm以内）混入灰色土
Ⅱ：鉄分・茶褐色土粒多量、礫（φ 2cm以内）混入灰色土
Ⅲ：茶褐色土粒・礫（φ 2cm以内）混入灰色土
Ⅳ：茶褐色土粒多量混入灰色土

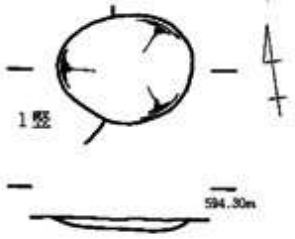
第24号土坑



礫（φ 0.5～5cm）・茶褐色土粒・黄色土粒混入灰色土

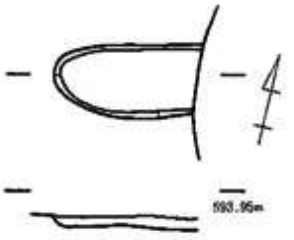
第99図　土 坑 (3)

第12号土坑



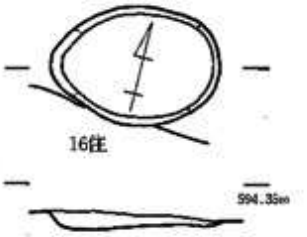
茶褐色土粒、灰色土塊（φ0.1～0.5cm）・黄色土塊（φ0.1～0.2cm）混入暗褐色土

第8号土坑



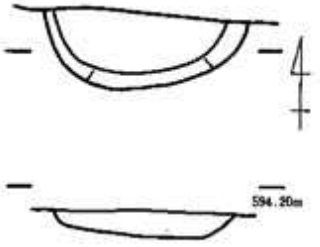
茶褐色土粒・黄色土塊（φ0.3～0.5cm）混入灰色土

第11号土坑



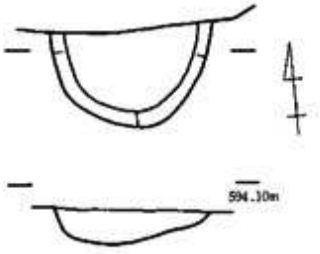
礫（φ1～3cm）混入黒褐色土

第18号土坑



炭化物・黄褐色土塊（φ0.5cm以内）混入砂質暗褐色土

第17号土坑

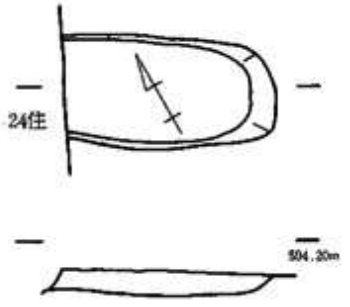


炭化物・黄褐色土塊（φ0.5cm以内）混入砂質暗褐色土

第14号土坑

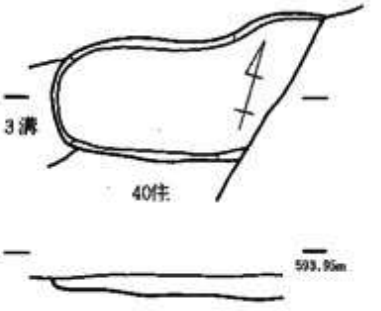
Ⅰ：細礫（φ0.5～1cm）・灰色土塊混入暗褐色土
Ⅱ：灰色土塊混入暗褐色土

第16号土坑

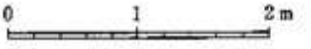


炭化物少量、黄褐色土塊（φ0.5～1cm）混入暗褐色土

第7号土坑



黄色土塊（φ5cm）・炭化物少量、茶褐色土粒多量混入灰色土



第100図　土 坑 (4)

第10表　　SK V　土坑一覧表

番号	平面形	規模(cm) 長径×短径×深さ	長軸方向	遺物 (数字は土器番号)	備考
1	長方形	161×139×—	N—5.5°—E	284	
2	長方形	167× 12×30	N—10°—E		
3	楕円形	149×118×34	N—12°—E		
4	楕円形	155×139×17	N—14.5°—W		
5	長方形	91× 73× 8	N— 3°—E		
6	円形	155×139×18	N—78°—W		
7	不整楕円形	—× 94×12	N—106°—W		
8	楕円形？	—× 58× 7	N—103°—W		
9	隅丸方形	210×138×29	N—12°—E	285～291	6住を切る。土器多量に出土
10	隅丸長方形	151×121×29	N—71°—E		
11	楕円形	127× 94× 8	N—77.5°—E		
12	楕円形	103× 84× 9	N—82°—W		
13	楕円形？	—×139×25	—		
14	長方形	133× 91×33	N—71°—W		
15	不整長方形	148×124×35	N—43°—E		
16	長方形？	—× 88×20	—		
17	円形？	—×127×27	—		
18	円形？	—×154×35	—		
19	不整楕円形	158×133×20	N—2.5°—E	292、293	
20	長方形？	—× 97×21	—		
21	円形？	—× 55×18	—		
22	楕円形？	—×103×36	—		
23	楕円形	144× 98×38	N—11.5°—W	294～306	26住を切る。土器多量に出土
24	方形？	—× —×26	N—3.5°—E		
25	楕円形	112× 64×34	N—90°—W	307～333	4住を切る。土器多量に出土

5）溝址

溝は第1検出面で1・2溝の2本、第2検出面で3・4・5・6溝の4本検出された。以下、各々について概観を述べる。

1溝

調査区中央を南北に走り、南端で西側へ屈曲する。位置的には現在の畦畔とほぼ一致しており、それに先行する溝と思われる。幅1.5～3.0 m、深さ60 m を測り、断面形はU、あるいはV字状を呈する。埋土中および底面には鉄分の沈殿が見られ、流水の痕跡がうかがえる。底面は、北から南、さらに西へと僅かに傾斜している。遺物は、覆土中より、須恵器、土師器、灰釉陶器、内耳鍋の小片が少量出土した。本址の時期は、21・27・30・32・33・36住を切る関係及び遺物から中世に属すると考えられる。また走行方向から区画としての性格が考えられる。

2溝

調査区南東隅から南端中央付近に蛇行する。幅0.4 ～0.7 m、深さ10 cm ほどを測り、断面形はU字状を呈する。底面には鉄分の沈殿が見られ、流水のあった可能性がある。遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器が出土した。

3溝

調査区北東隅に屈曲して検出された。37・38・39・40住を切り、7土坑に切られる。幅0.7～0.9 m、深さ16～30 cm を測り、断面形はU字状を呈する。埋土中および底面には鉄分の沈殿が見られ、流水の痕跡が見られる。走行方向から区画のための性格が考えられる。遺物は須恵器甕・甕、土師器坏・鉢・皿、灰釉陶器皿・碗等が出土した。切り合い等からみて本址の時期は平安時代後期以降のものである。

4溝

調査区南東隅に検出された。東半分は2本に分かれており、6溝を切る。幅0.7～1.5 m、深さ15～30 cm を測る。断面形はU字状を呈し、覆土中及び底面には鉄分の沈着が見られる。遺物は須恵器、土師器少量出土している。

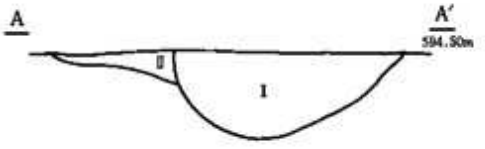
5溝

調査区中央南端に東西方向に走る短い溝である。幅0.5 m、深さ8 cm を測り、断面形は浅いU字状を呈する。覆土は鉄分混入青灰色の単層で、鉄分の沈着が見られる。遺物は土器片が微量出土したのみである。

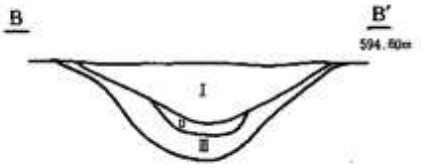
6溝

調査区東南隅に位置する。4溝に切られている為、形態がはっきりしない溝である。幅50 cm、深さ30 cm を測り、断面形はU字状を呈する。覆土は灰色土をベースとした二層に分層され酸化鉄の堆積が顕著に見られる。流水の痕跡と考えられる。遺物は、全く出土しなかった。

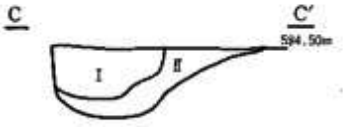
第1号溝址



Ⅰ：鉄分・茶褐色土粒・黄色土粒混入灰色土
Ⅱ：鉄分・黄色土粒混入、茶褐色土粒多量混入灰色土



Ⅰ：鉄分・茶褐色土粒・礫（φ 3～4cm）混入灰色土
Ⅱ：茶褐色土粒少量混入粘質灰色土
Ⅲ：茶褐色土粒・礫（φ 2cm）混入灰色土



Ⅰ：鉄分・黄色土粒混入、茶褐色土粒多量混入灰色土
Ⅱ：茶褐色土粒少量混入粘質灰色土

第2号溝址

Ⅰ：細礫（φ 0.5～1cm）・茶褐色土粒混入暗灰色土
Ⅱ：鉄分多量混入茶褐色土

第3号溝址

鉄分・茶褐色土粒・黄色土粒混入、
細礫（φ 1～3cm）少量混入灰色土

鉄分・茶褐色土粒・黄色土粒混入、
細礫（φ 1～3cm）微量混入灰色土

茶褐色土粒・黄色土塊（φ 0.5～1cm）混入、
細礫（φ 0.5～1cm）微量混入灰色土

第4号溝址

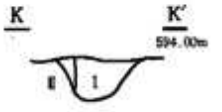
Ⅰ：鉄分・マンガン少量混入灰色土
Ⅱ：鉄分・マンガン多量混入灰色土

Ⅰ：鉄分・マンガン少量混入粘質灰色土
Ⅱ：鉄分・マンガン混入灰色土
Ⅲ：鉄分・マンガン微量混入灰色土

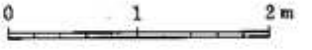
第5号溝址

鉄分混入青灰色土

第6号溝址



Ⅰ：鉄分・マンガン沈澱灰色土
Ⅱ：鉄分・マンガン多量沈澱灰色土



第101図　溝　址

3．遺物

1）土器・陶器

(1)概要

第Ⅴ次調査では、各遺構内外から多量の土器が出土した。そのほとんどが土師器、須恵器であり、これに若干量の灰釉陶器、微量の緑釉陶器、土師質土器、内耳土器が混入する。一括性の高いと思われる土器群を中心として南栗編年に従いながら、古代から中世の土器を概観してみたい。

◎各遺構出土土器群の様相

Ⅰ期　須恵器坏A（蓋坏）がかなりみられ、古墳時代の土器組成を維持する段階である。今回の調査で該当する遺物群は見られない。

Ⅱ期　須恵器坏Aがなくなり、土師器坏A、須恵器坏Bが大部分を占める。20住・28住・29住からの出土資料が中心となる。

ア）土師器

坏はすべてAで、5点図化している。体部に強いヨコナデの稜（あるいは段）をもって屈曲するもの（126・128・191・200）と体部に稜がなく内湾しながら開くもの（127）に大別される。126は器高が低く扁平で、底部はほぼ平坦である。調整技法は、内外面ヨコナデ調整され、体部下半ケズリの後に内外面にミガキが施されている。

甕は9点出土している（133・136・137・138・139・140・141・199・201）。すべて破片で全形を捉えられるものはない。製作技法は、すべて粘土紐巻き上げが基本となっており、胴部の器面調整は板状工具によりナデが施されるもの（133・136・137・139）と、ハケメを施されているもの（140・199）の2種類がみられる。134は小形甕で内面には縦方向に指ナデが施されており、口縁部に強いヨコナデ痕がみられる。

イ）須恵器

須恵器の出土量は全体的に少ない。須恵器坏Aは全くみられなく、同坏Bも数少ない。図化できたのは3点のみである（193・194・195）。製作技法上の特徴は、底面すべてにヘラ切り痕が見られる。

Ⅲ期　土師器の食膳具は減少し、須恵器坏Bで大半を占められる様相である。9住・25住出土、土器資料が中心となる。

ア）土師器

坏Aは大幅に減少して僅かにしかみられない。甕はAが大半を占める。165・87は胴部外面にハケメ調整が施され、内面は板状工具によりナデがなされている。88・89は、胴部内・外面に板状工具ナデが施されている。89は、口縁部に明瞭な指圧痕が観察できる。88は、器面に明瞭な輪積み痕が残り、口縁部に強いヨコナデ痕が観察できる。なお79・81は混入品と考えられる。

イ）須恵器

坏はBが見られる。坏Bは、体部に明瞭なロクロナデを残すものが多く、器形ではやや内湾気味に立ち上がるもの（161・162）、大きく開きながら立ち上がるもの（163）が見られる。坏Cは3点ほどみられるが、覆土上層からの出土で、底部に回転糸切痕も観察でき、混入品である疑いがある。164の底部にはヘラ記号が観察される。

坏蓋は、B、Cの2種類みられる。蓋Bは口径10.9～12.3 cm、器高1.7～3.0 cmの小形のものが3点（74・75・76）ある。75は焼き歪みがあり、やや扁平な形になっている。蓋Cは口径17.7～20.0 cm、器高4.7 cmのもの2点が出土している。

Ⅳ期～Ⅷ期　本調査では、この期間に属する土器群はみられなかった。

Ⅸ期　食器に大きな変化が見られる時期である。土師器坏Cが多数を占め、椀A、皿A、Bが発生している。須恵器坏Dはさらに減少する。37住土器群があてられる。

ア）　土師器

坏はCのみとなる。口径12.8～14.0 cm、器高3.8～4.5 cm前後に集中するが、226は口径16.8 cm、器高6.1 cmと大形である。ロクロナデ調整され底部には回転糸切痕が残る。224・225は、体部下半に墨書がみられる。

椀はAが新たに見られるようになる。ロクロナデ成形され、内面黒色処理され方射状に暗文が入る。口径14.2～15.0 cm、器高5.0～6.1 cmに集中する。

皿は、内面を黒色処理されたAと内・外面黒色処理されたBの二種類みられる。両方ともに口径12.8～13.9 cm、器高2.3～3.2 cmの範囲内にある。

甕はFが減少し、Eと小型甕Eの組み合わせとなる。

イ）　須恵器

坏Dは5点図化している（241・242・245・246・248）。器厚は薄く、ロクロナデ痕が明瞭となり、体部の開きが大きいものが多くなる。

Ⅹ期　土師器坏Cが多数を占めるが、同椀A、同皿Aもその半数程に増えてくる。Ⅸに起きた食膳具における椀、皿への指向はさらに進展する。良好な資料に恵まれないが、13住土器群があてられる。

ア）　土師器

坏はCがみられるが、図化できるものがない。椀Aは2点（103・104）図化し得た。坏Cまたは椀A、皿Aと考えられる破片数で8割を占める。

甕はEと小形甕Fがみられる。小型甕Fは底部に回転糸切痕を残し、胴部器面はロクロナデ調整を施されている。

イ）　須恵器

坏Eが微量にみられる。焼成が軟質で胎土も粗く、灰白色に焼き上がる。また、ほとんどのもの

に黒斑が観察される。

XI期　（古段階）　土師器坏Cが多数占めながらも、同坏Dが発生してある程度の量を占めてくる土器群である。22・23・26住土器群があてられる。

ア）　土師器

坏Dは、その口径においてI（15～20 cm）、II（12～15 cm）、III（12 cm 以下）とすると、II類に集中する。器形は体部が緩く内湾して立ちがるもの（144）と、やや屈曲して立ち上がり口縁部で強いヨコナデにより外反するもの（143・148）が見られる。

埦はA、B、Cがみられる。Aは小形のもの145・62と、大形のもの159がみられる。Bは146などがみられるが口径において14 cm 以上の大形のものが多い。Cは数量的に少なく148・149の2点を図化したのみである。口径14.8～16.8 cm、器高6.8 cm と大形のものである。内・外面に黒色処理され、ミガキが施されている。

甕は基本的にEと小形甕Eの組み合せとなる。151は、体部はロクロナデにより成形されているが、器面にハケメとは異なり、ヘラ状工具による斜格子状の文様が施されている。一部しか残存しておらず詳細は不明であるが、特異なものである。

イ）　須恵器

坏Eは量が少なく、数点の破片しかみられない。

ウ）　灰釉陶器

輪花碗が2点みられる（64・150）。輪花手法は、単に外面を指で押えただけのものであり、150は体部中程以下に及ぶ。26住出土の段皿には、内面に朱墨が付着している（186・187）。両者ともに内面見込み部には擦痕が認められ、いわゆるパレットとしてでなく硯としての機能を果たした可能性も考えられる。なお、同住居址からは、朱墨により水鳥の絵が描かれた土師器破片が出土した。

XII期　（新段階）　土師器坏Cの量が減少し、同坏Dの量が増す。23・24土坑があてられる。

ア）　土師器

坏Dは小形品が大半を占め、口径10 cm 前後、器高3 cm 前後に集中する。すべてロクロ成形と底部に回転糸切痕がみられる。

埦はAとCがみられ、両者ともに小形品である。埦Aは体部下半で大きく内湾しながら立ち上がり、口縁部に強いヨコナデ痕が残る。埦Cは高台がハの字状に開き、緩やかに内湾している。

盤Bは、法量により2法量みられる。一括遺物としては25土坑の328・329・332がある。小形のものは口径10.45～11.1 cm、器高5.7～6.6 cm であり、大形のものは口径15.2 cm、器高7.6 cm を測る。

イ）　須恵器

坏Eが微量に見られるが、図化できるものはなかった。

XIII～XIII期　古代最終末の土器群である。貯蔵具はみられず、食膳具のみが認められる。食膳具

の主体は土師器で、灰釉陶器と輸入陶磁器がある。3・4住土器群があてられる。

ア）　土師器

坏はDのみ見られ、大小2法量認められる。小形品は、より一層小形化が進み、口径8～10cm、器高2cm前後の坏というより皿というべき形態となる。

盤はXI期に引き続き大小2法量みられる。37の高台部には明瞭な指頭圧痕が観察できる。

イ）灰釉陶器

段皿と碗がみられる。段皿の内面には朱が付着しており、朱墨硯と考えられる。

◎遺構外の出土遺物

古代

緑釉陶器　第1検出面から5点出土した（349・350・351・354・357）。351はヘラ状工具により縦長の刻みが入る輪花碗である。350・357は、碗の底部で、両者とも付け高台で丁寧な仕上げをしており、トチンを用いていることから猿投系のものであろう（註1）。

須恵器　377は器種不明なものである。フラスコ形瓶とも考えられるが、自然釉が内面見込み部のごく狭い範囲と、外面の一部に見られることと、破損部付近において強く内湾した後やや外反する点などから短頸壺に類するものとも考えられる。

中世以降

内耳鍋　P_2から良好な資料を得ている。大小2点がみられ、口径32.6cm、器高27.2cmと口径27.2cm、器高11.3cmを測る。両者ともに口縁部内外面に三条の工具ナデ痕が残存する。

香炉　1土坑から出土している。底部のみの破片であり、本来ならば三足つくと考えられるが、一足のみしか確認できない。形態は胴部から腰部にかけて丸く成形されている袴腰形である。釉は灰釉が外面のみに施される。古瀬戸後期様式と思われる（註2）。

註1　寺島孝一氏は「平安京出土の緑釉陶器」『考古学雑誌』61－3の中で、平安京出土の緑釉陶器をA～C類に分類している。それによると、A類は付け高台で丁寧な仕上げをしておりトチンを用いているもので猿投系、B類は高台は削り出しで、重ね焼き痕を残すもので畿内周辺を生産地とする官窯系、C類は付け高台で重ね焼き痕を残すもので生産地を近江地方に求めている。この分類では、今回出土した緑釉陶器は付け高台であり、トチンの使用が認められることから猿投系にあたる。

註2　藤澤良祐氏の分類による。

参考文献

藤澤良祐　1984　「"古瀬戸"概説」『美濃陶磁歴史館報』III

㈶長野県埋蔵文化財センター　1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
—塩尻市内その2—　吉田川西遺跡』

第11表　　SK V　土師器器種・器形一覧表

番号	器種・器形	製作技法等の特徴	出典・出土遺構
1	坏A（有稜）	ヨコナデ・体部外面下半ケズリの後、内外面ミガキ。	文献6　77住
2	坏A	ヨコナデ・体部外面下半ケズリの後、内外面ミガキ、内面黒色処理。	文献6　38住
3	坏BII	ロクロナデ、体部外面下半および底面ケズリ。底面と体部の境界に稜を作る。	文献7　18住
4	坏BII	ロクロナデ、体部外面下半および底面のケズリにより境界の稜を失う。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　19住
5	坏BI	ロクロナデ、底面ケズリ。内面ミガキ・黒色処理。	文献8　13住
6	坏CII	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　9住
7	坏CI	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　9住
8	坏DIII	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
9	坏DII	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
10	坏E	ロクロナデ、底面中央に糸切り痕を残し外周ケズリ、体部下半ケズリ。体部内面縦ミガキ、外面横ミガキ。	文献6　75住
11	埦A	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　9住
12	埦B	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。	文献8　23住
13	埦B（盤B・足高）	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。	文献8　20住
14	埦C	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献2　1住
15	埦D	型押し、口縁ヨコナデ、付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献8　29住
16	皿A	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　6住
17	皿B	ロクロナデ、底面糸切り痕・付け高台。内面ミガキ・黒色処理。	文献7　6住
18	皿X	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
19	皿X	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　20住
20	鉢	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ。片口が一か所に付される。	文献8　21住
21	鉢	ロクロナデ、底面糸切り痕。内面ミガキ・黒色処理。口縁端部肥厚。	文献7　6住
22	高坏	口縁ヨコナデ、脚部外面ミガキ、坏部内面ミガキ・黒色処理。	文献3　2号墳
23	小形甕B	内外面ヘラナデ。器肉が厚い。	文献7　8住
24	小形甕C（丸底）	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデ。	文献7　16住
25	小形甕C（平底）	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデ。底部下端ケズリ。底面に木葉圧痕。	文献7　5住
26	小形甕E	ロクロナデ、底面糸切り痕、胴部外面と口縁内面にカキメ。	文献8　検出面
27	小形甕F	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　19住
28	小形甕F′	口縁ヨコナデ。胴部および口縁内面ハケメ・ナデ・指頭圧痕。底部平で若干あげ底。	文献7　18住
29	小形甕G	口縁ヨコナデ、胴部外面ケズリ・内面指頭圧痕。非常に薄い。	文献4　4住
30	甕A	口縁強いヨコナデ、胴部ナデ・ヘラナデ。底面に木葉圧痕。	文献6　68住
31	甕A（ハケメ）	口縁強いヨコナデ、胴部外面縦のハケメ、胴部内面ナデ・ヘラナデ。	文献10　15住
32	甕C	口縁ヨコナデ、胴部内外面縦のハケメ。頸部くびれず、丸底。	文献7　8住
33	甕D	胴部外面縦のハケメ、内面縦横のハケメ。口縁内面・胴部上半外面カキメ。	文献7　17住
34	甕E	胴部外面縦のハケメ、内面縦のナデによる浅広で長い溝状痕。口縁内面（一部胴部上半内面）カキメ。底面ナデ。	文献6　4住
35	甕E（内ハケメ）	胴部外面縦のハケメ、内面横のハケメ、口縁内面カキメ。	文献8　2住
36	甕F	口縁ヨコナデ、胴部外面ケズリ・内面指頭圧痕（一部にハケメ）。非常に薄い。	文献4　4住
37	甕G	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケメ・ナデ、内面ハケメ・ナデ・ヘラナデ。	文献6　11住
38	羽釜	口縁雑なヨコナデ、胴部ナデ。	文献10　6住

第12表　　SK V　須恵器器種・器形一覧表

番号	器種・器形	製作技法等の特徴	出典・出土遺構
39	蓋A	『坏蓋』ロクロナデ、天井部回転ケズリ。肩部に稜、口縁内側に僅かな沈線。	文献7　11住
40	蓋B	『カエリ蓋』ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ。口縁内側にかえり。	文献10　14住
41	蓋C	ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ。端部屈曲。	文献8　14住
42	蓋D	ロクロナデ、天井部回転ケズリ後環状つまみ。	文献6　75住
43	蓋E	ロクロナデ、天井部回転ケズリ後つまみ。端部下方へやや長く屈折。	文献11　27住
44	坏A	『蓋坏』ロクロナデ、底部回転ケズリ。蓋受部と立ち上がりを有す。	文献7　11住
45	坏BII	ロクロナデ、底面ヘラ切り痕または回転ケズリ。箱形。	文献6　11住
46	坏BII	ロクロナデ、底面ヘラ切り痕または回転ケズリ。逆台形。	文献8　13住
47	坏BI	ロクロナデ、底面ヘラ切り痕または回転ケズリ。	文献6　11住
48	坏CII	『有台坏』ロクロナデ、底面回転ケズリまれに糸切り痕を残し付け高台。箱形。	文献7　10住
49	坏CIV	『有台坏』ロクロナデ、底面回転ケズリまれに糸切り痕を残し付け高台。箱形。	文献8　1溝
50	坏D	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献6　75住
51	坏D	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献8　5住
52	坏E	ロクロナデ、底面糸切り痕。坏Dに似るが、胎土粗悪、挽成不良で軟質。	文献8　25住
53	高坏	ロクロナデ、坏部底面回転ケズリ。脚部中央に沈線、端部短く屈曲。蓋B・Cの作りかけに脚を付けたようなもの。	文献3　1号墳
54	埦	ロクロナデ、口縁短く外反。体部中央に沈線。	文献7　9竪
55	盤	ロクロナデ、底面ケズリ、付け高台。	文献6　75住
56	長頸壺A	ロクロナデ、三段成形。肩部と胴下部に回転ケズリ、底面糸切り痕、付け高台。頸部内面しぼり痕。	文献4　10住
57	長頸壺B	ロクロナデ、三段成形。胴部に回転ケズリ、底面圧痕、付け高台。肩部に稜。	文献3　2号墳
58	長頸壺C	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献7　80土坑
59	広口壺	ロクロナデ、底面糸切り痕、胴部下端回転ケズリ。	文献12　1住
60	短頸壺	ロクロナデ、底面糸切り痕。	文献6　47住
61	短頸壺	タタキメ、一部ロクロナデ、付け高台。胴部に沈線。肥手（耳）4か所。	文献3　1号墳
62	平瓶	ロクロナデ、底面一帯回転ケズリ。頸部に沈線。	文献10　14住
63	フラスコ形瓶	ロクロナデ、胴部側面（成形時の底面）回転ケズリ、他方側面粘土板貼付け痕。頸部内面しぼり痕。口縁直下に段。	文献1　8号墳
64	甑	ロクロナデ、胴部・底面回転ケズリ、付け高台。注口1か所貼付け。	文献10　15住
65	甕（広口）	タタキメ、口縁ロクロナデ。平底。	文献9　3住
66	甕（長頸）	タタキメ、口縁ロクロナデ。	文献3　2号墳

第13表　　SK V　土器器種構成一覧表（土師器）

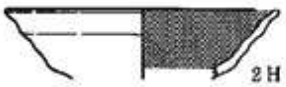
器種 / 器形 / 遺構	土師器 杯 A 内黒	杯 C	杯 D	杯 E	椀 A	椀 B	椀 C	杯・椀 内黒	皿 A	皿 X	鉢 B	鉢 内黒	鉢	鉢 不明	甕 A	甕 C	甕 D	甕 E	甕 F	甕 G	甕 不明	小形甕 C	小形甕 E	小形甕 F	小形甕 不明	その他 不明	土師器合計	内不土器 内不鍋	器種器形合計
1 住																													
2								1																			1	1	2
3			9																								9		9
4			16							1	7																24		24
5			1			1 (?)																					2		3
6	1		6																								7		7
7			1																								1		1
8			1			1							1 (?)								1			1			5		5
9									1						2						1			1	1		6		6
10		1	1															2									4		4
11			3																								3		3
12																								1		1	2		2
13					2																			1			3		3
14																													
15			5		1																			1	1		8		8
16			1																								1		1
17			1																						1		2		2
18																													
19													1 (?)														1		1
20		2	1														2		1		4				2		12		12
21																													
22			3		1	2																			1		9		9
23		2 (or 瑞A)	2		2	1																					6		6
24																													
25																							1				1		1
26			11		1						5		1												1		19		19
27																													
28	1																						1		1	1	4		4
29	1																				1						2		2
30																													
31			1								2																3		3
32																													
33																													
34																									1		1		1
35																													
36																													
37		15	4		7	1			4									12	1					1	1		46		46
38																		1			3				1		5		5
39																													
40			2																								2		2
41																					2			1			3		3
42															1						1		1		1		4		4
1 溝			1																								1		1
1 土坑																													
9 土坑			3		1					2								1									7		7
19 土坑											1																1		1
21 土坑		1 (or 瑞A)	8		2						1																12		12
25 土坑			20		1	1	1				4																27		27
ピット			1																								1	2	3
溝										1			1														2		2
1 検										1																	1		1
2 検		3	1																				1		2		7		7
区外北		1 (or 瑞A)																							1		2		2
器形別合計	1	4	25	102	0	18	7	1	1	0	5	5	20	0	4	0	3	0	2	16	2	0	13	0	4	7	15	2	257	3	260

第14表　SK V　土器器種構成一覧表（須恵器・灰釉陶器・他）

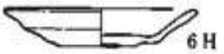
遺構	須恵器											壺						甕						灰釉陶器							緑釉陶器			その他	器種別合計
	坏						蓋			鉢	擂鉢	長類	短類	広口	不明	その他	壺	長類	広口	不明	その他不明	須恵器合計	碗	皿	段皿	壺	蓋C	不明	灰釉合計	碗	その他	合計		
	B	C	D	B+D	E	不明	B	C	不明																										
1住			1																			1													1
2						1																1													1
3																							1						1						1
4							1										1					2	6		1				7	2		2			11
5							1															1	1		1				2	1		1			4
6																							3						3						3
7																							1						1						1
8																							1						1						1
9		2					3	1					1	3								10													10
10			1													1					1	3													3
11		1																				1													1
12																																			
13																																			
14												1(?)		1		1(?)						3	2						2						5
15																							1			1(?)			2						2
16																																			
17																																			
18																																			
19																							1						1						1
20						1											2					3	1						1						4
21																																			
22																							1			1			2						2
23																								1					1						1
24																																			
25	3	1								1												5													5
26												1										1	1	1	2	1			5						6
27																																			
28	3								1			1(?)										5													5
29																																			
30																							2						2						2
31																																			
32																																			
33																																			
34																				1		1													1
35																																			
36																																			
37	3		5									2	1									11													11
38																	1					1													1
39																																			
40																																			
41																																			
42			2																			2													2
1 鄙																																			
1 土坑																																	1		1
9 土坑																							1						1						1
19 土坑																																			
23 土坑																					1	1													1
25 土坑																																			
ピット		1																				1											1		2
溝		1															1					2	1	1		1			3						5
1 検	1(?)																					1	3		1		1		5	5		5			11
2 検	1		3					1	1				1(?)		1							8	4	2	1	2			9						17
区外北															1							1	3	2	1				6						7
器別合計	11	6	12	0	0	2	5	2	2	1	0	5	3	4	2	2	5	0	0	1	2	65	34	7	7	6	1	0	55	8		8	2		130

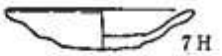
第1号住居址

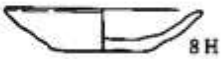
第2号住居址

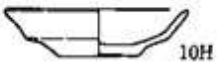


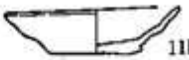
第3号住居址

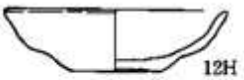


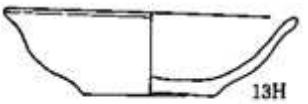




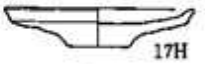


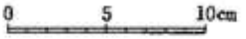




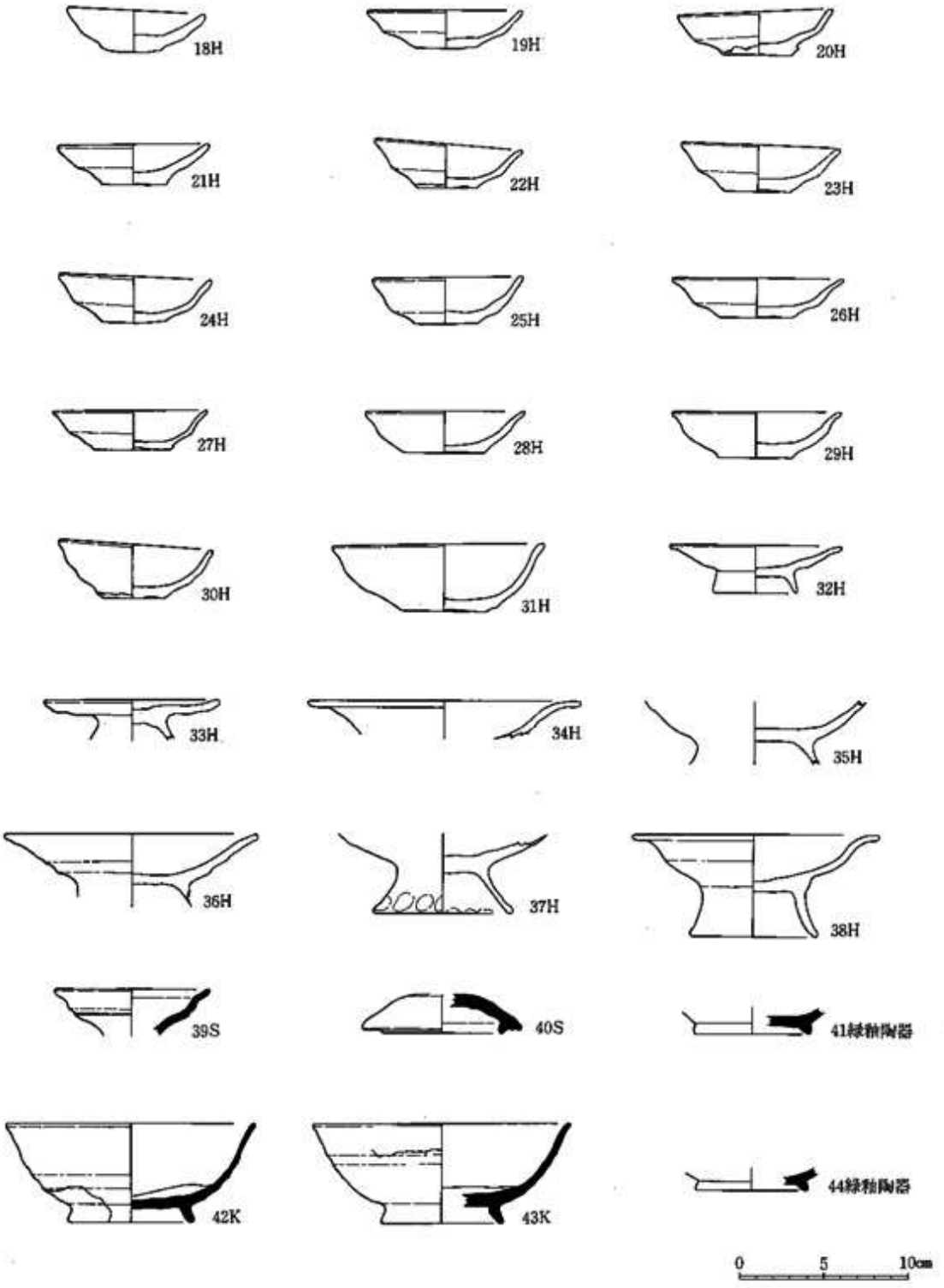


第4号住居址

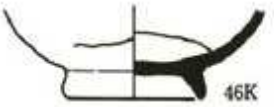


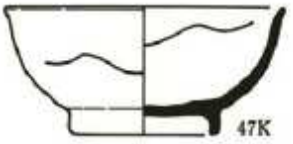


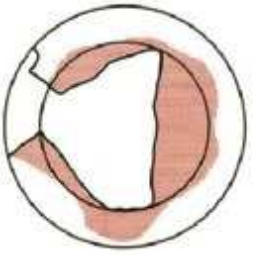
第102図　出土土器(1)


18H
19H
20H
21H
22H
23H
24H
25H
26H
27H
28H
29H
30H
31H
32H
33H
34H
35H
36H
37H
38H
39S
40S
41緑釉陶器
42K
43K
44緑釉陶器
0
5
10cm

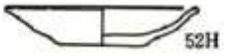
第103図　出土土器(2)



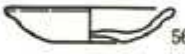


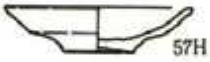


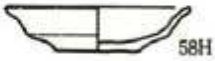
第５号住居址

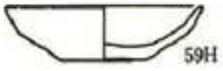


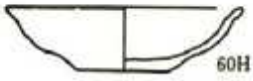
第６号住居址

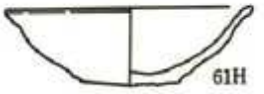


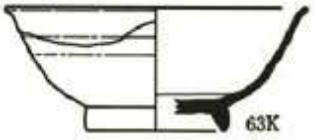




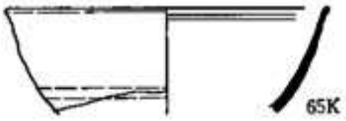




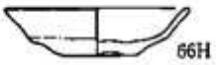


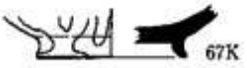


第104図　出土土器(3)

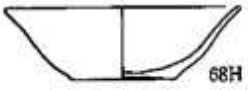


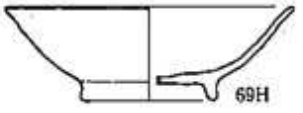
第７号住居址

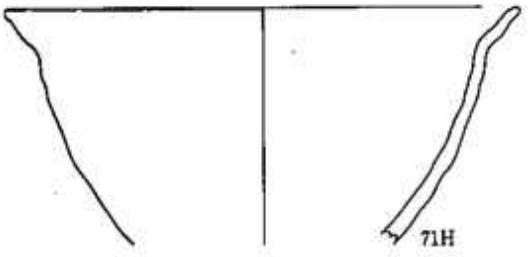


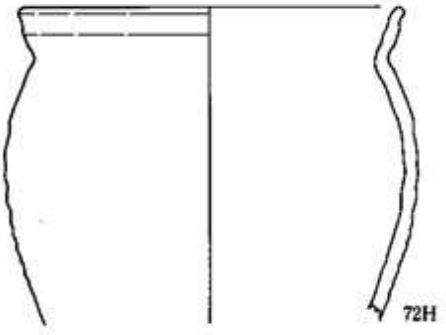


第８号住居址

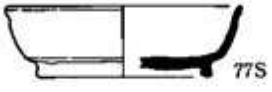


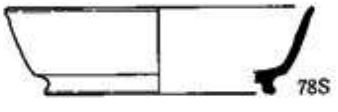


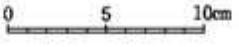




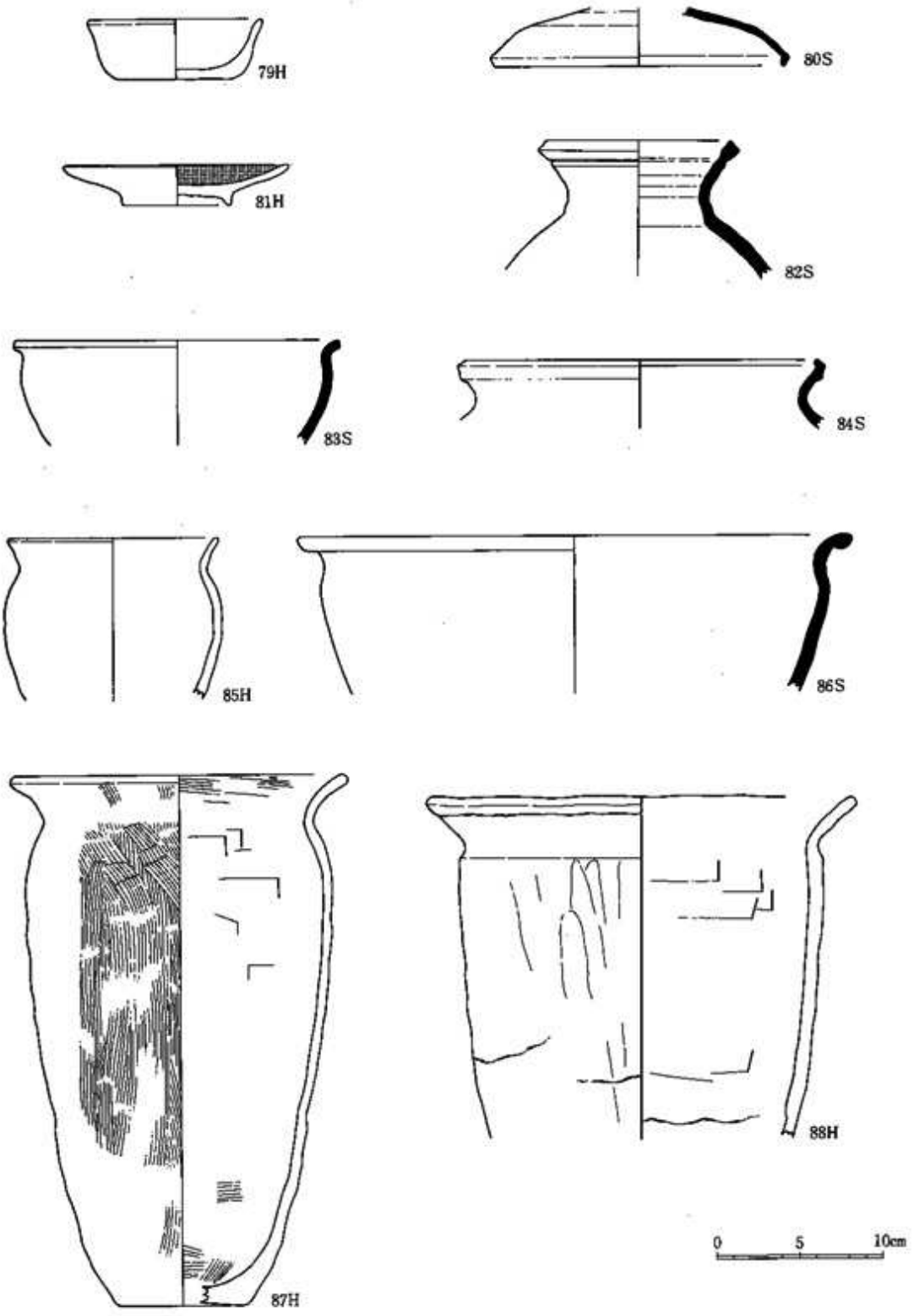
第９号住居址



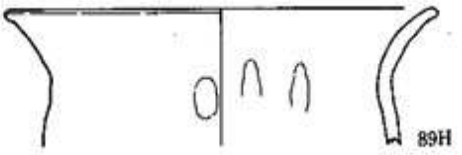




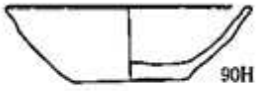
第105図　出土土器(4)

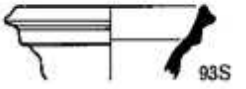


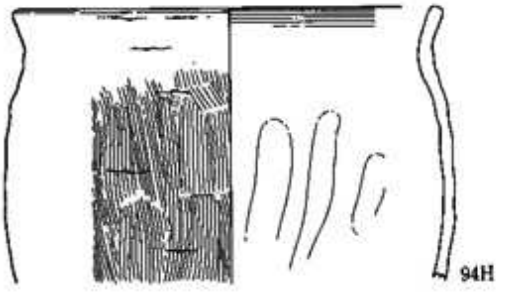
第106図　出土土器(5)

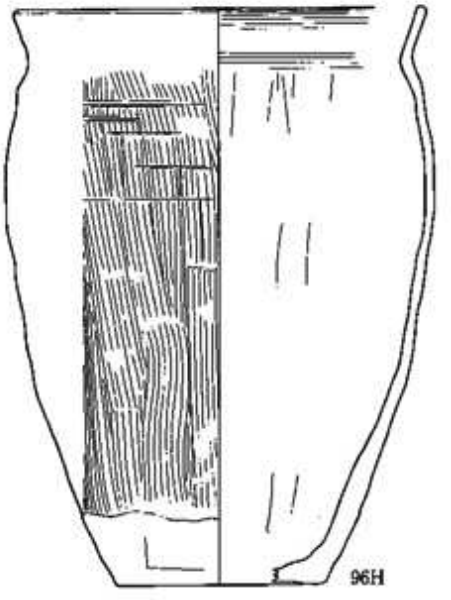


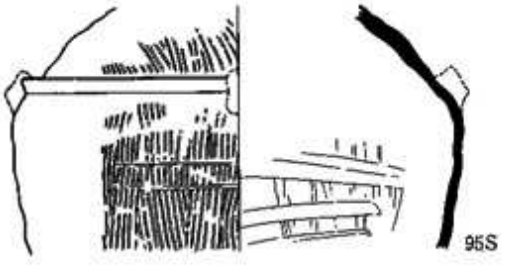
第10号住居址





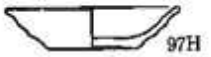


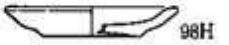


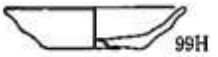


第107図　出土土器(6)

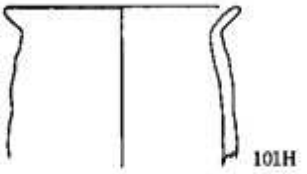
第11号住居址

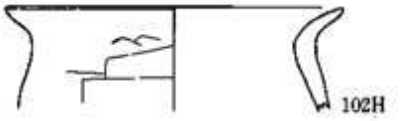




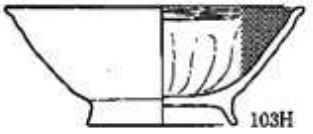


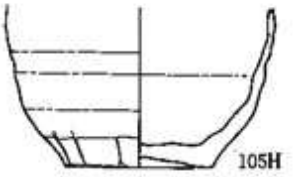
第12号住居址



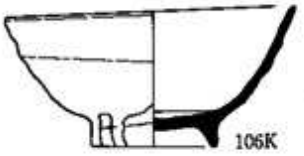


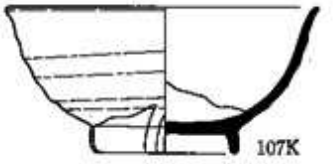
第13号住居址



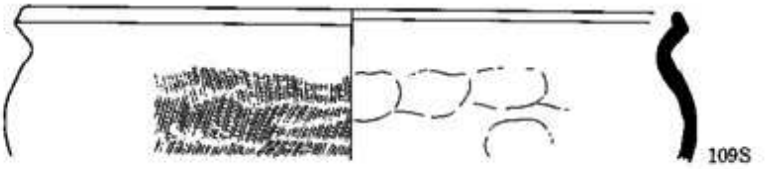


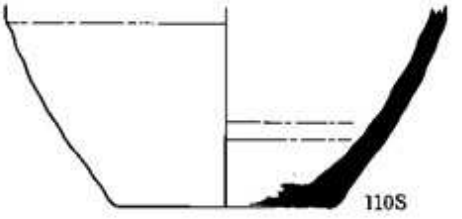
第14号住居址



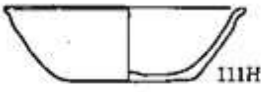


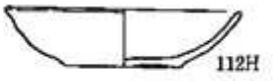
第108図　出土土器(7)

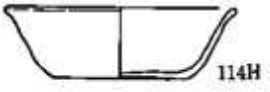


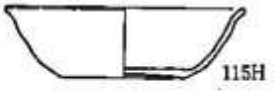


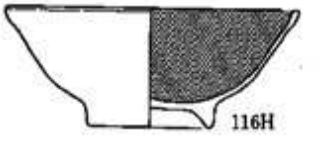
第15号住居址

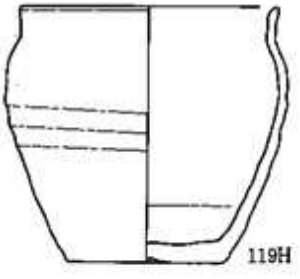


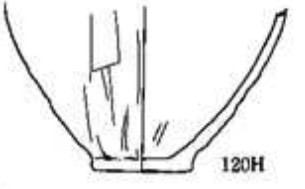






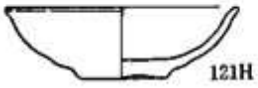




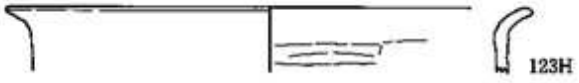


第109図　出土土器(8)

第16号住居址

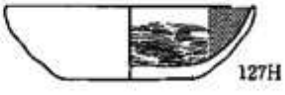


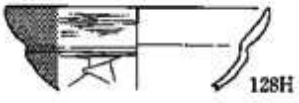
第17号住居址

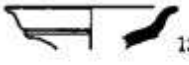


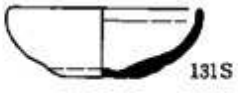
第19号住居址

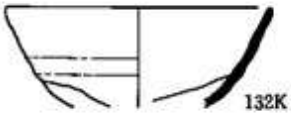
第20号住居址

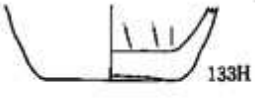




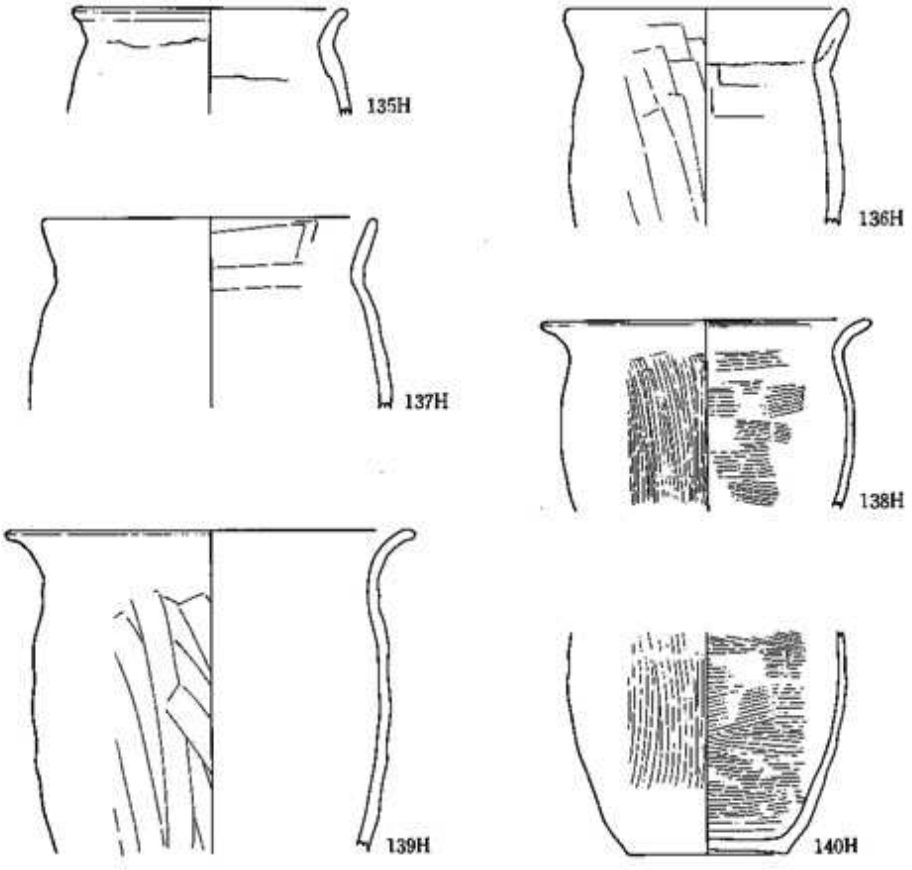




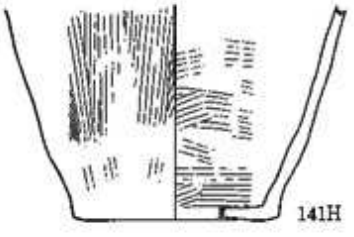




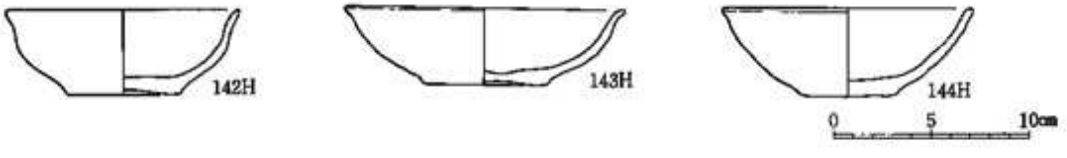
第110図　出土土器(9)



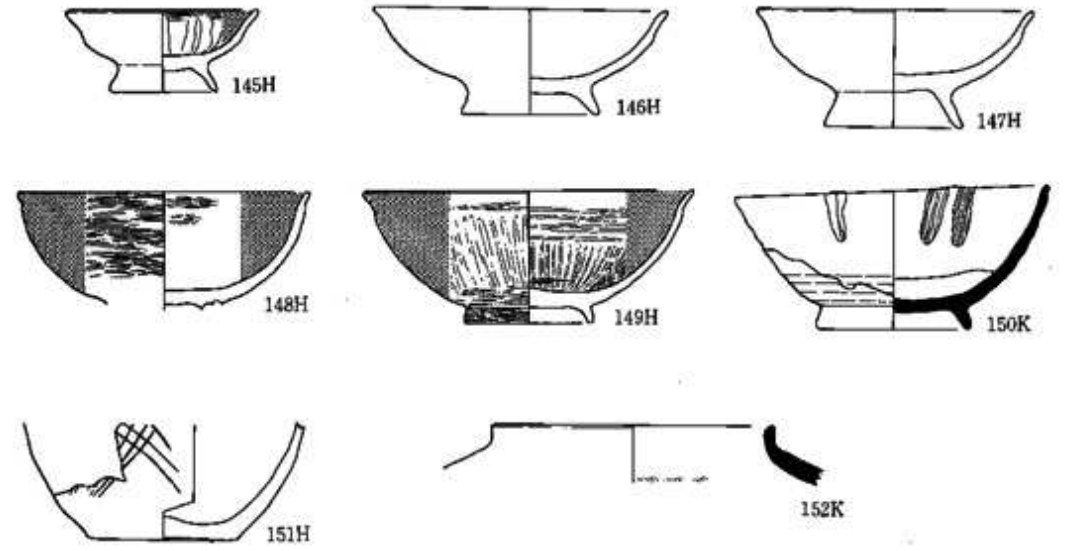
第21号住居址



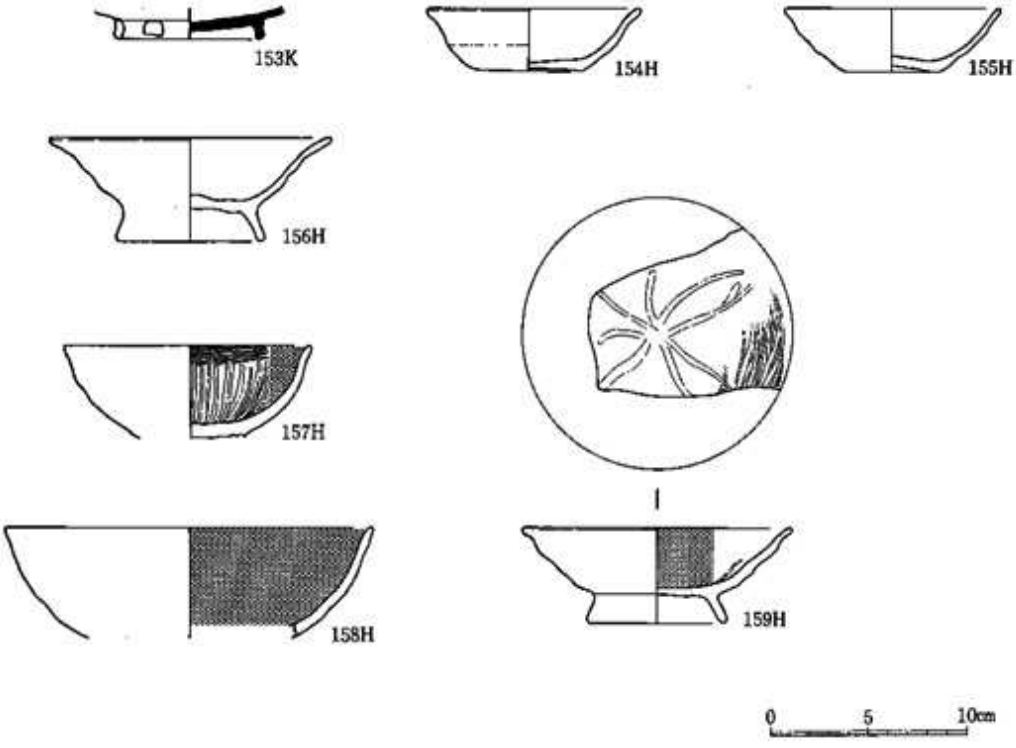
第22号住居址



第111図　出土土器(10)

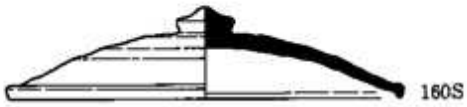


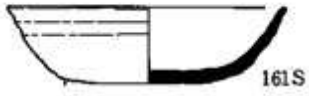
第23号住居址

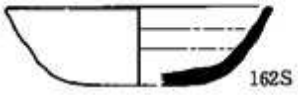


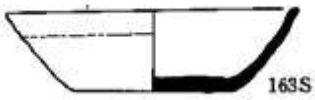
第112図　出土土器(1)

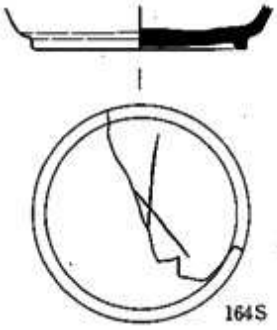
第25号住居址

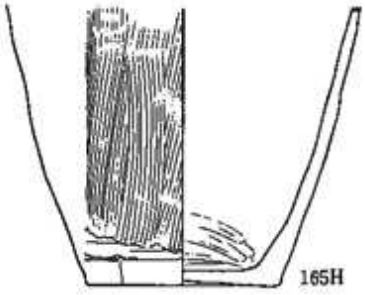




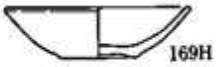


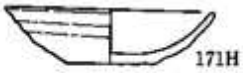


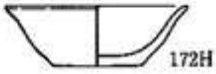


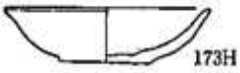


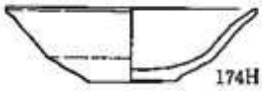
第26号住居址

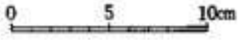




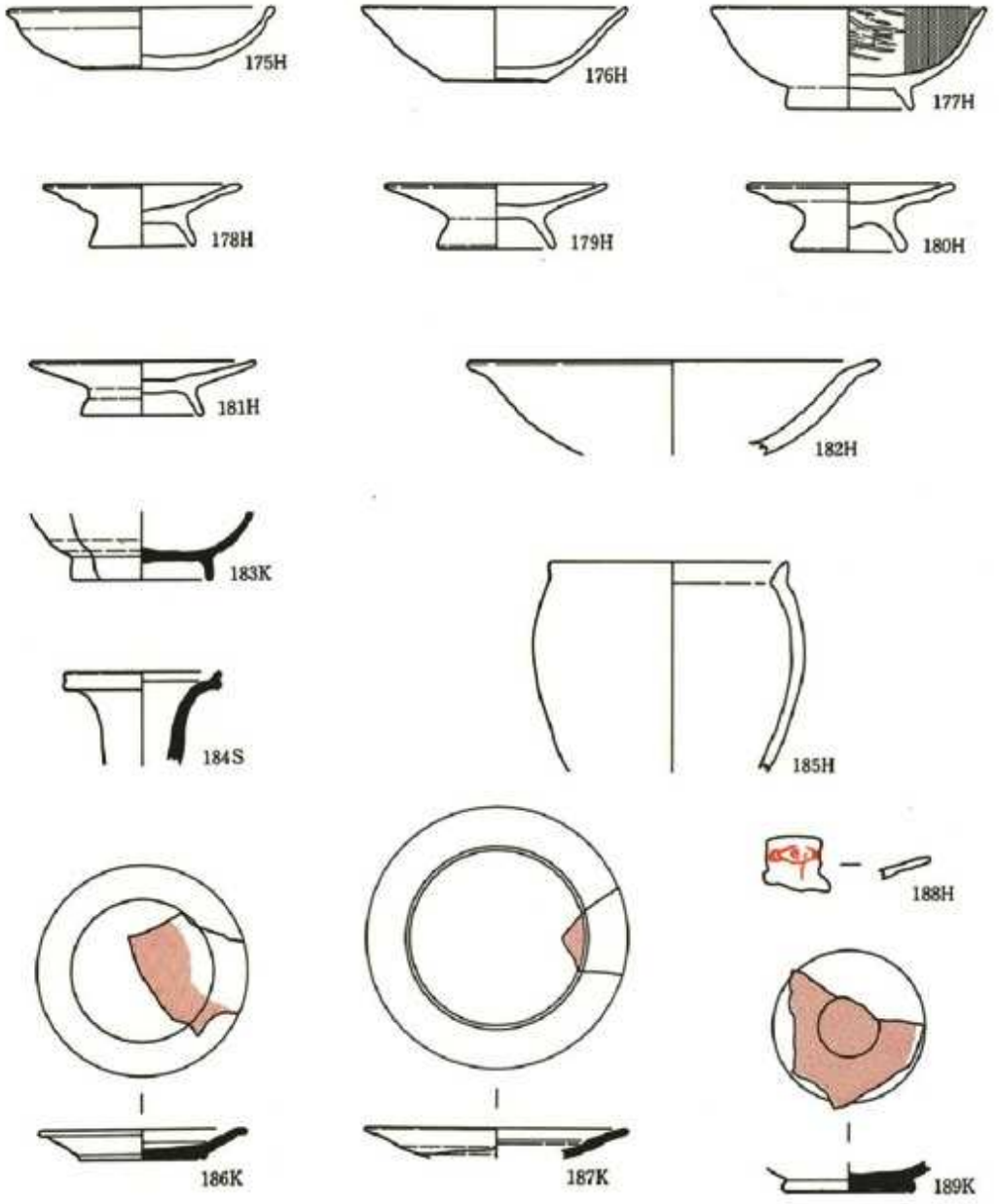








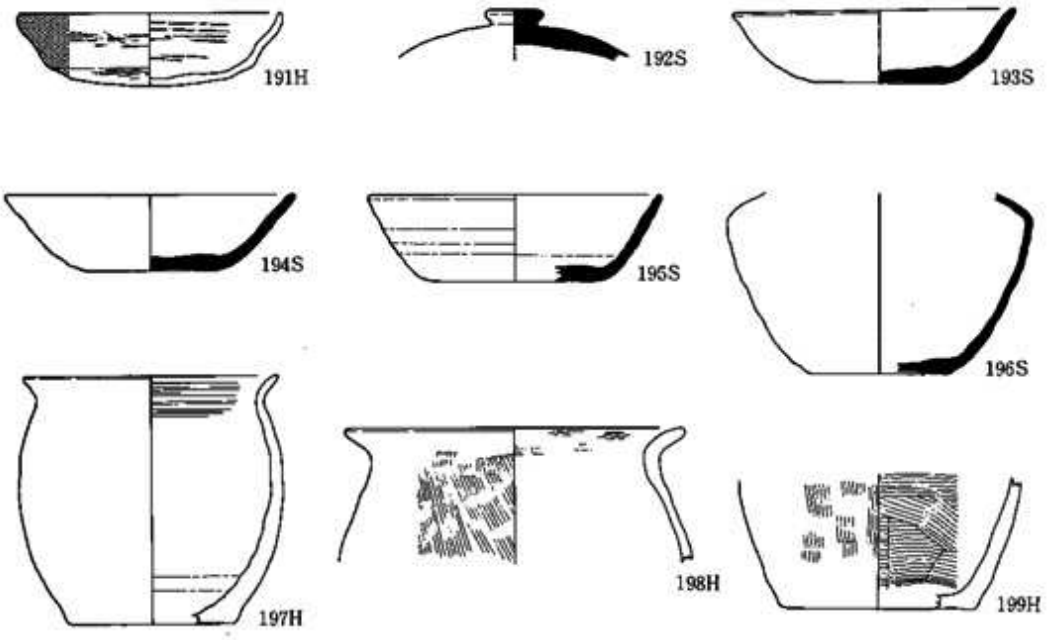
第113図　出土土器(12)



第27号住居址

第114図　出土土器(13)

第28号住居址

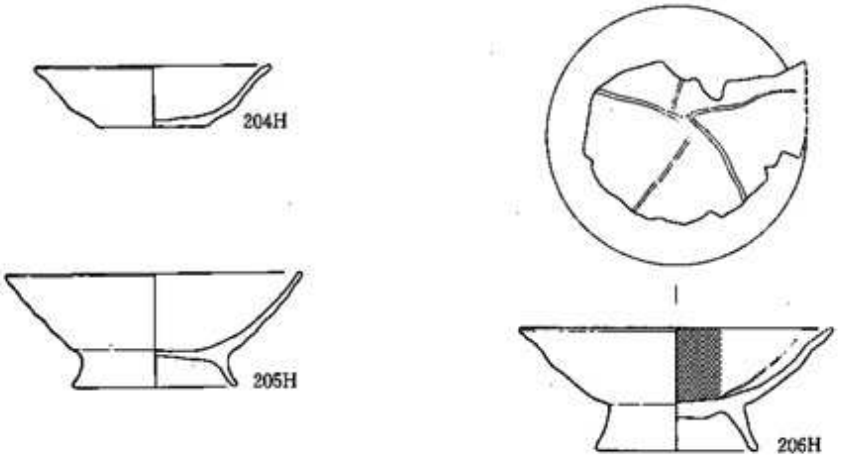


第29号住居址

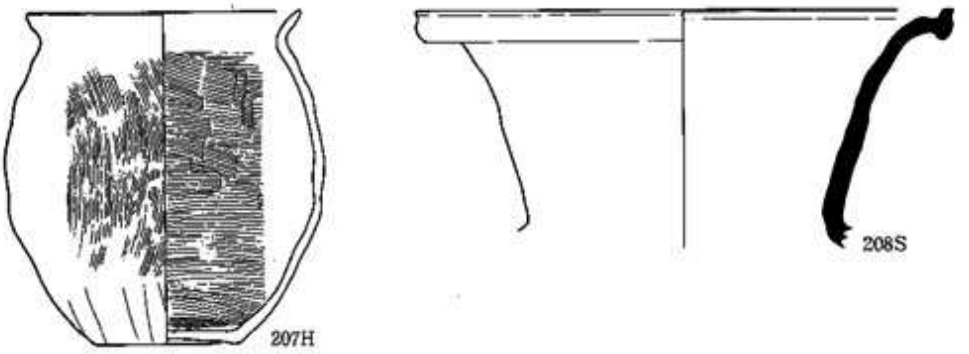
第30号住居址

第115図　出土土器(14)

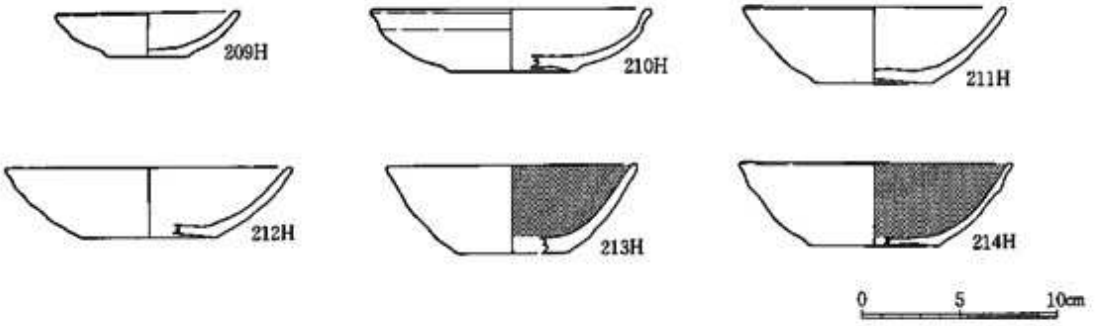
第31号住居址



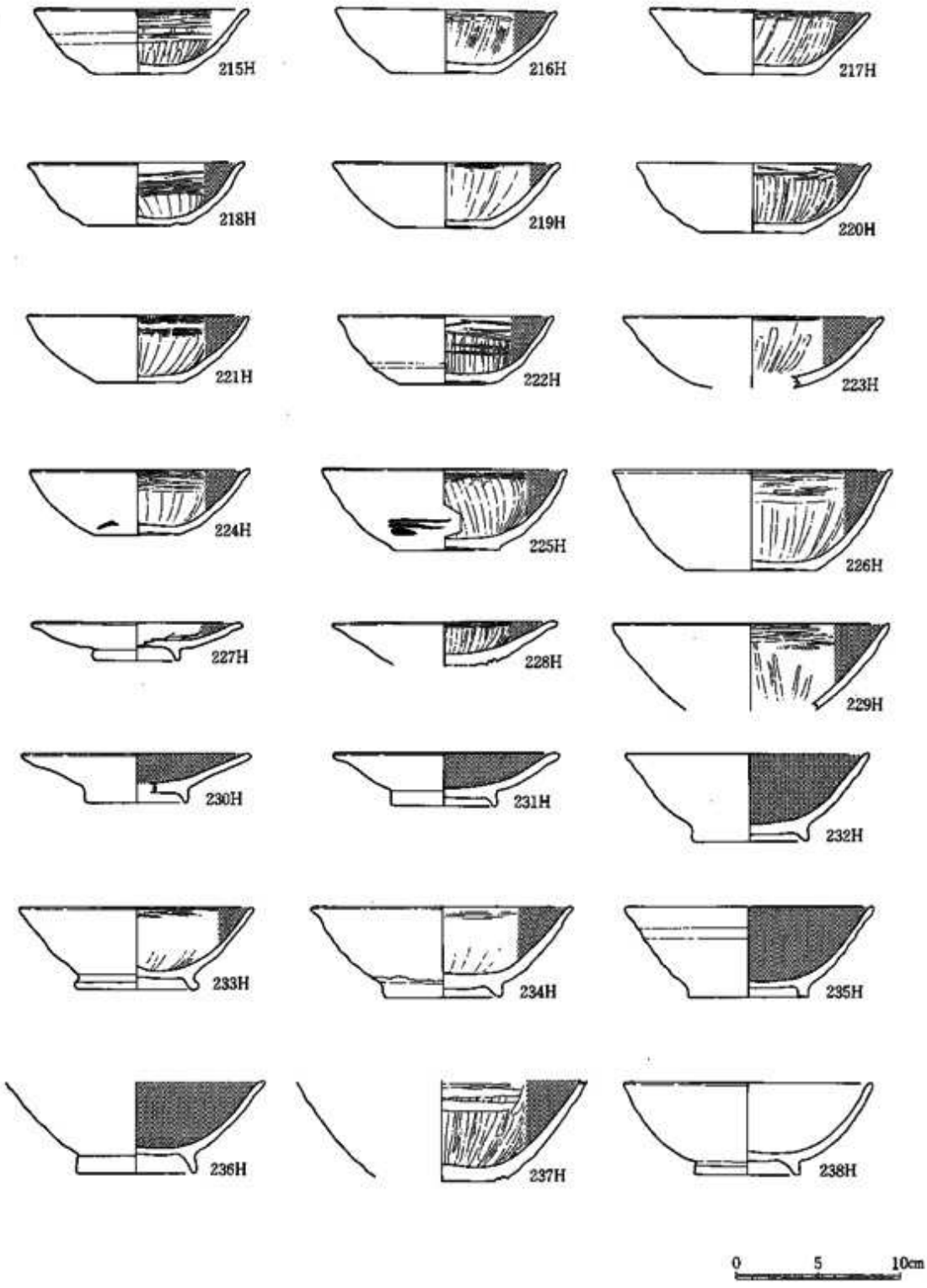
第34号住居址



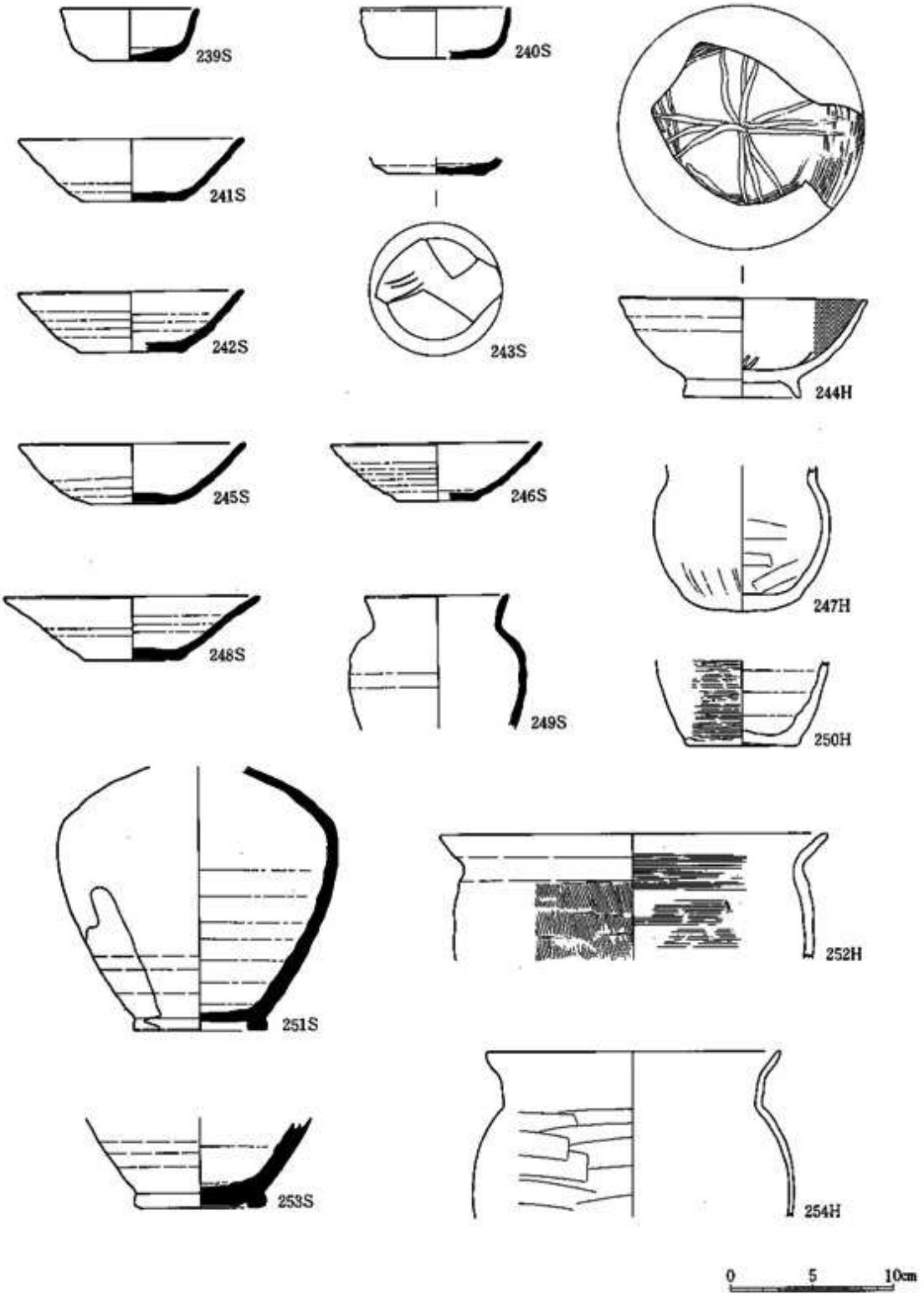
第37号住居址



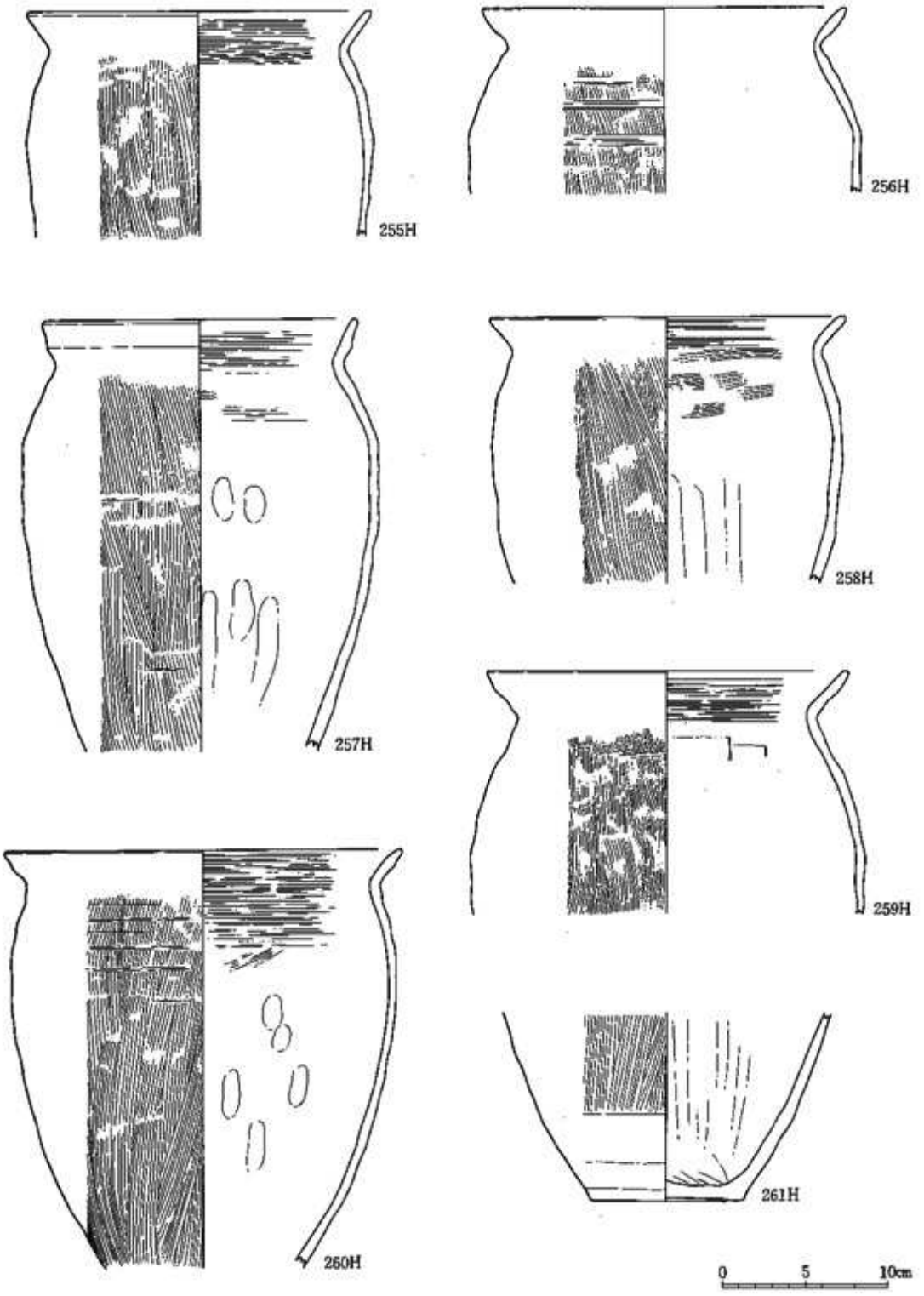
第116図　出土土器(5)


215H
216H
217H
218H
219H
220H
221H
222H
223H
224H
225H
226H
227H
228H
229H
230H
231H
232H
233H
234H
235H
236H
237H
238H
0
5
10cm

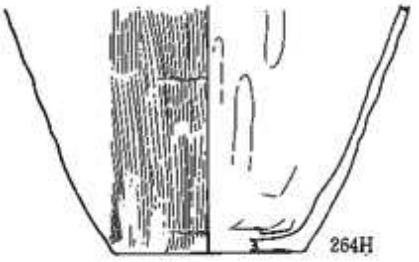
第117図　出土土器⑯

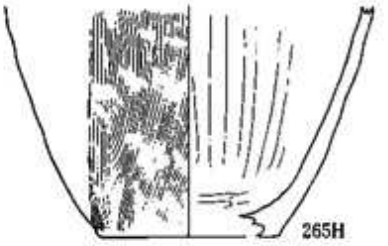


第118図　出土土器(17)

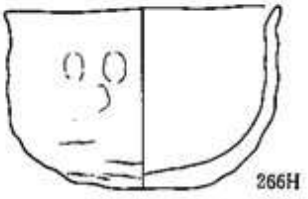


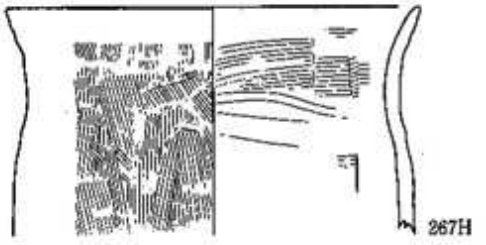
第119図　出土土器(18)

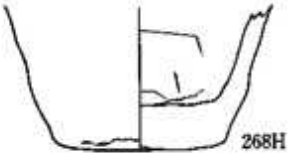


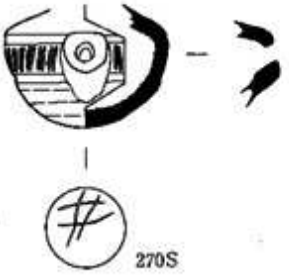


第38号住居址



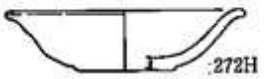




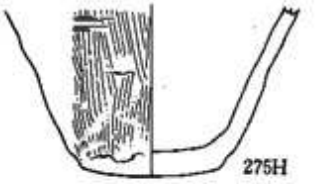


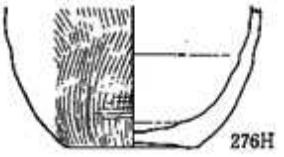
第120図　出土土器(19)

第40号住居址

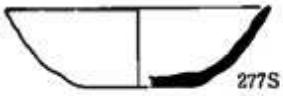


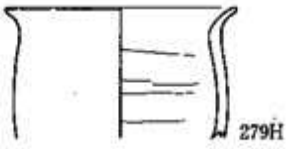
第41号住居址

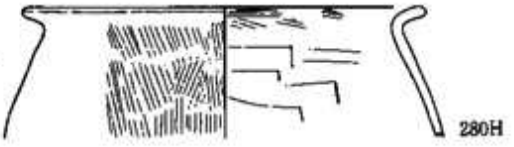




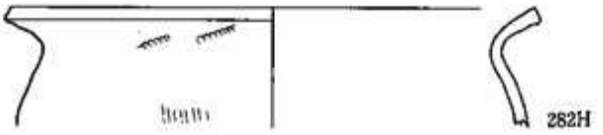
第42号住居址



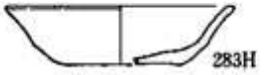




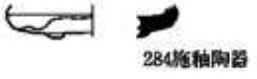
第121図　出土土器(20)



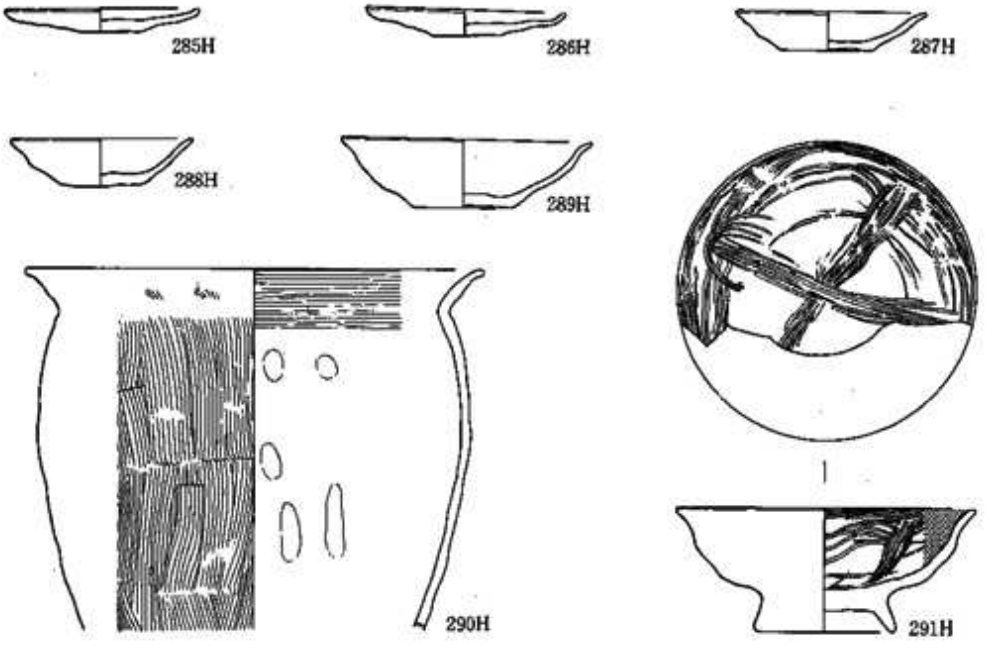
竪穴状遺構



第１号土坑



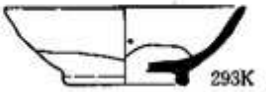
第９号土坑



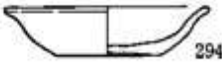
0　5　10cm

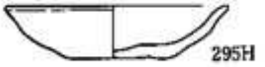
第122図　出土土器(2)

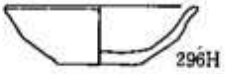
第19号土坑

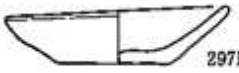


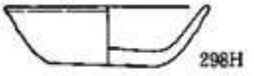
第23号土坑

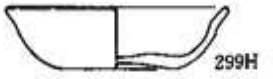


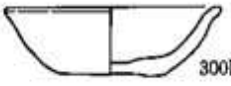


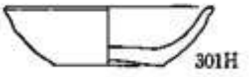


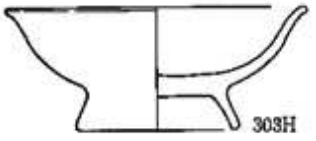


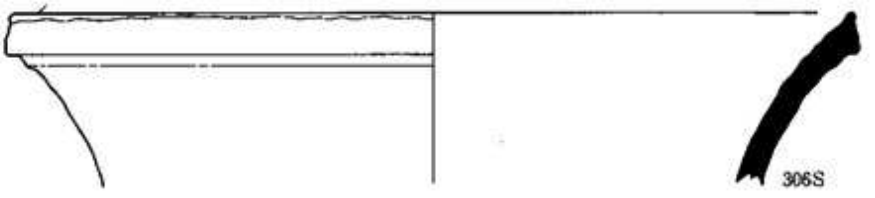




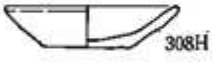


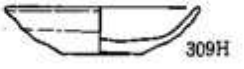




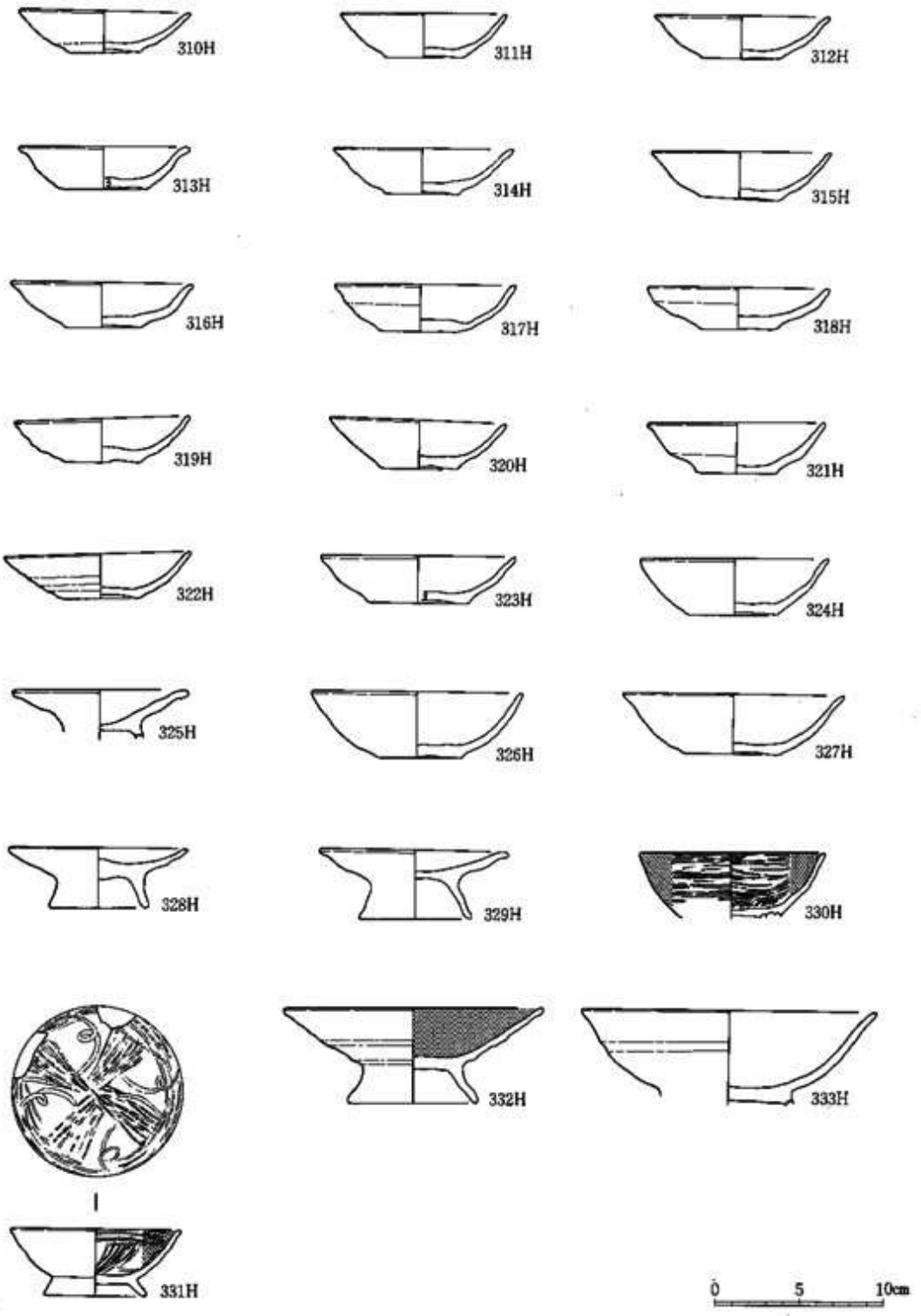


第25号土坑



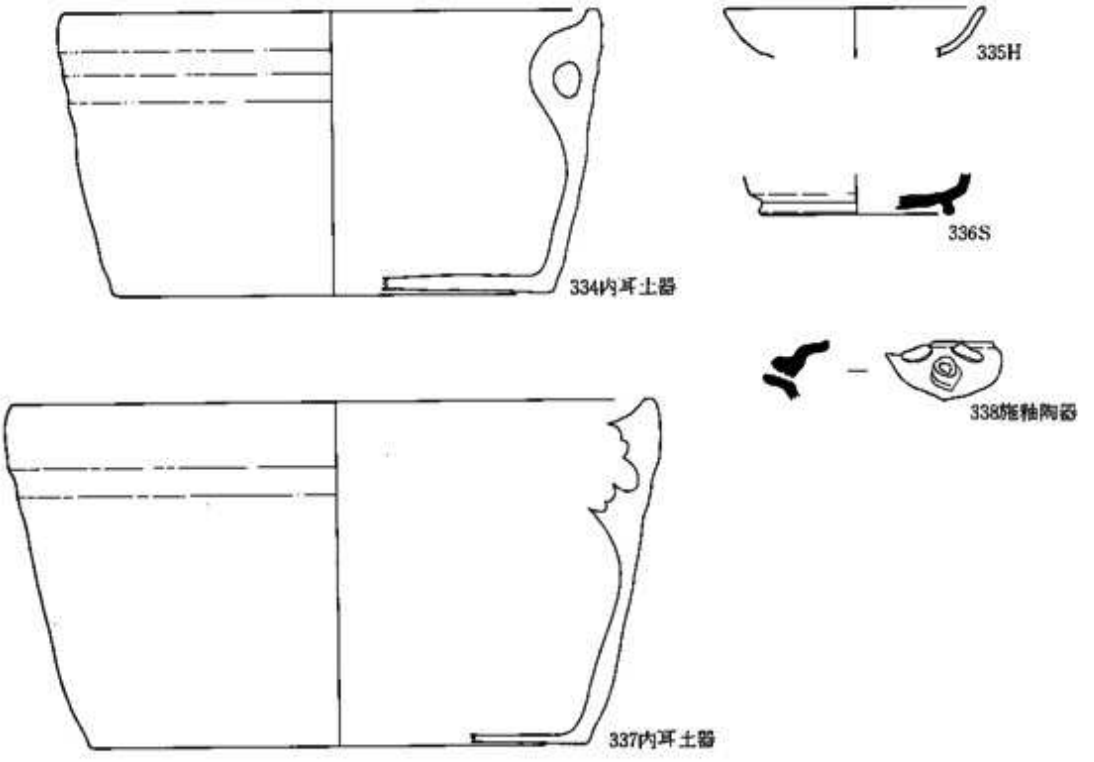


第123図　出土土器(2)

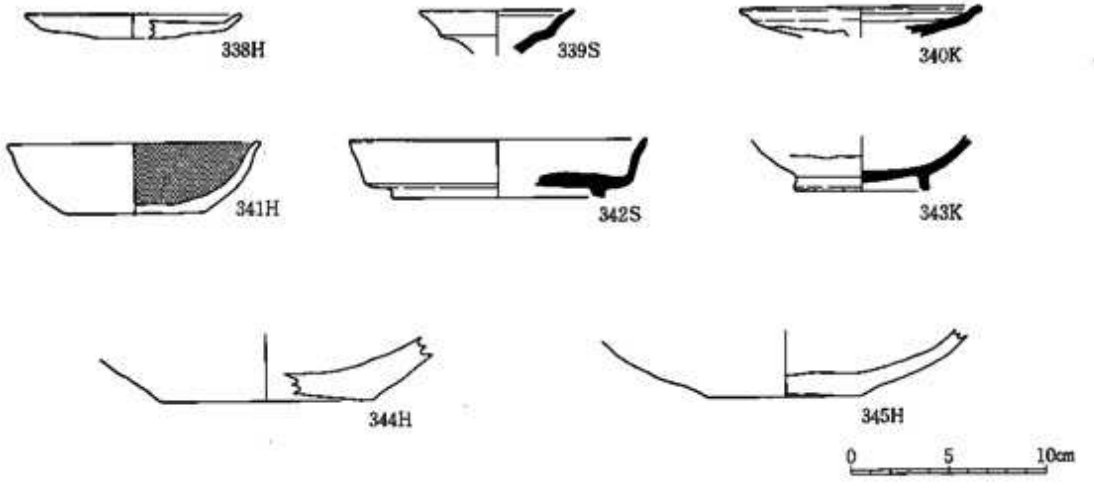


第124図　出土土器(23)

ピット

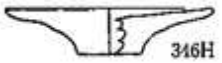


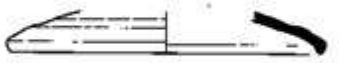
溝址

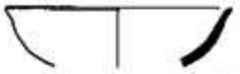


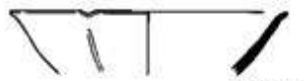
第125図　出土土器(24)

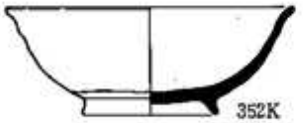
第１検出面

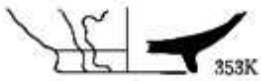


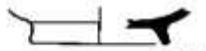




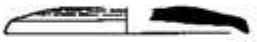


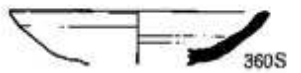


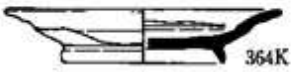


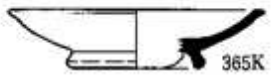


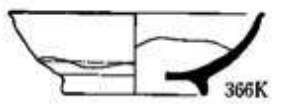
第２検出面

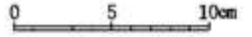




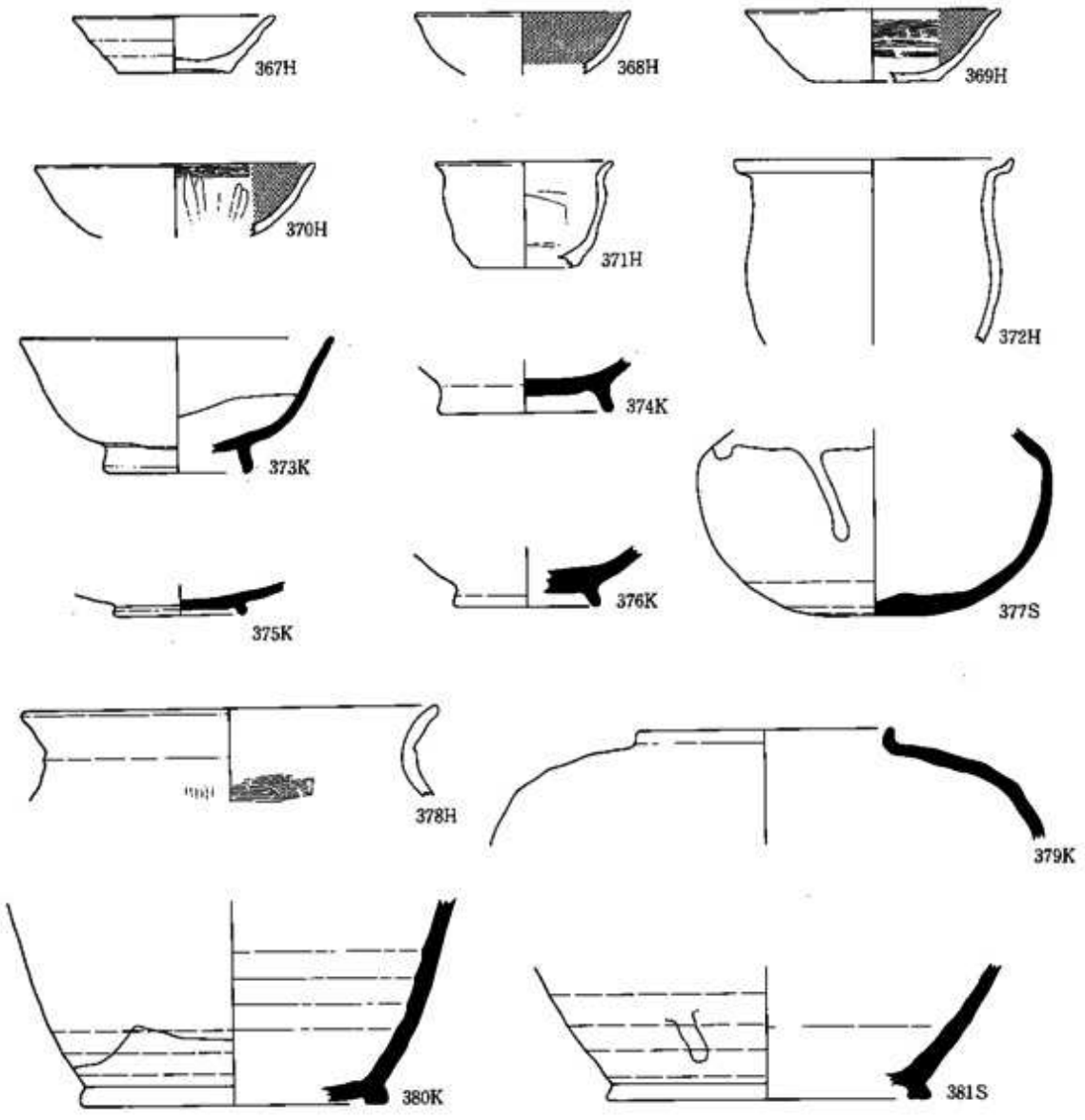




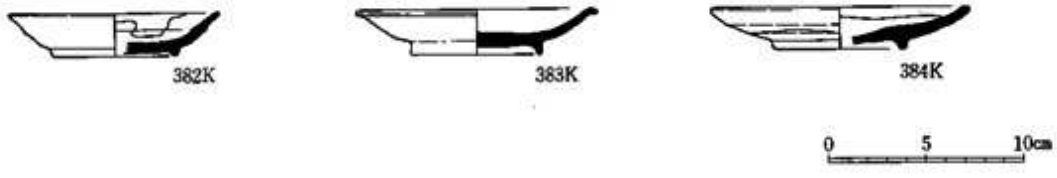




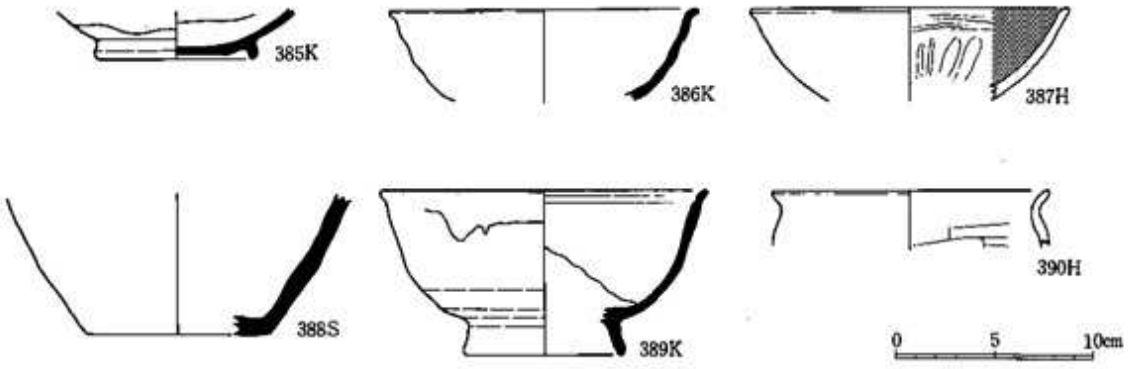
第126図　出土土器(25)



用地外北方



第127図　出土土器(26)



第128図　出土土器(27)

第15表　　SK V　出土土器観察表

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
1	1住	須恵器	坏D		6.8		(1/2)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		1
2	2住	土師器	坏C II or 埦A	13.8			1/4	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ摩滅	混入品?	1
3	〃	須恵器	坏		5.6		(一部欠)	黄灰	黄灰	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ	混入品	2
4	〃	内耳土器	内耳鍋		28		(一部)	黒～暗褐	黒褐	体部ナデ、底部ケズリか?		3
5	3住	土師器	坏DIII	8.3	3	2.3	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り(調整雑)		5
6	〃	〃	〃	9.9	5.3	1.9	完	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り(調整雑)		1
7	〃	〃	〃	9.6	3.8	2.1	(完)	暗～淡茶褐	暗～淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		2
8	〃	〃	〃	10	5.2	2.1	(完)	淡橙褐	淡～暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		3
9	〃	〃	〃	9.1	3.8	2.6	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		7
10	〃	〃	〃	9.2	4	2.4	(完)	淡～茶褐	茶褐～暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		10
11	〃	〃	〃	8.9	4.6	2.3	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		6
12	〃	〃	〃	11.4	5	3.15	(完)	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
13	〃	〃	〃	14.8	6.8	4.2	(完)	淡～褐	淡～褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		8
14	〃	灰釉陶器	椀		7.2		(2/5)	灰	灰	ロクロナデ、体部下半ケズリか?、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		9
15	4住	土師器	坏DIII	8.7	3	1.8	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		17
16	〃	〃	〃	9.8	3.95	2.05	(完)	暗～淡褐	暗～淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		14
17	〃	〃	皿X	9.6	3.2	2	(1/2)	橙茶褐	橙茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		19
18	〃	〃	坏DIII	8	3.5	2.5	完	濃橙褐	濃橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		35
19	〃	〃	〃	9.3	2.7	2.2	(完)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		3
20	〃	〃	〃	9.15	4.5	2.6	完	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り(調整雑)		11
21	〃	〃	〃	8.9	3.95	2.4	完	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		15
22	〃	〃	〃	8.8	3.6	2.6	完	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		34
23	〃	〃	〃	9.4	4	2.8	完	濃橙褐	濃橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		32
24	〃	〃	〃	9	3.8	2.8	完	暗橙褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		12
25	〃	〃	〃	9	3.8	2.95	(完)	橙茶	橙茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	胎土やや粗	13
26	〃	〃	〃	9.4	4.2	2.5	(完)	暗茶褐	暗肌	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		16
27	〃	〃	〃	9.1	4.6	2.35	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		10
28	〃	〃	〃	9.5	4.8	2.5	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		2
29	〃	〃	〃	10	4.4	2.7	(2/3)	濃橙褐	濃橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		1
30	〃	〃	〃	9.05	4.1	3.2	完	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		33
31	〃	〃	〃	12.7	5.2	4	完	淡～黄褐	黄褐～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	胎土粗	5
32	〃	〃	鍋B	10.2	5	2.85	完	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りか?、付高台のちナデ		4
33	〃	〃	〃	10.4			1/2	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、付高台のちナデ		18

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
34	4住	土師器	甕B	16.2			1/3	淡茶褐	淡茶褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ		23
35	〃	〃	〃					茶～暗褐	茶～暗褐	ヨクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		6
36	〃	〃	〃	15.1				淡黄褐	淡黄褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		8
37	〃	〃	〃		8.4			淡橙褐	淡橙褐	ヨクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	脚部に顕著な指圧痕有り。	7
38	〃	〃	〃	14.7	7.5	6.1	完	暗橙褐	暗橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリか?、付高台のちナデ		9
39	〃	須恵器	瓶	9.2			1/6	暗灰	暗灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ		24
40	〃	〃	蓋B	9.6			1/6	青灰	青灰	ヨクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ	厚手	25
41	〃	緑釉陶器	碗		6.8		(1/3)	黄緑	黄緑	ヨクロナデ、付高台のちナデ		31
42	〃	灰釉陶器	〃	14.8	7.4	5.9	(1/2)	灰	灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	釉、漬け掛け	28
43	〃	〃	〃	15.4	7.4	5.95	(1/3)	灰	灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		21
44	〃	緑釉陶器	〃		6.6		(1/3)	暗緑	暗緑	ヨクロナデ、付高台のちナデ		30
45	〃	灰釉陶器	〃	15	7.4	6.1	(1/3)	乳灰	乳灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉調、緑灰、漬け掛け	27
46	〃	〃	〃		6.8		(3/4)	乳灰	乳灰	ヨクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉調、半透明、淡緑	22
47	〃	〃	〃	14.2	7.6	6.5	(1/2)	灰	灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリのちナデか?、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉調、半透明、黄緑、漬け掛け?	26
48	〃	〃	〃		8.4		(3/4)	灰	灰	ヨクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切りのちナデ、付高台のちナデ	釉調、半透明、淡緑、漬け掛け	29
49	〃	〃	段皿	12.3	5.6	2.45	8/9	淡灰	淡黄灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリか?	朱墨硯、内面朱付着	20
50	5住	須恵器	蓋B	11.6			1/6	暗灰	暗灰	ヨクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		4
51	〃	灰釉陶器	段皿	12.2			1/4	乳灰	乳灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ		5
52	〃	土師器	坏DIII	9.9	4.6	1.95	(完)	橙褐	橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		1
53	〃	緑釉陶器	碗	10.4			1/6	(暗緑)灰	(暗緑)灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ	緑釉、内面剥離	6
54	〃	灰釉陶器	〃		6.7		(1/2)	淡灰	淡茶灰	ヨクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		3
55	〃	土師器	鍋?B	17			1/6	橙褐	橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ		2
56	6住	〃	坏DIII	8.6	3.8	1.8	(一部欠)	淡褐	淡褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		2
57	〃	〃	〃	9.5	3.6	2.3	(完)	黒～橙褐	橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		1
58	〃	〃	〃	9.4	4.4	2.3	(完)	橙褐	橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		6
59	〃	〃	〃	10	4.6	2.8	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		7
60	〃	〃	坏DII	12	4.6	3.25	(完)	濃橙褐	濃橙褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		3
61	〃	〃	〃	12.5	5	4	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り(調整雑)		4
62	〃	〃	鍋A	9.9	5.4	3.75	(完)	淡橙褐	黒	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理、付高台のちナデ		5
63	〃	灰釉陶器	碗	15.4	7.1	6.3	1/3	乳灰	乳灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリか?、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉、漬け掛け	9
64	〃	〃	輪花碗	9	4.7	3.6	(完)	乳灰	乳灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		8
65	〃	〃	碗	16.4			1/5	乳灰	乳灰	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ	口縁内部沈線	10
66	7住	土師器	坏DIII	9.3	3.6	2.4	(完)	暗～茶褐	暗褐	ヨクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り(調整やや雑)		1

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
67	7住	灰釉陶器	碗		7.6		(1/3)	淡灰	淡緑灰	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリか?、底部糸切ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉調外面透明、内面半透明、淡緑	2
68	8住	土師器	坏DII	12	5.2	3.7	(4/5)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
69	〃	〃	埦B	14.7	6.8	4.8	1/2	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		3
70	〃	灰釉陶器	碗	17.2			1/5	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ	釉、漬け掛け	5
71	〃	土師器	鉢?	26.2			1/3	暗~淡橙褐	暗~淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		2
72	〃	〃	小形甕F	19			2/3	暗~橙褐	暗~橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		6
73	〃	〃	甕		9.6		(完)	暗~淡橙褐	暗~淡橙褐	ロクロナデ、底部ナデ	底部内面、黒変	1
74	9住	須恵器	蓋B	10.9		2.1	2/3	暗青灰	青灰	ロクロナデ、つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ	焼成不良	3
75	〃	〃	〃	11.95		1.7	完	暗灰	青灰	ロクロナデ、つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ	外面自然釉付着、歪み大	16
76	〃	〃	〃	12.3		3	完	灰	黄灰	ロクロナデ、つまみ部ナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ		5
77	〃	〃	坏CII	12	9	3.6	1/2	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		1
78	〃	〃	〃	15.8	11.8	4.4	一部	黒灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、付高台のちナデ		2
79	〃	土師器	小形甕	10.4	7	3.65	(一部欠)	茶褐	茶褐	口縁ヨコナデ、体部ナデか?、底部木葉圧痕か?	古墳時代	9
80	〃	須恵器	蓋C	17.7			1/4	暗灰	暗灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ	口縁部自然釉付着	4
81	〃	土師器	皿A	13.6	6.4	2.4	(完)	暗橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキか?、黒色処理、体部外面回転ヘラケズリか?、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		10
82	〃	須恵器	短頸壺	11			一部	黒~茶灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面タタキメ	外面自然釉付着	8
83	〃	〃	広口壺	19.6			1/6	灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		6
84	〃	〃	広口壺(甕)	21			1/4	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		7
85	〃	土師器	小形甕F	12.6			1/4	淡橙褐	淡橙褐	体部内外面ナデ、口縁ヨコナデ	内外面摩滅	11
86	〃	須恵器	広口壺	33.4			1/6	淡~淡橙灰	淡~淡橙灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		15
87	〃	土師器	甕A	20.4			1/3	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、口縁内面ハケ目、胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ、底面ハケ痕、底部ナデ		14
88	〃	〃	〃	26			1/6	黄褐	黄褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面板状工具によるナデ、口縁部輪積み痕		13
89	〃	〃	甕	22			1/5	淡黄褐	淡黄褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ナデ、指圧痕		12
90	10住	〃	坏DII	12.55	6	3.6	(完)	淡~橙褐	橙~暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		1
91	〃	須恵器	坏D		6.9		(1/3)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り		3
92	〃	土師器	坏CII	13.2	6.5	3.9	(完)	暗~赤褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、黒色処理		2
93	〃	須恵器	甕(?)	9.6			一部	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		4
94	〃	土師器	甕E	22			2/3	暗黄褐	暗黄褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ナデ		5
95	〃	須恵器	四耳壺					暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、胴部外面タタキ目、内面板状工具によるナデ、凸帯部ヨコナデ		7
96	〃	土師器	甕E	21	10.8	29.4	一部	暗~橙褐	暗~橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ		6
97	11住	〃	坏DIII	8.8	4.6	2.1	(完)	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		2
98	〃	〃	〃	8.8	5	1.5	(1/2)	淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
99	〃	〃	〃	9.2	5	2.1	1/3	暗橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		3

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口縁(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
100	11住	須恵器	坏C	18.4	12.8		(2/3)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	美濃須衛窯か?	1
101	12住	土師器	小形甕F	12			一部	暗~暗橙褐	暗~暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		1
102	〃	〃	〃G	17.2			一部	暗褐	褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、胴部外面板状工具によるケズリか?		2
103	13住	〃	埦A	15.3	7.6	6.05	(完)	褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(縦・横方向)、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		1
104	〃	〃	〃	17.4			(1/2)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(縦・横方向)、黒色処理		2
105	〃	〃	小形甕F		7.6		(完)	暗茶褐	暗褐	ロクロナデ、胴下部ケズリ、底部回転糸切り		3
106	14住	灰釉陶器	碗	14.9	6.3	6.9	(完)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	釉調、半透明白~淡緑、漬け掛け	1
107	〃	〃	〃	16.1	7.2	7.45	一部欠	乳~淡橙灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉、漬け掛け	2
108	〃	須恵器	長頸壺?		8.6		(2/3)	赤褐	赤褐	ロクロナデ、胴部下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		3
109	〃	〃	広口甕	33			一部	暗青灰	暗青灰	口縁ヨコナデ、胴部外面タタキ目、内面あて具痕		4
110	〃	〃	壺?		11.2		1/4	淡灰	淡灰	ロクロナデ、胴下部回転ヘラケズリ、底部ケズリか?		5
111	15住	土師器	坏DII	12.3	6.8	3.8	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	外面摩滅	2
112	〃	〃	〃	12.1	6	2.9	完	黄褐	黄褐~黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	内面黒変	10
113	〃	〃	〃	11	4.6	3.8	1/6	淡~暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、黒色処理		5
114	〃	〃	〃III	11.6	7	3.65	1/2	橙褐	黒~橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	内面黒変	3
115	〃	〃	坏DII	12.2	6.5	3.6	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	焼成やや不良	4
116	〃	〃	埦A	14.8	6.2	6.1	(完)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキか?底部回転糸切りか?付高台のちナデ、黒色処理		1
117	〃	灰釉陶器	壺?		4.6		(一部欠)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、胴部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、高台部欠損	釉調、半透明淡緑	6
118	〃	〃	碗		8.2		(1/2)	淡黄灰	乳灰	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		7
119	〃	土師器	小形甕F	13.2	8.2	13.05	(完)	暗~淡橙褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ヨコナデ、底部静止糸切り		9
120	〃	〃	甕		5		(2/3)	暗~赤褐	淡黄褐	胴部外面密なケズリ、内面板状工具によるナデか?底部木葉圧痕か?	混入品か?	8
121	16住	〃	坏DIII	11.8	4.6	3.6	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		1
122	17住	〃	〃II		7		(1/2)	橙茶	淡茶~橙	ロクロナデ、底部回転糸切り		2
123	〃	〃	甕	26.8			1/8	淡茶	淡茶~黒	口縁ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面板状工具によるナデ		1
124	19住	灰釉陶器	碗		6		(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		1
125	〃	土師器	鉢か?		10		(一部)	黄褐	黄褐	胴部外面ミガキ(単位不明)、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		2
126	20住	〃	坏A	10.8			(1/4)	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ、底部ケズリ		9
127	〃	〃	坏CII	12.7	7.4	3.7	(完)	橙褐	黒	口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部ケズリ、黒色処理	外面摩滅	1
128	〃	〃	坏A	13.4			1/6	黒	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面ミガキ下半ケズリ、黒色処理		8
129	〃	須恵器	埦	9.4			1/5	黄灰	淡灰~淡緑灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	内面自然釉付着	3
130	〃	〃	〃	8.8			1/8	灰~暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		4
131	〃	〃	坏	9.6	3.8	3.5	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ		2
132	〃	灰釉陶器	碗	13.4			1/6	乳灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	混入品	5

No	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 (底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
133	20住	土師器	甕	7.2			(一部欠)	暗橙褐	赤橙褐	胴部外面ナデ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		10
134	〃	〃	小形甕	10	6.8	7	(1/2)	暗橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ナデ、底部木葉圧痕		6
135	〃	〃	〃	13.8			1/5	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ナデ		7
136	〃	〃	甕	14			1/3	暗褐	茶褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面板状工具によるナデ		11
137	〃	〃	〃	16.8			1/4	暗褐	暗～暗緑褐	口縁ヨコナデ、内面工具によるナデ痕か?、胴部内外面ナデ		12
138	〃	〃	甕D	16.8			1/6	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部内外面ハケ目	混入品か?	13
139	〃	〃	甕F	20.8			一部欠	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部外面板状工具によるナデ、内面ナデ		15
140	〃	〃	甕	8.1			(完)	暗褐	暗褐	胴部内外面ハケ目、底部ナデ		14
141	〃	〃	甕D		10.4		(一部)	橙褐	橙褐	胴部内外面ハケ目、底部ナデ		1
142	22住	〃	坏DIII	12	5.8	4.35	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		6
143	〃	〃	〃II	14.4	6.4	3.9	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		3
144	〃	〃	〃	12.8	5	4.5	(完)	暗褐	黒褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		2
145	〃	〃	坏A	9.8	5.4	4.2	(完)	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切りか?付高台のちナデ、黒色処理		9
146	〃	〃	〃B	14.9	6.9	5.4	3/4	黄橙褐	暗黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りか?付高台のちナデ	内外面摩滅	8
147	〃	〃	〃	14	7	6	(1/2)	橙褐	橙～暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りか?付高台のちナデ	外面摩滅	7
148	〃	〃	坏C	14.8			1/2	黒	黒	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ、底部回転糸切りか?高台欠損、黒色処理		5
149	〃	〃	〃	16.8	6.6	6.8	(1/2)	黒	黒	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		4
150	〃	灰釉陶器	輪花碗	15.9	7.5	7	(完)	淡黄灰	淡黄灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切りか?付高台のちナデ	釉、漬け掛け	10
151	〃	土師器	小形甕		7.6		(一部欠)	暗茶褐	暗茶褐	胴部内外面ロクロナデか、底部回転糸切り	外面工具による横撫	11
152	〃	灰釉陶器	短頸壺	14.2			1/4	淡緑灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ胴部内面あて具痕	釉調、半透明淡緑	1
153	23住	〃	皿	7			(完)	灰	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		4
154	〃	土師器	坏DIII	10.9	5.5	3.2	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		6
155	〃	〃	〃	11	4.8	3.25	(完)	暗橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	内外面摩滅	7
156	〃	〃	坏B	14.3	7.2	4.3	(完)	暗橙褐	暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		1
157	〃	〃	坏A	12.55			(坏部完)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、高台欠損、黒色処理		2
158	〃	〃	坏CI or 坏A	18.6			1/3	暗橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理	内面摩滅	3
159	〃	〃	坏A	13.8	7	4.9	(完)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		5
160	25住	須恵器	蓋C	20		4.7	1/2	暗茶灰	暗茶灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ部ナデ、端部ヨコナデ	外面自然釉付着	4
161	〃	〃	坏B	7.3	6.9	3.9	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り(のちナデか?)		2
162	〃	〃	〃	13.4	6.9	4	1/3	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り		3
163	〃	〃	〃	14.8	9.9	4.1	(2/3)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り		6
164	〃	〃	坏CII		11		(1/3)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	ヘラ記号	5
165	〃	土師器	甕E		10		(完)	暗褐	橙褐	胴部外面ハケ目、下部ケズリ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		7

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底径)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
166	26住	土師器	坏DⅢ	10.4	5.8	2.3	2／3	橙～淡茶	橙～淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		12
167	〃	〃	〃	9.6	3.6	2.4	1／3	黒茶	淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		13
168	〃	〃	〃	10.2	4.5	2.55	(完)	淡橙	淡橙～淡橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		9
169	〃	〃	〃	9.4	3.8	2.6	(完)	淡茶～橙	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		18
170	〃	〃	〃	9.8	4.2	2.6	(完)	濃橙	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		10
171	〃	〃	〃	10.65	4.55	2.3	(完)	褐～淡橙	淡茶～茶灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		8
172	〃	〃	〃	9.2	4.5	3.1	(完)	淡橙	淡橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		17
173	〃	〃	〃	10.45	4.2	2.75	(完)	淡茶	淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		11
174	〃	〃	坏DⅡ	12.9	4.4	3.8	(完)	淡茶	淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		7
175	〃	〃	〃	13.8	6.2	3.3	(1／2)	茶	茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		6
176	〃	〃	〃	14	5.4	3.9	(完)	赤橙	橙～茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		14
177	〃	〃	埦A	14.4	6.6	5.4	(完)	暗茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		21
178	〃	〃	鉢B	10.4	5.6	3.25	完	淡褐	淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りか？付高台のちナデ		3
179	〃	〃	〃	11.7	6	3.4	(1／3)	淡茶	淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		20
180	〃	〃	〃	11	5.6	3.6	(完)	茶	茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半ケズリ、底部回転糸切りか？付高台のちナデ		19
181	〃	〃	〃	12	6.4	2.85	(完)	橙	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		16
182	〃	〃	鉢	21.8			1／8	茶褐	黒褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面ケズリか？		15
183	〃	灰釉陶器	碗		7.4		(2／3)	白灰	白灰	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉漬け掛け	24
184	〃	須恵器	長頸壺	8.2			1／2	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		23
185	〃	土師器	小形甕	12			1／2	茶褐	暗茶褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ケズリ（単位方向不明）、内面板状工具によるナデ		22
186	〃	灰釉陶器	段皿	11	6.6		(1／3)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	朱墨硯	1
187	〃	〃	〃	13.8			一部	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ	朱墨硯	5
188	〃	土師器	鉢B				一部	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	鳥の絵？	4
189	〃	灰釉陶器	皿		7		(3／4)	白灰	白灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	朱墨硯	1
190	〃	〃	広口壺	18			1／8	灰	淡緑灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	釉調、無色透明～半透明淡緑	1
191	28住	土師器	坏A	13.4	8	3.7	(1／3)	黒	暗茶褐	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ、底部ケズリ		6
192	〃	須恵器	蓋				(つまみ部完)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ部ナデ	自然釉付着	4
193	〃	〃	坏B	14.25	7.8	3.7	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラ切り痕		1
194	〃	〃	〃	14.8	7	3.9	(完)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラ切り痕		3
195	〃	〃	〃	15	8.6	4.45	1／6	暗灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラ切り痕		2
196	〃	〃	長頸(?)壺		7.4			暗青灰	暗青灰	胴部内外面ロクロナデ、底部ケズリのちナデか？		5
197	〃	土師器	小形甕	13	8.4	12.7	一部	赤～暗褐	淡黄褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部内面ロクロナデ、底部ナデ	外面摩滅、混入品	9
198	〃	〃	甕E	17.4			1／4	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ナデ	混入品	8

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	色調 内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
199	28住	土師器	甕D		10		一部	暗橙褐	淡橙褐	胴部内外面ハケ目、底部木葉圧痕か?		7
200	29住	〃	坏A	10.8			1/3	暗褐	暗赤褐	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ	外面摩滅	1
201	〃	〃	甕		8.4		(2/3)	暗褐	暗黄褐	胴部外面ナデ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		2
202	30住	灰釉陶器	碗	16.6			一部	乳灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		1
203	〃	〃	〃(III)		6.4		(完)	乳灰	乳灰	ロクロナデ、体部下半回転ヘラケズリか?、底部回転糸切り、付高台のちナデ		2
204	31住	土師器	坏DIII	12			(1/2)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		3
205	〃	〃	盤B	15	4.4	5.8	(完)	褐~茶褐	黒~茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		1
206	〃	〃	〃	16	8.3	6.3	(完)	淡茶~黒	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		2
207	34住	〃	小形甕	14	7.6	17	(1/2)	橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケ目、下部ケズリ、内面ハケ目、底部ナデ		1
208	〃	須恵器	甕	27.4			1/3	暗青灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	内面自然釉付着	2
209	37住	土師器	坏DIII	9.3	4.3	2.3	完	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
210	〃	〃	坏DII	14.2	6.6	3.2	(1/3)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		33
211	〃	〃	〃	13.4	6	3.9	(1/2)	橙~茶褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(単位不明)、底部回転糸切り		32
212	〃	〃	〃	14.6	7	3.6	1/6	橙褐	暗~橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	混入品	37
213	〃	〃	坏C	12.8	5.7	4.5	1/8	暗茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、黒色処理		38
214	〃	〃	〃	13.8			(1/3)	黒~暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、黒色処理		36
215	〃	〃	坏CII	12.95	5.8	3.9	完	茶褐	茶褐~黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		1
216	〃	〃	〃	13.35	6.15	3.85	完	暗~褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		10
217	〃	〃	〃	13.2	6	3.9	完	暗橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		7
218	〃	〃	〃	13	6.4	3.8	(完)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		6
219	〃	〃	〃	13.7	6	3.95	(完)	黄橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		9
220	〃	〃	〃	14	6.2	4.2	(2/3)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		29
221	〃	〃	〃	13.4	5.4	4.05	(完)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		8
222	〃	〃	〃	13	5.6	4.15	(完)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		12
223	〃	〃	坏C	15.6			1/2	赤茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ		34
224	〃	〃	坏CII	13.3	5	3.95	(完)	暗~黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理	墨書	11
225	〃	〃	〃	14.8	6.4	4.95	(完)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理	墨書	2
226	〃	〃	坏C	16.8	8	6.1	(完)	赤茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		19
227	〃	〃	皿A	12.8	5	2.3	(2/3)	橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		30
228	〃	〃	〃	13.6			ほぼ完	褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、高台欠損、黒色処理		17
229	〃	〃	坏CII or IIIA	16.6			1/3	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ		15
230	〃	〃	IIIA	13.9	6	3	1/3	淡黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキか?(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		31
231	〃	〃	〃	13.65	6.35	3.25	(完)	暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		16

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
232	37住	土師器	埦A	14.7	6.85	5.35	(完)	赤橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転糸切りか?、付高台のちナデ、黒色処理		3
233	〃	〃	〃	14.2	7.5	5	(完)	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		21
234	〃	〃	〃	15.9	7.1	5.5	(完)	淡橙～暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		5
235	〃	〃	〃	15	7.2	5.5	1／3	淡～暗褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		20
236	〃	〃	〃		7.2		(完)	淡～黒褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		35
237	〃	〃	〃					暗～淡橙褐	黒	ロクロナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、高台欠損、黒色処理		17
238	〃	〃	埦B	15	6.4	5.6	(完)	茶褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	混入品	23
239	〃	須恵器	坏B	8.3	5	3.2	(1／2)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り		42
240	〃	〃	〃	9	7.2	3.1	(1／2)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り	自然釉付着	41
241	〃	〃	坏D	13.7	6.2	3.8	(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		24
242	〃	〃	〃	13.6	6.6	3.7	1／2	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		14
243	〃	〃	坏B		6		(1／2)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、体部外面下半ケズリか?、底部ヘラ切り	ヘラ記号	43
244	〃	土師器	埦A	15	7	6.1	(完)	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ、黒色処理		22
245	〃	須恵器	坏D	13.7	5.1	3.65	(完)	淡黄灰	黒灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		13
246	〃	〃	〃	12.8	4.8	3.55	(1／3)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		40
247	〃	土師器	小形甕		7.1		(完)	暗茶褐	暗褐	胴部外面ナデ、下部板状工具によるナデ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		28
248	〃	須恵器	坏D	15.6	5.8	3.9	(完)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		25
249	〃	〃	短頸壺	8.8			1／3	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ	外面自然釉付着	27
250	〃	土師器	小形甕F		6.6		(完)	濃橙褐	濃橙褐	胴部外面カキ目、内面ロクロナデ、底部回転糸切り		39
251	〃	須恵器	(長頸)壺		8.2		(完)	暗紫灰	暗灰	胴部外面ロクロナデ、下半回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、底部静止糸切り、付高台のちナデ	外面自然釉付着	18
252	〃	土師器	甕E	23.6			1／6	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目		46
253	〃	須恵器	長頸壺		8		(完)	暗紫灰	暗紫灰	胴部外面下半回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	内面自然釉付着	26
254	〃	土師器	甕F	18			1／4	暗橙褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ		50
255	〃	〃	甕E	20.4			1／6	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ナデ		45
256	〃	〃	〃	21.6			1／6	暗橙褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ロクロナデ		48
257	〃	〃	〃	18.6			1／3	暗褐	褐～黒褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面ナデ		44
258	〃	〃	〃	31.2			1／4	暗褐	暗茶褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面上部ハケ目か?、下部板状工具によるナデ		49
259	〃	〃	〃	21.4			1／3	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ		47
260	〃	〃	〃	23.8			1／4	暗褐	黒褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面指圧痕		51
261	〃	〃	〃		9.2		(一部欠)	暗褐	暗茶褐	胴部外面ハケ目、下部ケズリ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		56
262	〃	〃	〃		9.2		(完)	暗褐	暗褐	胴部外面ハケ目、下部ケズリ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		55
263	〃	〃	〃		10.4		(1／2)	暗褐	暗～茶褐	胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		54
264	〃	〃	〃		10		(1／4)	暗橙褐	暗橙褐～黒褐	胴部外面ハケ目、内面ナデ、下部板状工具によるナデ、底部ナデ		52

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
265	37住	土師器	甕E		9.4		(1/2)	暗橙褐	暗橙褐	胴部外面ハケ目、内面ナデ、下部板状工具によるナデ、底部ナデ		52
266	38住	〃	小形甕	14	7.5	9.2	(完)	黄褐	黄褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ミガキ(単位不明)、内面ナデ、一部板状工具によるナデ、底部ナデ		4
267	〃	〃	甕E	21			1/5	橙褐	淡橙褐	口縁ヨコナデ、内面ハケ目、胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ		5
268	〃	〃	甕		8.6		(完)	黒～暗橙褐	茶褐	胴部外面ナデ、内面板状工具によるナデ、底部ナデ		1
269	〃	〃	〃		6.8		(4/5)	暗褐	淡～暗褐	胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ、底部木葉圧痕		2
270	〃	須恵器	瓶		3.25		(完)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラ記号	6
271	〃	土師器	壺		9.8		(完)	暗橙～暗橙褐	暗茶褐	胴部内外面ナデ、底部木葉圧痕か?		3
272	40住	〃	坏DII	12.2	5.2	3.1	1/3	暗～茶褐	暗～淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		2
273	〃	〃	坏DIII	11.8	6	3.2	完	橙～淡茶	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		1
274	41住	〃	小形甕F	20.5			1/6	暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ロクロナデ		3
275	〃	〃	甕		7		(一部欠)	茶黒	淡褐	胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデか?、底ナデ		2
276	〃	〃	〃		6.8		(3/4)	暗～橙褐	橙	胴部外面ハケ目、内面ロクロナデ、底部回転糸切り		1
277	42住	須恵器	坏D	13.4	6.2	4	(1/3)	暗青灰	暗青灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りか?		4
278	〃	〃	〃	15	6.2	4.1	(完)	暗灰	暗灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		5
279	〃	土師器	小形甕	11.8			(3/4)	暗橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、胴部外面摩滅、内面板状工具によるナデ		2
280	〃	〃	甕A	20.6			1/4	橙褐	橙褐	口縁ヨコナデ、内面ハケ目、胴部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ		6
281	〃	〃	小形甕E		6.6		(4/5)	暗褐	橙褐	胴部外面カキ目、内面底部ハケ目、底部ナデ		1
282	〃	〃	甕	26.6			1/4	淡橙褐	淡橙褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ナデ		3
283	竪穴状遺構	〃	坏D	11.6	6.3	3	(1/3)	暗茶	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		1
284	1土坑	施釉陶器	香炉		6		(一部)	灰	灰	ロクロナデ	吉原戸糸陶器	10
285	9土坑	土師器	皿X	10.15	3.5	1.3	(完)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		8
286	〃	〃	〃	9.9	4	1.2	完	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		9
287	〃	〃	坏DIII	9.7	4.6	2	(完)	淡～暗褐	淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		4
288	〃	〃	〃	9.25	4.35	2.5	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		5
289	〃	〃	〃	12.7	5.1	3.5	(完)	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		6
290	〃	〃	甕E	23.4			1/6	暗橙褐	暗～茶褐	口縁ヨコナデ、内面カキ目、胴部外面ハケ目、内面指圧痕		10
291	〃	〃	壺A	15.2	7	6.3	1/2	暗～橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		7
292	19土坑	〃	鉢B	10.5			一部欠	茶褐	茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、高台欠損		3
293	〃	灰釉陶器	碗	12.2	5.8	3.95	(1/4)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	釉調、透明	2
294	23土坑	土師器	坏DIII	10.4	5.3	2.5	(1/2)	淡茶褐	淡茶褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		22
295	〃	〃	〃	11.3	5.1	2.7	一部欠	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		15
296	〃	〃	〃	9.7	4.2	3	(完)	淡橙褐	淡橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		11
297	〃	〃	〃	11.3	5.7	2.6	完	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		19

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
298	23土坑	土師器	坏DⅢ	10.3	6	3	(3/4)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		21
299	〃	〃	〃	11.2	6	3.15	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		13
300	〃	〃	〃	11	5.1	3.45	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		20
301	〃	〃	〃	10.6	5.6	3	(完)	濃橙褐	濃橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		12
302	〃	〃	椀A	10.4	4.8	4.5	(完)	淡黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		17
303	〃	〃	盤B	15.4	8.4	6.3	(一部欠)	茶褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半ケズリか?、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		14
304	〃	〃	椀A	10.4	4.8	4.5	(完)	淡黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理		18
305	〃	〃	坏C or 椀A	14.2			1/2	黄褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理		16
306	〃	須恵器	甕	42.8			1/8	暗灰	暗灰	口縁ヨコナデ、ロクロナデ	自然釉付着	23
307	25土坑	土師器	坏DⅢ	9.5	3.4	2.7	(完)	茶褐	淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		33
308	〃	〃	〃	8.9	4.2	2.15	(完)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		50
309	〃	〃	〃	10.6	4.6	2.45	(完)	淡褐	淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		49
310	〃	〃	〃	10.1	4.2	2.45	(完)	橙～淡黄褐	淡黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		30
311	〃	〃	〃	9.8	2.3	2.6	(完)	橙	橙～黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		34
312	〃	〃	〃	10.2	4.6	2.5	(完)	橙	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		36
313	〃	〃	〃	10	4.9	2.5	1/3	淡～褐	淡～褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		43
314	〃	〃	〃	10.5	4.4	2.7	完	淡橙	淡橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		26
315	〃	〃	〃	10.5	4.8	2.7	(完)	橙褐	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		27
316	〃	〃	〃	10.6	4.4	2.7	(3/4)	白茶～淡茶	白茶～淡茶	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		32
317	〃	〃	〃	10.6	4.4	2.8	(完)	橙	橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		28
318	〃	〃	〃	9.9	4.3	2.4	(完)	橙～淡褐	淡褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		35
319	〃	〃	〃	10.2	10.4	2.7	(完)	淡茶褐	淡茶～橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		31
320	〃	〃	〃	10.4	4.4	2.85	(完)	黄褐	黄褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		29
321	〃	〃	〃	10.45	4.8	3	(完)	黒～褐	黒～褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		40
322	〃	〃	〃	10.8	4.9	2.6	完	黄橙褐	黄橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		47
323	〃	〃	〃	11.4	6	2.8	(3/4)	褐	褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		42
324	〃	〃	〃	11	5.2	3.3	(完)	濃橙褐	濃橙	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		25
325	〃	〃	盤B	10.3			完	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、高台欠損		48
326	〃	〃	坏DⅡ	12.4	4.8	3.85	(完)	濃橙褐	濃橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		24
327	〃	〃	〃	13	5.8	3.5	(完)	黒～暗橙褐	黒～暗橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		41
328	〃	〃	椀B	10.45	5.7	3.55	(完)	暗褐	暗～褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		38
329	〃	〃	〃	11.1	6.6	4.05	(3/4)	橙褐	橙褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		37
330	〃	〃	椀C	10.85			1/3	黒	黒	口縁ヨコナデ、体部内外面ミガキ、底部回転糸切り、高台欠損		44

No	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考		実測No.
331	25土坑	土師器	坑A	10	5.9	3.9	3／4	黄～橙褐	黒	口縁ヨコナデ、体部外面ヨタヨナデ、内面暗文、底部回転糸切り、付高台のちナデ、黒色処理			45
332	〃	〃	鍋B	15.2	7.6	5.6	(1／2)	暗褐	黒	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ			39
333	〃	〃	坑B	17.2			2／3	淡橙褐	淡橙褐	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、高台欠損			46
334	ピット	内耳土器	内耳鍋	27.2	11.3	14.5	3／4	暗褐	暗茶褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ヨタロナデ、耳部ナデ、底部ヘラケズリ		注記No.P 2	2
335	〃	土師器	坏D	13.1			1／4	茶褐	橙褐	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ		〃 P46	5
336	〃	須恵器	坏C II		9.8		(1／4)	淡灰褐	褐	ヨタロナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		〃 P13	4
337	〃	内耳土器	内耳鍋	32.6	25.4	17.6	1／2	黒～暗褐	暗褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ヨタロナデ、耳部ナデ、底部ヘラケズリ		〃 P 2	3
338	〃	施釉陶器	水瓶				一部	黒～茶	暗茶褐	ヨタロナデ	古瀬戸系陶器、内外面鉄釉	〃 P 1	1
339	溝址	土師器	皿X	11	4	1.25	1／4	淡褐	淡褐	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		〃 溝4	8
340	〃	須恵器	瓶	8			1／12	灰	緑灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ		〃 溝3	3
341	〃	灰釉陶器	皿	12.2			1／4	灰	灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ	釉調、透明緑色	〃 溝3	2
342	〃	須恵器	坏C II	15.2	10.8	3	1／3	淡灰	淡灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	自然釉付着	〃 溝4	7
343	〃	灰釉陶器	碗		6.8		(3／4)	灰	灰	ヨタロナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉調透明	〃 溝3	5
344	〃	土師器	鉢		10.8		(1／8)	橙褐	橙褐	ヨタロナデ、底部回転糸切りか?		〃 溝4	9
345	〃	灰釉陶器	壺類		15.6		(1／6)	白灰	白灰	ヨタロナデ、胴部外面下部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		〃 溝4	6
346	第1検出面	土師器	皿X	10.6	3.2	2.35	(1／2)	暗～茶褐	黒褐	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		〃 溝4	7
347	〃	灰釉陶器(?)	壺C	15.8			一部	白灰	白灰	ヨタロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ			6
348	〃	〃	段皿	12.2	6.6	2.05	1／3	白灰	白灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切りか?、付高台のちナデ			2
349	〃	緑釉陶器	碗(?)	11.4			一部	黄緑	黄緑	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ			9
350	〃	〃	碗	12.4	6.2		(1／4)	暗緑	暗緑	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、高台欠損			10
351	〃	〃	輪花碗	14			1／4	暗緑	暗緑	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ			8
352	〃	灰釉陶器	碗	14.6	7	5.4	(2／3)	乳灰	乳灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ			1
353	〃	〃	〃		7.2		(1／3)	暗灰	暗灰	ヨタロナデ、底部回転ヘラケズリか?、付高台のちナデ			3
354	〃	緑釉陶器	〃		6.8		(1／3)	暗緑	暗緑	ヨタロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	内面釉摩滅剥離		12
355	〃	灰釉陶器	〃		7.8		(1／3)	白黄灰	白黄灰	ヨタロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ			4
356	〃	須恵器	坏B(?)		7.2		(1／2)	淡青～淡茶灰	淡茶灰	ヨタロナデ、底部回転ヘラケズリ			5
357	〃	緑釉陶器	碗		5.8		(1／3)	暗緑	暗緑	ヨタロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	内面釉摩滅剥離		11
358	第2検出面	須恵器	壺C	12.4			1／4	灰	灰	ヨタロナデ、天井部回転ヘラケズリ、端部ヨコナデ			12
359	〃	〃	蓋			1.65		白灰～灰	暗灰	ヨタロナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ部ナデ			10
360	〃	〃	坏D	13.2			1／5	暗灰	暗灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り			4
361	〃	〃	〃	12.3	4.8	3.65	(完)	橙褐	橙褐	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り	焼成不良		1
362	〃	〃	坏B	13.8	6.7	4.8	1／3	暗～淡黄灰	暗～淡黄灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り	焼成不良		23
363	〃	〃	坏D	14	5.6		(1／3)	灰	灰	ヨタロナデ、口縁ヨコナデ、底部ヘラ切り			3

No.	出土地点	種別	器形	寸法(cm) 口径	底径	器高	残存度 口径(底部)	色調 外面	内面	成形・調整・形態の特徴	備考	実測No.
364	第2検出面	灰釉陶器	段皿	14.2	8.2	2.75	(1/2)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		19
365	〃	〃	皿	13.2	7	2.95	1/10	緑灰	緑灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、付高台のちナデ		5
366	〃	〃	碗	13	7.4	4.3	1/5	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、付高台のちナデ	釉調半透明	2
367	〃	土師器	坏DIII	10.8	6.2	3.05	1/2	暗褐	暗褐	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り		20
368	〃	〃	坏C	11.6			1/3	淡茶褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ(摩滅)、黒色処理		13
369	〃	〃	〃	13.4	6.6		1/4	橙～暗橙褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、底部回転糸切り、黒色処理		14
370	〃	〃	〃	14.8			1/8	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理		15
371	〃	〃	小形鍋(?)	9.4	5.8	5.7	1/4	黒～暗褐	暗橙褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面板状工具によるナデか?		24
372	〃	〃	〃	14.8			1/3	茶褐	茶褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ロクロナデ		17
373	〃	灰釉陶器	碗	14.4	5.4	7.25	1/3	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ	釉ハケ塗り	6
374	〃	〃	〃		7.8		(1/3)	灰	暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		11
375	〃	〃	皿		6.9		(1/3)	白灰	白灰	ロクロナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		7
376	〃	〃	碗		7.8		(1/3)	灰	暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		16
377	〃	須恵器	短頸壺か?		9.8		(完)	暗紫灰	暗紫灰	胴部内外面ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ		18
378	〃	土師器	甕E	22.2			1/12	淡褐	淡褐	口縁ヨコナデ、胴部内外面ハケ目		22
379	〃	灰釉陶器	短頸壺	13.6			1/12	灰	白灰	口縁ヨコナデ、胴部内外面ロクロナデ		8
380	〃	〃	長頸壺		16.2		(1/3)	灰	灰	胴部外面ロクロナデ、下半回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		9
381	〃	須恵器	壺		17.4		(1/3)	灰	灰	胴部外面回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、付高台のちナデ		21
382	用地外北方	灰釉陶器	段皿	10.8	6.3	2.2	(1/4)	淡灰	淡灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		8
383	〃	〃	皿	12.4	3.6	2.3	(完)	白灰	淡黄緑～灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		1
384	〃	〃	〃	13.2	6.8	2.15	(1/3)	白灰	白灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		9
385	〃	〃	碗		7.8		(完)	白灰	白灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、付高台のちナデ		2
386	〃	〃	〃	15.6			1/6	乳灰	乳灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ		6
387	〃	土師器	坏C or 皿A	16			1/12	淡褐	黒	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部内面ミガキ、黒色処理		3
388	〃	須恵器	壺?		9.2		(1/4)	暗紫灰	暗紫灰	胴部内外面ロクロナデ		5
389	〃	灰釉陶器	碗	16.6	8.2	8.4	(1/4)	灰	灰	ロクロナデ、口縁ヨコナデ、体部外面下半回転ヘラケズリ、付高台のちナデ		7
390	〃	土師器	小形甕	14			1/12	茶褐	褐	口縁ヨコナデ、胴部外面ロクロナデ、内面板状工具によるナデ		4

2）鉄器・銅製品

竪穴住居址から80点、土坑、ピットから4点、溝から4点、遺構外から9点の計98点が出土している。その内訳は、鉄製品で鎌2、刀子20、鉄鏃11、紡錘車3、苧引鉄1、角釘14、鑿鉋1、楔状鉄器1、燧鉄1、毛抜型鉄器2、煮炊具1など、青銅製品では佐波理鋺1、帯金具2、不明品1、他には金環が1点あった。鉄器不明品は37点を図示し得たが、3・9・22・26・27・37・41住からの約10余点は、破損の為、又錆化激しいために図化していない。

鎌は、2点である。いずれも4住から出土した。1は、切先先端を欠くがほぼ完形品である。身部長18.4cmを計る大形品で、端部から棟部にかけ角丸状の折り返しを有する。刃部は三日月状を呈し、基部は直線状となる。全体的に肉薄であるためか、端部近くを除いて刃付けが行なわれている2は、刃部破片だが、1よりも若干小ぶりで中形鎌に属しようか。

刀子20点のうち、3点は茎部と想定、又、切先の無い2点は身部と想定した。刀子として確実なもののうち、大きさについて大別すると、特に小形の21、やや小形の3、10、17、19、中形の4、7、11、13、15、16、大形の20、特に大形の6などと分けられる。7は、茎部に布が付着している。又16は木質部が残っているのが見えた。錆化著しい19は、茎部断面が方形を呈することから鉄鏃の可能性がある。6は、その大きさに比べ茎部長が短く、刃部全体も内湾している。通例の形状とは大きく異なり、刀子という名称を与えられようか。なお関部の観察できるものは、11を除き両関造りとなっている。

鉄鏃は、11点としたが、茎部のみの2点は確実性に欠ける。4住出土が5点、3住2点、6・9住各1点が確実なものである。鏃身部が小形の23、24、鏃身部が長三角形で、関部が撥状となるもの（26、27、28、30）、鏃身部が五角形で逆刺をもつ33、いわゆる雁股鏃（29）などが見えている。鏃身部が長三角形を呈するものでも、身部、刃部、関部、などに相違が明らかで、一括できるものではない。又、特に異形の33は、切先が欠損したものを再加工したと思われる。なお、28と30に縞が見られた。

紡錘車は、3点ある。35はほぼ全容が分かるが接合できず、先端の糸繰部は不明である。紡輪だけの34は、薄手で腐食により穴も開いている。

大きく欠損した37は、形状と刃付けの部位から苧引鉄と想定している。

釘は、15点を認定したが、不明品と扱った中にも相当数含まれよう。脚部を途中から切損するものが多い為詳しくは分らない乍らも、3寸以上の43、45、47、48、2寸に満たない39、44などと分けられようか。頭部形状が観察できた8点のうち、頭部を叩き伸ばして後に曲げられている47、48を除いた6点は、いずれも鑿を入れた後に折り曲げ、方形ないし台形の頭部を作っている。

鑿鉋とした53は、中程で180度曲がっている。頭部は方形をなし、曲がっている箇所でくびれ状となり、刃端部を欠失するが、形状は平たく舌状をなすように見える。

54は楔状のものである。頭部はわずかに敲き潰されている。先端は平たく、しかも尖る。厚さも

あり、鑿として使用したものであろう。

燧鉄は、１点である。基部の山は低く、長く湾曲しながら裾へ達する。両裾とも端部を欠損するが、内傾して終わるようである。

56、57は、毛抜型鉄器と呼ばれるものである。薄い断面はカマボコ状を示し、下部でゆるやかに曲がっている。恐らく同一個体と考える。

58は、断面方形で、上部に関部のようなふくらみと、くびれがある。釘などとは明らかに異なり工具と思われるのだが、刃部側である下部を欠するため器種は不明である。

帯金具は、巡方と丸鞆ともに１点ずつである。両者とも37住より出土した。状態はあまり良くなく、特に巡方がひどく内面の突起も欠失している。両者を比較すると大きさが不揃いであり、巡方の大きさは図より大きくなろう。又、図示してないが、３住出土の銅製品は、0.5×１ cm の大きさで表面に突起が見える。鋳造品のようであるが全容は分からない。

４住より出土した佐波理鋺は、0.5～5.0cm 角程に割れ、計８片となっていた。これらは、底部及び体部の一部で、実測不可能であった。器面は、薄緑色でマダラ状を呈し、タタキによる打ち伸ばしの為か、直径１ cm 前後の小さな起伏が残る。底面内部には、同心円状に轆轤による整形の跡が線条痕となって見えている。敢えて、器厚を測ってみると、底部中央で0.5mm、体部で0.2～0.3mm である。器種は限定できないが、直径6.5cm 前後のやや扁平な丸底の器形を予想できる。

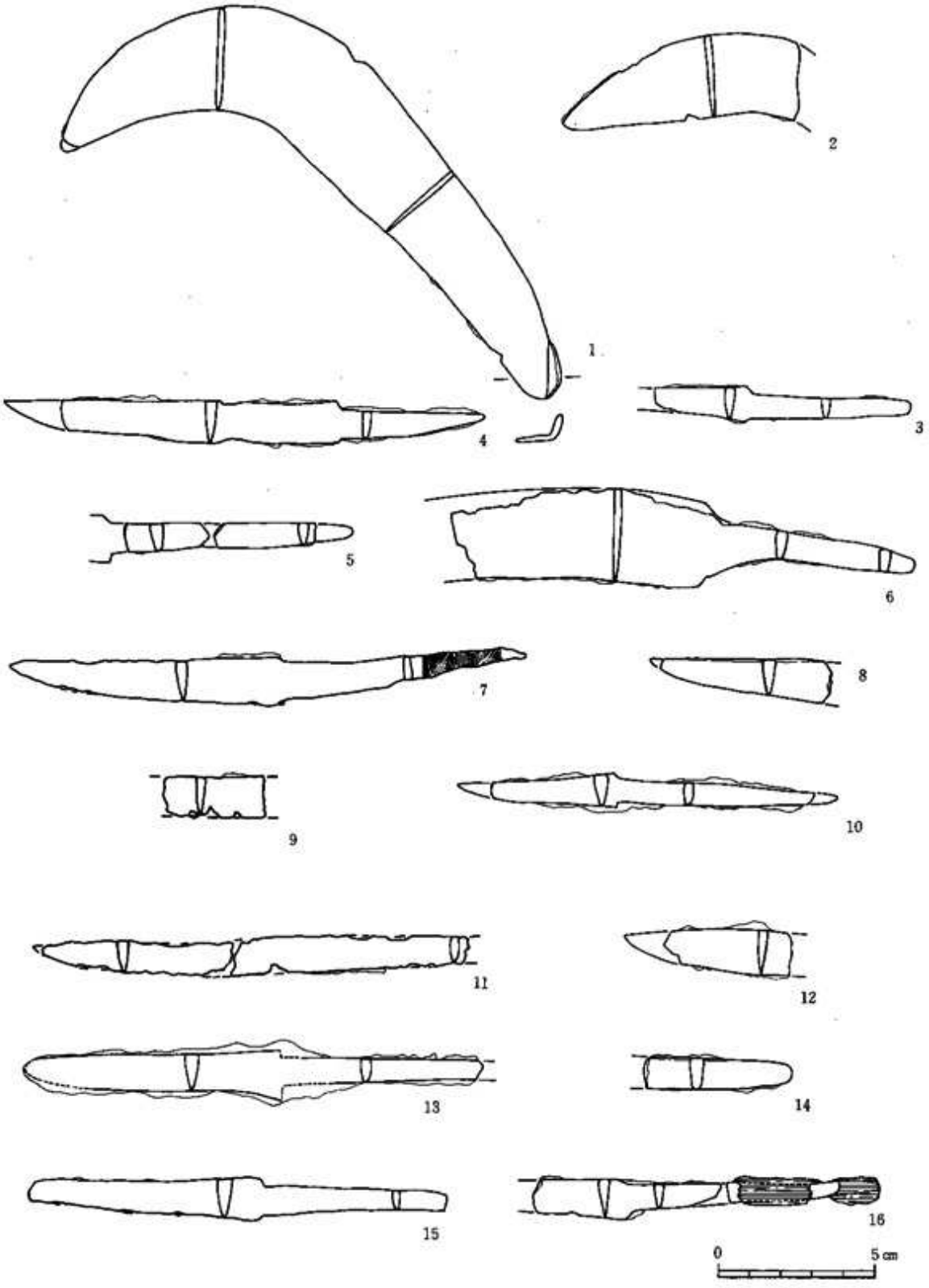
金環は、９住から１点が出土した。遺存状態悪く鍍金の剝落が激しく、内側の銅が見えている。

92は鉄製の煮炊具と考える。錆により明褐色を呈するが、厚い為かヒビ割れは全く見られない。その厚さは７～８ mm で口縁は波状をなしている。胴部から口縁は垂直に立ち上がり、残存部には突帯のような、或いは耳のようなものも見当らず、土師器坏の底部が錆と共に密着する。直径は20 cm 程と知れるが、釜なのか鍋なのかは分らない。尚、ここに付いた土器は11世紀のものである。

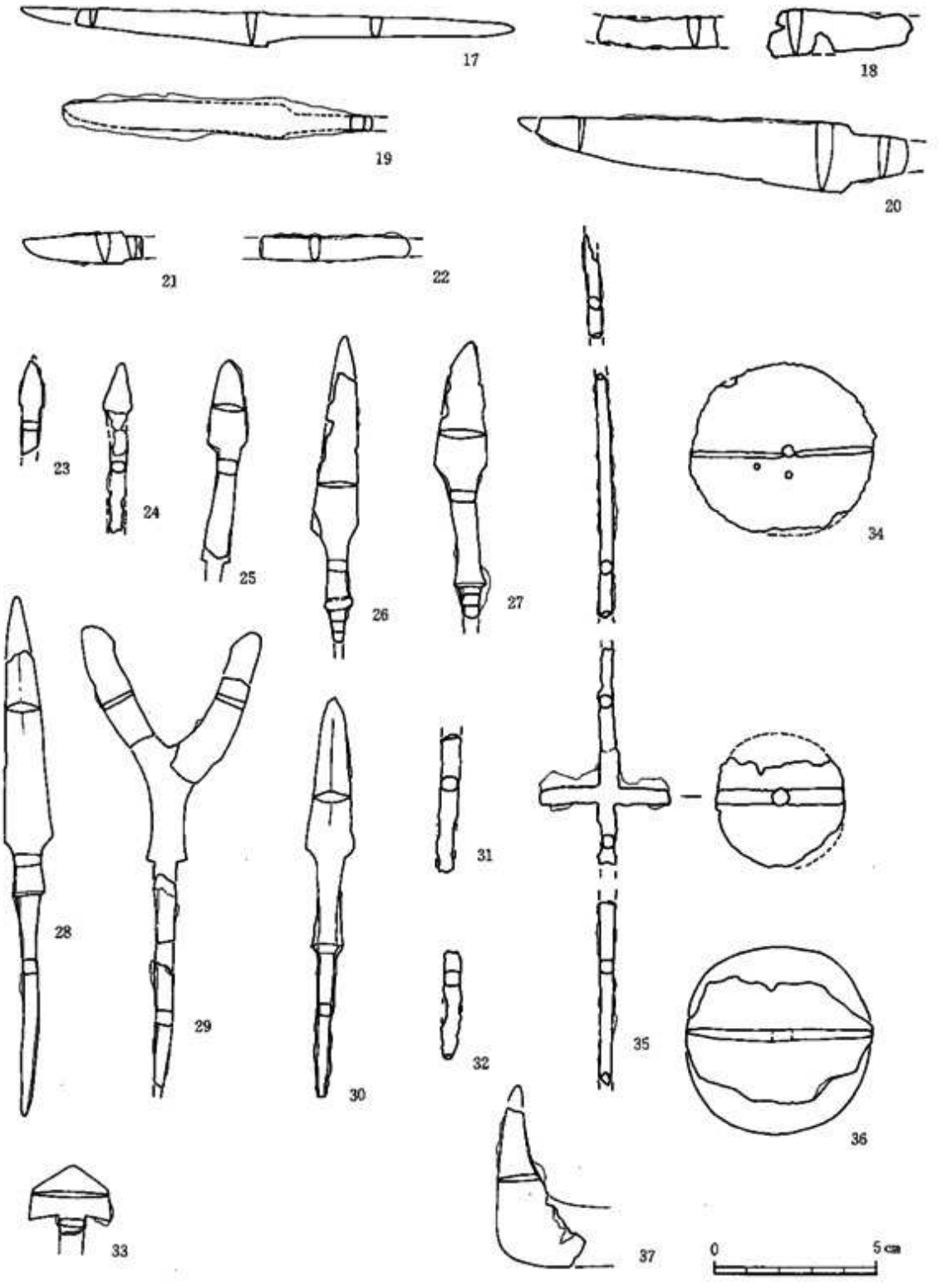
鉄製の不明品については、棒状・板状・Ｌ字状など各種のものが見られる。69は、鉄鐸の舌様のものであるが、建築金具である受金具や肘金具と類似するようである。74は、カマボコ形に近い断面形状と、一方の屈曲部から、56、57同様毛抜形鉄器かも知れない。81は、雁股鏃の変形品にも見えるが、鏃身頸部がなく、刃付けも見当らないことから鏃とは認められない。

最後に本遺跡から出土した鉄滓について見ることとする。これらは、18軒の住居址、溝３本、土坑１基、ピット２個など他に検出面も含め5,130ｇに達した。遺構別に見ると、４住の1,082ｇを最高に、３号溝677g、37住527g とつづく。大きさも形状も大小、相異あり形容しがたいものである。このうち、緑色を呈する１点を認めた。22住からのもので、磁性を帯びながら、銅色の輝きも見られる。どうやら鉄を銅で包んでいるものかもしれない。

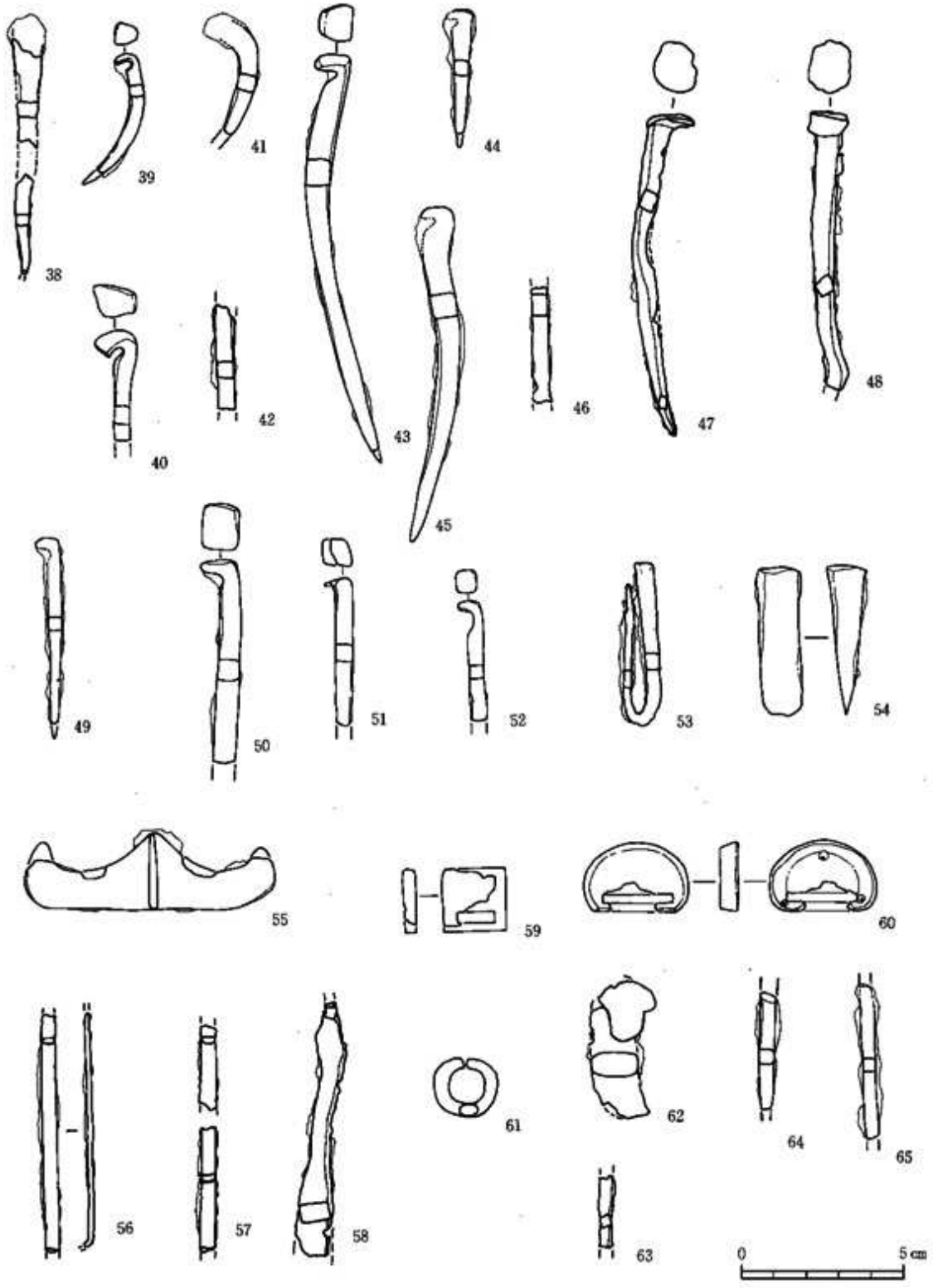
尚、37住より唯一の銭が出土しているが、腐食が激しく銭名などは全く分からない。



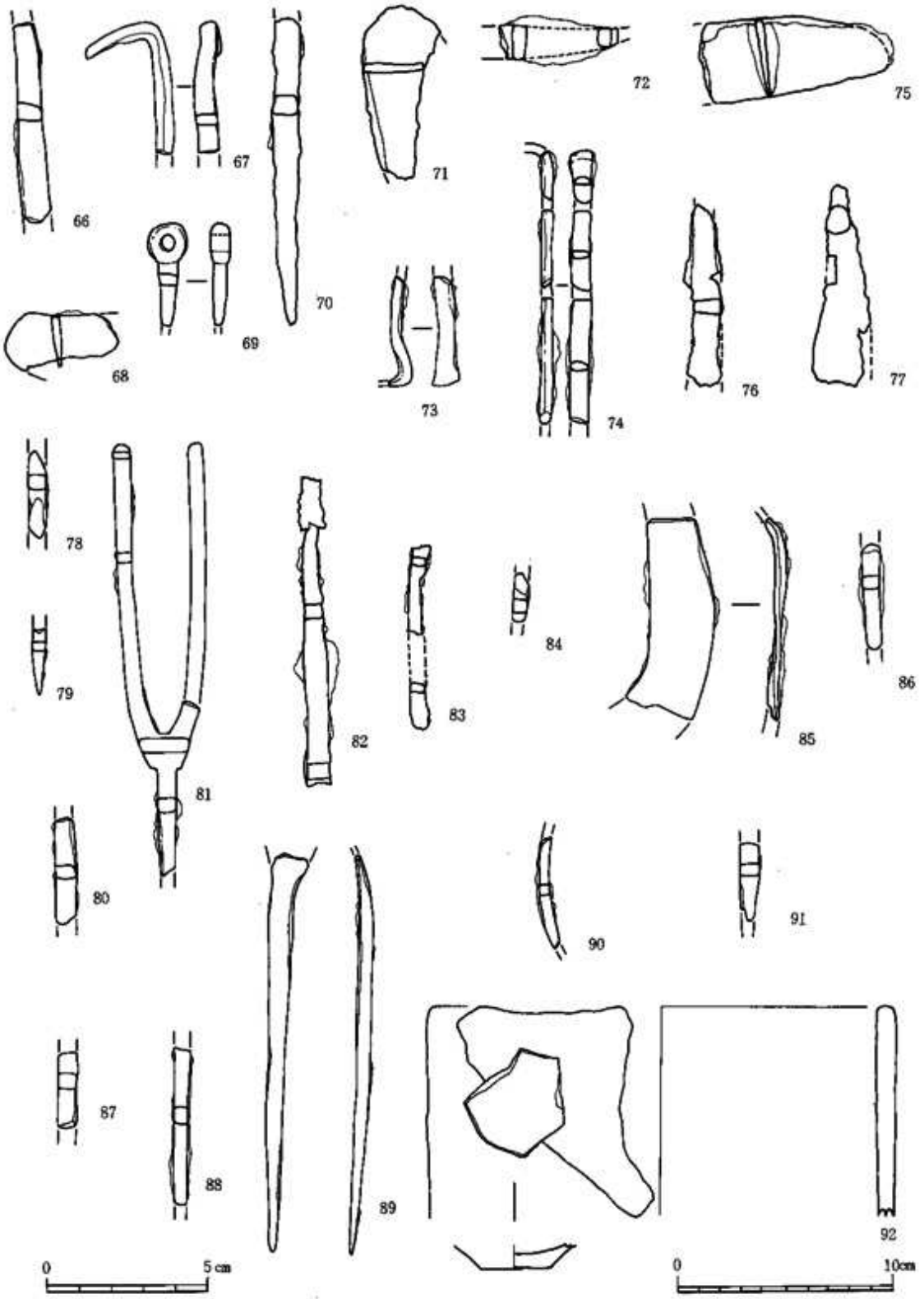
第129図　鉄 器 (1)



第130図　鉄 器 (2)


38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
5cm

第131図　鉄 器 (3)


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
0
5cm
0
10cm

第132図　鉄 器 (4)

第16表　　SK V　鉄・銅製品一覧表

No	種　別	出土遺構	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
1	鎌	4住	(18.4)	3.2	0.2	(28.7)	切先欠失、着柄角約40°、背縁折り返し
2	〃	〃	(7.5)	2.6	0.2	(9.5)	茎部以下欠失
3	刀子	〃	(8.1)	1.2	0.3	(4.1)	切先欠失、両関造り
4	〃	5住	(13.5)	1.3	0.4	(18.4)	切先欠失、両関造り
5	刀子茎?	7住	(6.1)	(0.9)	(0.4)	(4.0)	両端欠失
6	刀子	8住	(14.8)	3.0	0.3	(24.3)	身部半欠、身部内湾
7	〃	14住	16.5	1.5	0.5	13.1	完形、繊維付着、両関造り
8	〃	15住	(5.5)	(1.3)	(0.4)	(4.2)	切先・身部中央以下欠失
9	〃	20住	(2.25)	(1.3)	(0.3)	(3.0)	身部のみ
10	〃	22住	(10.3)	1.1	0.4	(9.3)	切先・茎尻欠失、両関造り
11	〃	23住	(13.7)	(1.1)	0.3	(10.8)	茎部、区別不明
12	〃	26住	(4.1)	(1.4)	(0.2)	(3.5)	切先・身部中央以下欠失
13	〃	〃	(14.6)	1.6	0.5	(21.4)	茎尻欠失、関部形状不明
14	刀子茎尻?	28住	(4.7)	(1.0)	0.5	(4.7)	関部以上欠失
15	刀子	37住	13.4	1.4	0.5	16.3	破損品のまま使用
16	〃	〃	(11.0)	1.3	0.3	(9.0)	身部中央以上欠失、茎部木質残存
17	〃	19土坑	(13.4)	1.1	0.3	(8.3)	切先欠失、両関造り
18	〃	2溝	(8.1)	(2.4)	0.4	(8.2)	刃部のみ、別個体か
19	刀子?	3溝	(9.5)	(1.2)		(18.7)	茎尻欠失、鉄鏃の可能性あり
20	刀子	2検	(11.6)	2.1	0.5	(10.6)	切先・茎部欠失、両関造り
21	〃	〃	(3.7)	1.0	0.4	(2.8)	茎部欠失、両関造り、研ぎ減り顕著
22	刀子茎?	〃	(4.6)	(0.7)	(0.3)	(0.2)	両端欠失
23	鉄鏃	3住	(2.9)	0.7	0.3	(1.6)	茎部欠失
24	〃	〃	(5.2)	0.7	0.3	(1.7)	〃
25	〃	4住	(6.1)	1.2	0.2	(5.3)	関部以下欠失、鏃身部長三角形
26	〃	〃	(8.3)	(1.5)	0.2	(3.6)	鏃身端部・茎部欠失、鏃身部長三角形
27	〃	〃	(8.5)	1.6	0.3	(6.7)	茎部欠失、鏃身部柳葉状の長三角形
28	〃	〃	(14.3)	1.5	0.3	(7.9)	鏃身端部欠失
29	〃	〃	(14.5)		0.2	(8.5)	頸部・茎尻欠失、箆設鏃
30	〃	6住	13.5	1.5	0.5	19.6	完形、錆あり
31	鏃茎?	〃	(4.4)	0.6	0.5	(2.3)	茎部か
32	〃	〃	(3.4)	0.6	0.7	(1.6)	〃
33	鉄鏃	9住	(2.1)	2.5	0.2	(3.0)	関部以下欠失、鏃身部五角形
34	紡輪	3住		5.3~5.6	0.2	(11.6)	紡輪孔径0.35cm
35	紡錘車	9住	(20.1)	4.0	0.4	(27.3)	紡輪直径4.0cm厚さ0.5cm
36	紡輪?	11住		5.7	0.4	(15.8)	縁辺一部残し欠失、紡軸孔不明
37	苧引鉄?	1検	(2.3)	(5.0)	(2.0)	(5.2)	刃部破片、刃付けあり
38	角釘	3住	(8.1)	(1.0)	0.5	(6.0)	脚部一部欠失
39	〃	4住	(3.8)	0.6	0.4	(2.3)	脚部先端欠失
40	釘	〃	(3.4)	1.2	0.5	(6.3)	脚部欠失、基部端整入れ後折り曲げ
41	釘?	5住	(3.7)	0.6	0.5	(4.8)	脚部先端欠失
42	角釘	9住	(3.2)	(0.6)	0.5	(4.9)	皿・脚部先端欠失
43	釘	13住	(12.4)	1.0	0.7	(10.8)	脚部先端欠失、端部整入れ後折り曲げ
44	〃	17住	(3.8)	0.8	0.6	(3.9)	脚部先端欠失、頭部形状不明

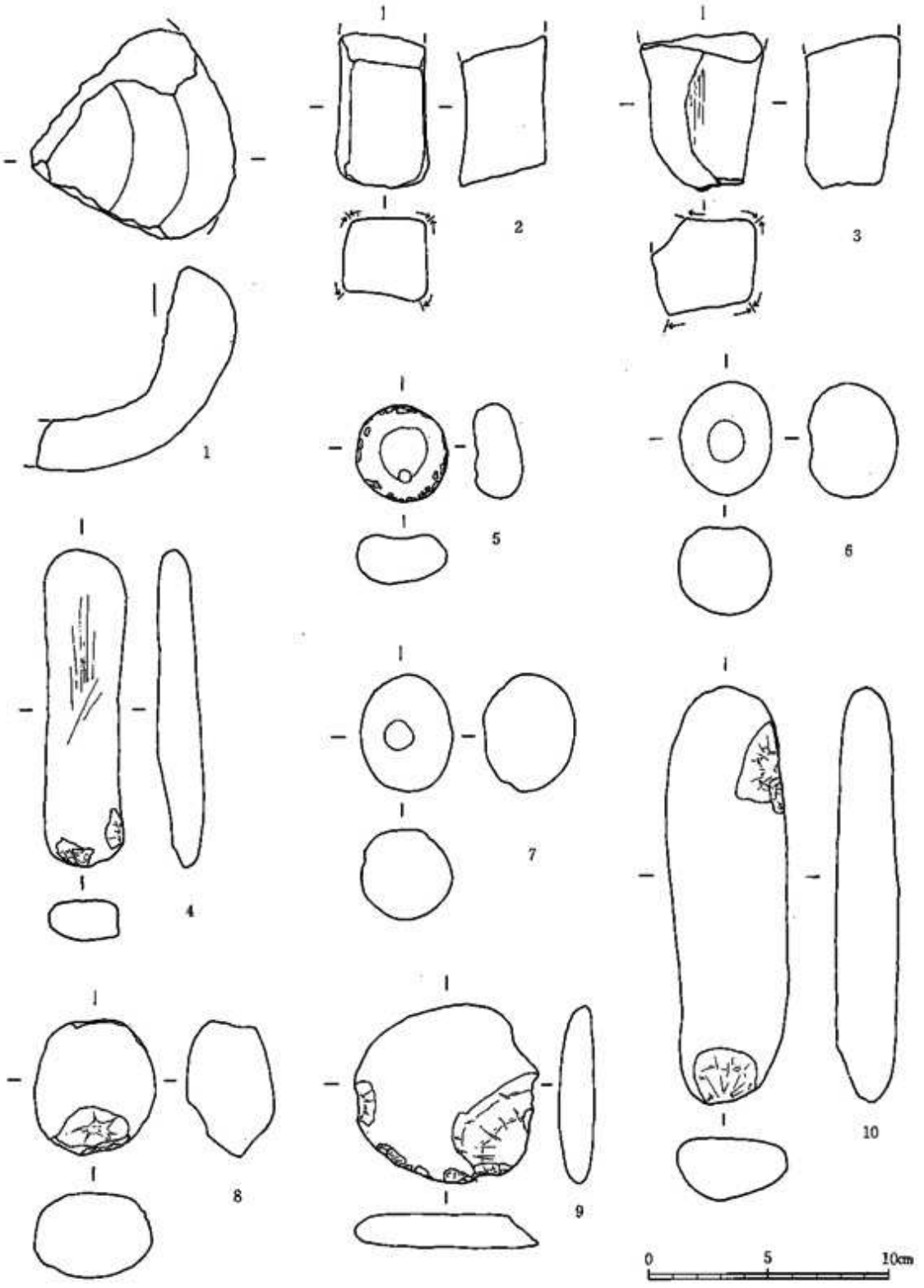
No.	種　別	出土遺構	寸　法（cm）			重　量（g）	備　考
			長　さ	幅	厚　さ		
45	釘	22住	10.4	1.0	0.8	15.3	完形、頭部形状不明
46	角釘	23住	(3.6)	0.5	0.7	(2.8)	上下不明、角釘か？
47	〃	〃	9.9	1.5	0.5	9.6	完形、ねじれあり
48	釘	〃	8.7	1.6	0.5	(7.2)	脚部先端欠失
49	〃	26住	(5.8)	0.7	0.4	(3.0)	脚部先端欠失、頭部形状不明
50	〃	P 28	(6.3)	1.2	0.7	(14.2)	脚部中央以下欠失、端部鏨入れ後折曲げ
51	〃	1検	(4.6)	(0.7)	0.5	(2.7)	頭部端脚部中央以下欠失、鏨入れなし
52	〃	2検	(3.7)	0.6	0.5	(3.2)	脚部中央以下欠失、端部鏨入れ後折曲げ
53	鎹鉈	3住	5.1	0.5	0.7	(7.5)	大きく屈曲
54	樹状鉄器	1検	4.6	1.3	1.2	22.6	完形鏨の一種か？
55	鋲鉄	22土坑	7.7	2.3	0.2	(9.8)	両端欠失、両端湾曲か？
56	毛抜き	3住	(7.4)	0.5	0.2	(2.3)	同一品か？
57	〃	〃	(7.1)	0.5	0.3	(2.3)	
58	工具	39住	(7.85)	1.1	0.5	(7.2)	工具、種別不明
59	巡方	9住	(1.7)	(1.8)	0.4	(0.2)	半欠
60	丸鋲	37住	3.3	2.1	0.5	(2.5)	下部一部欠失
61	金環	9住	2.0	1.8	0.4	2.7	剝落、腐蝕激しい
62	不明	3住	(4.3)	1.7	0.7	(8.3)	塊状、片端欠失
63	〃	〃	(2.25)	0.5	0.3	(1.6)	断面方形、両端欠失
64	〃	11住	(3.6)	0.5	0.5	(2.1)	両端欠失、棒状、断面方形
65	〃	26住	(4.7)	0.4	0.4	(2.8)	両端欠失、棒状、断面方形
66	〃	4住	(3.6)	(1.7)	0.2	(6.2)	板状
67	〃	〃	(4.2)	(2.7)	0.6	(6.6)	一方欠失、L字状、断面長方形
68	〃	〃	(6.2)	0.7	0.5	(3.2)	両端欠失、棒状断面長方形
69	〃	〃	(3.2)	1.2	0.5	(2.5)	一方欠失、受金具乃至計金具か？
70	〃	6住	(9.5)	0.9	0.6	(9.8)	断面方形的、片端欠失
71	〃	〃	(5.4)	2.2	0.3	(11.2)	外周一部、鉄鍋（容器）の一部か？
72	〃	〃	(3.7)	(1.1)	0.4	(6.2)	両端欠失、断面長方形
73	〃	7住	(3.5)	(0.8)	0.3	(1.4)	両端欠失、L字状、断面長方形
74	〃	8住	(8.5)	0.6	0.3	(5.0)	両端欠失、毛抜型鉄器？
75	〃	9住	(6.0)	2.5	0.2	(19.5)	鏃か、片端欠失
76	〃	〃	(5.6)	1.3	0.5	5.4	刀子の茎部か？、両端欠失
77	〃	〃	(6.1)	1.7	1.2	(15.5)	下部は中空
78	〃	14住	(2.7)	0.5	0.4	(1.2)	両端欠失、棒状、断面長方形
79	〃	15住	(2.0)	(0.5)	(0.3)	(0.5)	一方欠失、断面長方形
80	〃	17住	(3.3)	0.6	0.4	(2.3)	両端欠失、棒状、断面長方形
81	〃	20住	(13.5)	2.8		(8.5)	二股部、棒状部の一方欠失
82	〃	22住	9.6	0.7	0.5	7.9	茎様
83	〃	23住	(4.2)	0.4	0.2	(1.8)	工具か？
84	〃	25住	(1.5)	0.4	0.4	(0.5)	両端欠失、棒状、断面方形
85	〃	26住	(6.7)	(2.0)	0.2	(11.5)	両端欠失、板状
86	〃	28住	(3.3)	0.6	0.4	(2.0)	両端欠失、棒状、断面長方形
87	〃	1検	(2.4)	0.6	0.5	(2.5)	両端欠失、棒状、断面方形
88	〃	1溝	(12.4)	(1.2)	0.5	(14.5)	一方欠失、端部延伸
89	〃	3溝	(4.8)	0.6	0.5	(3.5)	両端欠失、棒状、断面方形
90	〃	〃	(3.5)	0.3	0.3	(1.3)	両端欠失、棒状、断面方形
91	〃	7土坑	(2.4)	0.6	0.4	(1.4)	両端欠失、棒状、断面長方形
92	鉄鍋	4住	直径　20.0		0.7	(185.0)	土師器坏、錆著

3）石器・土製品等

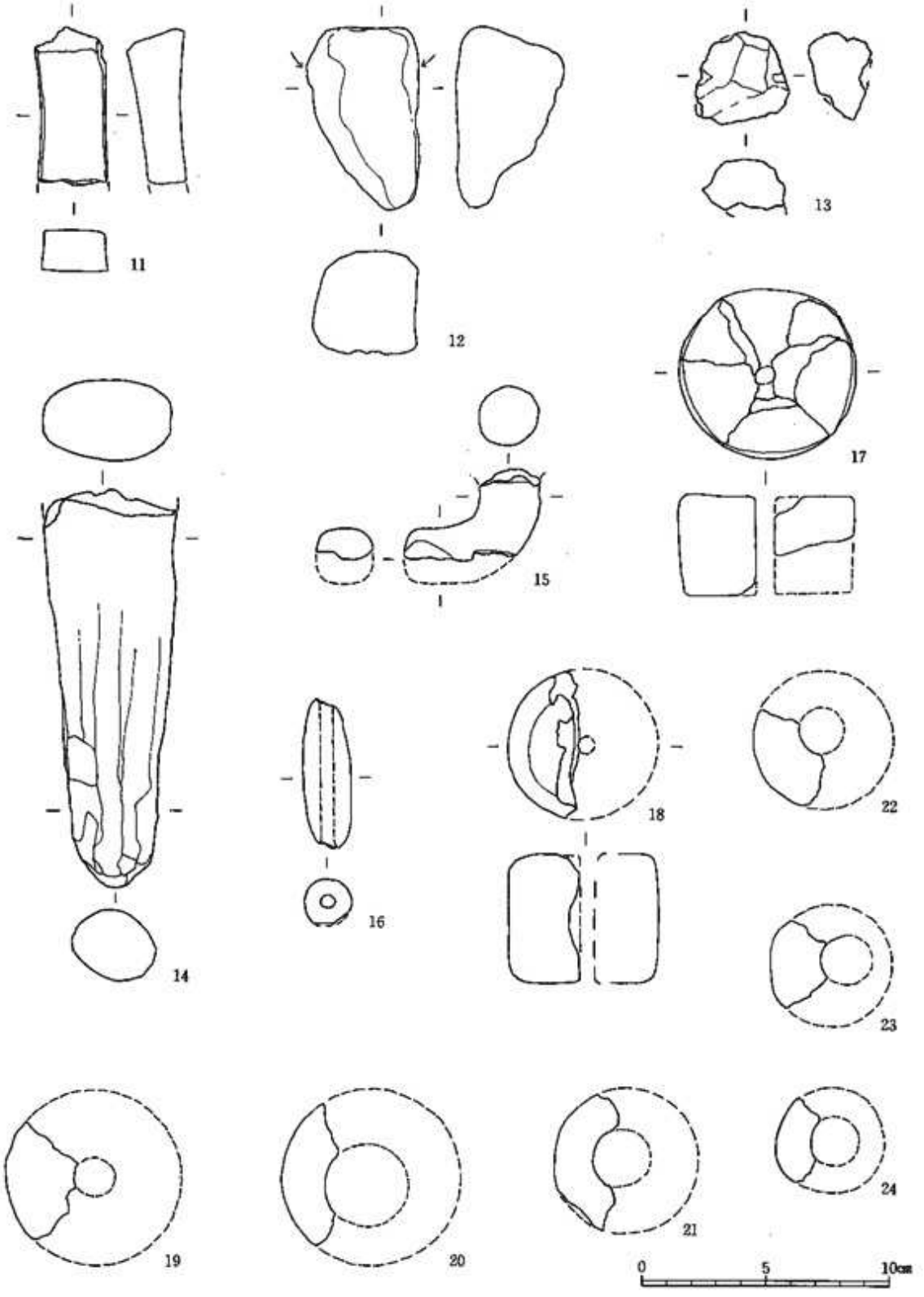
石器には、擂鉢、砥石、凹石、敲石、浮石などがある。擂鉢は1点(1)のみである。全体の2割程しか残存していない底部は安定していないが、口径と底径の差が小さく内部作業面が広いことから擂鉢と考えた。砥石は4点ある。2・3はいずれも片端を欠くが、断面は四角形で荒砥用のものである。11も一部を欠するが仕上げ用のものである。これらはよく砥石に使用されている石であるが、4は扁平な泥岩の自然石である。幾筋もの線条痕が見え、鋭利なものを擦った跡が残る。砥石として常用したものでなく、手近にあった敲石を利用したものと考える。凹石は3点ある。いずれも小形で小児拳大、5は、表裏両面に、6・7は片面に凹部がある。いずれも凹みの程度は小さい。これら3点と、10までの3点においては、敲石としての利用も見られる。使用箇所は面的な部分よりゆるやかな稜線に当たる湾曲部に限られ、円礫にはアバタ状に、又、板状礫には大きな剝離となってその痕跡をとどめている。浮石は2点ある。12は矢印の箇所にゆるやかな抉りが見られる。13も横断面側部に打ち欠きが見え、これらは浮子として使用されたものと考える。又、5軒の住居址と土坑1基より編物用石錘が出土している。重さの平均値で見ると、100g（10住）722.8g（38住）とでは非常に大きな差がある。

14・15は何かの脚部のように見えるが、両者とも片側を欠している為、細部までは分らない。前者は断面が楕円形で表面は篦によるナデが残っている。下半6割程は表面が褐色を呈している。15は断面が円形で、14より胎土が密で下端は黒変している。途中で直角に折れごく小さなくびれを生じ、上部で大きく広がるようである。前者はカマド内という出土場所から苦しい乍らカマドの支柱石の代用とも考えられる。土錘は紡錘形の1点である。暗褐色～黒褐色を呈している。紡錘車は2点ある。17の撫でによる丁寧なつくりと対照的なのが18である。羽口はすべて破片である。このうち直径を計測できる6点をここに掲げているが、何点かは同一個体の破片かもしれない。このほかには検出面から計106g、6軒の住居址と1本の溝から計212gの羽口をみた。又、図示していないが、3住より焼成済の粘土、26住より未焼成の粘土を少量得た。

これらのものに、時代別に帰属時期を与えると、中世の遺構から出土したものとして1の擂鉢、6の凹石、9の敲石が認められるが、この種の遺物類つまり10までは中世に含める方が妥当と思われる。上記以外のものは古代の遺物として考えたい。



第133図　石　器



第134図　石器・土製品

第17表　　SK V　石器・土製品等一覧表

No.	種別	出土地	寸法(cm) 長さ	最大巾径	孔径	厚さ	重量(g)	石質	備考
1	擂鉢	第1号溝址		(22.6)		12.5	1080	安山岩	深さは9.7cm＋α
2	砥石	第4号住居址	(9.6)	(5.7)		(5.2)	470	砂岩	
3	〃	第10号住居址	(9.7)	(7.6)		(5.9)	595	〃	
4	〃	第23土坑	19.6	5.0		2.7	435	泥岩	敲き痕あり
5	凹石	第1検出面	6.0	5.7		2.9	115	凝灰岩	〃
6	〃	第2号住居址	7.0	5.6		5.4	240	安山岩	〃
7	〃	第37号住居址	7.2	5.7		5.7	280	〃	〃
8	敲き石	第15号土坑	8.3	7.4		5.4	415	〃	
9	〃	ピット2	11.4	11.1		2.2	365	砂岩	
10	〃	第28号住居址	25.8	7.5		3.8	1070	〃	
11	砥石	第6号住居址	(6.4)	(2.8)		(2.2)	57	粘土質岩	
12	浮石	第9号住居址	7.3	4.5		4.3	56	火山岩	
13	〃	第2検出面	3.7	(3.7)		(2.5)	9	〃	
14	不明	第22号住居址	(16.0)	(5.3)		(3.3)	280		
15	〃	第9号住居址	(5.4)	(4.6)		2.4	34		
16	土錘	第4号住居址	6.0	1.9	0.5		20		
17	紡錘車	第17号住居址		6.8	0.8	4.1	160		
18	〃	第28号住居址		(6.1)	(0.6)	(5.2)	90		
19	羽口	第37号住居址		(7.1)	(1.7)		61		
20	〃	第20号住居址		(7.2)	(3.4)		128		他1点27g
21	〃	第38号住居址		(5.9)	(2.3)		45		
22	〃	第15号住居址		(5.6)	(1.9)		53		他1点16g
23	〃	第28号住居址		(5.0)	(2.1)		48		
24	〃	第37号住居址		(4.4)	(2.0)		26		他に37住より計2点30g

	出土地	個数	最大重量	最小重量	平均重量	平均径(長×短)	備考
編物用石錘	第4号住居址	12	285 g	95 g	180.8 g	11.11×4.1 cm	
〃	第10号住居址	3	130	75	100.0	9.43×2.83	
〃	第12号住居址	10	460	135	226.0	11.5 ×4.41	
〃	第37号住居址	4	250	140	210.0	12.7 ×4.27	
〃	第38号住居址	7	950	295	722.8	15.4 ×6.25	
〃	第23号土坑	10	165	100	130.2	10.09×3.82	

4．小結

島立北栗遺跡Ⅴ次調査は、ほ場整備事業に伴い実施され第1検出面～第3検出面までの総面積は2950.2m²に及ぶ。確認された遺構は竪穴住居址42、竪穴状遺構1、掘立柱建物址1、土坑25、溝址7である。時代は古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世に亘っている。以下、主な遺構、遺物について記述してみたい。

第1検出面では中世の遺構が多く認められる。2号住居址及び周辺のピット群が該当し、その周囲を1溝が方形に区画している。P_2からは内耳鍋が2個体出土しており特異な様相を呈している。

第2検出面では多くの遺構が確認された。住居址は切り合いが多く、冬期の調査であったので、困難を極めた。住居址は調査区全域に広がるが、特に東端では10軒の重複が見られる。3溝はこの部分を区画するように巡るが、37住を切っているため平安時代後期以降に成立し、4・26住に伴うと考えられる。4・26住は出土遺物でも質・量ともに群を抜いており、4住は緑釉陶器、灰釉陶器段皿を用いた朱墨硯、白磁、26住からは灰釉陶器の朱墨硯など他の住居とは様相を異にしている。朱墨硯は、役人が文書のチェックに用いるという指摘もあり(註1)、官人層の存在を窺わせる。土坑では9・23・25の3基が土師器小形坏を多量に出土しており、土師器の投棄遺構としての性格が考えられる。

第3検出面では土坑・ピットが若干見られたが、特別に古い様相を示すような遺構・遺物はみられなかった。

時期的な変遷を島立南栗編年にあてはめて追ってみると次のようになる。Ⅰ期：該当なし、Ⅱ期：20・28・29・38住、Ⅲ期：9・25住、Ⅳ～Ⅷ期：該当なし、Ⅸ期：12・14・37・41住、Ⅹ期：6・13・22・23・30・40住、Ⅺ期（古段階）：1・7・8・10・15・16・17・21・23・26住、9土坑、Ⅺ期（新段階）：11・31住、23・25土坑、Ⅻ～ⅩⅢ期：3・4住、中世（15～16世紀か？）：2住、その他は不明である。最初に居住地帯として使用されたのは、古墳時代後期～奈良時代前半であり、奈良時代後半～平安時代前半が空白となり、再び居住地帯として利用されるのは、平安時代前半（Ⅸ期以降）である。奈良時代後半から平安時代前半に空白期間が起きるのは、島立地区に普遍的に起きる現象であり、大きな特徴である。このことは、当時の社会背景が大きく係っていると思われるが、ここでは結論は出し得ない。今後の研究に期待したい。

註1）文献1の第7章第4節において指摘されている。

参考文献

文献1：㈶長野県埋蔵文化財センター　1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3
―塩尻市その2―　吉田川西遺跡』

第4章　調査のまとめ

今回は、夏に第4次調査として、北栗集落の北西部を、又冬に第5次調査として北栗地籍の東部を発掘した。

前者は西から南部へかけ、北栗の集落があり、すぐ北に境沢が西から東へと流下する。東を望めば、県道新田・松本線を隔てて島立小学校があり、又西140mには南北に通称、仁科道が通っている所である。

調査成果としてはここまで述べてきたようにまず古代として奈良時代6軒、平安時代中期～後期10軒などの住居址、建物址16棟、多数のピット等があげられる。住居址は平安時代前半の時期を大きく欠いている。これは島立地区では比較的普遍的なこととしてあげられ、それは自然条件より、社会的背景の変化の影響により、この地区から他地域へ流出していった為ではないかと推測する。中世に至ると、溝と土坑が多出する。ここで注目するのは南西地区に出現する2号溝である。今回はその一部しか調査できなかったが、大形の溝は水を滞水させていたことを示し、溝で囲まれる内側には中世の住居址がある。すぐ近くには現在「神明社」として天照大神が祀られているが、中世には溝区画内に集落の祝殿、氏神のような性格をもったものとも考えられる。又この北側溝の西延長60mには通称仁科道より東へ掘り割られた2号溝と同規模の凹みが続き、さすれば、水はこの西側より入れたものかとも思われるのである。

遺構の占地状況を見ると、古代では北部だけが全く空白となり、中世に至ると、遺構は南半部のみに集中し数個のピットと墓址のみが広い空白地帯におかれ、そこへ西から氾濫しながら東下する1溝が出現する。この溝から北側は未調査のため、これを境沢として良いかどうかは分らないが、中世に至っても条里水田といわれる下流地帯で周囲の集落に影響を与えるような流路が依然あったことは事実である。

ここから南東方向400mの距離に第5次調査地がある。ここは、奈良井川の河岸段丘際であり、本来3m位の小段丘があったようであるが、近年の開発で調査地の東際まで削平されていた。北側には、田中沢がある。この沢は200m程上流から段丘を深く開析し始め、調査地際では、水田と沢との比高差が1.5m～2.0m程となっている。南は東西に市道高綱線が走っており、この道の南際は6年前、当島立地区における埋場整備に関わる一連の発掘の発端となった地点でもある。

ここでの調査成果としては、古墳時代後期から奈良時代前期にかけての住居址6軒、平安時代前期後半から後期までの住居址が22軒、他に中世住居址が1軒であった。これらは東西に長い調査地の西際、中央部そして段丘側に集中しており、特に土取りにより崖状となる東際には、遺構の重複が激しく、遺構の判別も決しがたいものが多い。又ここには、方形に巡る平安時代後期以降の3号溝があり、この溝に囲まれた4・8・26号住居址からは、いずれも遺物が多く、特に4号住居址か

らの緑釉陶器、白磁、朱墨硯、それに佐波理鋺、5点の鉄鏃を含む多数の鉄器類などは、希少性あり、これら多種に亘る遺物組成をみても、ここに平安時代後期頃には、溝を巡らしたこの集落の中心的人物の存在を予見する。他の遺構では土坑の中に土師器の小形坏ばかり多量に出土するものが見え、土師器廃棄遺構として特異な様相をみせている。中世に至ると、遺構はほとんど消失し、西側に偏在する1号溝は遺物も少ない乍ら、検出面レベルより見てこの時期に含まれよう。この内側には、15世紀末葉から16世紀の土坑、ピットなどが見え、西側調査区外には、溝で囲まれた中世末期の集落が埋没していると考える。なおやはりここでも奈良時代後期を含め、平安時代初期の住居址が見当らない。

遺物のみについて見ると、前述のやや特異なものの他、土師器甕ないし盤の口縁部に水鳥が描かれているものがあり、ほほえましい。鉄器の類には見るべきものが多く、刀子・鉄鏃・角釘を中心に、前出の佐波理鋺・金環、それに同一住居址より出土した巡方と丸鞆などの帯金具がある。特に先の4号住居址からは、15点の鉄器製品のほか、計1,082gの鉄滓・溶滓があった。これらの鉄滓類は、今回出土総量5,130gの2割以上を占める。又、これら多量のモノに比べ生産用具の1つ羽口は、12軒の住居址、溝、検出面などを含め、総量でも691gとごくすくなく、鍛冶施設については、その関係まで言及できない(註1)。なお、この辺一帯の河岸段丘上にある縄文時代の遺構を探るべく調査地内西部に2m下部まで試掘を行なっている。結果は、途中から自然堆積の砂礫層となり、その地点には生活面が存在しないことが分かった。

この調査地から田中沢を隔てた北一帯も、ほ場整備工事中に歩いて見た。遺物は多く、全般的に見ることができるが、西・北部程、散布密度が薄くなってゆくようである。土器は灰釉陶器の碗・皿を中心に、土師器坏・小形甕、須恵器壺なども目につき、これらと共に焼土、カマド石らしきものも散見する。ここにも平安時代中期から後期の集落が存在していることをうかがわせる。これより更に北側100m、島立小学校の新グランド地点では、7世紀中～後期の住居址、建物址等が、調査(註2)されているが、これにつながるような遺物は、調査地、そしてこの一帯にも見つかってはいない。

註1　吉田川西遺跡の調査では、有力者は溝に囲まれた屋敷内に鍛冶場をもち鍛冶及び鉄器支配に関わっていた人物としている。

註2　昭和62年度の調査において該期の住居址3軒、建物址4棟、他に平安時代中期～後期、中世の遺構等を調査している(未報告)。

参考文献　㈶長野県埋蔵文化財センター　1989　『中央自動車道長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書3　吉田川西遺跡』吉田川西遺跡

㈶長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書8　松本市内その5』

松本市教育委員会　1985　『松本市島立南栗、北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構』

図　　版

調査地南半部

同西地区

第1号住居址

第2号住居址

第3号住居址

第4号住居址

第5号住居址

第6号住居址

第1図版　北栗Ⅳ　遺 構 (1)

第6号住居址（西より）

同カマド

同出土遺物

同南西隅

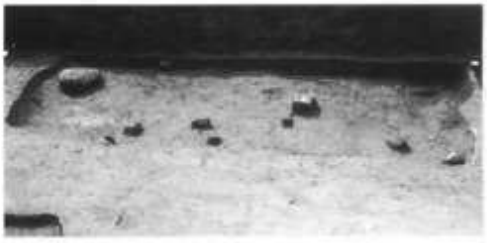
第7号住居址（西より）

第8号住居址（西より）

第8号住居址

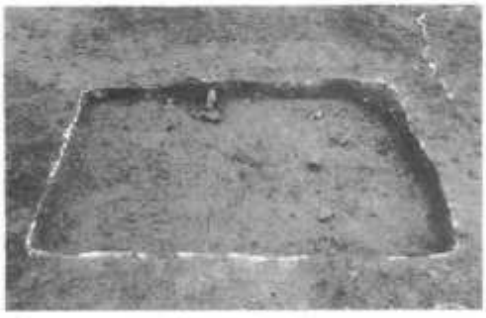
同カマド

第2図版　北栗Ⅳ　遺 構 (2)



第９号住居址

第９・７・８号
住居址
（手前より）



第11号住居址

第12号住居址

８住　カマド南側石

第10号住居址

第11号住居址・カマド

第12号住居址出土　馬歯

第３図版　北栗Ⅳ　遺 構 (3)

第13号住居址（南より）

第13号住居址カマド

第14号住居址
（北より）

第15・20号住居址
（手前より）

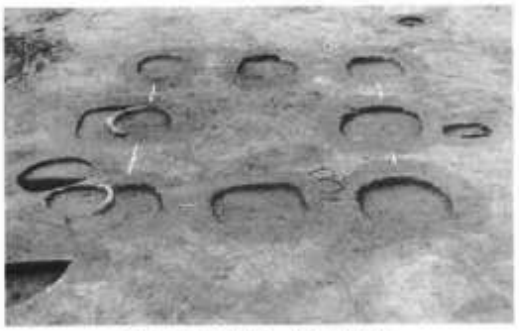
第16号住居址（西より

第17号住居址

第１号建物址

第２号建物址

第４図版　北栗Ⅳ　遺 構 (4)



第３号建物址（南より）

第４号建物址（南より）

第５号建物址（西より）

第６号建物址（西より）

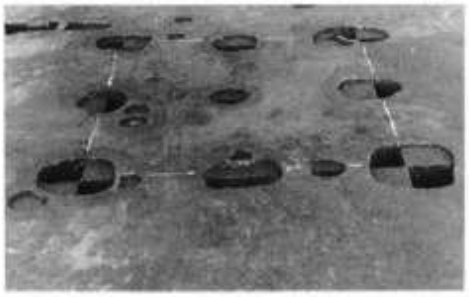
第７・８号建物址（北より）

第７・８号建物址

第９号建物址（南より）

第10号建物址（西より）

第５図版　北栗Ⅳ　遺 構 (5)



第11号建物址（南より）

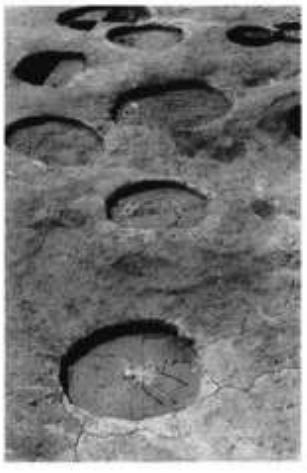
第11・12号建物址（南より）

第12号建物址（南より）

第13号建物址

第14号建物址

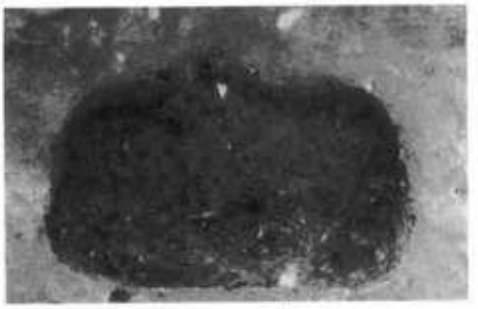
第14号建物址
西列（北より）



第14号建物址
北列（東より）

第14号建物址　P195栗石

第6図版　北栗Ⅳ　遺 構 (6)



第１号土坑

第39号土坑

第２号土坑

第21号土坑

第38号土坑

第45号土坑

第10号土坑

第16･17･18号
土坑（手前より）

第７図版　北栗Ⅳ　遺 構 (7)

第23号土坑

第47号土坑

第314号ピット

第364号ピット

第43・44号土坑
（手前より）

第66号土坑

第297号ピット

遺構外遺物

第8図版　北栗Ⅳ　遺 構 (8)

第3号溝址（東より）

第4・6号溝址

第2・3号溝址

第2号溝址

第2号溝址（北内側）

同（北外側）

同（東側）

溝2と調査地北部

溝2　北側部分

第9図版　北栗Ⅳ　遺 構 (9)

23

24

26

32

33

36

37

45

第10図版　北栗Ⅳ　遺 物 (1)

47

48

49

50

51

53

54

57

第11図版　北栗Ⅳ　遺 物 (2)

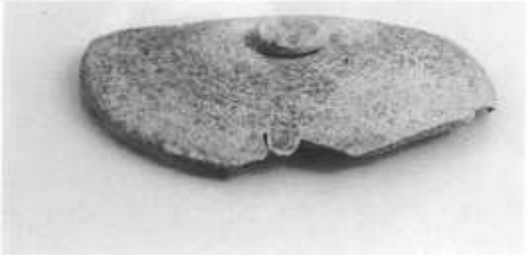
59

60

67

68

72



73

74

77

第12図版　北栗Ⅳ　遺 物 (3)

78

79

80

81

83

84

89

89

第13図版　北栗Ⅳ　遺 物 (4)

90

92

98

99

108

118

119

120

第14図版　北栗Ⅳ　遺 物 (5)

126

127

128

129

150

154

156

157

第15図版　北栗Ⅳ　遺 物 (6)

202

208

209

231

238

242

245

252

第16図版　北栗Ⅳ　遺 物 (7)

第1号住居址

第2号住居址

第3号住居址

第4号住居址　遺物出土

第4号住居址

第5号住居址

第6号住居址

第7号住居址

第17図版　北栗V　遺 構 (1)

第９号住居址
カマド

第９号住居址
遺物出土

第９号住居址

第９号住居址遺物出土

第11号住居址

第11号住居址　カマド

第12号住居址

第12号住居址　遺物出土

第18図版　北栗Ⅴ　遺 構 (2)

第13号住居址

第13号住居址　カマド

第14号住居址

第15号住居址

第16号住居址

第19号住居址

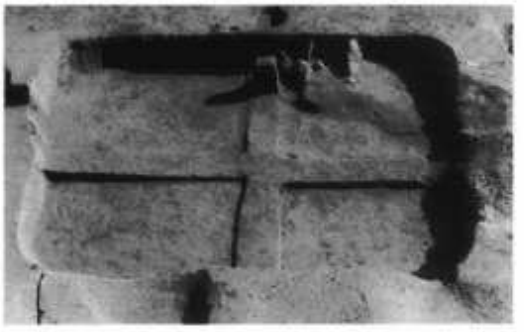
第20号住居址

第20号住居址
カマド

第19図版　北栗V　遺 構 (3)

第21号住居址

第22号住居址



第23号住居址

第23号住居址　カマド

第25号住居址

第８・26号住居址

第27号住居址

第28号住居址

第20図版　北栗Ⅴ　遺 構 (4)

第29号住居址

第27・32号住居址

第34号住居址

第34号住居址　カマド

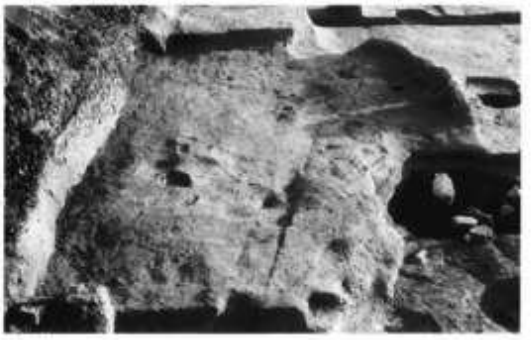
第35号住居址

第36号住居址

第37号住居址

第37号住居址　カマド

第21図版　北栗Ⅴ　遺 構 (5)



第40号住居址

第40号住居址　カマド

第41号住居址

第１号
竪穴状遺構

第１号建物址

第５号
溝址
（西から）

第４・６号
溝址
（西から）

第22図版　北栗Ⅴ　遺 構 (6)

第25号土坑

第23号土坑

ピット2

作業風景

調査区東側

調査区西側

第23図版　北栗V　遺 構 (7)

6

10

17

20

22

23

30

64

第24図版　北栗Ⅴ　遺 物 (1)

74

75

76

92

100

106

107

112

第25図版　北栗Ⅴ　遺 物 (2)

119

127

143

144

146

150

157

160

第26図版　北栗Ⅴ　遺 物 (3)

161

177

181

195

197

209

217

232

第27図版　北栗Ⅴ　遺 物 (4)

234

237

245

257

266

270

286

289

第28図版　北栗V　遺 物 (5)

291

292

297

302

321

322

326

328

第29図版　北栗Ⅴ　遺 物 (6)

330

331

333

334

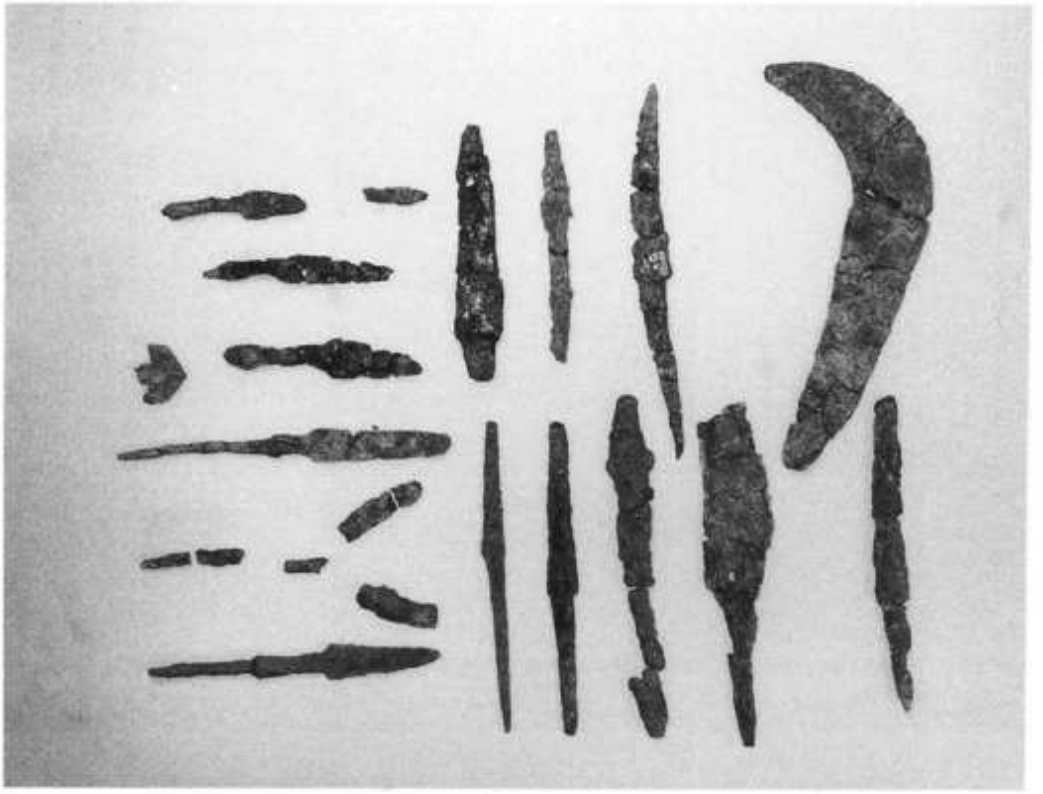
337

338

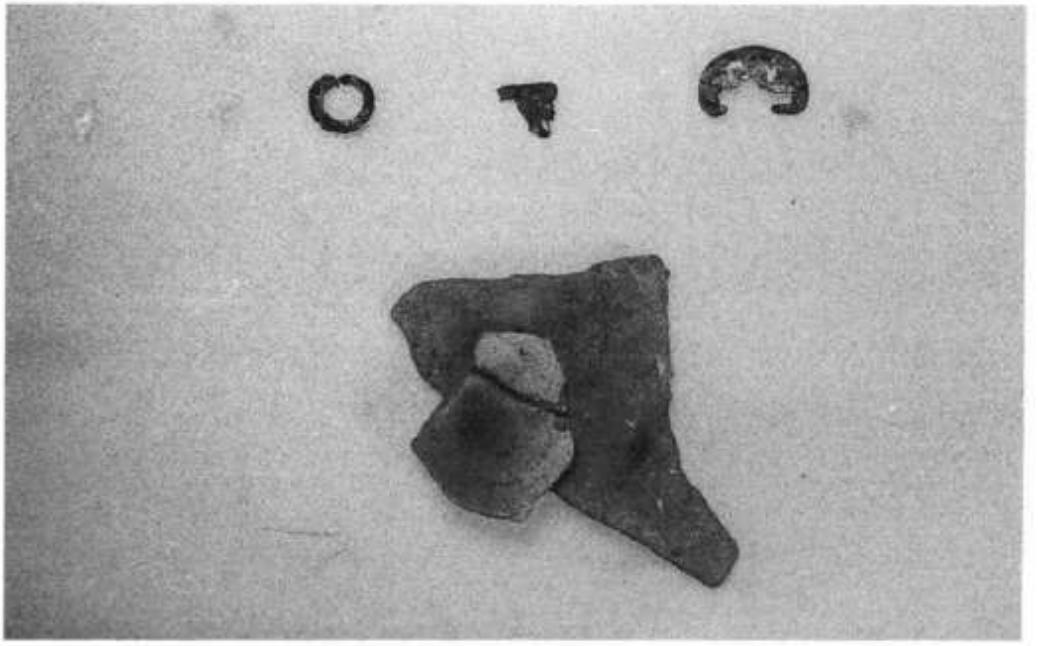
348

377

第30図版　北栗Ⅴ　遺 物 (7)



鉄　器



金環・帯金具・鉄鍋

第31図版　北栗Ⅴ　遺 物 (8)

松本市文化財調査報告No.85
松本市北栗遺跡Ⅳ・Ⅴ
平成2年3月20日　印刷
平成2年3月20日　発行
編集　松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL0263(34) 3000
発行　松本市教育委員会
印刷　電算印刷株式会社